
神秘と科学と創造

緒方 昇平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神秘と科学と創造

【Nコード】

N2359R

【作者名】

緒方 昇平

【あらすじ】

改造人間である少年1人（主人公）と少女2人が、現代の社会で警察に雇われて働く話です。サイボーグなどよりも遺伝子系・バイオ系がメインに出てきます。仮想的な科学技術ネタを扱いつつ、現実のバイオテクノロジーやその他科学技術、世の中の動きなどを反映させて書いているつもりです。

もはやクローン人間やサイボーグが現実となりつつある今日です。単なるバトルだけではなく、改造とは何なのか、人間とは何なのか、そこを詰めて書きたいと考えています。

第1編(1) 偶然のキツカケ(前書き)

はじめまして。初投稿です。

最初書いたときは、1話分が10万文字以上になったため、分割して投稿することになりました。読みにくいと思いますが、申し訳ありません。

第1編(1) 偶然のキツカケ

東京都内にある、とある都立高校。その校舎内、一人の少年が教室から教務室、そして学校の玄関に向かって急いでいる。まだ時刻は午後一時を回ったところ。放課の時間にはまだ早いのだが。教務室で担任と急ぎのやり取りをした少年は、それからすぐに玄関を飛び出し、最寄り駅とは反対の方向に向かって走り出した。途中でポケットから携帯電話を出し、短い会話をしていると、すぐに一台の灰色のセダンが少年を見つけた。少年は待っていたかのように助手席に転がり込む。

その乗用車には三人が乗っている。運転席に座っているのは、三〇歳前後の灰色のスーツを着た男性。助手席には先ほどの少年。少年は自身の体格があまりにも良すぎるためか、少々窮屈そうだ。後部座席には、少年と同じくらいの年齢の少女が一人。日本人女性標準をやや超えるほどの身長で、紺のブレザーに濃い灰色のスカート、胸元には赤いリボンを結んでいる。少年の通う学校とは違う制服だ。高校生、もしくはそれに近い身分であろう少年と少女の二人を乗せた車は、人込みを避けつつ、のびのびとしたスピードで走り去って行った。

実は少年と少女は、少し前まではごく普通の高校生、全国にどこにでもありふれている高校二年生だった。運命的ともいえる、あの日までは。

*

五月三日。ゴールデンウィークの最初の日だ。今年は曜日の並びが悪く、数日の細かい休みが細切れになっている。まとまった旅行には行きづらい。もし行くとすれば間に挟む平日を欠席することになってしまふ。

「暑い……。ホントに五月の朝なのかよ？」

初夏を思わせる強烈な日差しを全身に浴びながら、学校への道を
おおしまたつひこ
大島龍彦は一人で歩いてきた。今日の予想最高気温は二八度。昨日の最高気温が一八度止まりだったことを考えれば、季節が一気に数ヶ月進んだかと思うほどの暑さである。そんな中、龍彦はこれからアメリカンフットボール部の練習に行くのだ。

龍彦は小さい頃から常に運動能力で最高レベルだったし、さらにスポーツ選手だった両親の影響で様々な種類のスポーツも経験した。そんな素質や少々熱血気味ともいえる性格もあって、口で暑い暑いと言いつつも、生活で一番楽しみにしているのは部活動なのだ。

徒歩と電車を合わせて三〇分、学校にたどり着いた。学校の校門からは入らず、直接グラウンドの柵を乗り越えて、野球部の外野とサッカー部のペナルティエリアを堂々と横切って、アメリカンフットボール部のところへと行く。

「おっす、待たせたな」

「よう龍彦！」

「おう龍彦。今日は暑いぜ。ちゃんと飲物持ってきたか？」

「ちわっす、先輩っ！」

「お、おはようございます龍彦先輩……」

いつものような挨拶が、いつものように交わされる。

「おはよう龍彦。聞いたんだけど、龍彦、また他校の連中とケンカしたんだって？ そろそろ校長室への呼びだしをくらうんじゃない？」

「よう、サイモン。そんなこと言っても、ケンカ売ってくるのはいつも相手側なんだから仕方ないじゃん。こっちは売られたケンカを買っただけだよ。ごちゃごちゃ言ってるとおまえもぶっ飛ばすぞ？」

「ははは、わかったよ。僕が龍彦に何か言っただって、どうせ無駄だろうしね」

アメフトのヘルメットを手入れしている、サイモンと呼ばれる黒

人の少年に、龍彦は話しかけられた。彼はナイジェリア系二世で日本国籍保有者である（日本名は佐井門寛^{さいもんひろし}）。アメフト部と陸上部を掛け持ちしている。身長一八八センチ。体重は八五キロ前後。外国人は奇異の目で見られやすい日本だが、学校ではイケメンの範疇に入っていて、女子の間ではファンクラブができるほどの人気がある。一方の龍彦は全くと言っていいほどモテない。喧嘩っ早い性質だからなのか、事あるごとに女子陣からは毛嫌いされている。最近は『世界最北に生息するゴリラ』『地球外生物』の称号まで頂戴してしまった。モテないからといって特に困ることもないのだが、サイモンがモテる原因の一つに自分の存在があると思う。身長一八五センチ、体重百キロ前後とサイモン以上に体格がよくまた運動能力も高い龍彦が、色の黒いサイモンが日本で受けやすくだろう。『奇異の視線』を、少なくとも学校内ではその全てを代わりに集めている。サイモンが外人扱いなら、龍彦は宇宙人扱いだ。

龍彦とサイモンとでいるいろなやり取りをしていると、アメフト部のキャプテンがこちらに近づいてきた。

「龍彦、時間ギリギリだったな。もうすぐにアップ始めるから早く準備してくれ。今日は四十ヤード走の計測だぞ」

「了解つす、キャプテン。でも今日はあんまりキツイメニューはパス。午後から法事なんだよ。三回忌だ」

「三回忌……ああ、ご両親か」

「まあな。そういうことだ」

「そういえば、龍彦の両親って、二人とも有名なアスリートだったよね」

「別に特別に言うことでもねーと思うけどな……」

サイモンの言うとおり、龍彦の父は莫大な優勝数を誇る大相撲元横綱。母は百メートル走、二百メートル走、四百メートル走の女子日本記録保持者であり、オリンピックで複数の金メダルを獲得した、日本女子の短距離界で唯一ともいえる世界的スプリンター。ただし二人は今から約二年前に、交通事故で死亡。龍彦と三歳上の姉・美

希を残して他界した。両親の遺産は結構な額が残されていたため、美希や自分はギリギリながらもこうして学生の身分でやっていけている。もつとも龍彦は、身の上とスポーツと学業の成績を考慮されて、去年から学費一部免除の扱いを受けているが。

ちなみに姉の美希も同様に、スポーツで高い成績をあげている。陸上競技の短距離走と言われる種目全てで龍彦の母親につぐ日本歴代二位の記録を持っている。

「あときはテレビや新聞で色々報道されたから、僕も覚えてるよ。全国ニュースでも放映されたしね。あと無神経なマスコミもいたな。見てる僕の方がムカついてくるぐらいにしつこく龍彦の回りを取材する人間もいたし」

「ありや確かにムカついたなあ。親が交通事故で死んだ直後の未成年の人間にコメントくださいってマイク向けてくるんだぜ？ 常識ってモンがあるだろ普通？ あときは国に治安警察法なり作って、きっちり取り締まりを実行してほしいと思ったもんだぜ」

頑強・屈強で周囲に知られている龍彦も、さすがに両親の突然の死にはショックを受けた。なんといいても、当時はまだ中学三年になりたてだった。一五歳にして両親と死別。胸の中で何か大きなものが空っぽになったような感じがしたし、二年経った今もそのような感覚は抜けていない。

「だがまあ、なんつーかなあ……、もう二年経ったのかつて感じがする。頭の中では色々モヤモヤがあっただけど、親が死んだこと自体にはそんなに目が向かなかったような気がするんだ。衝撃は受けただけど、そのあとの悲しみがやってこなかった。親が死んで真っ先に頭に浮かんだ言葉が、『オレ、高校に行けねーのか？』だったしよ。オレはとことんヒネかれてる人間なのかもな」

「そりやまだ気持ちの整理がついてないからだよ。死んでから何年も後に突然実感がわいてくるってこともあるらしいし」

現実的な話題を出しつつも自分を傷つけないように言葉を慎重に選ぶポコに、龍彦はいつもと同じくにったりとした笑いを返した。

(そういうところが、サイモンのいいところなんだよな)

ぶつきらばうな自分とは、そこが違う。

「事故の加害者はどうなったんだっけ？ 今は公判中？」

「そいつは一緒に死んだ。自分の運転してた軽トラの運転席で体を潰されてな。死んじまった後だし、もともとロクな財産もねーやつだったから、損害賠償とか慰謝料とか、そういう話も派手には出てこなかった。相手が生きてたら、もつと金が入ってきたよ」

「またそんなこと言っつて。もし加害者が生きてたら、きつと龍彦は『あの時一緒にくたばりゃばよかったのによ』とか言うだろ？ 初めっから死刑になったと思えばいいじゃんか」

「なかなか黒い話だが……んまあ、確かにそういう考え方もあるな。うん」

サイモンにしては過激な発言だが、確かに自分の性格なら、簡単にそのように考えるだろう。

「人間の死って、いつたい何なんだろうなあ？」

「そんな突然哲学的な命題を言われても……」

その哲学的な命題を、龍彦はほとんど本気で考えていた。両親の死から三年たつても消えない心の穴。晴れない不透明感。自分はいつたい、両親の死を受けて何を考えたのだろうか。何を真剣に心に受け止めたのだろうか。心にできたその虚空は、一向に塞がりそうにない。

「やっぱり、親が死んでもそんなに生活に苦労してないからなのかもな。ほらよくあるだろ？ 親が死んで学校辞めるって話がさ」

「そういう話はよくあるけど、でもお金の問題じゃないと思うな。人の死とお金の問題は全く別だよ」

裁判の結果で得られた金が少ないからといって、龍彦は格別金銭的に困っているわけではない。両親が健全だったときと同様に学校に通い、部活をして、精神面では充実した学生生活を送っている。

学生時代に両親を亡くした人間の中では『幸い』な方の人間だろう。龍彦の中学時代に父親を亡くした人間が同じクラスにいた。成績優

秀で真面目な生徒だったが、彼は家計が苦しくて都心の高校に通学することができず、自宅に近い郊外の、それよりもかなり低いレベルの高校に進学し、現在でも奨学金をもらいアルバイトをしつつ学費を穴埋めしていることを龍彦は知っている。彼は他にも兄弟がいるため、金銭的に彼の大学進学は不可能だともささやかれている。そういう彼と比べれば、龍彦は遥かに恵まれている。

だから龍彦は、両親が死んでいなくなったことを、変に不幸に思ったり残念がったりしないことにした。言葉は変かもしれないが、下手に悲しんで沈むよりもよほどいい結果につながると自分では思っている。天国か地獄にいるかわからない父と母も、息子が悲しむよりも開き直ることを望んでいるはずだ。

「下手に意識し過ぎないようにする、か。たしかに間違っではないよと思うよ」

「今回の三回忌は、純粹な法事っていうよりも親戚が久しぶりに顔を合わせて話をする機会としてセッティングしたんだ。だから法事も午後からだなんだが」

「おーいおまえら、そろそろ練習始めるぞ」

「へーい、キャプテン。今行く！」

とりあえず話を切り上げて、駆け足でキャプテンのところへ集合した。

今日は午前中から気温が上がり、練習が終わる正午近くには、既に気温は二五度を超えていた。体質なのか、龍彦は成分の薄い汗を大量に掻く。臭いはきつくないので割と楽なのだが、ひとたび運動をすると滝のような汗でパンツから靴下まで、全身の着物がずぶ濡れになる。あまりの濡れ方に、昔の寝小便を思い出すほどだ。龍彦は部活の時、着替え、特にパンツだけは絶対に忘れない。

着替えの途中、サイモンが話しかけてきた。

「なあ龍彦、今日ちよっと僕の買い物に付き合ってくれない？」

「は？ おまえの買い物にか？」

男同士の買い物など面倒だなあと思い、反射的に嫌な声が飛び出た。

「新しいマウスピースと、ユニフォームの下に着るロングタイツを買おうと思ってるんだ。龍彦も新しいスパッツ買っつて言っつてなかつたっけ？」

「ああそうそう。そっぴやそっぴやだったような……」

「何だかだいぶ予定がアウトだね……。よくそんなんでやっていけないね？」

サイモンは笑って軽く肩をすくめた。

実は緊急に必要なものではないのだが、いつか買わなければならぬのでこの機会のうちに買っておいた方がいい。龍彦の性格からして、そうしないといつまで経っても買わないまま品物不足になるのだから。とりあえず龍彦は、サイモンの提案に賛成し、自分もついていくことにした。

「龍彦の両親って、どんな人だった？」

「買い物が終わりに、帰りの駅のホームを歩きながら、サイモンが話題を振ってきた。」

「史上最多優勝数を誇る元横綱と、百メートル走から四百メートル走までの日本記録を持つ女子スプリンター」

「そんな新聞記事みたいなことじゃなくて、例えばどんな性格だったとかさ？」

「二人ともかなりさっぱりした性格だったな。何っつーか、スポーツ選手っぽくなかったんだ」

「ということ？」

「例えばいい成績を残したスポーツ選手なら　とくに男のスポーツ選手なら、よくチームの監督になったりスポーツ解説員になったりするだろ。でも親父は引退したらさっさとフリーのプログラマーとして仕事を始めたし、母ちゃんは現役時代から司法試験の勉強を

始めて、引退してちよつとしたら今度は弁護士になった。意外だったんだよな。スターが一夜で隠居生活になったみたいで。それに今まで色んなスポーツを教えてもらったけど、特定のスポーツを強く勧められたことはなかったんだ。オレのやりたいようにやってきたっていうか、親が自分たちの影響をオレにできるだけ与えないようにしてきたようにも思える。実際オレは、親から影響受けたとか、親に心から憧れをもったっていうこともねーしな。やっぱりオレの親は、自分の影響で子どもの人生を左右しないように気をつけたのかもな……」

「日本ならともかく、アメリカとか外国ならそれくらい普通だよ。よくある。引退したスポーツ選手が大学入り直したり、MBA取ってどっかの会社の取締役になったりさ」

「これもまたもつともな。龍彦だって、それくらいの例は知っている。」

龍彦の両親は肩書や経歴こそ仰々しいが、人物・人格・金銭感覚に関しては『中』くらいの家庭の父親・母親となら変わりがなかった。両親ができるだけそのように振る舞ったのだろうか。子どもが最も影響を受ける他人は両親だろうから、特別な要素を排除した身で子どもに接したかったのかもしれない。あるいはスポーツ選手は所詮若いころの職業で、一生飯を食っていくには足りないものが多過ぎるということを暗に表そうとしていたのかもしれない。

いずれにしろ、両親は彼らが龍彦に教えたいと思ったことを全ては教えることができなかった。龍彦には、両親と同じく型にはまらない自由奔放な性格だけが残された。

そのような会話を最後に、龍彦はサイモンと別に、自宅の最寄り駅で電車を降りた。降りてから、もう一度電車の中のサイモンに向かって軽く右手を上げてみせる。

ホームから駅の出口まで階段で降りる。そんなに窮屈に階段を降りなくても大丈夫だ。休日の昼にしては、比較的混雑が少ない。

「ねえ、リユウ！」

突然後ろから聞こえた良く響く声に、龍彦の体は一瞬で反応した。自分のことを「リュウ」と呼ぶ人間は一人しかいない。

「おう清子。こりやまた偶然。何かの帰りか？」

「うん。ちょうど塾の模擬試験があつて、今はその帰りなの」

竹内清子

たけうち せいこ

龍彦と同じマンションの住人で、隣の部屋に住む龍彦の幼馴染だ。小学校卒業後、龍彦は公立中学に自動的に進学したが、清子は名門私立の中高一貫校に進学した。東大A判定、さらに帰宅部だが運動能力は女子の中で最高クラスに入る。地毛なのか、少しだけ茶色がかつた肩をこする程度の髪の毛が清潔感いっぱいに揺れている。万能の天才美少女である彼女は、連休でもいそがしく塾に通うらしい。

龍彦と清子は両親や兄弟を巻き込んで家族ぐるみの付き合いが幼少時からあつたが、進学した中学校の違いから、二人のそれからの進路は違いが出てきた。清子の家は代々医者で、清子の兄と姉も大学は医学部に進学した。清子も志望大学と学部は東大理科三類という、事実上の医学部だ。そういうわけで、清子は全国屈指の名門校である私立王満学院に進学した。対して龍彦は、いわゆるヤンキー中学に入学し、傍から見れば『プチャンキー時代』とも受け取れる学校生活を送った。それから高校は公立の（自称）進学校に進んだため、立場上は清子に近づいたことになる。自分で言うのも少し変だが、広い意味での『暗黒中学時代』を過ごしてきた自分の目に、幼馴染という認識でしかなかった清子が、あらためて眩しく映るのも当然だと思つた。

「明日の日曜日、リュウは何かあるの？」

「明日は西高とアメフトの試合だ。清子は？」

「模試の二日目」

さらりと言われた龍彦は、少し驚いた。まさか土日すべて模試に捧げるとは……。

（オレ、二日セットの模試なんて一度も受けたことねーぞ……）
同じ高校生なのに、自分の立場が少し揺らいだ気がした。

「模試って言ったけど、やっぱり清子の志望校って東大の理科三類だっけか？」

「そう。今のところは医学部志望かな。……でもちよっと国語の現代文がまだ不安定だから、そこを頑張らないと」

「そ、そうなのか……」

勉強のことに関しては全く無関心な龍彦だ。学校での成績こそいいが、特にやりたいと思う好きな勉強があるわけではない。単純に成績という数字、合格判定というAからEまでのアルファベットのランクを下げたくないから、ペーパーテストの勉強をしているのだ。正直龍彦にとって、模擬試験とはお金と時間を奪われる困ったものでしかない。

「っていうか、清子の受けるゴールデンウィーク返上の模試って何の模試だ？」

「東大模試……って言って、実際の東大の入試問題と同じ出題範囲と難易度と出題傾向で出される模試なの。たぶん龍彦君の学校でも、三年生の希望者が受けてると思うわ」

世の中にはそんな便利なものが存在するらしい。

「……それって高校の勉強の全範囲が出題範囲なんじゃ……？」

自分たちはまだ、高校二年生の五月である。

「私はもう英語と理系科目は、高校の範囲を一通り終わらせたわ。」

一応予習のつもりでサツとだけどね。あとみんな私が東大A判定って言ってるけど、理科三類はC判定くらいだから」

少し照れながら清子は答えた。

（ああそうだ。やっと思い出した）

東京大学……入試は文科と理科に分かれ、さらにそれぞれ一・二・三類の合計六つの科類に分けて行われる。ただし問題は文科、理科でそれぞれ共通。そして確か理科のうち、医学部につながる三類が突出して難易度が高く、同じ模試の結果による判定は、一類や二類より二段階ほど低く表われる……確か龍彦がおふざけで試してみたときもそうだった。

(理科三類がC判定なら、他はA判定という安全圏になるんじゃないか？)

まだ高二の春なのに、三年生や浪人生と一緒に模試で東大A判定をとる……幼馴染の強烈な実力、自分とはかけ離れた実力に、龍彦は心の中でひれ伏した。それと同時に、同じ日本人の高校生なのにここまで差がつくのはなぜだろうと本気で疑問に思った。

二人は自宅まで歩きながら会話を続けた。

「リュウも知ってる通り、うちはいわゆる医者の家系だからねえ

。上の兄姉きょうだいはみんな医学部に合格したわ。お姉ちゃんの方は、大
学中退してどこかの仕事にもらわれたけどね」

「医学部は親父の希望か？」

「四割はそう。私のお父さんは近年稀な医学部絶対主義者だし。でも六割は私の意思よ。やっぱりお父さんを見ると、格好よくみえるのよ。医者っておもしろそうだな、やってみたいなって思えるもん」

清子はもう一度照れ臭そうに笑って龍彦にウィンクした。もしこの場を龍彦と同じ学校にいる男子に見られたら、龍彦は次の日から多くの男子に妬まれることになるだろう。

今のように言われなくても、中学までは家族ぐるみの付き合いがあったため、竹内家の大体の内情は龍彦もある程度知っている。清子父親は大病院の院長で、清子を含め四人の子供がいる。一番上の長男はもう新米の医者として、父親の陣取る病院で勤務しているとこの前聞いた。姉も慶大医学部に入ったことは、中学一年のとき清子がちらりと言っていた気もする。そして清子はもちろん東大の医学部を狙っているし、末っ子の弟もどこかの医学部志望だろう。(なるほど。エリートってこういうやつらのことを言うんだな)

彼女の家の雰囲気比べたら、自分の家庭なんて思いつき普通の家庭だ。しっかりとそのことが自覚できた。

「そうそう。アメリカンフットボールって、実際どんなルールなのかよくわからないのよね。四回攻撃権があってそれまでに十ヤード

前進するとさらにもう四回の攻撃権がもらえる……ってことぐらいしかわからないわ」

「それだけわかりや十分だろ。帰宅部女子にしちゃ、かなりよくわかってる方だとオレは思うぜ。だってラグビーと混合するやつもいるくらいだからな」

「いるわね。女子だと大多数がそんな感じじゃない？」

「男でも下手すりゃ半分以上がそうだな」

龍彦と清子の間で成り立つ話題といたら、せいぜいお互いの学校のことを薄く浅く尋ねることぐらいしか無い。幼馴染とはいえない現在の状況では、清子がどんな話題が得意かなど龍彦にはさっぱりわからないし、仮にわかってても、部活と筋トレ以外にこれといった趣味もない無骨な龍彦には、話題を合わせるのも無理だ。だからこうして清子が話題を振ってくれることがありがたかった。

会話のほとんどは、清子が尋ねて龍彦が自分の情報を答えるという形式で進んだ。そんなこんなで二人の自宅が含まれるマンションの前に着いた。

「ちよつとリュウ」

「んん？」

「あれをみて」

「は？」

清子が指した先にあるのは、駐車場の外の小道に停車している灰色のセダンである。ピカピカに磨かれた車体が他の車よりも異質に見え、さらに中にはスーツ姿の男三人が乗っているのが遠くからでもわかった。運転席、助手席、後部座席にそれぞれ一人ずつだ。中では三人で何やら大切な話をしているように身を寄せ合っていた。ぱつと見た感じで、ここら一般の住人には見えない。

「なんだあ？警察の張り込みか？」

「さあ……。普通張り込みであんなスーツを着こなしてくるかしら？普通はもつとカジュアルで目立たないようにすると思うけど」

それはそつだ。プロの警察官なら、素人の龍彦に『警察かも』な

どと思わせるような格好はしないはずだ。

だが近年、警察の仕事が急速に増えたことは事実である。ここ数十年の間は、米ソ冷戦時代と比べて治安が大幅に悪化するようになった。これは日本だけではなく、世界的な現象だ。昔は映画の世界でしかありえなかったような、テロを含む大規模破壊事件が多発するようになったのだ。

特に今から一七年前、龍彦たちが生まれた年には、世界で初めてテロリスト 国家以外の組織が主導して核兵器を爆破させた。確か長崎島の離島で、膨大な犠牲者が出た。日本で核兵器が使われた場所は、ヒロシマとナガサキ、ツシマの三つというふうに教えられるようになった。ただしそれはテロリストが搬送中の爆弾が暴発したという話で、計画性という観点では失敗した事件だとも、テレビで専門家が言っていた。

龍彦はちょうどその核爆発事件の年に生まれたが、龍彦の目にも、年を追うごとに警察の警備や検問が強化されていくように見える。まるで龍彦の成長に同調するかのようだ。

それはともかく、龍彦の目には、今いるあの連中が異質に見えた。もしかすると本当に警察官だったのかもしれない。

(テロ警備だろうが何だろうが、とにかく警官がいればテロだけじゃなくて、飲酒運転なんかも減るだろ。そうすりゃオレの両親と同じ理由で死ぬ人間も減るはずだ……)

いつの間にか自分は、死んだ両親のことを考えていた。

「まっ、気にしたって仕方がねーさ。……おっと、オレはさっさと戻って姉貴たちの手伝いをしなきゃだ」

二人は気を取り直してエレベーターに乗り込んだ。扉が閉じるとぐんぐんと上の階に向かって四角い箱が昇っていく。そして最上階の一三階で、二人はエレベーターを降りた。

「それじゃあねリユウ。明日の試合頑張って！」

「おう、オレが頑張らなきゃチームは勝てねーからな。清子も模試頑張れよ！ それじゃあな」

お互いそう言って、それぞれ隣同士のドアの中に入っていく。

龍彦は帰ってからすぐにシャワーを浴びて、高校の学生服に着替えた。そして午後はマンションの部屋の中に、親戚一同が集まって南無阿弥陀仏のお経を読んだ。それからすぐ近くのと風料理店で食事をした。今日の行事は事実上この食事がメインであり、大島家の大黒柱となった姉の美希が会を進めた。まだ午後六時前だというのに、すでにビール瓶が何本も空になった。龍彦の血族には、大酒飲みが多いようだ。

『龍彦』

『なんだ、酔っ払いの姉貴？ 追加の酒か？』

『違うわよ。父さんも母さんもいなくなっただし、私は家のことほったらかしだし、よろしく頼むわね』

『よろしくじゃねーよ。親父と母ちゃんはともかく、姉貴のは完全に責任放棄だろ』

『あたしは所詮女だから限界もあるの。いい龍彦？ 長男として家を守るのは大事なことなんだからね』

『は……』

『そっだ龍彦』

『今度はなんだよ？』

美希は財布から一万円札をとり出した。

『悪いわね。この会が終わった時にみんなに渡すお菓子を買い忘れてたから、今ちよっと出て買ってきてちょうだい』

『やっぱ姉貴、おまえには大島家の中心は無理だな。酔っ払いめ』
というわけで、龍彦は渋谷店から出て行った。しかしこの辺りには法事のように手渡すようなお菓子を売っている店はない。ここからだと自転車で少し遠くに行くことになる。自動的に、龍彦は自転車を取りにマンションの駐輪場まで戻ってきた。

「さーと、釣り銭からいくら引いておこつかなあ……」

周囲の自転車に注意しながら、龍彦は自分の自転車を引っ張って道路まで行く。何かに足を引っかけて転び、駐輪してある多数の自転車がドミノ倒しになるという非常に面倒な展開にならないことを願いながら、龍彦は慎重に前に進んだ。

「親戚つていつても、なかなか会ったことのない人たちばかりだったな……」

龍彦の両親はどちらも一人っ子なため、龍彦にはおじ・おばに値する人間がいない。さらに両方の祖父母は四人すべてが死んだか行方知らずだとも聞く。今回の法事や両親の葬式にももちろん現れなかった。行方のはつきりしている中で一番血縁の近い親戚というのが、祖父母の兄弟から降りる家系だ。しかし龍彦はそれまでほとんど面識がなかったし、両親が他界したのがきっかけでたびたび連絡を取るようになったような関係ではない。しかし親戚で集まってみれば、龍彦や姉の美希、そして生前の両親のようにみんな明るくて能天気な人間が多かったので、とくに変に気を使ったり考えたりすることもなかった。

高校生の龍彦と二十歳になりたての美希二人だけの家庭に、また別の空気を持ち込んでくれたという意味ではいい機会になったと思う。親戚たちは、色々と励ましてくれた。遅ればせながらも、竜彦が中学全国大会の百メートル競走で優勝したこと、美希が東京大学に進学して大島家の『出世頭』になったことなどだ。

（そっぴや姉貴も東大生だったか。清子の竹内家といい姉貴といい、オレの周囲には妙に高学歴な連中が集まってるな……おっといかんいかん。あの話題はナシ！）

頭を横にぶんぶん振って、昼間の教育格差を思い出させられるような話題を頭から消し去る。

自転車を引っ張って道路に出てみると、そこで龍彦は、道路に一人奇妙な男がうろついているのに気がついた。黒のスーツと靴に、灰色のYシャツ、そこに青いネクタイ。顔には黒の太いフレームのメガネをかけている。

龍彦は、正午過ぎに見たあのセダンとそこに乗っていた男たちを思い出した。

（昼間の連中の仲間か？）

一瞬緊張してそつちに目が行きっぱなしになったが、じろじろ見ているとこつちも怪しい。

相手は自転車に乗った龍彦の姿をちらりと見ると、電柱に立てかけてあった自転車にまたがり発進した。相手のペダルをこぐペースはごく普通、それほど速くはない。向かう方向も、ちょうど龍彦が行こうとしているデパートの方だ。

（スーツを着込んで、あそこに自転車立て掛けて、いったい何をしていたんだ？）

そしてちよつとした好奇心に導かれるまま、龍彦は見知らぬ相手の追跡という行動に出た。

相手はごく普通の籠付き自転車に乗り、背中にリュックサックを背負っている。ぱつと見ると自転車通勤のサラリーマンといった感じだ。だがどうして移動途中のサラリーマンがわざわざ自転車を降りてあのマンションの近くをうろついていたのか疑問に残る。龍彦のマンションの周囲にはコンビニも自動販売機もないので、わざわざ自転車から降りる用事などもありそうもない。

目の前の男が進む道は、まさに龍彦の目的地であるスーパーに向かう道だ。この辺りの狭い路地を抜けて、それから大通りに入るつもりなのだろう。実際にその大通りを少し走っていくと、お目当てのデパートにたどり着く。相手の目的地は、いったいどこだろうか。すぐに、交通量の多い四車線の道路が見えてきた。

（おっ、オレと同じく左に曲がるつもりだな。このまま行けば、デパートに着くぞ。行き先がデパートなら、一瞬怪しいって思ったけど単なるオレの勘違いだったのかもな）

自分と同様、相手も次の交差点を左に曲がる予定らしい。予想通り、男は交差点で左折した。

だが龍彦は、脇の路地から偶然出てきた集団に、行く手をふさが

れた。

「おう、おまえ大島だろ。祐橋中出身の、大量破壊兵器」

「あ？」

龍彦が自転車のブレーキをかけると、向こうから声をかけられた。全部で七、八人ほどで、髪の毛の色や長さは様々だが、全員耳にピアスをしている。ガラの悪い連中の『お手本』のような外見だ。

「おまえ、あのエリート高校に入ったんだってえ？ しばらくおとなしくしてるかと思ったら、まさかお勉強してたとはなあ！」

「どうだ、お勉強の調子は？ 大量破壊兵器からガリ勉君になれたのか？」

「その割にはげくんぜん勉強できそうに見えねえけどな！」

一同がひやははとこれまたガラ悪く笑った。

龍彦は記憶を巡らせる。今日の前にいる連中には初めて会う気がするが、中学時代に見たことあるような気もする。

(うーんと、どうだったっけなあ？)

学校の成績はいいが、興味のないことは一瞬で忘れる龍彦である。

(確か見たことあるぞ。えっとあは……)

だんだんと頭の中で記憶がはつきりしてくる。

「あ！ 思い出したぜ。てめーら木中のやつらだろ。そーだそーだ。確かオレが中二のとき、おめーら全員多摩川に放り投げてやったんだっけか！」

プチャンキー時代の記憶がよみがえる。

「あの時は傑作だったなあ！ あのまま流されちまえば良かったじやねーか」

三年前のある日の出来ごとを思い出して、龍彦はチンピラ集団の前で腹を抱えて笑い出した。

あれは中学二年の夏休みのことだった。ヒマつぶしに多摩川に釣りに行ったら、たまたまそこにいたやつらに声をかけられた。龍彦のいた祐橋中学校ゆはしちゅうがっこうと同レベルの不良中学で幅を利かせていた連中だった。当時、祐橋の大量破壊兵器と呼ばれていた龍彦は、そのとき

に初めてよその中学校の連中からケンカを売られたのだ。相手は七人だったが、そんなのは龍彦の相手にもならなかった。結局、相手七人全員が川に落ち、ケンカは終了した、というのが龍彦の記憶だ。「ブハハハハッ！ おめーらマヌケだったな！」

「黙れ！ 今日こそ決着つけようじゃねえか！」

「決着も何も、てめーらと戦ってオレが負けたことなんて一度もねーよ。決着なんてもうついてらあ！」

龍彦の進んだ高校は、一応は進学校なので、さすがに高校になってからケンカの数は減った。だがそれでもひと月に一回は中学時代の『ワル』だった連中に見つけられ、ケンカをするという展開になっている。

「まさか、勉強のし過ぎでケンカの勘が鈍ってるとか言い訳するんじゃないやねえだろうな？」

「んじゃ、どうなったか試してみるか？」

龍彦も臨戦態勢になって構える。だが一応正当防衛という言い訳が使えるように、相手が手を出さない限り龍彦は自分から手を出さないことにしている。

「そこどけ。オレはこれから乾電池を買いに行かなきゃならねーんだ。てめーらクズどもにかまつてるヒマなんてねーんだよ！」

「んだとこの野郎！」

最初にキレた一人が、龍彦に拳を構えて突っ込んでくる。だが龍彦はそれを難なくかわす。

（相手に攻撃の意思を確認、つと）

すかさず突っ込んできた相手の後ろ頭を、今度は自分が拳を作つて殴る。龍彦の拳を頭に食らった相手は、そのままバランスを崩して地面に倒れた。

「次、誰だ？」

「くそおおお！」

今度は七人のうちの残りがいっぺんに襲い掛かってくる。これで全員に攻撃の意思があることを確認できた。

「てめーら、連携してるようで連携できてねーんだよ」

龍彦はそれぞれ各個撃破して対応する。ベンチプレスで一八〇キロ以上持ち上げるパワーを持つ龍彦の攻撃は、そこら辺のチンピラが相手ならば、うまくいけば一撃で決着がつく。高校に進んでからさらにパワーアップしたようだ。

「がはっ！」

「へっ、もつと腹筋鍛えろよ」

最後の一人は、腹を一発殴っただけで相手は地面に膝をついて倒れた。

（七人相手に約三分。オレの評価にしちゃ中の下って感じだな。よし、次はもつと手っ取り早く片づけるとしよう！）

手と服の土埃を払い、龍彦はうずくまる七人を見下ろした。

「あーあ、口ほどにもねーやつらだぜ。オレに勝とうなんざ百万年早いんだよ」

捨て台詞を吐く元気もない相手は、よろよろとしながらも立ちあがって引き上げようとした。龍彦も、せいせいとした気分で反対方向に足を踏み出す。

その時。

「くおらああ　っ！　おまえら、また何をしとるんだ！」

「げっ、お巡り……」

道の向こうには、紺の制服を着た警察官の姿が見える。

「やべっ、逃げるー！」

龍彦は反射的に自転車に飛び乗り、一瞬で加速して猛スピードで逃げだす。ケンカを売ってきた不良たちも重たい足を引きずりながら逃げていく。

当然ながら龍彦は、ケンカの強さだけではなく逃げ足も天下逸品だ。戦闘から逃走へとすばやく意識を入れ替え、猛スピードで逃げる。

（ワハハハ！　ここまで来ればもう追いつけまいっ！）

龍彦はケンカの調子ですっかり有頂天になっていた。そしてそんな

ことで、昼間に不自然な車を見つけたことや、その後一人の怪しげな男を追跡しかけていたことなど、龍彦の頭の中からすっかり消えてしまっていた。

今日は昨日と同じシチュエーションだ。電車を降りてから、龍彦はまたもや偶然鉢合わせした清子と、いっしょに歩いてマンションまで帰ってきた。

「で、試合はどうだったの？」

「オレたち三本橋さんぽんはしが三〇対三で圧勝。ちなみにオレが二四点決めたぜ」

「すごいっ！ さすがね」

褒められて悪い気はしない。しかし何となく龍彦としては欲求不満だった。相手が弱すぎて。

「清子ってスポーツに色々詳しいよな。何か興味あるスポーツとかあるのか？」

「うーん、一番興味があるのはバスケかな。中学までバスケ部だったし」

「やっぱ中学までは運動部か」

帰宅部とは思えない運動能力も、何となくであるが少し納得することができた。

「オレも中学まではバスケ部と陸上部の兼業だったな。高校は陸上の他に、バスケとアメフトとラグビーで迷ったんだ。結局コンタクトスポーツが面白そうだからアメフトを選んだ。でもバスケも得意だからかなり迷ったけどよ」

「休みの日に隣の公園でバスケの練習をする龍彦くんを見てればわかるわよ。だつてフリースローラインから跳んで簡単にダンクを決めるんだからね。バスケ部からもスカウトあつたでしょ？」

「スカウトっていうか、一回仮入部に行つてから熱烈に誘われるようになった。でもこっちのバスケ部は強くねーし、あとヘッドギア

だけでタツクルし合うラグビーをオレがやると、簡単に相手にケガさせるってことが一度練習試合でわかって、結局アメフトに落ち着いた」

「あはは！ とことん規格外なのね！」

（よく笑うな、清子は）

本人の自覚なしに数多の男子を魅了してきただろうその笑顔は、確かに非常に魅力的だ。彼女の父親や母親も、あまり会うことがないが五つ上の姉や七つ上の兄、二つしたの弟も同じように人あたりがよい人たちばかりだ。

そんな竹内家の両親と、龍彦の両親は親友同士だった。同じように明るくて、同じように何事にも一生懸命な人間だったが、半分無意識に、話題をつなげる。

「なあ、清子って弟いたよな？ 最近は兄貴と姉貴の話ならよく聞くくんが……」

「俊ね。そういえばリュウが小学校卒業してから、ほとんど俊と顔を合わせる機会もなかったわね。俊は王満の中等部にいるわ。うちの親は勉強しろってうるさいから、弟はけっこう部活に逃げるのよね。今日は家にいると思うけど」

なんとなく想像できそうな一幕だ。

慶大医学部合格の長女、高二ですでに東大理科三類以外でA判定が出る清子、さらに一番年上の兄は父の大病院を継ぐ立場として勤務している。そして弟も名門と言われるこの王満学院に在籍している。さらに父親が医者で、母親は薬剤師。またもやつくづく思うが、竹内家はなんとというエリート一家なのだろうか。

そういえば、これから一家の中心になれと姉に言われた龍彦は、いったいこれから何をすればいいのだろうか。酒で酔っ払ったときの姉の言葉が、なぜか今ごろに浮かんできた。

「ねえねえリュウ。実はうちの弟なんだけど、高校でアメフトに挑戦してみたいって言ってるの。超一流のアメフトプレーヤーから何か教えてあげてくれないかしら？」

「清子の弟、アメフトに興味あるのか？」

清子はうなずいた。話によると、よく衛星放送でやっているNFLの試合を録画しているらしい。

「よっしゃ、わかった。オレがヒマな時にみっちり教えてやる。弟に言っとけ。今からひたすら食いまくって体重増やしておけつてな」

龍彦も、もともと食欲旺盛で筋トレ大好きという性質たちもあり、高校入学からの一年間で、体重が二〇キロ近く増加した。

「そうだ。じゃあ竹内の弟にアメフトのボールを一つやるよ。今のうちから触っておいた方がいいぞ」

「え、いいわよ！ まだ別に」

「いいから、いいから！ そのうち弟にアメフトのことをよろしく伝えておいてくれよな。今部屋から取って来るからここで待っててくれ」

そう清子に言い残して、龍彦は走ってエレベーターまで向かった。日本ではマイナーなアメフトの競技人口が増えるならこっちにとってもありがたい。

（そっぴや、オレも親父からいろいろなスポーツを教えてもらったんだっけ……）

エレベーターは、自分の部屋のある一三階まで登っていく。

両親の死から二年が過ぎても、何かモヤモヤとしたものは一向に消えない。まるで自分の心全てが幻であるかのように、大きく揺らぐ。ふと思う。自分は両親の死への悲しみを無視し、自分の気持ちにずっと嘘をつき続けて笑ってきたのだろうか。自分が涙を流さず、笑って過ごしてきたこれまでの二年間は、すべて虚構なのだろうか。（いや違う。オレはスポーツに熱中してきたし、勉強も学校で上位の成績を維持してる。友達だって少ないわけじゃねえ。オレは、そのことを本気で楽しんで、笑ってこられたんだ……）

とそこまで考えたところで、不意に下から爆発音のような音が聞こえた。かと思うと、同時に何かの衝撃波がエレベーター全体に伝わってきた。

「な、何だおい!？」

あまりの衝撃に建物全体が揺れ、エレベーターは緊急停止する。見てみると、エレベーターのガラスにもひびが走っている。

(いったい何が……何がどうなってるんだ?)

この建物は、それほど大きくないマンションとはいえ鉄筋コンクリートでできた頑丈なものである。大型トラックの衝突程度ではこんなふうには揺れたりしない。かといって今は明らかに地震の揺れとは違う。

だが次はさらに大きな衝撃波が、エレベーターどころか建物全体を貫通するように広がっていく。衝撃で龍彦は体が吹き飛び、エレベーターの四方の壁に思いつきり背中を叩きつけた。そして背中をぶつけたかと思うと、すぐにエレベーターごと下に落ちていくのが感覚でわかった。突然の衝撃に、エレベーター内の電源も消える。

固いものが激しく擦れ合う音がして、建物を構成している鉄骨やコンクリートなどがわれ先と下に向かっていくのがわかる。エレベーターという箱に、どこから落ちてきたものが外側に当たり壁がへこんだ。今はまだスローモーションのようだが、そのうちどこかがポツキリと折れて自由落下を始めかねない。危険だ。

また不意に何かは衝突して、エレベーターの扉の一枚が壊れて外れた。外をみると、自分がエレベーターごと下に向かって崩れ落ちる最中だというのが明確に理解できる。

「のわっ!」

だんだんと落下物の量が多くなり、何キロもあるコンクリートの塊が数発エレベーターの床に直撃した。頭に直撃したらおそろく

いや確実に助からない。

(わ、ワケわかんねーけど、とりあえずあの世行きだけはカンベンしてくれ　っ!)

再び何かが砕けるような、爆発音とは少し違う破裂音。その衝撃により一段とエレベーターは変形し、落下速度を増す。

突然のことにもう泣きなくなった龍彦だが、そんな感情はすぐに

なくなった。巨大な鉄骨が龍彦の寄りかかっていた壁に直撃して、龍彦は鉄骨と床に挟まれた。その拍子にいくらか頭を打ち付け、気分が遠くなる。だんだんと薄れていく意識の中、自分のいるエレベーターが下方向に、どんどん加速していくのだけは、最後まで感じていた。

どのくらい時間が経ったのかわからない。龍彦は何か耳に聞こえると感じた。ここがああ世かこの世かもわからないが、だんだんとその声は、はっきりと意識の中に入ってくる。

「抹殺は完了したか？」

「標的は建物の上部にいたはずですから、ほぼ確実に瓦礫の下敷になつて死んでいるでしょう」

「ビルの他の連中は？」

「下の階の者は瓦礫の下敷に、上の階の者は落下の衝撃で、いずれも死亡した者と思われます」

「そうだな。生きていたらそれこそ奇跡だ」

(だ、だれだ……?)

頭の中で、声が響く。男と女の声だ。

「だがその奇跡が起きているとも限らん。念には念を尽くせ。それと、こんなところで思わぬ手柄が得られそうだなぞ」

会話を耳で聞き取るたびに感覚がはつきりとしてくる。足の動く音からすると、立っている人間はおそらく複数だ……。

「あれは警察のジード。コードネームはゼロ。どうせいずれ戦うことになるんだ。今のうちに消しておくべきかな」

「医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法、並び殺人やその他諸々の罪の現行犯によりあなたたち二人を逮捕します」

はつきりとよく伝わるまた別の女の声でした。『警察』という単語が聞こえたので、彼女は警察の者だろうか。

（ おっとそうだった！ 今ここはマンション倒壊の現場じゃねーか…… ）

ビルの瓦礫の中に、血まみれの死体が無数に散らばっている。そんな惨劇の場面が一瞬頭をよぎり、龍彦はぎくりとなった。

改めて気がつくとき、自分の体は砕けた鉄骨やコンクリートに挟まっており、目の前にある自分が流したらしい血にまみれた赤いコンクリートが、真っ先に目に入る。そしてうつ伏せに挟まっている自分の首を少しだけ動かすと、ほんのメートルほど先に二人の犯人らしき者の後ろ姿が見える。感覚的には、一人は男、もう一人は女だと何とかわかる。そしてまた、彼らと二十メートルほど離れて向かい合っているところには、話の通り警察の者らしき女が立っている。ただし、顔は頭部と顔面全体を覆うヘルメットで見えない。ヘルメットから垂れる髪の毛が彼女の背中にかかる程度なので、龍彦は女と判断した。

しかしこの三人はいったい何という格好 いや姿をしているのだろうか。犯人二人の方は男女問わず筋肉が異常に隆起しており、ぴったりとしたタイトらしき服は今にも筋肉の盛り上がりではち切れんばかりである。よくアニメや映画である『ドーピング』のシーンに近い。肌は光沢のある紫色で、妙にごつごつし、また不気味に光を反射している。龍彦はそこから、爬虫類の鱗を想像した。そして髪の毛は無く、頭も同じくうろこのような皮膚で覆われている。目も人間の目ではない。黄色くギョロリとした、おぞましい目だ。対峙する警察の者女は、全身を銀色のメタリックな防護服で嚴重に身を包み、フレームが服と同じ銀色でさらに外からの視線を遮る黒色のアイシールドのついたヘルメットを被っている。そしてヘルメットから溢れる長い髪の毛は、赤色だ。よく言われる人間の赤毛ではなく、不思議なくらい鮮やかな赤茶色で、そして人間の髪の毛とは思えないほど艶やかで、髪の毛の先までエネルギーが満ち足りているような圧倒的で近寄りがたい雰囲気がある。警察の方はまだよくわからないが、テロリストの方は間違いなく普

通の『人間』ではない。

(人型の怪獣……いや怪獣型の人か)

そこでやっと、率直な疑問が頭に浮かぶ。彼らはいったい何なのだ？

テロリストやカルト宗教が怪獣型兵器を作っている、なんてデマやオカルトに近い噂を耳にしたことはあるが、まさかこれほどまでに完成度の高い『ホンモノ』が堂々と目の前に現われるなど、本気で信じてはいなかった。

ここで興奮からハツと我に返ってみると、全身がずきずきと強く痛む。当然だ。自分は鉄骨とコンクリのサンドイッチ、というか押し寿司のような状態になっている。あと数センチでも鉄骨が動けば肋骨が押しつぶされるだろう。

(どうする？ とぼつちり覚悟ですつとここにいるか？ それとも飛び出してすかさず逃げるのか？)

幸い四足の感覚があるので、まだ五体は満足しているということだ。それなら自分は逃げ足に自信がある。だが得体の知れない相手に、人間としての能力が通じるだろうか。それに十階以上の高さから墜落したので、生きているだけでも奇跡だが、身体能力を百パーセント発揮することは間違いなく不可能だ。

「とりあえず戦いにはそれに相応しい場所が必要だ。まず彼女にこの場を片づけさせるとしよう」

「そんなことはさせません」

「自分たちの任務を実行するのに、わざわざ君の承知など受ける必要ない。我々には我々のすることがあるんだ。やれ！」

「はい」

紫のトカゲのような女は返事をする、突然空気が震えだした。よく見ると、その右の手の平にみるとエネルギーが吸い寄せられていくのが、空気の流れでしつかりとわかる。

(なななな、何だありや……!?)

「これがこのマンションを倒壊させた衝撃波のもとです。使うエネ

ルギーをほぼ全て運動エネルギーに変換するので、効率がいいんです」

おもちゃを自慢しているような、わざとらしい口調でその女は仕掛けの種を披露し始めた。

「やめなさい！」

彼女は叫んだ。鈴のように澄んでいて、かつ力強いしつかりとした声だ。それと同時に彼女は腰のホルスターから拳銃を抜き、引き金を引いた。狙われたのは、今にも瓦礫を吹き飛ばそうとしていた鱗の女だ。

だがその女はなんと、簡単に弾を避けた。いや正確に言うと、女が発砲音と同時に身をかわす一連の動作を龍彦は目で見た。女は音速に近い銃弾を、まるでドッジボールのように避けたのだ。

(ウソだろおい……！)

だが、狙われた女はエネルギーを貯めるのを中断した。

「これ以上の大規模破壊は許すわけにはいきません」

三人の間にさらに緊張した空気が走る。

(おい、いったい何なんだよ?)

どうやら敵は、もう一度衝撃波を放つてこの辺り一面を粉々にする気ようだ。万が一に生存者がいるときのためを想定した、徹底的な破壊工作。自分は、次は間違いなくあの世行きだ。

(冗談じゃねえ！んな簡単に死んでたまるかよ！死ぬならせめて、てめーを一発痛い目に遭わせてからだっ！)

飛び出すか、まだ様子を見るか……しかし死ぬのはもう、ほんの少しの時間の問題だと判断した龍彦は、意を決した。

龍彦は慎重に手足を動かし、四足や上体を挟んでいる鉄骨から全身の自由を取り戻す。次に目の前の折れた鉄骨を一本両手で掴みながら、押し寿司状態から飛び出した。そして飛び出しながら鱗女の頭めがけて狙いを定め、瓦礫のコンクリートの上に両足をつけたときには、すでに両手に持った鉄骨が十分な高さまで振り上げられていた。

「ぶっ殺す！」

「な、なんだ!？」

まさか瓦礫の下に生存者はいまいと油断していた二人は、驚いたようにこつちを振り向いた。龍彦は女の頭を狙って鉄骨を振り下ろす。女は避けようとしたが、そもその油断が祟って反射が遅れた。鉄砲の弾を避けた反射能力を持つてしても、龍彦の不意打ちからは逃れられなかった。鈍い音がして、鉄骨はほんのわずかだが、不気味な光沢を放つ紫色の頭にめり込む。

しかし龍彦の手応えに反して、女はびくともせず、表情だけが嘲りの色を増した。

(なっ……!)

「まさか生存者がいたとはね！」

鉄骨の一撃に何の怯みも見せない相手に驚愕した龍彦は、反応が完全に遅れた。相手の正拳が腹を直撃する。あまりの威力に骨が粉々になり、相手の腕が自分の背中を突き破って貫通するのがわかった。

「ぐぎゃあああつ！」

そのまま衝撃で体が宙に浮き。簡単に十メートル以上も吹っ飛んだ。そして頭から折れた鉄骨の上に落ちた。十メートルという飛び方は、完全に車の衝突並みの衝撃を受けたことを意味する。だが不思議なことに痛みは殴られた瞬間だけで、もう感じなかった。意識もすっかりとしている。

「この瓦礫の下敷きになって生きていたとは運がいいな。だが飛び出てきたのが運の尽きだ」

(いやいや、ここら一帯をまた吹き飛ばすつもりだっただろーが……)

今度は男が手のひらをこちらに向け、例の衝撃波を放った。その衝撃もまさに自動車に正面衝突されたようだ。それにより龍彦の首は奇妙な角度に曲がり、左肩の先から何かずっしりとしたものが飛んで行った。左腕が切断された。

「くっ……クソつたれ！」

「まだ意識があるとは強靱な人間だな。人間の中では強靱な方だろう」

(人間の中では……だと?)

龍彦は穴の空いた腹と切断された左肩から吹き出る血液を気にしながら、無理やりその場に立ち上がった。ただし、立ち上がったから何をするか、逃げるか、このままでいるかは全くの『白紙』だ。「人間とは哀れなものだ。あとこの指一本で、生命を失ってしまう」男は人差し指一本をこちらの方に向け、自分の頭を指差した。

「やめなさい。そして人が大人しくしてください。本当に死にますよ」

たまらなくなっただろう警察の女は、ヘルメットの下からはつきりとした強い声で言った。

だが龍彦は、そんな注意など気にもしなかった。というより、頭に入らなかった。

「てめーら、何のつもりかわからねーが、承知しねーぞ！」

唾と一緒に血も口から飛ぶ。自分でも意外なほどの大声が出た。

気迫だけならまだ普段通り、というところか。

「高所から落下したにもかかわらず、大声を出すほどの元気があり、左腕と内臓がえぐり取られてもまだ意識を保っているその強さに、敬意を示そう」

紫色の男は。勝ち誇った気分で口元を緩めた。大人が赤ん坊を、いや、それ以上に無力な虫けらをおだてるような笑いを浮かべている。

「人間は脆い。だがその脆さがあるからこそ、美しいのだ。はかない生に全力を尽くし、一日を歯を食いしばって生きるその姿があるからこそ、我々人間は、人間性を持った人間らしい存在として、この地球上に存在することができる」

まるで国語の教科書に出てくる哲学が題材の評論文、または仏教説話集が題材の古文のような『お話』だ。それがいったい何だとい

うのだ。

「だがその美しき脆さ、人間の人間らしさは、にわかには崩れかけている」

どこぞの過激派だろうか、この男たちは。全身を鱗に覆われ、二足歩行の恐竜と人間を混ぜたような外見なので正確なところはわからないが、表情はいたって真面目そうである。今述べた自分の考えを、本気で信じ切っている。

「我々は、人間を人間のままにしておくために、戦うのだ。その警察の用意した改造人間と、さらにそれに続く計画と、そして元締めとな」

男はビシッと、対峙する警察の女を指さした。

彼らは単なるカツコつけに見えそうだが、龍彦の目にはもっと別なように見えた。何かを本気で信じ切っている人間というものは

この場合は『人間』でないかもしれないが、圧倒的なオーラを醸し出す。真面目な考えというものを面白おかしく嘲笑するような連中など寄せ付けない、気迫に満ちたオーラを。

龍彦は、カルト宗教の教祖を半分騙されながら見上げるような気持ちになり、相手を見つめ続けた。

(待て、今警察の改造人間って)

その言葉に、龍彦は視線を警察の白い女の方へ向けた。彼女はこれまでの言葉には何も反応を示していない。

(政府御用の改造人間か。そんなことが現実にあつたとはな。薄々と無根拠で興味本位の視線くらいはオレも持ってたけどよ……)

死ぬ間際にも関わらず、龍彦の心は驚きという感情をくつきりと示した。

(だがよ、こいつらはいったい何を言ってるんだ?)

わけのわからない哲学のような構文を並べられたからといって、龍彦の疑問や怒りが解決することはなかった。いやむしろ、さらに強く激しくなっていた。

「 Manson をぶっ壊したのも、大量の住人を殺したのも、全

部でめーらの言う人間らしさを守るためだつて言うのかよ！」

「おまえにその理由など、理解できるはずがない。マスクミとネットだけからしか情報を手に取らず、水と安全をタダだと思いこみ、今ある社会を当たり前のようにしか考えていない、現代の奴隷にはな」

「なんだと」

「おまえは物事を知らな過ぎる。いま目の前にある現実　いや正確に言えば、現実とみなされているもの　これにしか目が行っていない」

男は強い口調で、龍彦の言葉を遮った。それにより、またしても龍彦は自分の頭の中で何かを思いついた。

自分の目に入らないこと　自分に知らされていないこと　それは政府御用の改造人間。

「……改造人間すら見たことがなかったオレは、てめーらとは到底分りえないってか？」

「簡単にそういうことだ。奴隷とはいえ、死ぬ間際まで冷静とはたいた者だな。気力については、まったくたいした人材だよ。それだけ気力があり意志が強いおまえなら、優秀な戦士になれたかもしれないのに」

まだ龍彦が意識を保っていることに、相手はすこしばかり驚いた様子だった。

（なんだか知らねーが、こいつらめ、絶対に許さねーからな！タダじゃおかねーぞ……）

龍彦は目いっぱい睨みを利かせて相手を見たが、それに対しては相手はとるに足らない龍彦になんの注目も、驚きも示さなかった

紫色の男と女は冗談交じりにそこまで言うと、再び警察の女の方を向いた。とどめを刺さないのだろうか。

「……なんのつもりです？」

「警察のジーの腕試しだ。さあ、加減して戦わないとそこにいる瀕死の少年が巻き添えになるぞ」

再び薄ら笑いを浮かべ、鱗の男は龍彦を親指でちよいちよいと指差した。

（けっ、オレは結局お荷物にしかならねーのか！ 情けねーったらありやしねーぜ！）

さんざん大きな声を上げた後に自分が戦いの邪魔になるとは何とも不愉快である。これではさらし首だ。

もうイチかバチかだ。重たい体にもう一度渴を入れ、逃げる準備をする。

よっこいしょっと。相手が警察と向き合っているときに、何気なく反対の方を向いて歩き去ろうとする。男らは龍彦に一瞬目を向けたが、自分は何も無いかのように無視された。こんなやつが何をしようがどうってことないと相手が目で言っているように、龍彦は思えた。

（よしっ、オレのことをカス扱いして油断してる。今がチャンスだ！）

力を振り絞り、歩行から次第に疾走へと動きを変化させる。

が、相手の示した反応は全くうその反応だった。すぐに男の手から次の衝撃波が飛び出し、再び龍彦の全身、特に胴体を直撃した。

「ぐえ……」

すっかり穴のあいた腹だが、今の衝撃でさらに穴が広がり今度は背骨が折れた感覚がした。そしてまた次の衝撃により体が浮き、別のコンクリートの壁に直撃する。今度は上体を保てなくなり、頭と上半身からその場に崩れた。

（くそっ……！）

今自分は、みじめな肉団子の一步手前の状態になっているだろう。自分が哀れに思えた。恥ずかしくも思えた。だが龍彦は、それでもあきらめがつかなかった。

（そっだ清子は？ あいつは、あいつの家族は……）

生きてるのか。龍彦が全身の力を込めて無理やりにも前に移動しようとしたとき、またしても龍彦の体に衝撃が加わった。し

かしそれはあの鱗人間の放った衝撃波ではなく、何か小さな破片のようなものが、龍彦の体に衝突し刺さった感触だった。そして次の瞬間、体から感覚という感覚が抜けていく。力が入らない　とうとう体の限界が来たのだろうか。

（ははは。これであの世にいる親父たちに会えるかもな、なんちつて……）

そして龍彦は、そのまま意識を失った。

（お父さん、お母さん……それに……）

三〇メートルほど先、龍彦が吹き飛ばされて壁に打ち付けられ、身体が崩れ落ちていくシーンの一部始終が視界に入った。ショックな光景なのだろうが、そもそも事態を呑み込むのに精いっぱい、清子はシヨックという感情が何なのか忘れていた。

それでもコンクリートと鉄骨の下敷きになった清子は、薄れていく意識の中であらゆる人間のことが浮かんできた。龍彦と、家の中にいた父と母と弟　。

（私は死ぬの……？）

自分は龍彦のように屈強ではない。すでに立ち上がる力など皆無だ。

だが……。

（あれはいつたい何なの？　私たち、突然攻撃を受けて……）

だんだんと意識が朦朧としてくるが、その中でも逆にはつきりとしてくる感情が、心の中で強く光った。

（許さない……許さない！　私はまだ死ねないわ！　私はまたみんなの顔を見るんだから！）

「現場からの報告です。都内のあるマンションが謎の攻撃を受け、完全に破壊されました。敵の正体、攻撃の目的はまだわかりません」
「上がやっとな腰をあげて手を打ったってのに。これじゃまた

警察と防衛省、与党と野党の非難合戦になりますよ」

「そりゃもつともね。オジサマたちの醜い争いには巻き込まれたくないわ……」

「でも私たちの方に来る予算はきつと増えますよ、先輩」

「予算が増えるかわりに、マンション一つを簡単に全壊させる敵の捕縛を命じられるのよ、私たちはね」

「緊急です！ 新たな情報が入ってきました。倒壊したビルから生存者二名を確認。一五歳から二十歳程度の男女一人ずつです。それと倒壊したマンションの映像を送ります」

「あつ、これって……、先輩の実家のマンションじゃないですか？」

「うそつ？ 本当だわ！まさか……」

「また新たな情報を送信します。つい先ほど、生存者二名の身元が確認できました。身につけていた学生手帳から特定。被害者は二人とも都内の高校に在籍する高校生。男性の方は大島龍彦、女性の方は……竹内清子です。二人とも虫の息、瀕死の状態です」

「救出した医療班から詳しい情報を教えてちょうだい！」

「大島龍彦の方は脊椎と内臓を激しく損傷。損傷というか、もう完全に腹に穴があいています。しかし呼吸があります。竹内清子は全身を強打しており、全身打撲です。呼吸・脈拍ともに弱りつつあり、どういうわけか状態としては彼女の方がより重体かと……」

「……Zパーツの実験体を緊急に変更します。いいですか？」

「突然また、どういうことですか？」

「私ではなく、妹の清子に変更です」

「……まさか！」

「そう。緊急事態のため、変更です」

「そんなことしたら……」

「いいから！これで誰が実験体になるか、はつきりしたの。いい？

これは命令よ」

「それは」

しかし気おされて言葉が続かない。

「……わかりました」

「うん。至急医療チームと研究班に告ぐ！ Z計画の一部を修正する。実験素体を重体患者の竹内清子に変更。すぐにZパーツを用意して、重体の竹内清子に移植する準備にとりかかること」

第1編(1) 偶然のキツカケ(後書き)

中途半端な切り方で、本当に申し訳ありません…。

第1編(2) 見えない現実(前書き)

続きです。よろしく願います。

第1編(2) 見えない現実

目を閉じて眠っている間も、龍彦の体は完全に休んでいたわけではない。傷の修復のために一生懸命内臓が働いているのがわかった。それをどうやって実感したのかはわからないが、その事実だけははっきりと知覚できる。

(どうなってるんだ、オレの体……)

体が熱い。いや、これはただ暑がっているだけではない。今まで体の奥深くに封印されていた何かが興奮している。それが何なのかは龍彦にはわからない。しかしそれは、意識が無意識かもわからない広い闇の中で、クエーサーのように強く明るく輝いている。ひと際高いエネルギーを秘めた何かだ。

「……………お」

突然視界が明るくなった。目の覚めた龍彦は、睡眠からの目覚めにもかわからず、運動後のように体が活性化した状態だとすぐにわかった。

まず真上に天井の蛍光灯が見える。左右に首を動かしてみると、シーツや布団の『白色』がやたらと目に入る。腹部の包帯が腹巻きのように見える他は、別にどうってことのない病院の縦縞模様のパジャマを着ている。どうやら自分は、どこかの病院のベッドに仰向けに寝ているようだ。

(病院ってことは、まだあの世には行っちゃいなーよな?)

自分は、あの状況でも何とか一命を取り留めたい。何と運のいいことや。自分の幸運にはつくづく驚いてしまった。十階以上の高さから墜落して生きていただけでも驚きなのに、さらにそのうえ左手がぱっくり切断され腹のど真ん中を相手の拳が貫通したにも関わらず、こうして意識を取り戻すまでに回復したのだ。なんとまあ『悪運』の強いことだろうか。

(ひょっとすると、ツギハギの無免許医が治療したのかもしれない)

な そりゃねーか……)

何度目をぱちくりさせても景色は変わらない。間違はなく自分は地に足の着いた人間のままだ。幽霊ではない。

だが周囲に日常を思わせるものが何も見えないため、現実を実感するのにならぬと手間取ってしまった。

(一応医者には、意識が戻ったってことを伝えた方がいいのかもな) 頭の上……というか隣には、看護師を呼ぶ呼び出しボタンがある。自分は腕を伸ばしてそのボタンをひと押しした。

「ありゃりゃ？」

ボタンを押してみると気付く。無意識にボタンを押した手は、なんと左手だった。おかしい。左腕は改造人間に吹き飛ばされたはずなのだが……どうしてここに付いているのだろう。

蒲団の下でもぞもぞと動かしてみても、右手、右足、左足以外にももも一つ一つの『左前足』が確かにそこにある。人間以外の動物でいう左前足がちゃんと生えている。さらに、もしやと思いパジャマの中に手を入れて包帯の内側を手で触ってみる。すると腹には穴など何も空いていない。それどころか傷跡や瘡蓋かさぶたらしき感触も無く、ただ指先には滑らかな皮膚の感触を感じるだけだ。

(こりゃまたどうなってるんだ?)

しかしその疑問の答えが出る前に、若い女の看護師が、背広を着た一人の男を連れてあわただしく自分のいる部屋に入ってきた。

目を覚ました自分を一目見て、アツと小さな声で看護婦は驚いたが、後ろに連れられた男はピクリとも表情を動かさなかった。

「気がついたようだな」

その男はそっけなく、遠い画面の向こうでこちらをみているようにぼそりとそう言った。それが自分へのあいさつなのか、それともただの独り言なのか、龍彦にはわからなかった。

男は看護師に礼を言って、事件にかかわる話があるからといってすぐに彼女を部屋から追い出してしまった。それから男は手短な椅子を引っ張ってきて、自分の顔を覗き込むような位置に座った。

「私は警視庁のナカハラという者だ。今回起きた事件について担当している」

そう角刈り頭の男は言った。年齢は二十代後半ほどから三十歳前後、礼儀正しい真面目な人という印象がまず頭にやってくる。どこにでもいるような角刈り頭、灰色のスーツと地味を貫き通したような外見であるが、鋭く光る眼だけが目立つ。龍彦には、何だか油断ならない相手のような気がした。

真面目そうなナカハラは警察手帳を取り出すと、彼自身がしっかりとした本物の警察官であることを証明した。フルネームと階級を示してから、なかはら けんじ中原賢治警部補は再び手帳を内ポケットにしまった。

「今回のこと、君の目で見たことをはっきりそのまま教えてほしい。君の情報が私たち警察の手助けになることは間違いないだろう」

龍彦にとつて、話したいことはたくさんある。エレベーターに乗っていたらいきなり敵の攻撃によりマンションビルが崩れ、そのまま落下して瓦礫の下敷きになったこと。その後で警察と犯人の改造人間同士が、よくわからない会話をしていたこと。反射的に飛び出して、犯人のうち一人を鉄棒で殴打したが、何のかいもなく簡単に返り討ちにあつたこと。そして犯人の衝撃波を全身にくらい、死んでもおかしくないほどの大けがをしてから気を失つたこと。龍彦はまずは詳細を伝えずに、今までの流れだけをざっと簡単に説明した。

「その改造人間というのは、実際に見たんだな？」

「もともと人間だったのかは確信できねえ。だけど二足歩行してたしちゃんと言葉もしゃべったから、ゴリラやチンパンジーの品種改良と考えるより先に、改造人間を思い浮かべた」

この男 警察は何か知っているのだろうか。いや、何かしら、龍彦の知り得ない事実を知っているはずだ。ちなみにもし本当に何も知らないで自分を一から頼ろうとしているのなら、自分には日本警察のことを世界で最も役立たずだと非難する権利がある。そんなことは絶対ないだろうが。

「もちろん、その改造人間というのは、実際に存在する。我々も、彼らを重点的に監視しなければならぬ超A級の危険人物だと考えられている。君の頭に浮かんでいることは、事実ということになる」
非常に勿体ぶった話し方をするなあと龍彦は思いながらも、その言葉を全身で噛みしめていた。改造人間は、実在する。

(本当にいるんだな……)

そしてマンション一つを全開させるという、超人としかいいようのない能力を目の前で発揮したやつらは、紛れもない本物の改造人間なのだ。

「なあ刑事さん」

「なんだ？」

「そいつらは今、何してるんだ？ もう捕まえたのか……？」

そこからまず浮かんできた言葉。

まさかまだ『あれら』が堂々と外をほっつき歩いているのなら、これ以上危険なものはない。彼らの存在は、鉄筋コンクリートビル一つを破壊する高性能爆弾をハンカチか携帯電話のような感覚で持ち歩いているといった状態だ。

しかし、中原は龍彦の問いには答えなかった。

「あいつらは捕まったのか？ まだ逃げてるのか？」

中原が、ちらりと下を向いたような気がした。しかし中原は、腕を組んでうなるだけだ。

(……いや)

そう言えば犯人が言っていたではないか。警察にも改造人間がいると。

「警察にも改造人間がいるんだろ？ そいつを駆使して捕まえたのか？」

自分の口がひとりでに自然と開いたようだった。中原は驚いたように目を開いた。

「知ってたんだよ。オレに腹に穴を開けた犯人がペラペラとカッコつけてしゃべったんだ。あの野郎、死に際の人間を軽く見て重要そう

な話を口から漏らしてたぜ」

「その件については、私は答える権限を持ってはいない。それよりも、他の人間の安否は気にならないのか？」

「……あつ！」

そうだった。あのとときマンションの玄関には清子がいたではないか。おそらく、彼女の家族もマンションにいただろう。指摘されて、急に頭いっぱいになったことが浮かんできた。

「おい！ 他に生存者はいねーのか！ オレ以外に助かったやつはいねーのかよ？」

「見つかった生存者は、今のところ二人だ。一人が君、もう一人は君と同じ年くらいの女子だ」

「肝心の名前を教えろっつーの！ オレはな、マンションを吹っ飛ばされる直前まで女と一緒にいたんだよ！」

「君の言いたいことはわかってる。もう一人の生存者の名前は、竹内清子。彼女はまだ生きてる。運よく瓦礫や衝撃波の直撃を避けられたようだ」

彼女はまだ生きてる 中原のその言葉に、龍彦はいったんホツと胸をなでおろした。

「だが彼女はもう虫の息だ。衝撃波の流れ弾みたいなものを全身にうけて内臓破裂を起こしている。非常に危険な状態だ。息があるのが不思議なくらいだ。はっきり言って、いつ死んでもおかしくない」

あの惨事の中で生き残っただけでも奇跡だろう。現在発見された生存者が、自分と清子のたった二人しかないのだから。

（もしかすると、竹内の両親や弟は……）

不吉な予感が頭をかすめたところで、龍彦の腹の中から盛大な音が響いてきた。敵が龍彦の胴体に穴を開けられたときに胃袋もなくなったはずだが、龍彦は一気に猛烈な空腹を感じるようになった。

「あゝ、なんだか急に腹が減ってきたな……」

龍彦は空腹で落ち着きがなくなってきた。自分の腹の音で緊張が少し解け、ベッドの上でもぞもぞと転がる。

「もう動けるのか？」

相手の警察官はまたもや驚いた様子でそう尋ねた。

「ああ。どこも異常無しだ。つーか、異常があるんならもつと包帯でグルグル巻きにされてるだろ。　　しかし腹が減ったなあ……」
急速に空腹感が襲ってきた。これは……一食抜いたような比ではない。

「胃袋が吹き飛んだのに食べられるのか？」

それは当然すぎる疑問だった。

(そういやオレ、そんな状態だっけ……)

中原の指摘はもつともだ。だがそんなこともすっかり忘れるくらい、体の調子がいい。

(いったいどうなってんだホント……?)

とにかく空腹なことは間違いない。

「なんか無性に空腹感がしてたまらねーんだよなあ。頼みます、お巡りさん。医者の許可が取れたらでいいから何か買ってきてください。あつ、やつぱりラーメン大盛の出前を二人分お願いします」

自分がすでに食欲があるということ、大盛ラーメン二人分という普通の人間からはかけ離れた食の量を要求したことの二つに中原は信じられないという顔つきになった。それでも「医者の許可が取れたらな」と一言残してから立ち上がり、病室の入口のドアから出て行った。

「くーっ！ それにしても喉の渇きもひでーモンだぜ……」

空腹の一方で、激しい全身の渇きも感じるようになった。これも真夏にスポーツをしているときの比ではない。全身の細胞が水分を渴望しているように感じられるくらい、ひどい渇きだ。

龍彦は中原が抜け出た後、とりあえず自分も病室を抜け出して適当な水道から水を飲むことにした。ベッドから降りて立ち上がり、部屋の反対側にある棚のスリッパを拝借してドアの取っ手に手をかけた。

「どこへ行くつもりだ？」

ドアを開けて一歩踏み出すと、すぐに横から中原とは別の声が出た。反射的に振り向いてみると、そこには体格のいい男が立っていた。身長は一九〇センチを超えているようで、スーツの上からでもわかる体格は、龍彦並みに筋骨隆々としている。その体格と丸刈り頭という髪型から、龍彦はいつだかの映画で見たアメリカ海兵隊を想像してしまった。

「あいや、ちよつと水を飲みに。胃袋無いけど」

そう言うとその男はちよつと待っていると残してどこかに走り去り、ものの一分もしないうちにオレンジジュースの二リットルのペットボトルを手に持って走ってきた。

「これでいいか？」

「おつ、ありがとうございます！」

オレンジジュースのボトルをありがたく左手で掴み、部屋に引き返そうとした。だがその男は龍彦の左手を突然掴んだ。

「！なんだ」

「この左腕……いったい何がどうなったんだ？」

男は幽霊に出会ったかのようにあっけにとられた顔で、龍彦の左腕をまじまじと見つめた。

「これ……これってスーパー名医がくっつけてくれたんじゃないんですか……？」

聞かれたって龍彦自身もわからないから適当に答える。本当に寝て起きたら腕がくっついていたので、説明しようもない。

「そのジュースを飲みながらでいいからさ、少し俺に話を聞かせてくれ。な？」

その男は一転くだけた顔になり、親指でもとの病室を指しながらそう言った。この男も警察の関係者だろうか。龍彦が少し怪訝そうな顔を見ると、それを読んだかのように男は胸の内ポケットから警察手帳を取りだし、同時に自己紹介を始めた。

「俺は警視庁の、とあるテロ対策をやってる部署の幹部だ。名前は出口太。^{いできちかちし}階級は警視正。自己紹介はこれぐらいでいいか？」

丸刈りの頭とふざけたバカな笑い方が印象的なこの男は、警察幹部というよりも体育会系の部活の先輩のようなイメージだ。年齢は中原よりも年上、三十代前半と言ったところか。

「さあさあ、まあ色々話を聞かせてくれよ。食いたいもんがあったら何でも食わせてやるぞ」

そう言いながら出口という男は自分を再びベッドに腰掛けさせ、自分も隣のベッドに腰を下ろした。

今回の事件は、たまたま犯人に敵対する人物が大島家の住むマンションに隠れていただろうということで、龍彦自身は全く関与していない、たまたま巻き込まれただけだという出口の説明にはため息が出てきたが、安堵するには到底及ばない。偶然に巻き込まれたとは言っても、自宅を完全に破壊され、マンションにいた他の多くの無関係な人々を無差別に殺害されたという事実には全く変わりようがない。犯人に対して、今にも怒りが爆発しそうだ。

しかし、さっきの中原との会話がまさしく『事情聴取』にぴったりの雰囲気だったのに対し、出口との会話は部活仲間とさきほど終わった試合にいちやモンをつけているといった感じだ。怒りで血が頭に上りつつあった龍彦が頭を冷やすにはちょうど良かったのかもしれない。

最初のたわいもない雑談は短く切り上げて、本題に移る。

「まずマンションを粉々にし、多数の人間を殺し、おまえに致命傷を与えたやつらは全員、改造人間だ」

「改造人間」

先ほどのときと同様、警察関係者の口から直に語られた言葉に、緊張が走った。

「改造人間。定義にはいろいろあるな。映画に出てくるような派手な連中から、遺伝子治療や臓器移植を受けた人間も、ある意味で改造人間と見なすことができる。しかしここでいう改造人間とは、通常の人間では獲得し得ない、明らかに異常な能力を持っている人間のことだ。車を軽々と持ち上げたり、ジャンプひとつで家一軒を飛

び越えたり、マンションを粉々にしたり」

出口は真面目に説明しているのだろうが、フィクションでしか起こらないだろう出来事が、ありありと公務員の口から語られていることに龍彦は少しばかり違和感を感じてしまう。ただもちろん自分がこの目で見たことや今出口が言ったことを、普通の人間ができるはずがないのは確かで、またその存在そのものを疑う余地もない。

「さっき俺は、スーパー科学テロ対策をやっている警察の部署にいるって言ったよな？　じゃあそのスーパー科学テロ対策をしてる部署が、いったいどんな犯罪者を相手にしてるかわかるか？　言っとくけどな、拳銃を持ったやつが民家に立て籠ったぐらいじゃ俺たちは出動しねえ、というか管轄権を持たん」

興味の真ん中をつついてくるその質問に、龍彦は最初心がついていかなかった。

「やつぱり、当然、今の定義による改造人間が出てくるような犯罪ですよ？」

「改造人間だけが限定じゃねえんだな。最近のテロリストや過激派が好む兵器が急速に高性能化してるって知ってるか？」

「小型核兵器とか新型の毒物とか、そういうことですか？」

その例なら、龍彦も知っている。紛れもない一七年前の対馬での核兵器爆発事件の他、都内の人口密集地域でビルの一室から猛毒ガスが大量に漏れ出した事件もあった。さらに通常よりも極めて強い毒をもった新種のスズメバチが東京都心のビジネス街でばら撒かれたという六年ほど前の事件もある。いずれにしろ、それを扱うテロリストがヘマをしたせいで起こった事件なのだ。

「まあそんなもんだ。その中でも最近特に人気なのが、バイオ兵器を主体としたやつだ。これがどういうことか、想像つくか？」

「何なんですか、それって？　そりゃあもちろん改造人間も含まれそうですが」

「人間を改造することができんなら、例えば他の動物を改造することだってできるだろ」

その言葉に、龍彦はすぐにぴんときた。

「SFみたいにマンモスとトラを人工的に合体させたのとか、口からビームを発射する鷹とか、そういうのを言ってるんですか？……いや、確か六年前に、新種のハチが都心で人を刺しまくって死者も出た事件、まさかあれもバイオ兵器が使われたりしたんですか？」

「そう。察しいいいねえ。今まで見たことがあるのは、遺伝子を組み替えて嗅覚を通常の数百倍に強化した犬とか、人間程度の大きさの動物を狙って襲うゾウサイズのトラとか、それとごくわずかな量で人間を死に至らせるような猛毒を持たせたオオスズメバチとか……」

出口の言葉を聞いて、アクションRPGに出てきそうなモンスターを龍彦は想像した。現在の科学技術をもってすれば、フィクションに出てくるような非現実的な生き物も、生み出せるのかもしれない。

「俺たち警察は、そういった多細胞生物のバイオ兵器のことを生体兵器と呼んでいる。細菌やウイルスなんかを指す生物兵器という言葉が似てるが、別物だから注意するように」

微生物関連のものが生物兵器で、より大きな、例えば動物などを使ったものが生物兵器だ。

(そんなのが堂々と存在するなんて……)

出口はいろいろと生体兵器が使われた事件を話してくれた。ある事件では、住宅街に体長が五メートル以上になる新種のトラが五匹野放しにされて、多数の重傷者を出した。またある会社員がその会社をクビになって、腹いせに全財産を叩いて大型犬サイズの生体兵器一〇匹を買ってクビになった会社に入りこませたこともあったそうだ。これにより噛まれて出血死した人間が多数出ることになった。さらに平等主義を掲げる極左過激派が、六本木に急性肺炎を起こすような強いウイルスをまき散らして大混乱になったこと。この事件の概観は龍彦も知っているが、このときは確か新型のウイルスが流

行したと報道されていた。今出口が話した事件は、全てここ五、六年くらい、龍彦が小学校高学年になってから起こった最近の出来事だ。

「今から十年くらい前から、そういった従来では考えられなかった事件が急増した。実際にオレが警察庁に入庁したてのころは、『改造生物』が現実に見れるなんて考えてもみなかったからなあ。

とまあそんなことで、世間一般の科学技術以上のスピードで、犯罪が急速に高度化したつてのは、まず理解できたか？」

「はい、まあ……。いやでも　　つてことは、進んだ科学技術で人間も手軽に改造できるようになったつてことですか？」

「『手軽』がどの程度のことを指すのかはまた別問題だが、おまえの指摘通り、改造人間は生体兵器の延長と考えていい。例えば人の手で作った、生体兵器の臓器の一部を取り出したものを人間の体内に移植する。神経もつなぐ。こうすることで、人間が生体兵器として活動することが可能になる。もちろん実際は生体兵器のパーツをそのまま移植するんじゃなくて、最初から人間に移植することを前提に開発するんだけど、話としてはそんなもんだと思ってくれればわかりやすいだろ」

人工的に作った瞬発力に優れる筋肉を手足に移植する。犬の百倍の嗅覚をもった鼻と嗅覚神経を移植する。あごを鋭い牙のある肉食獣のものを取り替える。そうすれば、見た目は猛獣、頭脳は人間という改造人間が出来上がる。実際は筋力に応じて骨格なども強化しなければならぬからそう単純にはいかないだろうが、話を聞くとこゝろ、それくらいの技術はもう実現していそうだ。

「それに生物とロボットの最大の違い。それは生物の細胞が自己増殖することだ。ロボットなら他の人間やロボットがパーツを取り替えてやる必要があるが、生物は増殖する細胞の種類と数を操ることにより、自分自身で複数の姿かたちを表現することができる。つまり変身だ。これなら普段は人間、特定の時間にだけ別の姿に変わることができる。人間と兵器の両面を併せ持つことが可能になる。場

合によつては人間体の他に、複数の変身パターンも持てるかもな」
「そんなことまでできるのか……」

「おまえのマンションを破壊した、全身が鱗で覆われていた連中も、普段はしれっと人間の姿をしてるのさ。どこぞのサラリーマンか、もしかするとどこかの会社役員だったりするのかもな」

見た目は普通の人間、だが目的を目にすると突然変身し、マンション一つを粉碎して住民を皆殺しにする凶人となる。

（住人　　そういえば今のところ発見された生存者は、こうしてもうピンピンしてるオレと、生死の境目を行き来してる清子だけか……）

「話を少し戻すぞ。六年前、日本で初めて生体兵器が出現した。例の新種のオオスズメバチの事件だ。あれは人間が、オオスズメバチの遺伝子を意図的に組み替えて、ボツリヌス毒素に匹敵するような猛毒をもつオオスズメバチに仕立てたんだ。これは、遺伝子組み換え動物が『兵器』として使用される初めての例だった。だがそれにより警視庁内に、そんな遺伝子工学を応用した兵器を専門に担当する研究組織が誕生した。それが生体兵器対策の始まりだ」

生体兵器　　遺伝子改造された多細胞生物を兵器利用したもの。

出口に言われた定義を思い出す。確かに『バイオテクノロジーの危険性』なる内容は、テレビ番組や社会の教科書で特集されていたり、テレビの番組で取り上げられたりして、龍彦もよく耳にする。しかしそこで取り上げられる話は、『自然にいない生物が環境や生態系を破壊する』というお決まりのネタで、より直接的・緊急的な脅威を訴える話はほとんど聞いたことがない。それでも一度だけ、バイオテロの脅威が取り上げられた特集番組を見たが、そこでも脅威として挙げられたのは、炭素菌やボツリヌス菌といった、病原性の細菌類・または天然痘などのウイルス類だった。遺伝子が人工的に改造され、人を殺すことを目的に作られた八子という多細胞生物

一般社会に浸透している概念とはレベルの違う新しい脅威であることは確かだろう。

「だがな、その研究組織が発足してからの三年間で、この主の生体兵器がさらに高度化するんだ。使われる生物が、八チからネズミ、鳥類、コウモリ、猫、犬、そしてついには大型動物の虎や熊なんかの改造兵器も登場した。八チやネズミはまだしも、熊や虎を封じ込めるのは、普通の人間には至難の業だ。そこで登場したのが」

「警察の、警察による、日本のための改造人間ってわけですか」

「いや、それはまだだ」

龍彦の言葉を、出口は少しもつたいぶったように否定した。

「当時はまだ『テロ』って意識が少なかった。実際にも、近所に変な動物がいるって苦情が入って、出動した地域課の警察官が偶然生体兵器に遭遇する、ってパターンがほとんどだった。だからそういう事態に対応するために考案されたのが、パワードスーツだ。……これ、何のことか知ってるか？」

「一応は……」

モーターやコンピュータを使い、身体機能を補う強化服。フィクションで多用され、またときどきテレビで報道されたりしているのに、龍彦も単語の意味くらいは知っている。自衛隊や米軍の開発が示唆されているが、まさかそれが本格的に考慮されているとは思っていなかった。

「その機械仕掛けの服を着る部隊は、人員こそ機動隊から選ばれたが、求められた役割は、生体兵器の捕獲だ。ほら、よくクマの出没で警察官が捕獲しにくいだろ？ あれと似たようなのが仕事だ。断じて対テロ特殊部隊なんかじゃなかった」

対テロ特殊部隊というより、地域のお巡りさんの補助　いかにも日本らしい、平和そうなエピソードに感じられる。

「そして発足してから一年半くらいまでは、部隊は順調に実績を上げていった。防御力に優れた機械服を着ているために、隊員への被害がほとんどなく、またそれが理由で腰を落ち着けた作戦も実行できる。生体兵器捕獲作戦において、近所住民への被害もほぼゼロ。そんな機械服部隊を、みんな微笑ましく眺めてたぜ。これなら他に

も使い道があるだろう、例えば災害派遣や土木工事にも使える、もつと安価で大量生産ができるようになればなあ、いやこれでも上出来だ、さすがはモノづくり大国、ロボット大国の日本だ　こんな風に、いつの間にか警察よりも、経産省と国交省と文科省の方が喜んでたな。のん気なモンだろ？　だが突如発生した事件により、そんな軽々しい雰囲気は一気に吹き飛ぶことになる。　羽田空港がカルト集団によって乗っ取られた事件、おまえは知ってるか？」

「それはオレも知ってます。一般のニュースじゃ、テロリスト制圧に突入した特殊部隊がボロボロと死んでいったへたくそ警察の不祥事ってなってますが」

ニュースにも挙げられた、一年半前のテロ事件だ。あの時は突入した機動隊だかSATに、数十人単位といふかなりの被害が出て、『専門家』なる人たちが大きな声で非難めいたことをテレビの中で叫んでいた。

この事件にも、また裏があるのか。

「実はあれこそ、日本で初めて改造人間が使われた事件だった。蜂や熊や虎なんかじゃねえ。人間が、人間以外のものに変身したんだ。あれには度肝を抜かれたよ。今度こそ、政府と警察と、さらに自衛隊も巻き込んだの大騒ぎになった。また同じ事件が起こったらどう対処するのか、いったいどうすればいいのかってな」

また口の中が固まった。あの事件、マスコミの報道とは全く違う事実が隠されていたのだ。

（でも、事件の真相を隠したのが間違いとは言えねーよな）

真相が隠ぺいされたのも、政府官庁が大騒ぎするのも、十分納得できる。フィクションの世界でしか起こり得ないだろう、今まで無意識的にも否定していた出来事が、真つ昼間の羽田空港で起こって、多大な被害を出したのだから。

「この時に、機械服部隊は初めて対テロ部隊として活動することを求められた。だがこれはあまりにも突然過ぎた。今まで相手してきた生体兵器は動物ばかりで、ここで初めて人間が改造された生体兵

器という、未知の存在に遭遇した。空港という派手な場所、大勢の人質、何より改造人間がどんな力を秘めているか全くわからないという大きな不安。これらの要因により、パワードスーツ部隊隊員を含む警察は、歴史に残るくらいの大敗北を喫することになった。訓練を積んだ機動隊員がズタズタにやられた、あの衝撃は計り知れなかった。改造人間というものが、いかに通常の人間と次元が違うのかを、俺たちは思い知らされた。生体機能そのものを強化された生体兵器と、ただの人間に機械服を着せたやつとの戦いは、そりゃあもうみじめだった。自分の身体の一部となる生体パーツと、機械仕掛けの服という道具。使いやすさや体への馴染みやすさつてのが、根本的に違うんだな」

何となく、出口のいうことがわかる気がする。手そのものと手で扱う箸とでは、できる動作が全く違う。動作のスピード、滑らかさ、細かさなど、一概に比較はできないが、手で直接に食べ物を掴む方が遥かに簡単であり楽である。

(でも訓練された機動隊がズタズタにつて……)

いったいどんな相手だったのだろうか。この事件と同じく、大規模破壊を可能にする連中だろうか。

「今度こそ政府は、テロを本格的に意識して、態勢の大改革に着手した。研究組織を拡充するとともに、パワードスーツ部隊の実力を底上げを図る。そして何より、今までは議論が憚られるところか概念そのものが無かった、改造人間の配備が計画されるようになった。もちろん人権諸々の議論付きだけどな。同時に政府は、改造人間という存在を初めて公式に把握し、その通称『G』という単語を生み出した。『ジー』つてのは、遺伝子に関わる Genetic の頭文字『G』な」

(『G』つて確か……)

隣人間たちが、確か『ジー』と同じ言葉を言っていた。それを今龍彦は思い出した。

しかしこんな話の最中でも、出口は大きくがっしりとした口を開

けて笑っている。実際に重大で、本当は語ることさえ避けるべき内容なのに、出口の話し方と云ったら、まるで学校の朝テストで失敗したことを笑っているようにしか見えない。

龍彦は、今までの内容を頭で整理する。そしていったん区切りをつけてから、また出口に質問をぶつけた。

「そんで、出来上がった改造人間ってのが、オレを助けたあの女ですか。確か敵は、警察の改造人間と、それに続く計画と戦うっていつてましたが」

「……まあそうだ。本当は機密事項なんだが、今さら否定もできねえしな」

マンション倒壊現場に駆け付けた彼女の背景には、そういった事情があることをまず理解する。

パワードスーツを『量産』と出口が言うからには、それに対して警察が用意できている改造人間の数はごく少ないはずだ。となると彼女は、警察の中のエリート中のエリートから選り抜かれた成績優秀者ということになるだろう。

(じゃあ、それに続く計画ってのは何なんだ?)

二人目の改造人間の計画だろうか。

「マンションの破壊とおまえとは、直接的に何の関わり合いもないって教えたよな。それは本当だ。だがそのマンションの住人の中の一部と、警察側の重要人物とが、重要な関係だったんだ。具体的に言うと、警察の研究開発部門のナンバー二の実家が、あのマンションにあった」

「じゃあ敵はそれを狙って攻撃した……?」

「それはまだ確証はない」

一瞬高ぶった龍彦の感情は、出口の言葉に蓋をされた。

「研究開発に重要なのはその当人だけでな、なんで敵が、単に血縁者ってだけで近くの住人ごといきなり皆殺しにするのか、その理由がわからん。そのナンバー二に対して脅迫したいなら、むしろ一人ずつ身内を誘拐していった人質にして脅した方が効果的なんじゃね

えかって俺は思ってる。また標的を殺すところが目的なら、何で当の本人じゃなくて、わざわざ家族の方を狙う？ 俺はもっと、別の原因があるように思えるな」

「……………」

「その原因が何なのか悩む前に、そのナンバー二ってのはいったい誰だと思っ？ なんと、実は竹内清子の姉貴なのだ」

「まさか！」

これはまた意外な人物が出てきた。竹内涼子たけうちりょうこ 清子の五歳上の姉で、たしか慶大医学部に進学したと聞いている。龍彦とも顔見知りりで小さい頃はよく遊び相手になってもらった。しかし五歳という歳の差は意外にも大きく、また彼女は大学進学をきっかけに自宅を離れて暮らすようになったため、龍彦は中学二年の春以降、彼女とは比較的疎遠になっている。

そういえば、ほんの昨日の清子との会話で、姉が大学を中退してどこかの研究機関にもらわれたという話が出てきたではないか。

（昨日のことが、もう一週間も前のことみてーだ…………）

だがまさか、もらわれた先が警察の研究機関だったとは考えてもみなかった。

「涼子くんは、改造人間の第二シリーズの主要開発メンバーで、さらに改造人間の実験体になる予定だった」

「実験体に…………」

自分の身近にいた人間が、まさかそんな政策に深くかかわっているとは、正直驚きである。それに出口の言葉の終わりが『だった』という過去形になっている点が妙に気になる。

「今な、おまえの幼馴染の竹内清子、何してると思う？」

「何って、今にも死にそうだから、治療を受けているんじゃない？…………？」

突然の話題の転換に戸惑い慌てて答えたが、現実的な内容を口に出すのが憚られるような気がして、言葉の最後のほうらが小さく消えてしまった。

「うん、そう。そうなんだが、ただの治療じゃなくて、本来涼子く

んに移植される予定だった生体パーツ……つまり『改造人間のもと』を、移植する処置を受けるんだ」

「 何い!?!? 」

出口があまりにも平然と軽々しく言葉を口にしたので、龍彦は数秒間、言っている言葉の意味を呑み込めずに啞然と固まってしまった。

「おい、それって……」

パーツを移植するということは、改造人間になるということに違いない。話の脈略がわからない。けが人の治療の中で、どうしていきなり『改造人間への生まれ変わり』のような話が出てくるのだろうか。

「法律・倫理・道徳 すべての中でアウト寸前なだけだな」

「いやそんなこと言われても……」

もはや、どうコメントしてよいのかわからない。

「なんで突然、清子が改造人間になるんだよ? 」

「生体パーツには、極限状況でもそれに耐えうるという、改造人間として必要な能力を実現するための機能が濃縮されている。そのパーツを移植して、なんとかして死ぬ一歩手前の、いやもはや数センチ手前の竹内清子の命を救おうってことだ」

その話はわかる。あらゆる手段を使って人命救助に尽くすということは、むしろ賞賛すべきことだろう。だが。

「 警察が用意した切り札を、そんな簡単に使っちゃっていいんですか? 」

もつと露骨に、そんなことしたら色んな意味でヤバいのではないかと聞こうとした。だが仮に清子の立場になって考えてみれば、命からがら助かることを、そのように悪い感じで言われたくないだろう。自分の口は、考えたこととは別のことをしゃべっていた。

「このパーツはな、もともと技術水準を実証するための、いわばプロトタイプだ。もちろん実戦さながらの性能を備えちゃいるが、実戦を前提とした配備は行われぬ予定だった。そんなに深刻になる

ことはねえよ」

「予定『だった』ってことは、もしかしてまた何か事態が変化したとかですか？」

「ここでも『だった』という過去形表現が気になる。」

「まあ、ちよつとした変更があっただけで、それは気にするようなことじゃねえ」

出口は苦笑してそう流してしまった。

（しかし、実はこれって、本当にヤバいことなんじゃねーのかよ？）

生命倫理とか人間の尊厳だとか、そういう観念的・主観的なことは抜きにしても、自分の親しい人間が改造人間にされるといふ事実を聞かされると、戸惑いを感じざるを得ない。

（それにパーツが移植されてから、清子はいつたいどうするんだ？ まさか警察も、丹精込めて作り上げた生体パーツを一人の民間人に渡してそのまま野放し、なんてことにはさせないんだろーが……）
そこまで話が進んだところで、病室の扉が開いた。再び中原が入ってきた。中島は両手でお盆を持ち、その上に大盛チャーシューメンが二皿置かれている。

「署長、もういたんですか」

「対策本部との話はもう片づけたからな。あと、もう少し詰めの話があるけど」

「はあ。ほら、注文のラーメンだ」

中原がお盆をベッドに備え付けられたテーブルに置くと、早速龍彦は礼を言っつて割り箸を二つに割り、ひたすら麺を腹の中にかきこんだ。

「ありがとうございます、刑事さん」

中原は少しだけ頷いて、レシートを出口に渡す。出口はレシートを中原から引き取つて大事そうに内ポケットにしまった。

「ところで刑事さん、オレのこの左腕も、バイオテクノロジーか何かで繋がったんですか？ ほら、ちよつぴり跡がついて、何だかトカ

ゲの尻尾みてーなんですが……」

話がついたところで聞こうと思っていたことを、龍彦は口にした。龍彦は長袖のパジャマから左肩を抜いて二人に見せる。そうすると肩関節のところ、肌の色の違いから見えるきれいなラインが入っているのがわかる。一見すると日焼け跡のような感じだ。

「いや、その治療を施したのは我々ではない」

中原は真剣そうに目が細くなり、出口は再び啞然とした顔になった。

「え？ んじゃ医者はオレに何をしたんです？」

「何もしていない。強いて言うなら、血圧や心拍数と脳波を計つて腹に包帯を巻いたくらいだ。君が運び込まれて来たとき、すでに全身の出血は収まっていた。切断された左肩や貫通して穴の空いた腹には大きな瘡蓋ができていて、医者は何をしたらいいかわからなかったそう。それに血圧や心拍数が不思議なくらい正常だったため、医者は判断に迷いこうして腹に包帯を巻いただけという処置であとは放っておくことにしたんだ」

「……ウソつけ」

「本当だ」

そんなこと信じられないと思いつつ、もう一度自分の左腕をよく見てみる。左腕の肩からすぐしたの部分を境にして、それより先の肌の色は別の部分と比べるとかなり白い。『処置』の結果でなければ、これはどういうことだろうか。

「んじゃ何か？ 放っておいたら腕がまた生えてきたってことかい。

ほう、そりゃ本当にオレがトカゲの親戚みて〜じゃねーか」

「うん、そう。そうとしか言いようがねえよなあ、賢治？」

出口は肯定した。まさか本物の刑事が、今言った自分の言葉を全て肯定するとは思わなかった。だが出口や隣の中原も、大真面目な顔でうなずいている。

「なんて言ったらいいかなあ？ というか今言えることは一つだけだけ……」

出口は立ち上がった、窓の方へと移動した。

「可能性としては、すでにおまえの体の中には一種の生体パーツが移植済みってことが考えられるな」

「生体移植パーツって、オレも改造人間だってことか？」

突然そんなことを言われても、自分には全く身に覚えがないのだが。

「遺伝子技術の発達によって、失った手足を再生できるような医療技術が開発されつつある。広義の生体パーツはそれらも含む。ただし、今にも死にそうなくらいに体が痛んでりや、ちんたらと移植パーツを育ててるわけにはいかねえ。そういう一刻も争うような事態には、最終兵器がある。格別に増殖力の強い万能細胞を、身体に組み込むんだ」

通常人間は一つの受精卵から成長する。受精卵の段階の細胞は、脳や筋肉などの様々な細胞に分裂することができる。この能力を分化というが、細胞分裂が進んで分化できる細胞の種類は減っていき、最終的には一つの種類の細胞にしか増殖できなくなる。これに対し万能細胞とは、最初にできた受精卵と同じように、体のどんな細胞にも変化できる能力を持った細胞のことだ。ここ近年に日本のある大学教授が、体の普通の細胞を使ってこの細胞を作り出すことに成功したと龍彦は聞いたことがある。

この細胞はその名の通り万能に分化できる一方、制限を超えて分裂と増殖を繰り返しガンの用になる可能性も高いという。

「実際にこの細胞を大量に身体に組み込む場合、慎重な制御が必要だ。そうしなきゃ、無制限の細胞増殖が起きて、結果的に全身がガンだらけになっちゃうからな」

「なるほど……」

「でもそれくらいのことをしなきゃ、おまえは今生きてるはずがない。普通なら出血多量どころか、それ以前に衝撃波で全身を強く打ちつけて即死してる。だがおまえは、体内の臓器をかなり損傷させても意識を保ち、突っ立ってデカい声で喚いてたらしいじゃねえか。

うちの連中が言ってたぜ」

おそらくそれは、あの現場に現れた警察の改造人間だろう。

（でもよ、そんなこと言われても、オレが改造人間だなんて、信じられねーぞ！）

心の中でだが、刑事二人に対して強く反発する。

改造手術を受けた記憶もないし、遺伝子治療などすら経験がない。いやそもそも、最後に医者にかかったのが何年前だったか。

「とにかくだ。おまえの体に何らかの改造が施されてるのは、ほぼ確実だ。そのための色々な検査を警察でやりますから、事情は知ってってくれよってことで、わざわざ機密事項を教えたわけ。こつちから話さなきゃいけないこと、おまえにやってもらわなきゃならねえことはたくさんある。それは心得といてくれ。それじゃ賢治、俺また話をしてくる」

「わかりました。残りの話は私からしておきます」

そんな二人の警察官のやりとりも、龍彦の耳にはほとんど届かなかった。

（オレが改造人間だと……）

確かに説得力のある仮設である。あのとときのタフさは、奇跡や幸運といった言葉だけでは片づけられまい。

（それでもしオレが改造人間だったら……）

まだそのことに対する疑いが抜けていないが、自分がいつたいどういう存在なのか、非常に興味が湧いてきた。自分の持っている未知なる能力や新たな可能性。そういったものをすべて自分の力としてコントロールしてみたいという欲望が、ないわけでもない。

だがその裏で、改造人間と自分を結びつけると、背筋には悪寒が走る。改造人間ならば、自分はマンションを破壊した組織や羽田空港を占拠したカルト集団などの連中に仲間入りすることになる。人間以外のものになる。人間ではなくなってしまう。

（オレはいつたい、何なんだ……？）

「それと大島くんや」

「んあ？」

頭の中で一連のやりとりをぐるぐると繰り返していると、不意に出口が声をかけてきた。

「お手柄だったぜ！ 犯人一人と対峙してくれたおかげで、ある程度の防御力が図れた。その点ではこっちも褒めてやる。優遇するぜ」

「おつ、ラッキー……じゃねえ！ まだ話が」

「続きはこの中原警部補に相手してもらえ。俺はこれから敵との戦闘準備を打ち合わせに行ったりと忙しいんだよ」

龍彦の意見など聞こうともせず、出口はさっさと病室から出て行ってしまった。

中原はあらためて背筋を伸ばして起立し、歩いていく出口を敬礼で見送った。

（改造人間だっけいきなり言われたって、どうしようもねーしな……）

いつの間にか大盛ラーメン二つは汁まできれいに無くなっていった。空っぽのラーメン鉢とは逆に、龍彦の頭は今までに浮かんできた疑問で頭がいっぱいになっていった。

（改造人間、対策部署、オレの回復力の謎……）

ここで始めて気がついたが、時計を見ると現在の時刻は午後三時ぴつたり。ということは、仮定では、正午前後にあの破壊事件が起こってから、わずか三時間で左腕が生えてきたということになる。もし現実にあるとするならば、恐ろしいと言えるほどの再生力だ。現状では何とも言えないが、そのうち明るみになるのだろう。そのとき、自分はその現実を知ってどう思うのだろうか。どうするのだろうか。

全ての謎が頭の中を駆け巡りながら、龍彦は静かに、一人で思考を開始した。

「おーい、いるか祐二？^{ゆじ}入るぞ」

荒々しくノックをしてからドアを開け、出口は応接室にズカズカと入っていった。中には角刈り頭の男がソファに座って待っていた。忙しく手帳を確認している。

「おう祐二、相変わらずお忙しそうに。いやあ、やっぱり優等生は大変ですなあ」

「別に優等生でも何でもありませんよ、僕は」

照れくさそうに笑ったその男は手帳をしまつて座り方を正した。それにも構わず、出口はどさりとソファに尻から着地した。

「相変わらずの童顔にその角刈り。いつまで立っても新米自衛官みて「な感じがするぞ」

「よく言われます。でも自衛官で長髪というのもダメでしょう」

彼 高野^{たかの}は笑うととても愛想がいい。何度も言うが、全く軍人には見えない。

「まず、警察の『メカ』に仮入隊させた自衛隊の隊員はどうですか？」

「うん、報告じゃよくやってるらしいぜ。実際にパワードスーツを体験してみて、その能力に驚いて自衛隊への必要性も痛感したって。報告書には書いてある。だが、現実にはうまくいくかどうかは……防衛省の力次第、さらには時の内閣の政治力次第ってとこだな」

出口はノートパソコンを起ち上げ、パワードスーツの単価と最近の委員会の中であった発言の一覧を画面に映した。それらを見て、二人は苦笑ともため息ともつかない妙な表情になった。

「しかし制服組はまた大変だよなあ。背広組の防衛官僚が悪いこととして逮捕されると、マスクミ連中は特に自衛隊を嫌ってるマスクミがそうだが 制服着てる自衛官を堂々とテレビに映して悪者にしたてるんだからな。やってらんねーよ。だから今回の計画は極秘にな。自衛隊が改造人間を計画してるなんてバレると警察以上に、人権屋を含む左の人が騒ぎ出すからな。まあだからこう警察を隠れ蓑にするように俺が手配してるんだけど」

「その点には非常に感謝します。今のままでは、国防がありもしな

い空論に振り回されるだけですから」

「よし。引き続き自衛隊との協力は勧めていく。その点に関しては変更なし。さて、次の話題だけど……」

出口はB5サイズの書類を出した。重要機密の印が押してある。

「プロトタイプの『Zパーツ』^{ゼット}を、奇跡的に救出された竹内清子に移植する。もう少し経てば手術が始まるだろうな」

「竹内 たしか彼女、涼子さんの妹でしたっけ？」

「そう。涼子くんは数週間後に、テスト用のパーツを自分の体に移植する予定だった。そのZパーツを、緊急的に自分の妹のために使った」

「まず最初に浮かぶ疑問なのですが、なぜそもそも研究スタッフである竹内さんが、パーツのテストをすることになったんですか？より想定に近い機動隊などの隊員がやるべきだったのでは？」

もつともな疑問だ。竹内涼子はいくまで研究員、詳しく言えば警察官でない『警察職員』だ。ごく普通の一般人と戦闘力は変わらない。さらに彼女はたしか、片足の膝があまりよろしくないと聞く。戦力としては貧弱な彼女を、どうして研究成果の主体にしたてるのだろうか。

「計画提案のとき、上が態度をコロコロと変えたんだ。議論という名の先延ばしが長引いた結果、計画凍結まであと一歩という雰囲気になった。理由はこうだ。人間を改造する実験。それは生命倫理上もつとも重大な罪であり、国家がそれを犯すことなどできない。それに生体兵器として投入された人物の人權はどうなるのだ。そんな問題だらけの人体実験を黙認することはできないし、現場の隊員の了解も取れないだろう。ってね。だが俺たちにしてみれば、向こうから上意下達式で命令してきたくせに、俺たちが非難されるのは到底納得がいかねえ。そしてあんまりな朝令暮改に頭にきた涼子くん自身が、オレと一緒に直訴にいった。そこで彼女は、自分が実験台になる、リスクは全部自分が負うから何とかしてくれと強引に主張して、計画を押し通したんだ。上の方もその直訴には圧倒され

て、なんとか了解したよ」

「さすがは涼子さん。直訴のかがありましたね」

「というより、生贄の引き受け手が現れたから、上のほうも頷いたんだろうな。誰だって人体実験のモルモットにはなりたくねえよ。」

実際に『メカ』の隊員でも、自分が改造人間になろうとする人間は皆無とっていい。だからいったい誰が実験体になるか、大問題だったんだ。そのとき涼子くんが意外にも名乗り出たことで、各方面が抱え込まなければならねえ一番厄介な問題が解決された。それを『取引材料』と見なした上は、計画を了解した。」

「防衛省でもたしか、制服・背広の両者を巻き込んだ、いろいろなやり取りがありましたよ」

「そんなわけで涼子くんが、出来上がった試作品のZパーツを自分の体に適応するよう調整して、自ら実験台になろうとした。今現在その計画は最終段階にあり、次の二週間以内に涼子くんに移植される予定だった。その対象を、民間人の救命を名目に急きよ妹に変更した」

「そんなことをして大丈夫なんですか？ 家族とはいえ一民間人を勝手に改造、さらに今回は竹内さん自身の私情も含まれます。公共物の私物化にあたるのか……また各方面から文句が出てきませんか？」

「出てくるだろうけど、涼子くんが『今まで文句しかつけてこなかった奴らにとやかく言われる筋合いはねえ！』って反論すればいいんだ。それに上の指示で実戦用配備を諦めて涼子くんを素体として設計と調整を進めてたのに、この前に急きよ、やっぱりある程度実戦にも使えないかってことを上は言ってきた。だから膝が不自由で戦闘任務に不向きな竹内涼子よりは、運動万能でさらに体質が涼子に近くて、涼子くん用のパーツが比較的なじみやすい妹の方が適任だって言い訳もできる」

出口は自分よりも一〇歳も二〇歳も年上の人が言いくるめられている場面を思い描いているのだろうか、さぞ満足そうに高笑いをし

て、ソファーにどさりと寄りかかった。それを見た高野は少し苦笑いをして区切りをつけ、次の議題に移ろうとした。

「次に、もう一人救出された大島龍彦というあの少年ですが」

「ああ。あいつの方な。あいつはもうピンピンしてる。胃袋が吹っ飛んだつてのに大盛チャーシューメンを二杯もペロツとバカ食いたぜ。腹にデカイ穴が空いても意識も失わずに生きてるわ、トカゲの尻尾みたいに無くなった腕がまた生えてくるわ、いったいどうなつてんだか。両親は怪物、姉貴も世界に通用する女子スプリント選手の化け物。そして三人目の息子で、ついに人間以外の生物が生まれてきたつて感じだな」

「出口さん、人間の子どもは人間ですよ」

高野は笑いながらそうやんわりと返した。

出口はパソコンに、大島龍彦が病院に担ぎ込まれてから午後二時半までの状態を記録した画像を映し出す。担ぎ込まれてから撮られた写真では、左腕がとれ、穴が空いて背骨の見える腹に分厚い瘡蓋が張り付いている。

「あいつは血を垂れ流しながらも、なお喚き散らす状態だったから、うちの実働部隊が偶然手元にあった麻酔銃を撃ち込んで眠らせたんだ。あれ以上起き上がったままだったら、本当に死にかねなかったからよ」

「麻酔銃を被害者に向けたんですか？」

「あの時は仕方なかったから俺が命令したんだ。だが当の本人の血圧や脈拍は、危篤状態になったことは一度も無い。麻酔銃で撃たれたことも、本人は何とも覚えてねえ」

出口は次の画像を指差した。そこには体のあちこちが痛み、骨や内臓がむき出しになっている大島龍彦の痛々しい映像が映っている。「ほら見てみる。このひでえ見た目に反して、運び込まれた時からピンピンしてたらしいぜ。それから約三時間後には、左腕は再生し、腹に空いた穴も見事に修復。こんな芸当、通常の医療技術じゃ絶対に実現不可能だ。もちろん普通の人間じゃありえねえ」

「となると」

恐る恐るといった感じで高野は言葉をつづけた。

「やはり彼も改造人間でしょうか。でも話を聞く限り、彼にはその気が全く無いと？」

「ああそうだ。俺の目からしても、あいつが何か隠し事をしてるとは思えねえ。ほんの少し話したただけなんだけどな。あと手術の痕跡についても……腹に空いた穴がすっかり治るくらいだから、もちろんそんなもんは残っちゃいねえ」

確かにそれはそうですね。高野も頷く。

「知らず知らずのうちに改造されてたのかもな。子供の頃に何かで事故って、担ぎ込まれたところのヤミ医者の実験台になる。移植されたパーツをそのままお持ち帰り、ってことが考えられるわけだが……」

「そんな粗雑な処置では、とても生存できないくらいの障害が発生する」と

「そうだ。さすがは優等生の高野祐二・三等陸佐」

少し苛立ちのような不快感をにじませ、出口は自分の膝をピシヤリと叩いた。

「今回、普通じゃ考えられねえほどの細胞増殖が起こって、あんな回復を実現した。この増殖スピードは半端ねえぞ。ガン細胞を遙かに凌いでやがる。何と言っても、わずか数時間の間で腕の一本やその他の臓器が丸々復活したんだからよ」

「ここまでの増殖力を持つパーツを長く体内に保持していれば、絶対に修復の度を超してガン化します。万が一にも成功するとなつたとしても、移植する本人の遺伝的性質に慎重にパーツを適合させなければありえません。そうすると、今度はそのパーツの開発や調整に莫大な資金がかかります。それには必然的に、どこか巨大な組織が絡んでいるとしか考えられません」

「その可能性はもつともだが、意図的にやつに移植したんじゃ疑問が残る。見ず知らずの人間のために、金をかけてパーツを調整して、

その上それをタダでくれてやるド親切なやつがいるか普通？ それにそもそもこのレベルだと、パーツの機能を個人専用に調整したつて、人間の体に適合させるのは無理がある」

また仮に大規模な組織が関わっているとしたら、それほどの組織とあの少年がどういった接点で結びつくのだろうか。遺伝的に適応させるということは、移植先の相手からも体組織のサンプルをたくさん採ってデータを集めなければならぬ。今回の場合はパーツの性能が高度過ぎるため、偶然怪我を負った患者にこっそりと、しかも怪我の手術（と見せかけた改造手術）だけでパーツの調整を含む全処置を行うということは、不可能だ。

「まさか『ゼロ』以上に出所不明な『G』が見つかるなんてな。こりゃあ、まるでマンガか映画の話にしか聞こえねえよなあ」

「そのマンガか映画のような事態に対し、現実に対処しなければなりませんね。それも今回を含めて二件も」

その任務は、五年前からすでに始まっているではないか。

「その出所を探すのは、自衛隊というよりも警察の仕事ですが」

「そうだ。もつと言うとオレの仕事に含まれる」

全く謎めいた大島龍彦の回復力。今回のテロ事件の捜査と並び、偶然見つかった彼の能力の検証も最重要任務となるだろう。

「とりあえずパーツを移植された竹内清子と、謎の超回復少年の大島龍彦の世話はこつちがする。念のためこのことはまだ防衛省にはまだ内緒にな。下手に組織のトップにかぎつけられたくねえんだわ俺、ああいうオッサンたちはクライだから」

「わかりました。彼に会ってみてもいいですか？」

「竹内清子ならまだ麻酔でおねんねしてるぜ」

「いえ、大島龍彦の方です」

「あ、うん。じゃあ立川を連れてから三人で行こうぜ。そうそう、大島龍彦に会うには、何か食いモンでも買って行ってやるとなおいぞ」

しかし高野が出て行くこうとする前に、部屋の扉がノックされた。

「古川ふるかわです。失礼します」

ドアが開き、二足歩行のロボットのようなものが入ってきた。しかしそれはロボットではなく、パワードスーツを装着した人間だ。頭の部分には、顔がわからないようなシールドを付けたヘルメット。警察の制服と同じ紺色の光らないボディーが、なんとも威圧感を漂わせる。

その本人は強化素材で覆われた手でヘルメットを脱いだ。中からは、中年の男の顔が出てきた。

「嚴重警備体制、ごくろうさまです。古川警備課長。いや、隊長つて言った方が似合いますな」

「出口署長こそ、もう関係省庁との調整は済んだのですか？」

「だからこうして敵を待ちかまえてるんじゃないですか」

古川と呼ばれた男に、出口はにやりと笑ってからスーツの裾をめくって腰のホルスターを見せつける。

パワードスーツを着た古川は、立ったまま次に言葉をつなげた。

「最重要警備対象である一階の手術室に、隊員を集中配備しました。重要職員も一緒にそこに避難させました。何があってもあそこは落とさせません」

「もちろん、そこはしっかりとお願いします」

だが 何かが抜けているような気がする。

「出口さん、大島龍彦はまだ避難させないんですか？」

不自然とも考えられることを、高野は尋ねた。

「あいつを敵の目の前に放り出して注目させ、オレや中原と一緒に敵をかく乱させる。あいつの不審なタフさの情報は敵も知ってるだろうな。きつと興味津々だぜ」

「改造人間の疑いが濃厚とはいえ、一民間人を利用するんですか？」

「『利用』じゃない。『隔離』だ。まだ正体のつかめない大島龍彦を、重要な拠点に連れていくのはマズい。だからしばらく拠点の手術室から離れた場所で様子を見ていたら、そのまま敵襲に遭った。こういうわけだ。わかったな？ もしかしたら、あいつの能力の片

鱗も見えるかもしれねえじゃん」

「しかし」

「私もそれは、いたしかたないように思えます。たとえ短い時間でも、敵の戦力が分断されていた方が有利になります。我々が最も優先すべきことは、Z計画およびそれを受け継ぐ竹内清子の警護です」

古川も、出口に賛成のようだ。

「それに、危機的状況に陥らせた方が本人も本当の能力を發揮しやすいように思えますな」

「それは犯罪では？」

「こつちはあいつの能力がどんなもんなのか、把握しなきゃならねえ。勝手な能力發揮はバイオテク規制法違反だが、この場合は正当防衛を主張できる」

だがさすがにそれは禁じ手だ。国民の安全を守るべき警察が、一般国民の一人、それも事件の被害者を危険に駆り出すのだ。

しかし高野は、現状がそれほどにまで危機的であることを知っている。出口たちへの具体的な反論が口からは出てこなかった。

「それからこれは大きな声で言えませんが」

さらに古川は話し続ける。

「実験体を涼子技官からその妹に移し替えたのは、偶然とはいえむしろ正解だったのではないでしょう。現状では膝に障害のある技官よりも、より身体能力の高い妹のほうが戦闘戦士に向いている、とは考えられませんか。あのままパーツを涼子技官に移植したら、本当にただの実験体で終わってしまいます。しかし妹なら、戦闘任務はこなせそうだ」

「遺伝的に涼子さんと異なる竹内清子で、ちゃんと生体パーツの能力が發揮されればの話ですがね。でもそれは俺の責任として、運に賭けるとしますか」

露骨に言ってしまうえば、古川の言うとおりだ。Z計画がただの技術実証体で終わってしまうのを空しいと思っむなているのは、古川だけではない。パーツと実験体の齟齬そごのリスクを抱えてまで前に進もう

と考える人間は少なくない。

「あの。お二人は、竹内清子を本気で？ 第一、実験体を無理やり取り換えたわけですから、そもそも移植やさらに能力発揮がうまくいくかどうか不明ではありませんか？」

「だからそこは博打なんだ。完全なる失敗か、実験体から戦闘員への拡張か。成功すればそれでよし、失敗したら俺の責任だ。それに、利用するのは竹内だけじゃねえ。大島龍彦だって大いに活用……せざるを得ないと俺は思うぜ」

出口の『せざるを得ない』に力の入った言葉に、古川も硬い表情でうなずく。

高野はさすがに、簡単に頭が前に下がらなかった。だが。……そうですね。放っておいても、彼らのためになるとも限りませんし。いっそのこと自分で事実をつかみ取ってくれば」

それをきっかけとして、二人とも自分のおかれた状況をしっかりと理解し受け入れることができるのではないか、そしてそれが最善の道ではないか。高野はそう考えるようにした。

龍彦は一人で思考沈黙していた。出口から話を聞いて、今までわからなかった疑問の答えが解けた。しかしさらに新しい疑問が、それ以上に増えた。

敵の目標は何だったのだろうか。さきほど出口の言った事情を除くと、龍彦には当然ながら何の理由かはほとんど見当もつかない。ただ思いつく理由といえば、龍彦が改造人間であるということに敵がすでに知っていて、その上で龍彦に何らかの危害を加えようとしたのかもしれない、ということだった。しかし仮に龍彦を対象にしていたのだとすると、敵は龍彦のことをあまりにも重視しなすぎている。龍彦が重大な怪我を負ったのは、龍彦が自分から敵の前に飛び出して行って戦いを挑んだからだ。あのときの敵の狙いは確実に龍彦以外に向いていた。

(刑事さんたちも、オレは事件の根本筋には無関係な立場だつて言つてたしな……)

それに、自分の体の謎も、深まる一方だ。しかしこちらは本当に何も原因に結びつく手がかりがない。

「君の体の話のことは、今議論したつてどうにもならない。話を変えよう」

龍彦の思考に一区切りついたのでを見計らつて、中原が久しぶりに口を開いた。

時計を見ると、すでに午後四時を回つた。あれこれと一時間以上も考え事をしていたのか。

目が覚めてからも、自分の体がさらに回復を重ねていくのが、体内の感覚で実感できた。全身の細胞が、まだ活発に働いている。そろそろじつとしているのが退屈なくらい、調子も出てきた。

「ちよつと自分の足で動きてーな。刑事さん、ちよつと病院の中をうろついてきます」

「待て、待て。何をしにいくんだ？」

ベッドから降りてスリッパを履こうとした龍彦を、中原は止めた。「だから自分の体が正常に動くか実験するんですよ。ああもう、こんな大げさなモンはいらん！」

龍彦はそう言つて、体に張つてあるガーゼや包帯の類を全てはずした。食べ物や胃の中に入れてからさらに体が回復したような気がする。もう包帯が邪魔に感じて仕方がない。もちろん、一三階の高さから落下してさらにうろこ人間に胴体をぶち抜かれたのだから、決して『大げさな治療』ではないのだが。

きっと医者への許可が必要なのだろうが、中原は龍彦を止めようとはしなかった。

中原は積極的とは言えない態度だが、龍彦と一緒に歩きながら病院の中を案内してくれると言つた。中原がこう言つてついてくるのは、二つの意味での監視のためだ。一つは、もし龍彦の容体が急変してもすぐに医療スタッフを呼べるように。もう一つは、一応こ

は警察管轄の病院であるので、むやみやたらに龍彦が部屋の踏み込まないようにするために。

「警察の病院つっても、普通の病院と変わらねーな……」

「病院は病院、それは当たり前だ。病院の扉と壁全てが鋼鉄製、随所にレーザートラップなんてものを想像していたのか？」

「そんなわけねえ……いや、でも結構武装した人間もいるな。やっぱり普通の病院と違うぞ」

「何といつてもあんな事件の直後だ。犯人の狙いも動機もわからない。もし犯人の狙いがあのマンションに住む人間だったとすると、けが人が運び込まれた病院も同じように襲撃される危険がある。だからこうして嚴重な警備態勢が敷かれている。マンションの中に人間の中で生存者は君を含む二人だけだが、他にもマンションのすぐ近くにいた人々でもけが人が多数出た。犯人の目的が分からない以上、彼らの安全も守らなければならない」

龍彦は心の中で、中原の言葉と武装した警察官の像を重ね合わせた。そうすると、今にもあの隣人間たちが再び襲撃してきそうで、腹の奥がうずくような感覚に襲われた。今はもう塞がった腹の穴。しかしまたここに大きな風穴が開くかもしれない。さらに次に吹っ飛ぶのは腹だけでないかもしれない。

（ええい、ビビってたって仕方がねえ！ オレらしくねーぞ！ 相手が改造人間だろーがサイボーグだろーが、ぶっ潰す！）

心の中ではそう叫ぶが、なぜかしっくりとこない。本心では何かを恐れている。それは敵だろうか。いやそれとも。

「よう、こんなところで何してんだ？ またこっちから行くことしてたんだが、まあ手間が省けて良かったってことか」

背後から、さきほどまでこの耳で聞いていた声がした。振り向いてみると、丸坊主頭の出口警視正がそこにいた。

「どうも中原警部補」

「署長に高野三佐まで……」

高野三佐と呼ばれた愛想のいい男は、にっこりと笑って会釈した。

「紹介しといてやる。高野三等陸佐だ。自衛隊の改造人間部隊設立計画に関わってるエリート自衛官だ」

「特別エリートってわけじゃないですけどね」

出口の紹介に、少し照れながら、高野は再び会釈した。龍彦の目から見ると、人懐っこい態度とか愛想のいい表情とかが目立って、とても軍人とは思えない。元ジャーニーズのタレントみたいだ。

そして高野の隣に、龍彦を助けた全身銀の防護服に身を固めた彼女が直立していることに、今やっと気がついた。龍彦は彼女の顔を覆っている黒いシールドをじっと見たが、こちらには何の気配も伝わってこない。あの中には本当に人間が入っているのだろうか。

(あれ……?)

気のせいだろうか。彼女の髪の毛の色から、少し赤色が引いているように見える。

「そうそう、これは僕からの回復祝いです。たっぷり食べて早く全回復するといいですね」

高野は手にぶら下げていたスーパーのビニール袋を龍彦に差し出した。小さく礼を言って袋を受け取ると、意外にもずしりと重さがあった。中を覗くと、その中には半分に切られた大きさのフランスパンとチーズとトマトソースの缶づめが入っていた。ただし、その量は龍彦以外の一般人が一人で食べきるにはあまりにも多い。おそらく高野は、龍彦がラーメン二杯をぺろりと食べ上げたことを聞かされたのだろう。

「敵に切り落とされた腕とお腹はもう治ったんですか？」

「え、ああ、そのことですか」

それならもうこの通り。龍彦は高野に、腕まくりをした左腕を差し出し、それからパジャマの上をめくり、穴のふさがった腹を見せた。

高野は龍彦の左腕をまじまじと見て、少し手首や肘を握った。龍彦にはその感覚がしっかりと伝わっている。腕は、確かにつながっている。

「なにそんな男の腕をじろじろと見てんだよ祐二。おまえはゲイか」
「ああ、すいません」

驚いてつい夢中で確かめていた高野は、出口の野次で我に返った。
「私にも確かめさせてください」

「ん、ああ別に」

突然、ヘルメットを被った人の方から女の声が聞こえてきた。はつきりと澄んだ声。そのヘルメットの内側から響いてきた声は確かに女の声だった。

(やっぱりこいつ、女なんだな)

さつきから感じていたのだが、数少ない改造人間戦士に選ばれるような優秀な戦士が女だということは、龍彦には意外に思えた。別に龍彦は『男尊女卑』という考え方ではないが、こういった仕事に携わる女性の数はそう多くないだろう。

その彼女はグローブをした手で龍彦の左腕を掴んだ。ヘルメットをした頭は動かないが、それはさきほどの高野のように驚いているからなのだろうか。

「失礼しました」

納得したのか、彼女は龍彦の腕を静かに放して一歩下がった。

「おまえらはこれからどこに行こうとしてんだ？ 大島、別にここにはマンモスとトラがミックスしたような怪物はいねえぞ」

「そんなモン探してませんよ。体が動くか試してるだけで」

「何でもいいが、あんまり奥の方に行くんじゃないぞ？ あそこはおまえの幼馴染の治療で忙しいから」

「清子のやつは治るんですか？」

「一命は取り留めたし、あとは順調に回復を待つだけだ。ただ、ちよつと今後の生活で尾を引くことがあるがな」

「後遺症とか障害とかですか？」

「そういうもんじゃねえんだが、まあ後遺症だと思えばそれでいいな」

わかりにくい曖昧な答えで誤魔化された。しかし、清子のことは

今の龍彦が気にしたってどうしようもない。自分に出来ることは何もないだろう。

「それとな、今はちょうど、犠牲になつりケガをしたりした人たちの関係者たちが結構病院に来てるんだ。遺体の前で泣いてる人間もいれば、両足が不自由になつた人間もいる。そんな雰囲気の中でバカ騒ぎなんかするんじゃないやねえぞ？それとある程度満足したらさつさと病室に戻ることに」

「わかつてますよ」

と言いつつも、実はそのことは頭から半分ほど離れかけていた。それじゃまたな。

出口、高野、女の改造人間の三人は、そのまま廊下を歩いて行った。

「この先を行くと、霊安室がある。行きたいのなら着いていく」

霊安室　死んだ人間の置き場だ。それを聞いて龍彦は少しギョツとなった。

(そうだけ。二年前もオレは……)

二年前の四月末のころ、龍彦の両親が乗っていた車が大型トラックと正面衝突した。両親の乗っていた運転席と助手席は押しつぶされた。救出され次第、二人はすぐに救急車で病院に運ばれた。

昼休みが終わつた後の五限目の授業中に、龍彦は教室をノックしてきた学年主任に呼び出された。その学年主任は生徒指導の次にゴツくて恐れられている柔道部の副顧問だったが、その時は妙におとなしく見えたのを今でも覚えてる。教務室に早足で向かいながら、龍彦はかかつてきた電話の内容を聞かされた。

『ご両親が交通事故に遭われたようです。今は病院に運ばれているそうなので、すぐに病院に向かった方がいいのでは？』

そう言つて沈痛そうな表情を浮かべる学年主任に、ああそうかわかつたと反応し返す余裕はあつた。その後は教務室の電話でタクシ―を呼び、そのまま病院まですつ飛んで行った。

自分が病院に駆け付けたときには、すでに両親二人とも息を引き

取っていた。だから病室の前で回復を祈り続けるとかはしなかったし、あれこれと心で考える前に事実だけつきつけられたので、その場での衝撃は逆に小さかった。

それからはまず別の場所で生活している姉に電話した。それからのことは強い印象では残っていない。両親が死んだというのに、両親の遺体をこの目で見たというのに、自分はまるで他人事のように振る舞った。姉も龍彦も強がりな性格のために、弱さを見せたくないという気持ちも確かに働いたが、それ以上に龍彦の心はかなりそっぽを向いていたようだった。両親を失った悲しみよりも、騒ぎ立てるマスコミをどうとつちめてやろうかということが頭の中を占領していた。

しばらく歩くと、なにかすすり泣きのような声が聞こえてきた。

中原は龍彦にあまり声を立てるなよと言うと、龍彦の体を押してそのまま先に進めた。

(親父、母ちゃん……)

他人が泣いている声を聞いて、今さらながら両親の顔が頭に思い浮かんでくる。あの子の自分は、あまりにも薄情だったのではない。三回忌の法事のとときは正反対な考えが頭に浮かぶ。あの子き自分で納得した根拠だって、龍彦の勝手な想像に過ぎない。

(オレは何をやったんだ？ ああしてそっぽ向いてる態度は正しかったのか?)

こんなときに、二年前にも感じが深い疑問が、心を揺らす。

廊下の少し離れた戸が開いて、誰かが出てきた。それは、制服警官に肩を押されながらハンカチで涙を拭う若い女性だった。ここからでは会話が聞き取れないが、状況は手に取るようにわかる。霊安室から出て来た泣いている女性を、脇の中年男性の警官が言葉をかけ、とにかく慰めようとしているのだ。

あまりに絶妙なタイミングの出来事で、龍彦の心は強く揺らされた。

「オレは、改造人間なんですよね……?」

「確実にそうだろうが、可能性が極めて高い、とまでしか現状では言えんな」

中原からの返答は無機質なものだったが、それは龍彦の確信をより強めてくれた。

自分が改造人間であることに間違いはないだろう。警察がそこまで誇張した嘘をつくとは思えないし、自分の左腕を見たときの反応も、本当にあっけにとられていたようだった。

改造人間ならば、通常の間人よりも、差の程度こそあれ戦闘能力は高いはずだ。ならば自分は、今すぐにも犯人たちを追うべきだ。追って犯人を捕まえ、ここで泣いているすべての被害者、もちろん清子や、なにより自分を含むが、それら被害者を代表して、犯人に復讐するのが自分の責務であろう。普通ならば、身近な人を亡くして怒り泣き叫ぶのは当たり前のことである。そんな人たちのために、自分は体のことを気持ち悪がっている暇など無いのだ。

「くそ……！」

握った拳に力が入る。

犯人が憎いかと聞かれれば、当然憎い。大量殺人犯を野放しにしておくなど狂気の沙汰である。そんな大量殺人犯に立ち向かうべきいや、立ち向かいたい。自分がこの手で、敵に天誅を下してやりたい。自分の身を傷つけられ、家族との思い出の場所を破壊され、大切な幼馴染とその家族を破壊され、さらに多数の間人を殺した犯人へ、正義の一撃を加えてやらなければ、自分の気が治まらない。

（あいつらめ、絶対に見つけ出して……ぶっ殺してやる！）

「人の死んだ状況に多く接してきた人間として言うがな」

突然隣の中原が口を開いた。気がつくのと、すでに龍彦たちは廊下一本を抜けていた。

「遺族のうちある一定の割合の間人は、犯人に対する復讐という行為が頭に浮かぶ。具体的な計画などではなく、漠然とあの犯人を殺してやりたいと思う。これは確かに、人間としては当然の感情だ。そしてさらにその中でもごく少数の割合の間人は、実際に復讐行為

に及ぶ。因果応酬……日本人はこの言葉を比較的肯定的に受け取るだろうが、法律で解釈すれば、犯人が犯した殺人も被害者の遺族が起こした復讐の殺人も、扱いは同じだ。同じ殺人罪だ。一応だが君に言っておく」

「突然どうしたんですか？ そんなことオレに言つて……もしオレが成人して裁判員に選ばれた時にはそういうことを心がけて審議に臨めつてことですか？」

「大島、君は自分自身以外に危害を加えられた身内の人間がいないが、それでも君はあの事件の被害者である。さらに君は、二年前に他人の行為が原因で両親を亡くしている。そして何より、君には行動力が抜群にある。君が誰かに唆されて復讐などという行為に走らないように、警察として今言つたことを教えておく」

中原は感情を完全に洗い落とした声でそう言つた。表情も硬い。

「どうして……オレが両親を亡くしたことが知つてるんですか？」
「君が眠っている間に大急ぎで調べたのだ。君は改造人間であることが最有力なのでね」

生体兵器の頂点とも言える改造人間。日本警察にもおそらく一休しかないだろう、そんな強力な『兵器』であることがほぼ確実な人間が現れたら、警察は確実に驚く。龍彦が発見されてすぐに自分の身辺調査が始まつたとしてもそれほど大げさな反応とは言えない。しかし。

（オレに優等生ぶつた復讐論を吹き込むわ、勝手に身の回りを調査されるわ、この刑事、わざと嫌がらせのつもりでやってんじゃねーか？）

中原の言葉に、龍彦は心の中で腹を立てた。

自分がたつた今考えていたことを、待っていましたというように絶妙なタイミングで全否定してみせる。もしかして中原は、そのように情緒的でまっすぐな龍彦を、あえて遺族のいる場所に連れて行き、そこで龍彦の心を刺激した上で忠告したのかもしれない。ただの人殺しも復讐の殺人も一緒なのだ。

正論そのものを、無表情かつ威圧的に突き付けられた龍彦には、不満感が高密度で詰まり始めた。

「オレが考えをこじらせて警察の敵に回らないように、警告したつてわけか」

「平たく言えばそうだ。君の行動力と実行力、それと秘められた謎の能力は脅威になりうるからな」

中原は消極的に否定するどころか、はっきりと肯定した。

「そのいちいちシヤクに障る言い方はやめろ！」

「こつこついう風にでも言わなければ、君は言うことを聞く人間でないだろう？」

(こいつめ……！)

なおも毅然とした態度を崩さない中原。その態度に、みるみる頭に血が上ってきた龍彦。あまりいい雰囲気ではない。というよりはや完全に険悪なムードになっている。

「じゃあ聞くけどな、てめーらケーサツはあの鱗人間どもをひっ捕らえることができるのかよ？ またへまして警察の部隊の隊員までボロボロと死んでいって、結局敵に逃げられるのがオチなんじゃねーのか！？」

「できる限りの手は尽くす」

できる限り 龍彦は聞いたことがある。日本国内のことであるが、犯罪の種類によっては、検挙率が三割程度のももあるという。「はつきり言うぜ！ てめーらなんかよりもな、このオレが自ら敵陣に乗り込んでいった方がよっぽど役に立つんじゃないか！？」

規則や法律や雰囲気などに縛られて何もできない警察よりも、体力があつて知恵もそこそこ働いて、大胆な行動力をもつ自分のほうが、効率的に動けるのではないか。

「目の前の敵に吹き飛ばされ、腹に穴を開けて運ばれてきたのは誰だ？」

「次はそんなへまはしねーよ。次こそあいつらの脳ミソがち割つてやるー！」

いつの間にか、龍彦の心の中であの鱗人間たちへの憎悪が拡散していた。ここにいる全ての被害者の憎悪が龍彦に集まってくるかのように、龍彦の堪忍袋がパンク寸前になる。

「オレなら、被害者と遺族を代表して、あの『敵』にケンカを売ることができるかもしれねえ。そして勝てるかもしれねえ……いや、勝つんだ！」

「敵の組織の規模は、いったいどれくらいだと思っか？」

話が不意に脇道に逸れて、龍彦は拍子抜けして口がうまく動かなかった。

「自分自ら復讐を手掛けるにしても、敵の情報を知らなければなにも動けまい。下手に動けばそれこそ自殺行為だ。今それらの情報をもっと教える。復讐の戦いを挑む前に、まずは病室に戻るんだ」

声を荒げる龍彦に対し、表情一つ動かさない中原。龍彦の頭を無理やりにも冷やそうとするかのようなその言葉。龍彦はそれを聞いて自分がわがままをいう子どものように思えて、さらに自分に腹が立った。だがここで喚いても何にもならないことぐらい、さすがにわかる。

「まあ、別に今すぐ玉砕攻撃したいワケじゃねーしな……」

なんとか自分で自分の頭を冷却する。だがそれは怒りを冷ますのではなく、声を荒げるのをやめることにしかならなかった。

そういえば、こんなに感情的になれたのは初めてかもしれない。中坊同士でケンカをしたって、こんなに心は動かなかった。自分の両親が事故で死んだときも、ここまで心の奥からわき上がる強い憤りは、果たしてあったかどうか……。

いつの間にか龍彦は、もと来た廊下を歩きだす中原の背中を追っていた。病室に入るまで、二人は一言も話さなかった。龍彦は話す代わりに、高野のくれたフランスパンを口に運んだ。

「どうだ立川、^{たちかわ}やっぱり完全に腕が生えてきてただろ」

「はい。最初は川井さんが、出口さんの変な冗談じゃないのかと言っていたので、いまいち信じられませんでした」

「おいおい、それじゃ俺が狼少年みたいじゃねえか」

「普段の出口さんならネタとして言いかねない冗談ですからね」

「こんな非常事態に冗談もなにもあるかよ。俺はマジだぞ。……ありや、ここにおいてあった研究保管庫の鍵が見当たらねえな。どこいった？」

「研究保管庫って、Zパーツゼットが保管してある場所ですよね？」

「おう、そうだ」

高野の何気ない指摘に、立川雪菜たちかわゆきなはぴくりとだけ反応した。

「まさか、Zパーツを狙った敵でしょうか？」

敵の狙いは、やはりZパーツなのだろうか？ マンションを破壊したのも、Z計画推進者のナンバー二であり、さらに最初の実験体候補であった竹内技官に揺さぶりを与えるのが目的だった。こう考えると、辻褄が合う。そして敵は、そのパーツの保管庫の鍵を盗んだ。

しかし彼女とは対照的に、高野は緩い顔で笑ったままだ。

「立川くん。出口さんはね、本当にとられちゃまずい物をそこらに放り投げておくほど、いい加減な人じゃないですよ。盗られて困るような物なら、肌身離さず持っているのが当たり前です」

「どういうことですか？」

出口もまた、笑っている。高野と比べてあまり爽やかな笑いではないが。

「Zパーツはもう、あの保管庫の中じゃねえ。あそこにはZパーツとセットで開発された応用パーツがあるだけだ。もうそろそろ移植の処置が終わるころだろ」

出口の言うことがいまいちよくわからない。

「Zパーツはな、瀕死状態にある涼子ちゃんの妹に移植されることになったんだ。ちなみに妹は、おまえと同一年の高校二年生だ」

そこまで言われてはじめて、事の重大さを理解できた。

「本当なんですか？ そんなことが許されるのでしょうか……」

「あのZパーツのために、もう三〇億円以上の開発費がつき込まれてる。でも予算はもう、中途半端なところで打ち切られた。だとすると、できた試作品一つを戦力として有効活用すべきだわな。」

失敗のリスクもでかいんだけどさ」

「それをなぜ、一民間人の しかも未成年の彼女にやらせるのですか？」

「涼子くんは膝が不自由だ。戦闘任務には不向きだ。足が不自由だとしても、犯罪者は手加減なんてしない。パラリンピックと同じようにはいかんわな」

「出口さんは賛成なのですか？」

「賛成っていうか、反対してないだけだ。祐二だって同じ考えだろ？」

出口に話を振られると、高野は顔に少し皺を寄せて頷いた。

「涼子さんにとっては苦渋の選択だったと思います。本来自分が『試験的』に担うことになるであろう戦闘任務を、実の妹に死と引き換えに与えるわけですから。そしてそれは、妹さんの人生を大きく左右する選択になりえます。我々には決してつらいところを見せませんが、涼子さんは姉として、私たち以上につらい決断をしたんでしょう」

「……………」

改造人間となるか、あるいはそのまま死ぬか。まさに究極の選択だ。

「あの、もしかして鍵を持っていったのは……」

「うん、立川の察するところ。一方で、処置の実行者は応用パーツの使用にはかなり消極的だ。まあそこは、女同士、女の感覚で争ってくれりゃいい。家庭的な女の感覚で。俺ら仕事だけに忠実な男どもの意見は邪魔になるだけ。口出しはしないぜ」

出口の言葉に、高野もかすかにうなずいた。

竹内涼子は研究保管庫の鍵を開け、中に入った。ここには確か、開発中の生体人工知能もあつたはずだ。暗い部屋の中に、いくつもの実験体や実験試料が保管されている。

(置いてあるとしたらここに**あるはず**)

確かその人工知能は、実験や検査のためにこの病院に持ち込まれたと思つていたが。

(あつた。これだわ)

嚴重に鍵のかけられた鋼鉄の金庫を見つけた。ロックを解除して扉を開けると、再び中に扉がある。鋼鉄の箱が三重にも重なつていて、さらにその中に光を通さない焼き物入れ物の中で、その人工知能は保管されている。その生きている人工知能を、涼子は手持ちの強化ガラスケースの中に生食塩水と共に流し込んだ。

(これでいい。あんな無能でいい加減な上層部の指示に従つていたら、せつかく国民の税金と私たちの時間をかけてつくつたこれが全部無駄になつてしまふわ)

ガラスケースの蓋をしつかりと閉め、中から液体が漏れださなにかしつかりとチェックする。万全の状態が確認できると、涼子はガラスケースを両手で抱えた。

「こんなところで何をしてるの。涼子ちゃん？」

ぎよつとなつて後ろを振り返る。すると入り口には、川井チーフかわいが立つていた。まだ手術着に帽子とマスクをしていて、手袋だけは外れている。

(いつの間に……?)

「その移植用の人工知能はどうするつもりなの？」

川井は普段と同じ、涼子の知つている声としゃべり方だ。マスクをしていて分声が少し詰まって聞こえるが。どうせ彼女だつて知つている疑問を、わざとらしく涼子に問うた。

「このZパーツ付属の人工知能は私の妹　竹内清子に移植します。

これも実験の一環として私用に調整したものです。これを清子に移植し上手くいけば、脳に障害を負っていたとしても機能を修復できます」

「それは公的物資の私的流用よ。Zパーツ本体なら緊急医療行為として認めるけど、人工知能まではやっちゃだめ。涼子ちゃんにはそんなこともわからないの？」

言葉こそいつもの川井と変わらないが、口調はやや厳しい。顔も心なしか少しこわばっているようにみえる。

「……お上の人たちは、一貫した意思というものがありません。先輩たちの意見が色々は無視されながらも実現した『Z計画』^{ゼウス}ですが、その計画すらも、もうすでに失敗になりかけています。最初は思い切った判断をしてくれたと上層部には少し感謝しましたが、ほどなくして実戦配備ではなくあくまで研究対象前提でやれという指示が送られ、さらに『Zパーツ』にかけられる費用は実験サンプル用の一セットだけだと突然通告されました」

一度羽田空港で、戦闘の素人相手に、警察が胸を張って揃えた特殊部隊が惨敗している。国や省庁のトップも隊員がバタバタと死んでいく場面を映像で見せられたらうに、検討期間中の選挙の結果、政権が交代し、担当大臣も変わった。官僚トップもお役所都合による人事で頻繁に変わる。そして結局見せたのは、従来と同じ硬直的な態度だった。この旧態依然とした態度だけは『一貫した意思』と見えなくもないが、その後には急きよ、やっぱりサンプルを戦力としても回せという『意見』までも通達してきたのだ。

「戦闘への使用という急な通達が来たところには、もうパーツの調整が私向けになされているところで、機動隊を含む警察隊員への修正が効きませんでした。でも法学と行政しか知らない上層部は、とにかくやってくれとしかいいません。場合によってはその責任までも私たちに押しつけます。いい加減に愛想が尽きませんか？ あんな人たちに任せていたって、この国は守れません」

握る手が汗ばんでいる。最初は冷静でいようと心掛けたが、今は

もう声が震えている。

「二年か三年でころころと変わるトップは、自分が担当のときだけでも安泰にと、現状維持という選択に逃げます。不良債権処理の先送りやずさんな年金管理だって、そうして問題が積み重なりました。たとえ問題が発覚しても、その時にたまたま政権や担当部署にいた人間が非難されるだけです。問題を先送りにと長年隠蔽してきた真の犯人たちは、何の責任も問われずにトンスラ、退職金で悠々と暮らしています。……そして結局、そのツケを払わされたのは国民じゃないですか！」

政治家と役人が無能だと、困るのは金持ちの大物政治家や高級官僚ではなく、それより下の立場にいる、大多数の一般国民である。

そして今回、涼子と清子の両親、弟は、自分たちの命という最大限の犠牲を強いられた。もうそこまでして上層部を信じる意味や価値などあるのだろうか。

「上層部が無能で役立たずなことで、涼子ちゃんの妹に人工知能を移植することには何の関係があるの？ そのパーツを移植するといふ行為は、いわば改造人間になるための通過儀式のようなものよ。

そんなことを妹さん　清子ちゃんにして何になるの？」

「Zパーツの試作品を一つしか作れないのなら、その試作品を戦力として使うしかないでしょう？」

「その言葉の意味はだいたい理解できるけど念のため聞いておくからね。　どういいうつもり？」

一層表情の厳しくなる川井。しかし涼子も負けない。

「竹内清子を、対テロ用の改造戦士、『Za^{ゼット}』として投入することを進言します」

断固とした口調で涼子も先輩の川井に向かって宣言した。

さすがの川井も、涼子があつきりとそのことを述べると表情を変えた。

「そんなこと本気で言ってるの？　清子ちゃん、まだ高校生でしょ。子どもに対テロ用の武器を与えて何にもならないことぐらい、涼子

だつてわかるでしょうが！」

「なら子どもではない真つ当な特殊部隊隊員に開発の完了した生体パーツを与えるときは、いつになつたら来るんですか？ トップが政局と出世競争と法律で揉めている間に、何人も国民が犠牲になつていくんです。羽田空港でメカの隊員がボコボコとやられたというのに、それから一年半以上も効果的な進展が見られません。このまま待つていても、日本のテロとの戦いは敗北という結果になるだけです。そして現在のテロとの戦いで勝利することができるのは、私たち科学特別警察だけです」

「上層部が無能なことも、現場のことを何も知らないことも、私はよくわかつてる。でもね、あなたのしようとしていることは、妹を生体兵器との戦いの最前線に駆り出すつてことなのよ？ 本来なら知らなくていい現実を知ることになつて、改造人間と名指しされて規制に従つて生きることになる。間違いなく『ふつうの高校生』の生活の半分は崩れ去る。あなたのせいで、妹さんの一生が激変するわ！」

「私の妹は、脳に障害を負っている可能性もあります。植物人間状態で生きる道より、改造人間として戦いに生きる道を、私は妹に与えます」

涼子は妹の清子に選択肢を与えるのだ。改造人間として生きるか、それに耐えられずに自ら死を選ぶか。清子には、戦士として戦うことを拒否する権利がある。そして彼女がもし拒否すれば、Z計画は、完全というそのままの意味で、失敗となる。

涼子はさらに言葉を続けようとしたが、一瞬間の前のダメガネが揺れて、ためらいが生じる。そしてそのわずかな隙に、川井もひどく悲しげな声で言葉を指し込んだ。

「もし清子ちゃんが戦うことを承諾したとして、それで……涼子ちゃんはいいの？ 改造人間になつて命がけで戦う妹のを見ていて耐えられるの！？」

「それは私の考えることではありません」

口では心の中と別のことを言っている。妹が命がけで戦うなど絶対に反対だ。両親と弟は死んでしまった。せめて妹の清子には、絶対に無事に生きてほしい……。だがあれだけ激しい破壊工作の中、清子も脳にまで障害を負っている可能性が高い。それを克服し万全な状態で治療を仕上げるには、Zパーツ本体の他にこの人工知能の移植も必要だ。だが人工知能まで移植してしまえば、自分は清子の平穏な生活を望むことなどできなくなる。

「そこをどいてください。Zパーツは戦力に　それが無理でも研究材料として有効に使わせてもらいます」

「涼子ちゃんは自分の妹を軽々しく実験台にできるような人間じゃないわ」

まっすぐ正面を見据えて言い張る涼子に、川井も視線を返す。

「妹にZパーツを移植して命を助けることが、同時に日本を救う希望の光となる。これは矛盾していません。そのために生じる犠牲と天秤にかけるまでもないことです。それに脳に障害があることを仮定すると、まずこの人工知能を移植しなければ何も始まりません」

妹を救うにしても、Z計画を実施するにしても、まず清子の命が特に脳が助からなければ話にならない。清子にZパーツとさらに人工知能を移植することが最優先課題であることは理論上確かなことである。

それに。

(どんな状態で生きようが、死んでしまうよりはずっといいに決まってるじゃない！)

事件のすぐ後、手術室に運び込む直前に涼子と二人だけになった瞬間、清子はわずかながら意識を取り戻した。

『おねえ……ちゃん？』

『清子！ わかる！？ 私よ！』

『私……死ぬ？』

『大丈夫！ 私が……助けて上げるから！』

『私……生きなきゃだめなの』

『もういいから』

『知らなきゃ……』

『もうしゃべらないで』

『敵を……見つけて……許さない……』

目を閉じる最後の言葉に、涼子は言葉を失った。

（大丈夫よ、清子。因果応報には賛成しないけど……しないけど、あなたの命だけは絶対に助けてみせるから、あなたも頑張つて！）

そう、それが約束。自分は清子に対し、改造されたことをきつと理解させてみせる。それと並行して、清子が因果応報に走らないように、きつと説得して見せる。

「最後に一つだけ言わせてちょうだい。人工知能特に、脳と機能が一体化するため一度移植したら簡単に機能を停止できない。妹の清子ちゃんは、死ぬまで改造人間として過ごすことになる。本当にそれでもいいの？」

「私が必ず説得します」

清子が生きること、そして自分自身が改造人間であるということを受け入れること。清子を説得できなければ、日本の明日は無し、清子自身の将来も無い。だから絶対に説得して見せる。涼子は決意を固めた。

「……わかったわ」

「……え？」

その言葉に、涼子はい拍子抜けした。

「そこまで言うんなら、その人工知能を手術室に持ってきてちょうだい。すぐに二人で作業に取り掛かるわよ」

「先輩……」

川井は涼子の手招きして、すぐに二人は手術室に向かって歩き始めた。

「出口さんや高野さんなら、今回の涼子に対して特別強く反対することはなかったわね。涼子ちゃんの言うとおり、Zパーツを移植した戦闘員は今の日本に絶対に必要なもの。だからあの二人なら法的

にも倫理的にもやばいことはわかっていても、事実上必要な措置としてすぐに口を閉じるようになる。でもね、そんな意見ばかりだと、やっぱり公平じゃないのよ。物事はあらゆる角度から見て考え、判断されなくちゃだめ。だからあたしは、一人の公務員としてじゃなくて一人の姉、弟をもつ姉として反対したの」

「私だってできることなら　姉の視点でいたら、こんな結論はとも出せません。清子はある中でただ一人生き残った大切な妹ですから、それを戦闘の最前線に出すなんて……。でも、今は助けるために　清子個人と日本国全体を救うために、これしかないんです」
清子の治療に全力を尽くすことには賛成だが、清子を戦いに巻き込むことはしたくない　その矛盾する考えを、涼子は今ふっ切った。

これは本当に涼子自身の自分勝手な判断かもしれない。というか実際そうだ。だが妹の清子には、これが現時点で自分にできる最善の　清子に最大限の選択肢を与えることができる決定だとわかってほしい。これがあなたのためであり、日本のためであると。

再び病室に戻ってから、龍彦と中原はまだ一言も口を開いていない。お互いに椅子に座っているが、体を向けあってはいない。さきほどのやり取りで少し気まずい雰囲気なので、互いに何も言えないでいる。気まずさのために口に運んでいたフランスパンもチーズもトマトソースも全部無くなった。

（オレだって、少し方向が違ったらあの泣いてた遺族みたいになっただハズだ）

今回のテロの犠牲者と、交通事故で死んだ自分の両親が重なる。自分の両親を失った悲しみと両親を轢き殺した犯人への憎しみが、重なり、混じり、増幅していく。

（そついや清子の両親も死んだのかな……。なんて余計なことは考えたらだめだろ！）

そろそろ沈黙に絶えづらくなってきた。思い切って中原に向かつて口を開いた。

「さつきはいきなりキレてすいませんでした」

「気にするな。よくあることだ」

「……………」

「……………」

また沈黙。話題らしい話題が見つからない。

「…………… 事件現場から、他に生存者は見つかったんですか？」

「君と竹内清子以外はまだ見つかっていないそうだ」

龍彦の少しばかりの希望はあっさりと否定される。

「一三階のマンションが跡形もなく崩れ落ちた状況、鉄骨やコンクリートの瓦礫が地震などで崩れた場合に比べてかなり細かいことなどから考えると、マンションを破壊した敵の衝撃波は相当な威力だったものと推測できる。通常の地震なら瓦礫の間に逃れて奇跡的に助かる人間でも、今回の場合は衝撃波自体で肉体を砕かれ死に至るだろう。生存者の可能性は極めて低い。竹内清子が一命を取り留めたのは、マンションビルの中でも比較的安全な端の柱近く、それも衝撃波を放った敵とマンション中心を挟んで反対方向にいたからだ」
龍彦が清子と最後に別れたのは玄関のすぐ近くだ。偶然が清子のことを救ったということか。

（ホント、生きてるだけでもラッキーだったんだな……………）

だが例え生き残った身であっても、瀕死の状態になって生活がめちゃくちゃになったことについて、清子だって到底納得できるものではないだろう。うまいこと生きた自分だって、両親と過ごした痕跡のあるマンションを跡形もなく壊されている。

（オレは交通事故で、清子はテロで、生活をめちゃくちゃにされた……………）

これからどうするのか。生活資金になっている預金は銀行に預けられている。印鑑と通帳が無事なら大丈夫。などと言っていられないだろう。お金以外の生活の基盤がすべて壊されたのだ。

不意に病室のドアがわずかに開いた。看護師が手招きで中原警部補を呼ぶ。数秒のやり取り後で、中原がこちらにやってきた。彼の表情を見ても、何を話されるのかさっぱり見当がつかない。

「お姉さんが会いに来たそうだ」

久しぶりに、本当に久しぶりに、日常に関する単語を耳にした。

「君自身の回復能力や、事件の概要、その他のことを話さないように」

「……そりゃあ、もちろんです」

後ろのほうのやり取りは、龍彦もつられてひっそりとした声になった。

もう一度念を押してから、中原は病室を出て行った。それと入れ違いに、心配そうな表情をした姉の美希が病室に恐る恐る入ってきた。

「……龍彦！」

「よう姉貴。期待に反するようですが、このとおりピンピンおりま
すぜ」

「よかった！ 生存者はあなた含めて二人しかいないって聞かされたから、全身複雑骨折および内臓多数損傷状態でいるんじゃないかと思って……！」

姉貴は大学でレポートを仕上げているときに警察から携帯電話に連絡が行き、この病院にすっ飛んできたらしい。肩にかかるバッグには、参考書類が大量に詰まったままだ。

「それで……家は完全に倒壊したって聞いたけど」

「文字通り完全に倒壊した。オレが意識のある中でちらっと見た記憶によると、もはやコンクリと鉄骨の山しかなかったぜ。刑事さんに聞かなかったのか？」

美希は曖昧な受け答えしかなかった。

「何にも話とか聞かされてないのかよ？」

「うっん。そうじゃないけど、でもよかった。龍彦が生きてて」

美希は初めて自分が荷物を抱えて突っ立っていることに気付いた

ようで、ベッドの脇から椅子を引っ張り出し、龍彦と向かい合うように腰掛けた。肩のバッグはもう一つの椅子の上に乗せる。美希はここに駆け込んで来てから、初めて安堵の表情を見せた。

「座ってるから大丈夫だって看護婦さんから聞いたけど、本当にケガはないみたいね？」

「まあ……な。奇跡的に」

「……あんたって運がいいのね！ きつと天国のお父さんとお母さんが守ってくれたのよ」

「そ、そうかもな。ちょうど三周忌だったし」

そう言ってお互いで笑い合う。

（姉貴は、本当にオレがケガひとつしないで助かったと思ってるんだよな……）

龍彦は別に、無傷だったわけではない。それどころか、ただの肉の塊の一步手前まで身体を壊された。しかしその後は、わずか三時間間に切断された腕が生えてくるという超人的な回復力で、全身の傷を治癒した。奇跡的にもケガを回避したのではなく、警察スタッフも首を傾げる奇跡の治癒力でケガを回復したのだ。そんな真実を言えない、隠さなければならぬとなると、何だか後ろ暗いものを感じてしまう。

ふと思った。もしかすると、美希も同じような能力を持っているのではないのだろうか。同じ姉弟なのだし、何かで繋がりがあるかもしれない。

「で、これからどうするの？ いつ退院できるとか、教えてもらった？」

「いや、それはまだ……」

そもそも自分がどういう立場にいるのか、龍彦にはさっぱりわからない。きつとこれから、貴重な生存者としての事情聴取もあるだろう。

（そついやあの丸刈り署長、オレにやってもらうことがたくさんあるとか言っただけか……）

あれはいつたい何の事を言っていたのだろうか。……いや、考えればたくさんある。事件に関する証言。現場検証の付き添い。それに何より未知の回復能力についての精密検査。場合によっては、実験用のモルモット役もやらされるかもしれない。

(うゝむ、あの男なら何でもかんでもやってのけそうだな……)

病室のドアをノックする音がして、ドアが開く。申し訳なさそうな表情の女性看護師が顔を出し、そろそろ面会を切ってもよろしいですかと声をかけてきた。

「あれ、もう終わりなのね」

「事件が事件だからな、いろいろな面で慎重になってるんじゃないの？」

「そうねえ……。それじゃ龍彦、また今度ね」

「おう。それじゃ。それと姉貴、お見舞いごころうさん」

「なによ、もうっ！」

そう言いながら、笑って美希は病室から出て行った。美希の登場で、事件後初めて笑ったような気がする。

(オレの日常、これからいったいどーなるんだ?)

とてつもない秘密を知ってしまった自分は、これから今までと同じような日常が送れるかどうか……。

それから間もなく、突然ドバンと入口の戸が勢いよく開いたかと思つと、出口とそれに続いて中原が部屋に突っ込んでいた。

「犯人のクソどもがこの病院を襲撃してきた。一般の職員と患者はもう一応避難始めてる。おまえもさっさと逃げた逃げた！」

部屋に入ってくるなり、出口は早口にそう言った。

「犯人つて、あのときのやつらか？」

「ああそうだ。それも今回はたぶん、数が結構いるかもな」

龍彦はちらりと中原の方に目がいった。中原はうゝんと小さく唸つてから、出口に何気なく囁いた。

「やはりやつらの目的はZですか？」

「そうみてえだ。とにかく、何が何でも守り通すぞ」

(ついに犯人が来るのか……)

ビルを一撃で破壊する犯人に手立てはあるのだろうか。いつきにそわそわし始めた二人の警察官の方に視線を向ける。

(もし犯人と鉢合わせして、さらに実際にオレが改造人間だったら、自分の能力を存分に発揮してやるぜ!)

それと耳に入った『Z』という言葉が気になった。なんのことだろう、『Z』とは。何かのコードネームだろうか？

「モタモタしてられねえぞ。賢治、大島を早く遠くに避難させとくれ。それとこの防護服を」

「はっ」

出口は輝きのない濃い灰色のつなぎとヘルメット三人分を抱えていた両脇から床に落とした。それは、さきほど廊下で出会ったゼロと呼ばれた人間の着ていたのと雰囲気似ている。そのうち一つを拾って、出口自ら装着する。ただし、ヘルメットには目隠しの役割が無く、顔面は透明な材質に覆われている。

「出口さん。あんた管理職にもかかわらずここに残るつもりなんですか？」

「しょうがねえだろ。トップがしっば巻いて逃げるわけにはいかねえの」

その傍ら、龍彦も急いで防護服とヘルメットを着用する。中原も同じように着用したあと、手持ちの拳銃シグ・ザウエルP230を確認してから防護服に取り付けられているホルスターに拳銃を納めた。

「その拳銃、なんかデカくないですか？」

出口のホルスター、ふと龍彦の目に止まったのは、素人でもわかる有名大型拳銃、デザートイーグル50AEだった。五〇口径のスーパーマグナムだ。

「ああ。この前のガサ入れの時に押収したやつだ。やっぱり五〇口径は威力があつて最高だね！生半可な生体兵器ならこれで一発で仕留められるぜ」

たしかに、野生のヒグマなどが生息する地域を歩くときに護身用に大型拳銃を持つということがあると聞くが。

(っっていうか、勝手にそんな銃を使ってもいいのかよ……)

防護服の着用し、さらに出口と中原の二人の点検を受けた。そうして龍彦たち三人は急いで階段を使って一階に降りていく。

この防護服は見た目も着心地も薄っぺらく、ヘルメットも極めて軽いので動きにくいということはない。アメリカンフットボールの防具に馴れている龍彦にとってみれば、こんなものはおもちやにも感じられる。しかしその分、頑丈さに少し不安を感じてしまうのが。「賢治は大島のことを一階の緊急治療室付近に連れて行ってくれ。

あそこが一番守りが堅いはずだから」

「一階だと、落ちてきた瓦礫で全員圧死ってことにはならないんですか？」

「あそこはたとえ空爆を受けても、家具類が燃えるだけで建物は崩れたりしないから、大丈夫だ」

そう言いながら三人は急いで階段を駆け降りる。だが、一階に着く寸前というところで、凄まじい破裂音と共に後ろの方に衝撃が走るのを感じた。建物全体が、まるで交通事故を起こした車のように揺れる衝撃。振り返ると、後ろの壁が砕け散って階段もヒビが入っている。

「さあいよいよ敵のお出ましだぞ！ 二人とも先に行け！」

出口は後ろに向かって二回牽制のために引き金を引いた。五〇口径弾の発射音は、また凄まじい。

「チツ、やっぱ向かい合うよりは逃げる方が先だな」

建物の割れ目からは、マンション倒壊現場で見たような紫色の鱗人間が出現し、龍彦たちを追いかけてきた。

「ほう、まさかあれだけのケガを負っても、生き延びるだけでなくなお全回復するとは。ちょうどいいサンプルだ。技術研究に利用させてもらうぞ」

「バカやろう！ 誰がためぐらのモルモットになるかよっ！」

物騒な相手の物言いに憤慨しながら、階段を降りてロビーに降り立った。かと思うと、そこでもう一つの破裂音。病院の玄関のガラスが全て砕け散り、もう一人の鱗人間が入ってきた。

「新たな任務だ。Z拡張パーツの奪取の他、この少年の身柄の確保も加える。攻撃はそれほど躊躇しなくてもいい。内蔵が無くなってもこの通り全回復する体質らしい」

鱗人間はズカズカと前に進んできて、病院の奥へと逃げようとす
る龍彦ら三人の足をとめた。

「この野郎！ よくもオレん家をめっちゃめっちゃにしゃがったな！」

「ふん、抹殺対象と同じマンションに住んでいたことを運が悪かったと思つて諦める。でも悪い面ばかりではないぞ。おかげでこうして新たな能力を発見したではないか」

そんなことを言われても、既に亡き両親の跡が残った場所を跡形もなく破壊され、さらに大量の死者を出した状況を考えれば到底領けるわけがない。

これが普通の人間だったら、龍彦はぶん殴つてはり倒していただろう。ケンカなら負けた試しがない。強盗も一度捕まえた経験がある。体重百キロ前後、ベンチプレスで二百キロ近くを持ち上げる龍彦ならケンカで人を殺しかねないほどだ。

だがそんな龍彦でも、改造人間相手では実力の差、潜在能力の差というものがあり過ぎる。自分が改造人間だとしても、どうすれば能力を発揮できるのかさっぱりわからない。

（勢いのいいことばかり考えてたけど、まずは逃げねーとどうにもならねーな……）

そしてまた銃声が後ろから聞こえてきた。振り返ると、あのメタリックシルバーの防護服とヘルメットを着た改造人間の女が走ってきた。

「みなさんは奥に。ここは私に任せてください」

「いいタイミングだぜ、ゼロ。いくぞ大島。……なに見とれてるんだよ」

「あ、ああ」

彼女は、本当にいつたい何なのだろうか……。引き金を引き銃声を轟かせる姿と、鈴の音のような美しい女の声がひどく不釣り合いに感じられる。

『ゼロ』と呼ばれる全身をメタリックな色の防護服で包んだ女は、すぐに鱗人間たちと絡んで戦い始めた。受け、突き、ひねり。彼女は非常に格闘戦に馴れている様子で、動きに無駄が無くきれいだ。新鮮みのある動きは、どこかの軍隊が考案した格闘術であろうか。ちなみに龍彦も小学校の最後二年間は柔道を習っていたほか、いろいろな格闘技を少しずつかじって動きを身に付けた。

「うおっ……」

相手の衝撃波により飛び散るコンクリートの破片から顔を覆う。だがヘルメットとアイシールドがあることに気がついてすぐに視界を開ける。

遠距離から広い範囲を攻撃することで始めて真価を發揮する相手の放つ衝撃波。それに対して彼女は素早い接近戦で対応する。腰にホルスターに納められた銃がちらほらと見えるが、それを使おうとする様子はない。

さらにもう二つの衝撃波が、病院の別の方向から聞こえてきた。出口の言った通り、出現する相手の数が多いようだ。

「これじゃ一直線に逃げるとかえって危険だな。よし大島、俺たちと一緒にじっくりと病院の奥まで進んでいくか」

「引き籠もってるだけじゃ、あの衝撃波で三人いっぺんにあの世行きじゃ……?」

「言つたろ? 空爆でもビクともしないって。それにちゃんと戦力を配置してある。パワードスーツ部隊が何人か、それともう少しすれば治安出動中の自衛隊の普通科部隊が駆けつけてくる」

自衛隊まで出動しているのか と思いつつ、普通科、つまりは通常歩兵で対応できるのか心配になってきた。そこら一般の高校生でしかない龍彦が、こんなことを心配するなど生意気なことだとも

思ったが、通常の間人だと歯が立たないから改造人間を戦力に据えたと説明したのは、他ならぬこのデザートイーグルをぶっ放つ男である。

「くらえ」

突然どこからか声がしたかと思うと、頭上から強烈な破壊波が降り注いできた。龍彦たち三人はバランスを崩し、地面に叩きつけられるように倒れた。衝撃波により、全身に打撲のような痛みが広がる。

「いてて……そこか！」

出口は素早く起き上がり、天上に向かって数発の銃弾を撃った。何かコンクリートとは違うものに当たった音がして、天上から一人の鱗人間が降り立った。

「ちよいと痛そうじゃねえか。もう一発撃って楽にしてやるぜ？」

「ふん、これくらい何と言っこともないわ」

その男の鱗人間の肩には血痕がある。出口の撃った五〇口径弾が当たった跡だろう。

「生憎だがな、てめえの撃たれたところはちょうど衝撃波を放つエネルギー器官の中枢がある場所だ。これではらくはあの殺人波は威力が減衰するぜ」

そう言つと同時に、出口は四回目の引き金を引いた。〇・五インチを誇る弾丸は、元々ついていた傷口に当たり、深くめり込んだ。

（まさか、同じ部分に何発も打ち込んだとか言っんじゃねーだろな？）

しかも出口は、デザートイーグルを片手に持って扱っている。五〇口径の銃など、馴れない人間は両手で撃つても反動に負けて狙いを大きく逸らしてしまう。あまりにひどい場合は手首を痛めさえするというのが都市伝説だ。

キャリア組のくせにこの射撃の腕……もしか出口は、とんでもない人間では無いのだろうかとあらためて龍彦は彼を見た。

「まずは貴様ら三人を始末せねばな」

「ざけんな、クソ野郎！」

龍彦がそう叫ぶと同時に、相手の手のひらがこちらに向けられる。龍彦は反射的に身をかわしていた。しかしそんな動きなど無意味なくらいに、広い範囲の衝撃波だ。だが、出口の射撃のおかげで、威力は確実に減衰しているようだ。

「ちっ！」

三人は何とか直撃を避けたものの、全員が防護服の一端を切り裂かれ、腕には切り傷ができています。

「フン、手こずらせおって」

もう一度相手が手を構える。次こそは確実に、命中させようとしている。

(うまいこと射程外に……)

また反射的に体をかわし、衝撃波を横に避ける。

どうやら敵は、衝撃波を手のひらから放っているようだ。肩の中枢機関を思い切り使わないのは、人間一人ひとりに狙いを定めるためだろうか。確かに、ここで病院を倒壊させるほどの衝撃波を全身から放つと、被害を与える側の人間までが瓦礫の下敷きになりかねない。室内という状況により敵の力がある程度制限されるのは、龍彦たちにとっては都合がよい。

しかしこのままでは埒が明かない。物陰に隠れてタイミングを見計らうか、それとも三人で固まりながら逃げるか……。

(なんとか早く、相手の内側に攻め込んで間合いを詰め……いやだめだ！ オレの力じゃ攻撃にすらならねーぞ！)

マンション倒壊現場で、目いっぱい力で振り下ろした鉄骨が、相手に何のダメージも与えられなかったことを思い出す。自分の力では、ダメージすら与えることができない。

「逃げているだけでは、倒せんぞ！」

衝撃波が周囲に与えるダメージの痕跡を見る。大幅に減衰した衝撃波は、分厚いコンクリートの壁で、ある程度は防げそうだ。しかしそれでも壁を少しは貫通してくるし、さらに至近距離で直撃すれ

ば間違いないく即死する。

さらなる銃声。壁に隠れている出口や中原が、相手の反対方向の肩にも銃弾を撃ち込んだ。その隙に龍彦も、病院の廊下の一角に身を隠す。

「これで衝撃波はさらに減衰するけどな……」

相手はすでに半インチのマグナム弾を五発くらっているが、まだ二本足で立つ余裕がある。大口径マグナムも効かないのだ。相手を倒す手段がないことには変わりがないようだ。

「こしやくな！」

「うおっ！」

何度目かの衝撃波。さきほどよりも一度の攻撃範囲を拡散させている。龍彦がさきほど転がり込んだコンクリートの壁そのものにひびが入り、砕け落ちる。龍彦の背中にも、防護服ごと切れ目が入った。あとコンマ数秒反応が遅れていたら、自分の胴体がスパツと切れるところだった。

（なんてやつだ！）

背中をさすった手には、生温かい血がついている。背中への傷はそんなに深くない。撃たれた敵一体しか来てない今が倒すチャンスだ。しかし、決定的なダメージが与えられない。

だがここで倒さなければ自分が殺される。自分が殺されれば、こいつらへの応報などできない。

（クソっ、どうすれば……！）

再び衝撃波を避けながら思う。だが、いつまでも『ドッジボールの内野役』をやっているわけではない。何とかして対応をしなければ……。

（そうだ。オレが改造人間だって話はどうなったよ！）

改造人間なら……自分が改造人間なら、自分は何か力を持っていないのか。やつらと互角に戦うことのできる能力を持ってはいないのか。

（どうにかなれ、どうにかなれっ！ オレの体！）

その時、突然、龍彦は全身が波打つように鼓動したのを感じた。
(えっ!?)

ドクンドクンと、急に全身が熱を持ち始めた。さきほど病室で目を覚ました時とは比べ物にならない。龍彦の体、頭のとっぺんからつま先まですべての細胞がエネルギーを放出し、燃え、音を立てて稼働しているかのようだ。熱とともに不思議な感覚が体を満たし、一つ一つの細胞が実際に動いているように感じられる。

(これは……?)

細胞の動きがさらに活発化していく。筋肉が、内臓が、骨が全身の組織が体内を忙しく駆け巡り、長い眠りから覚めた機能を発揮せんとばかりに、龍彦の身体全体が新たな活動を開始する。全身の感覚が研ぎ澄まされていく。

次の瞬間、目の前の視界が急に遅くなり、体も軽くなる。

(今度はなんだ!?)

まるでスローモーションのような視界に一瞬戸惑う。相手の動き振り向きや構えなどの動作がすべて遅い。出口や中原も同様に、やたら動きが鈍い。

(これなら堂々と)

スローになつた周りの世界を置き去りにしていくような感じで、龍彦は回り込んでから相手との間合いを一気に詰めた。この一連の動きを、相手が完全に振り向くまでに行うことができた。

そのまま反射的に、相手の背中、肩甲骨の間ぐらいの位置に、右腕のストレートを打つ。敵の反撃を恐れてすぐにその場から離れようとしたが、それとほぼ同時に、信じられない光景が視界を占めていた。

敵の背中に自分の拳がめり込み、衝撃を受けた敵の体が宙に浮いて三メートルほど飛んでいったのだ。

(おいおい、どうなっちゃったんだ……?)

ふと気がつけば相手は、コンクリートの地面に腹から崩れ落ちていた。だがまだ戦闘不能というほどではなく、すかさず手について

立ち上がる。

「なんだ貴様……」

突然の不意打ちに、敵も戸惑っている。

「やはりただ者ではないようだな……」

聞こえてくる言葉こそ違和感がないが、やはり相手の動作全体が『遅い』と感じてしまう。

「言っておくが、ただ能力を開花させただけで、俺に勝てるわけではない」

相手が言葉を言い終わる前に、こっちから仕掛けに行く。相手はさらに衝撃波を放とうと手のひらをこちら側に向けたが、すでにそのときには、龍彦は動きを感知して右に体を動かし身をかわしていた。

そして今度は、低い姿勢から相手の横っ腹に正拳突き。今回は相手の内臓にまで衝撃を与えた感触が、拳を通じて感じられた。

(何だかわかんねーけど、すげえ……！)

今度は相手の体は吹っ飛ばず、そのまま身がたじろいだ。しかしなおも反撃を続けようとする相手に、龍彦はその腕を掴んで手首を捻り、衝撃波の狙いを外す。そして相手の腰が浮いたところで、龍彦は下半身に強烈なローキックを加えた。何か固い物が碎ける感触が生々しい。最後に腕をひねられ回避動作ができない相手の右頬に、左手で渾身のフックをお見舞いする。

ゴキリと首の骨が砕けたような音がして、相手は力なく地面に崩れた。さらに反撃を加えようと龍彦は構えたが、すでに相手の戦闘力は皆無だった。死んだ。

(……………)

敵が動かないのを見届けてから、少し離れた場所で銃を構えていた出口と中原がこちらに駆け寄ってきた。二人は死んだ隣人間に銃を向け、敵の死亡を確認してからようやくやく銃を降ろし、龍彦の方を向いた。

「大丈夫か、大島。　　しかしよくこいつを倒したものだな」

中原も、心配というよりも驚きの表情で龍彦に言った。

まだ体は軽い。また視界に入ってくる情報も違う。ただスローに感じるだけでなく、視界の中の一コマ一コマが、きめ細かにとらえられている。視界でとらえた画面全体を見ているのに、まるで一点を凝視しているかのように細かい情報まで目が届く。

（もしかして、これが改造人間の能力か……？）

というか、絶対にそうであろう。

「おお、よくやってくれたな。大したもんだぜ。たぶん、改造人間の要素が現れたってところかな」

そこは出口も感づいたようだ。

「……すげえ」

「あ？」

出口の反応などにかまっていられない。龍彦は、全身の興奮を抑えられなかった。

「すげえよ！ これならオレは……オレは……！」

全身から湧き上がるエネルギー。それは、頭の中のモヤモヤを吹き飛ばしてくれるほど、爽快なものだった。人間でなくなるのではないかという不安など、いとも簡単にかき消してしまった。

（これなら、あの隣連中たちに対抗できる！）

自分には、敵と対等に戦う力がある。力があるのなら使うべきだ。今の一大事に文句を言われるような筋合いは、自分にはない。

「出口さん、オレ、ちよつと戻って敵をブン殴ってきますんで」

「あ？ アホ。何言ってるんだ」

「よくわかりませんが、オレは不思議な力に目覚めたみたいです」
「状況を見りゃわかる！」

これなら倒せる。この能力があれば、敵を倒し、壊滅させ、脅威を排除することができるかもしれない。

（何だかよくわからねーが、いけるぞオレは！）

まだ全身が熱い。

「それじゃ、ちよつと行ってきます」

「あ、コラ！」

出口が返事を返す前に、龍彦はまた元の場所、『ゼロ』と呼ばれた改造人間が戦っている現場へとかけ出した。間違いない。この時のダッシュ力も通常とは比べ物にならない速さだ。本当に自分は、改造人間なのだ。

「賢治、オレはあいつのことを止めたよな？」

「はい」

「大島の件は、正当防衛ってことで上に報告するぞ」

「……はい」

現状では何が何だかさっぱりよくわからないが、この力があるならあの改造人間たちにも勝てる気がする。やられたら三倍にして返す。相手がチンピラだろうが暴走族だろうがテロリストだろうが関係ない。売られたケンカは買うまでだ。

（野郎どもを相手に思う存分暴れてやろうじゃねーか！）

龍彦は何か文句を言いたげな出口と中原を無視して走り出すと、すぐに『ゼロ』と呼ばれていた人が四体の鱗人間と戦っている場面に遭遇した。他に一体が床に無惨に倒れている。おそらく『ゼロ』がすでに無力化したのだろう。

「てめーら全員、このオレがブツ潰す！」

そう叫ぶと同時に、龍彦は一体に目がけて走ったまま突っ込んだ。不意に脇から飛び出してきた龍彦に相手は気づくこともできなかった。龍彦は肩と頭で体当たりをすると同時に、拳も突き出した。うまくタイミングを合わせたその攻撃を食らった相手は、吹き飛んでコンクリートの壁を突き破り外の地面にドサリと墜落した。壁を突き破ってなお飛んでいった相手は、そのまま気を失って地面からピクリとも動かない。

「あなたは」

『ゼロ』も含むその場にいた全員が、ハッとなって龍彦の方を見た。「この場から離れてください。危険です」

「堅いこと言うんじゃないよ。オレにもこいつら殴らせる」

「だめです。警告します。この場から離れてください」

警察関係者からの警告だが、若い女のきれいな声であるため、警察からの警告というよりも学級委員長から注意を受けたぐらいにしか聞こえない。中学校時代に毎日生徒指導の体育教師に叱られていた龍彦にとつて、そんなものは警告でもなんてことがないのだ。

「これは警察として」

「もういい！」

気の短い龍彦は、彼女の警告など無視して、また別の敵に殴りかかった。

「図に乗るな、素人が！」

数メートルほど離れた位置にいるその敵は、すばやく腕を構えてあの凄まじい衝撃波を放つ。さきほどの負傷した相手とは違う、破壊力抜群の衝撃波だ。しかし龍彦はその狙いから素早く飛び退き、壁を跳ねるようにして回り込んだ。そして体めがけて拳を突き出す。「それで出し抜いたとは思うなよ」

相手もすぐに身を翻して龍彦の攻撃を防いだ。改造の有無を考慮にいれなくとも、その動きは明らかに素人ではない。

だが龍彦も完璧な素人ではない。小学校のころに柔道と、マージナルアーツ系の技を少々習ったことがある。さらに色々とわけがあって、ボクサーのパンチの基本もジムに通っていた友達から入念に教わり、『実践経験』も多分にある。龍彦は打撃系と組系の両方の技を存分に使える。

「どりゃっ！ てめえ……おっと！」

相手のカウンター蹴りを、華麗に身を裁いてかわす。さっきの龍彦からの奇襲だったのでパワーに驚くだけだったが、龍彦が本当に凄まじいと感じるのはパワー以上にスピードだ。相手の動きを克明にとらえられる動体視力に加え、体の重さが普段の何十分の一になったかというくらい体が軽く感じる。まるで地球の重力が一瞬で激減したかのようだ。

「ちょこまかと……おまえなど我々の手にかかれば」
相手が格好つけようと口を開いた瞬間に隙ができた。龍彦はその隙を見逃さず、相手の顎に下から強烈なアッパーをお見舞いした。龍彦の拳が大きく顔にめりこみ、顎の骨が折れるか砕けるかの感覚が残る。

「よつと！」

人間の力を遙かに上回る力のパンチで相手の身体は宙に浮いた。頸への衝撃も相当なものだろう。相手の体が浮いたところで龍彦は右足でミドルキックを相手の横っ腹にお見舞いする。感触から、相手の内蔵がグシャリと潰れるのがしつかりとわかった。

「びぎゃっ！」

腹に衝撃を受けた相手は奇声を漏らして飛んでいき、五メートルほど脇の階段に頭から突っ込んでコンクリートに上半身がめり込んだ。

（スゲえ！ 車の衝突よりも強烈なんじゃねーか？）

明らかにいつもの自分とは違う身体能力を龍彦は発揮している。人間を優に超える絶大な能力だ。身体能力の強化というよりわかりやすい特徴を思う存分に発揮したことで、龍彦はより一層、興奮が高まっていた。

残り二体　そう龍彦が思ったところで、何やら空気の流れが変わった。

（えっ、な、なんだ……？）

空気を変えたのは、二体の敵に対して構えている『ゼロ』だった。肩甲骨あたりまで伸びる彼女の髪の毛の色が、みるみる変わっていく。さっきの茶色から、マンシヨンのところで見た赤茶色、さらにそれを通り越して、鮮やかな赤色に根元から毛先へと色が変わっていく。

「もう、時間がありません」

彼女はそう言って一歩敵に踏み出す。早い。今まで周りの視界が遅く感じられた龍彦の目にも動きが素早く映る。

彼女は踏み出して、そのまま敵の懐に潜り込む。敵が反応して防御姿勢を取る前に、脇腹を素早く殴る。その間にもう一体の敵は、味方ごと『ゼロ』を排除しようと手のひらを向け衝撃波を打とうとしたが、『ゼロ』はすぐにそのもう一体のほうにも低く滑り込んで相手の膝を蹴って逆に曲げる。そして彼女は相手の首を抱え、最初に殴った敵の方に投げ飛ばした。そしてぶつかった二人が大勢を崩したところに、二体の頭をめがけて二回の蹴りを入れ、二人の首をへし折った。

龍彦はその一部始終に見入った。すばやく効率的な攻撃、無駄のない動作。龍彦のようなチンピラではない、本物のプロの動きだ。「い、いや」ホントにスゲーぜ。改造人間ってのは、こんな力も発揮するか。これじゃ確かにパワードスーツを着ただけじゃ対処不可能だわな。こんな能力なら興味本位でほしがる連中も確かに出てくるだろうし。……いや、怪獣の姿になっちまうんじゃ逆に誰もなりたがらね〜か。怪獣になったんじゃ学校にも会社にも行けね〜しな。あ、あはは……」

ひとまず相手を片づけた彼女に対して、龍彦は何を言ったらいいかわからなかった。顔も見えない相手なので、非常にたどたどしい言葉になってしまった。

「人間として生まれた個人を、わざわざ異形の姿に変える必要はありません」

龍彦が上がったテンションのまま長い独り言を口に行っていると、『ゼロ』は淡々とした口調でそれに答えた。

「変える必要はねーって、あの鱗人間どもは怪獣みてーな見た目してるじゃねーかよ」

「普段は通常の人間の姿で、必要な時だけ異形な姿の人型生体兵器に変身する。改造人間の本当の脅威は、人間と生体兵器の両面を持っていることにより、ひとたび人間世界に紛れ込まれると搜索が厄介なところですよ」

そういえば確か、さっきそんなことを出口か中原の説明で聞いた

ような気もするが。

「それならあの鱗人間どもも、普段はスーツ着て普通の顔して、仕事になったらその時限定で変身するってワケだよな？」

「スーツを着ているかどうかはわかりませんが、ごく普通の人間として生活しています」

「あんたも同じように『人間』と『生体兵器』の二面があるのか？」
「……はい」

再び聞くような話だが、自分で力を使ってみた後に同じ話を聞かされると、さらに驚く。ただでさえ人間が生体兵器の役割を担えるようになれば、量産型の生体兵器よりも大きな長所がある。知能だ。性能が良いものでも知能がチンパンジー並の人型生体兵器を使うより、各国の特殊部隊や情報機関に属するような優秀な人間を生体兵器として仕立てれば確実に使える戦力になる。これくらいは龍彦にも容易に想像ができる。さらにまさか普通の人間の顔も持てるのであれば潜伏潜入も自由自在である。単純な戦闘から、標的のピンポイントの破壊という高度な任務も容易にするだろう。不意打ちが仕事であるテロリストにとってはうってつけの兵器だ。

「自分の身体が気にならないのですか？」

「こんな能力があるんじゃないのですか？」
「……」

「そういう意味ではなく、今あなたの体がどういうふうに変身しているかを確かめてみた方がいいのではないのでしょうか？」

「変身……まさか」

まさか自分もあんな怪獣のような姿になっているのでは……。正直そんな人間離れた姿にはなりたくない。例えば鱗人間のような状態から人間に戻れるとしても、その姿が忘れられずに何かぎこちなく感じてしまうだろう。

だがさつきは急に体が活性化し、能力のレベルが『スイッチの切り替え』のような一瞬の変化を見せた。まさに『変身』という名にふさわしい変化が龍彦の身に起こっていることだろう。

まず恐る恐ると、龍彦は左手の防護用の手袋を外してみた。

手袋の下から見えたのは、普段見る自分の肌の色ではなかった。かなり黒に近い紺色というか、黒の絵の具に青が一滴混ざったというか、そんな色をしている。皮膚も体毛と爪が消え、硬質ゴムのようになり、弾力性のある肌となっている。だが手の感触はいつもと変わらず健在だ。いやむしろ、いつも以上に器用で敏感な手かもしれない。

「うげ　っ！　これが変身後の姿かよ。手と腕がこれなら、全身もこんな皮膚が覆ってるのか。カッコワリいな……」

龍彦は一瞬、体全体がゴムタイヤの素材で固められたようなイメージが頭に浮かんだ。

こんな皮膚の色をしていれば、顔がどうであれ非常に気味の悪い存在になることは間違いなさそうだ。

（改造人間っていうか、人間を離れて二足歩行の怪物になってるぞ……）

「医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法により、日常生活や生命維持に関わるもの以外の『改造』は禁じられています。あなたの改造の理由が何であれ、警察の手で元の普通の人間に戻さなければなりません」

「医療および改造に関する規制法……？」

そんな長つたらしい名前の法律が存在したのか。いや、そんな法律のお世話になることなど滅多にないのだろうが。

一方でこの女に対し、中原のような優等生ぶった図々しさを感じてしまった。

「いいんだ、いいんだ！　ゼロ、こいつの能力発揮はオレが許可した」

「出口さん……」

ゼロという女は、いつの間にか奥から歩いてきた出口の方を向いた。出口の接近に気付かなかった龍彦も、思わずそちらのほうを見る。

「緊急事態における特別措置だ。敵はこの大島少年自身のことも狙っている。彼が自分の持っている能力を遺憾なく発揮して敵を撃退するのは、正当防衛さ」

「そうだそうだ！ こっちは自分の命がかかってんだぞ！」

龍彦もうまく調子を合わせる。彼女の言っていることはいまいち理解できないが、自分の存在に否定的なのは明らかだ。だが自分が自分の持っている能力をどう使おうが、それは個人の自由である。

彼女は少し黙ってから、病院の奥の方向へと顔を向けた。

「この奥に向かってください。あなたの友人が眠っています」

今まで忘れていた清子のことだが、あらためて頭に浮かんでくる。

彼女はまだ治療中だろう。襲われたら逃げることをすらできない。

「よっしゃ！ 何人来ようが返り討ちにしてやるぜ！」

龍彦は肩をブンブンと回し、もう一度気合いを入れ直す。全身の興奮度を上げ、戦闘態勢に入る。一流のスポーツ選手も、試合前はこうして心を興奮させ、気力を高めるのだ。

（今のオレなら、全被害者を代表して、犯人に天誅が下せるのか…）

今度は奥から、破裂音が聞こえてきた。新たな敵か。

次の瞬間、龍彦は『ゼロ』や出口よりも早く、病院の奥へと駆け出していた。

第1編(2) 見えない現実(後書き)

またまた中途半端な切り方ですが、本当にすいません。
次回でやっと、序章に当たる第1編が完結します…。

第1編(3) 覚醒、そして…(前書き)

これで「第1編完」といった感じですか。今まで楽しんでもらえたでしょうか？

衝撃波によりコンクリートに穴が開けられ、そこから複数の敵が侵入してきた。全身が爬虫類の鱗のようなものに覆われている。全身紫色で、二足歩行で歩くトカゲ人間と言ったところか。

「怯むな！ 数はこちらの方が多し。落ち着いて引き金を引け！」
病院の内側へも侵入を許した。「ゼロ」が戦っている間、他の連中は別の個所から侵入を試みていたのだ。こちらには改造人間は「ゼロ」一人しかいない。パワードスーツ部隊でどこまで応戦できるかどうかはわからない。

「データ転送！ 敵の弱点は肩だ！ 上半身を狙え！」

前線から一步下がって状況を考える。古川はパワードスーツ部隊の隊長として、この上なく危険な状況に挑もうとしていた。すでに部隊もかなりの損害を受けている。あとどのくらいもつのかかわからない。頼みの綱の「ゼロ」だが、改造人間といえどもたった一人という数では分が悪すぎる。

(時間稼ぎ。まずは時間稼ぎだ。Z計画を台無しにするわけにはいかん)

やっとのことで完成に辿り着いた初めて警察独自で開発した改造人間、それとそれを作り上げた優秀なスタッフ これらを失うわけにはいかない。たとえ自分の命を犠牲にしても。

「自衛隊はまだか？」

思わず叫んでしまった。だめだ。焦ることは状況を悪くする……。もうすぐ到着する予定です。それまでは何としても持ちこたえなければ……」

あるはずもないと思われた返答が不意に後ろから聞こえてきた。

「中原警部補」

「敵の弱点は肩。右と左の各部位に、複数発の弾丸を撃ち込めば、相手の衝撃波を放つ威力がかなり抑えられます」

中原も銃を構えている。ただしそれは、パワードスーツ部隊の使う大型徹甲弾を放つ特殊拳銃ではなく、普通の自動式拳銃だ。

「それで敵の防御力を突破できるのか？」

「大丈夫です。これでもいくらかのダメージは与えられます」

いつもは表情の硬い部中原が、意気込んだ顔をして言葉をつづけた。

年下の見せた表情に、古川も失いかけていた落ち着きを取り戻す。落ち着くことこそ、最善の策だ。

「敵の最終的な数はまだ不明！ 全員落ち着いて、冷静な発砲を心掛ける！」

その時、影が天井を舞った。古川と中原の二人は、その影を視界の中にとらえた。

ゼロか。三人は直感的にそう思った。他の隊員も同じだろう。しかし。

「ぶっ潰す！」

超人的なスピードと脚力で、龍彦は壁を蹴ってつたうように銃撃戦の現場に乱入した。片側には初めて見るパワードスーツ姿の集団がいる。龍彦が被っているのと同じようなヘルメットはいいとして、頭からは完全に機械に覆われている。二足歩行ロボットと言って騙せるほど完全に『機械』にしか見えない。まるでアニメか映画に出てきそうな『ロボット国の軍隊』である。そしてもう一方に、紫色の鱗人間が全部で六体。まだ敵の全員が健在のようだ。

地面に着地し、隙をついて一体の敵の足をつかむ。そして最重要施設である、清子の治療室とは反対の方向に投げ飛ばす。

『手術室から敵を遠ざけるように戦うんだ。いいな？』

出口はさきほど、こう教えてくれた。実際には『ゼロ』に顔を向けて言ったのだが、それはあくまで、民間人である龍彦に戦いを進めないという建前をつくるための行為だ。自分にわざと聞かせるた

めに、出口は大きな声で叫んだ。

(ケンカと同じく、各個撃破が大事だな！)

突然の登場に、一瞬現場は固まったが。

「これが警察の『G』か!？」

「いや違う! こいつは捕獲対象の大島龍彦だ」

鱗人間たちはすぐに我に返り、パウードスーツ部隊ではなく龍彦に攻撃を仕掛けてくる。龍彦は再び地面を蹴ってその攻撃をかわし、一体の敵の後ろに回り込んで再び拳を炸裂させる。

そしてもう一体の敵の顔にも拳をあて、すぐにまた飛び上がる。

こうして龍彦が先制攻撃した敵を、『ゼロ』が拾い集めて攻撃を加え続ける。特別に作戦を練ったわけではないが、龍彦の無鉄砲さと『ゼロ』の几帳面さが噛み合わさり、偶然にもうまい具合に役割分担が進んだ。このおかげで六体の敵を、手術室の周りからある程度引き剥がすことに成功した。

「このくたばりぞこないが!」

「んだとてめえ!」

二体の敵と対峙することになった龍彦。だが興奮しているためか、非常に気持ちが高まっている。自分でも本当に不思議だ。

二体の放つ衝撃波をそれぞれ交わしながらの格闘戦は容易ではなかったが、龍彦は何とかそれをこなしていた。

(オレは度胸でこいつらを上回る!)

相手はプロの犯罪者に間違いなく、それに対し自分はただの高校生チンピラではない。それは自覚している。だが龍彦は、気持ちでも負けるわけにはいかなかった。龍彦は現時点の被害者の中で、自分は直接的に犯人に影響を与えうる唯一の存在だ。被害者の代表として、この残酷極まりない殺人鬼たちに、心で負けるわけにはいかないのだ。

龍彦は、拳と足元を狙う蹴りを繰り返しながら、衝撃波の狙いが定まらないようにちょこまかと身をかかわす。しかしステップが小まめな分、圧倒的な一撃を繰り返せないでいる。

「おめーら、絶対に許さねーからな！」

相手の間合いの内側に入りこみ、拳で顔を狙う。相手も腕でそれを防ぐ。素早い蹴りをもう一撃下半身に与えるものの、ダメージを与えたといえるほどではない。もう一体の衝撃波を予感して、すぐにその場所を飛び退く。さっきからそのような動きの繰り返しだ。

(これじゃ、さらに敵が来たら終わりだぞ！)

これでは最初の戦闘と同じような状態だ。

(こうなりゃ、イチかバチかだ！)

龍彦は一旦姿勢を低くして、すぐに相手一体を当て身で突き飛ばし、ちょうどよくもう一体の相手を巻き込む。そこからすかさず連続攻撃に出て、二体が変わるがわる攻撃するのを防ぐ戦法に出る。

「おとなしくしろ！ この殺人鬼！」

日常とは比べ物にならないスピードで、龍彦と敵二体は連続して攻撃を繰り返す。普段ならきつと、目を回すほどのスピードだ。

だが少し攻撃のタイミングがずれて、若干だが衝撃波を左肩にくらってしまう。肩のプロテクターが見事に砕け散り、肩の骨自体も割れるか砕けるかした。龍彦は思わず攻撃の手を緩めてしまう。

「ぐっ……」

左肩より先が、うまく動かない。痛みは何とかこらえられるが、体が言うことをきかない。これでは連続攻撃にならない。

「ようやく動きが遅れたな」

不意に、冷徹な敵も反応した。二発目や三発目の衝撃波も、それぞれ左脇腹と右足の脛を切り裂き、肉を抉った。

(やばい、バランスが……)

やはり二対一では不利か。一瞬バランスを崩しかけ、胴体の一寸右を衝撃波が通り抜けた。こちらもすぐに態勢を立て直して、すかさず拳と蹴りを繰り返し出す。

肉を抉られた身体から血が流れ落ちる。傷や流血により、体の感覚もずいぶん狂いだしてきた。骨もすでに、複数個所が砕けている。

だが負けられない。その意思が、龍彦の体を無理やり動かした。骨は砕けても、筋肉がそれを力バーするように稼働する。龍彦の肩関節は、タコやイカの足のようになら、拳を繰り出した。

「地獄に堕ちろ、人殺し！」

「おまえに何がわかるというのだ！」

敵の言葉も熱を帯びてくる。

「うるせえ！ 親が殺された怒りなら、十分知ってらあ！」

「主観でしか物事を考えられないのは、動物と同じではない」

「無慈悲に人を何十人殺すてめーらこそ、鬼畜そのものじゃねーか！」

体にさらに熱が集まってくる。体の動きのスピードと力強さもさらに増す。かなり激しい動きをしてきたが、まだ疲れは出てこない。むしろ『ウォーミングアップ』を終えて、本格的な性能を発揮し始めるようだ。左肩や脇腹の痛みも、なぜか意識から消えていく。

「オレは住む場所と思いが破壊された。そして幼馴染も含めて、家族を破壊された人間が大勢いる。その怒りを、いとも簡単に否定しやがって！」

「大事の前の小事。それだけだ！」

「んだと！」

「おまえは何も知らない。何も知らな過ぎるのだ！」

お互いに拳が炸裂する。互いの意地がぶつかり合う。

「てめえ、自分が何でも知ってるような口調だな！ でも人殺しの事実は事実だろーが！」

「だからそれが何だというだ！ 何十人の人間が死んでも、別に地球が破滅したりしないだろ」

「人の命を奪ってにおいて、んなことを口からペラペラと……」

「これこそが事実だ。現代社会の一般大衆でしかない貴様が知りもしない、知ろうともしない事実だ！」

「オレは逃げねーぞ！ 被害者の代表として、どんな事実からでも

「！」
「貴様は何を根拠にそれを言う？ 貴様は何を知っているというのだ。何も知らないだろう！だからこそおまえは、大事の前の小事にも噛みつく愚かな行為を、絶対の正義だと信じて疑わない」
「てめーらが正義って言葉を口にすんじゃねえ！ このクソ野郎どもがああ！」

相手の動きが、また一段と遅く感じられるようになった。

（こいつら……絶対に生かして返さねーからな！）

「現代の奴隷に、我々の任務を妨げることなどさせはしない！ 貴様には何もできません！」

「極悪人が、エラそそうな口聞いてんじゃねエよ！」

「おまえごときに、現代っ子ごときに、我々は負けん！」

「なんだと！ さっきから現代現代っていちいちバカにしゃがって……何なら見せてやるよ！ 日本男児の意地、ここで見せてやるぜ！」

龍彦はここで、しっかりと足を踏み込む。それから踏み込んだ足から下半身に力が伝わり、さらに上半身へと移る。そして、全身の力を自分の右手に集中させる。

（今度こそ、地獄に堕ちろ！）

自分の未知なる力が、最高に覚醒したような気がした。

「無駄だ。愚か者！」

相手も自分のわずかな動作の隙を見て、手のひらをこちらに向け
る。

「くたばれ、人殺し！」

今までで最大の力で、相手の腹を拳で打った。相手は防御に一瞬遅れ、拳は見事腹に命中する。その正拳突きは目の前の敵の腹部を貫通したのみならず、そのすぐ後ろに密着するように構えていた、もう一体の敵の腹部までもぶち破っていた。

「ぎゃあああああ！」

すさまじい衝撃だったのだろう。敵の肉体が飛び散った。直撃を

受けた前の方の敵は、あまりの衝撃により、体が真っ二つに割れた。貫通して腹部に穴が開いた後ろの方の敵も、内臓がつぶれて飛び出した。

(よっしゃあ！ オレは、やったぞ……！)

不思議と心が落ち着く。わずかな時間、快感に浸る。頭の中の興奮が最高に達していった。

でもなぜ自分は、こんなにも興奮しているのだろう。敵が目の前にいるからか、それとも自分の信じられない能力を体感したいと無意識に思い込んでいるからなのか。もはやそれすらもわからず、龍彦はただ戦いへとまい進していった。

*

出口は、わざわざ本庁に呼び出されていた。

「結局、病院施設は壊滅、残った敵の死体も相手方がうまいことすべて回収し、敵は突然姿を消した。そう君はいいいたいのかね、出口くん？」

「その通りです。それが事実ですから」

「この大島龍彦は、どうやら改造人間らしいとな？ 報告によると、彼は五体の敵を殺害またはそれに近い戦闘不能状態にしている。君は民間人を戦わせたのかね。それに彼は得体のしれない改造人間なんだろう？ そう簡単に能力を発揮することは、本来あってはならないことだ。場合によっては、他の捜査員へ被害を及ぼすようなことがあったかもしれない」

「我々は彼に戦闘を仕向けるようなことは一切しておりません。彼が最初に能力を発動したのは、戦闘に巻き込まれた最中でありました。また敵は大島龍彦自身の身柄を標的とするような発言もしていましたが、彼を敵の攻撃から完全に守れなかったことについては、我々の責任です。ただ彼はあらゆる努力をして、自分を殺そうとする相手を排除したまです。正当防衛の範囲でしょう。一般人が、

自分の身を守るために行った、仕方のないことです」

「しかし、医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法を考慮すると、彼は法令違反ということになる。君はこの件を、何の注意も向けずに見逃したのかね？」

「現行犯での逮捕はしておりませんが、非常事態がひとまず去ってから、彼は自分から我々の方に来てきたので、任意同行という形をとりました。たしかに、彼が改造人間であるということは明らかです。しかし病院を破壊し施設内の人員の殺傷を試みる鱗に覆われた敵多数と、改造人間である事実を全く知らず、さらにそもそもこの事件の被害者であり我々に何の有害な影響も与えないことが確実にあると思われた大島龍彦、その当時どちらに優先して戦力を向けるべきかは明らかでしょう。ただでさえ、一歩間違えば病院内の人間が全員死にかななかった状況で、さらに大島龍彦の身柄拘束にまで戦力を向けるとおっしゃるのでしたら、それは理解に苦しみます」

「大島龍彦についての取り調べは、君のところで行うのか？」

「バイオテクノロジーに関する事件ですから、我々がもっとも的確な捜査要員であるにとらえております。ただ大島龍彦は現在のところ、改造手術については一切否認しており、また体には手術の跡はもちろん、ミリ単位の縫合の痕跡すらなく、レントゲンやその他精密検査では何の発見もありませんでした。手掛かりが少なすぎます。彼自身の事案については、捜査や検証が非常に難航し、長期にわたるかもしれませんが。期待通りには進まないでしょう」

上層部に対する挑発ともいえる出口の言葉に、その上司はフツと軽く笑った。

「……次に、警察の威信をかけて開発した生体パーツを、なぜ無関係な女子高校生に与えたのか、理由を述べなさい」

「お伝えしましたように、彼女の命を救うのはこの手段しかなかったからです。具体的な資料は手元にありませんが、運び込まれた当時、彼女は内臓が多数破裂し、形だけでもどうにか正常さを保っているのは頭蓋骨の中身だけ、という有り様でした。そのため彼女の

命を救うことを最優先とし、緊急に実験体を変更し、彼女を充てたわけです」

「それならばなぜ、実験体を他の警察官にしなかったのだね？ 我々は一度、実験体だけでなく戦力としての活用も検討するよう通達したはずだが」

「これも以前にお伝えした通りです。生体パーツは、遺伝的に違う個人に合わせた調整が非常に重要です。他人に合わせられたパーツを使うと、体が拒絶反応を起こします。場合によっては非常に激しく人体に有害な反応になります。人体の方がパーツに食べられるとでも言いましょうか。今回の場合、妹という遺伝的に近い存在だったからこそ、偶然に、それも奇跡的に実験体の変更が成功しました。これがたとえば性別の違う男の兄弟などでしたら、きっと無理だったでしょう」

「ではこれからいつたい、どうするつもりだね？ Zパーツは民間人に渡った。これでは実験体を、戦闘用に活用することは不可能だ。Z計画が技術検証以下にしかなりえない以上、君が強く推進してきたZ計画は半分破綻したようなものだ。この状況で後続の計画や予算が得られるとは思えない」

「今回の数々の行為によりZ計画を半分破綻させたのは、紛れもなく全てが私の責任です。ですからこそ、ここで新たな提案をさせていただきます。別に、新たな生体兵器を開発するわけではありません。今回、我々は『Z』こと竹内清子の他に、全く予想外の改造人間である大島龍彦の身柄も確保しました。我々は科学技術に関する規制を実行する立場から、彼ら二人の能力をしっかりと分析・検証しなければなりません。そのために、予算のわずかな増額をお願いしたいのです」

「そのわずかな増額で、改善できる点はなんだ？」

「竹内清子の能力検証による、Z計画の半分破綻状態から健全経営までの引き上げ。並びに大島龍彦の能力検証による、未知の犯罪組織や重大な能力を持つ生体兵器の能力の把握です。それと『その他

諸々の付随効果』も期待できません」

「具体的な予算増加分の見積もりは？」

「全体で、もう一人警部補階級の捜査員を増員するための人件費と、住居などその他手当でだと思っただけだ」

「……上に掛け合ってみよう」

結局あの日、龍彦は五体の鱗人間を、戦闘不能にした。今まで味わったことのない能力に対する興奮と、マンションをめちゃくちゃにした敵が目の前にいたための興奮。二種類の興奮が作用してか、あの日の龍彦は、何かが弾けたように戦いに突っ込んでいった。ケンカの経験も多い龍彦だが、あんな高揚感を戦いの中で感じたのは初めてだった。今思い出すと、少し怖い。本当に自分が人間から離れていきそう。

「ああ……」

今龍彦は、とある警察署にいる。ここは科学特別警察、通称『科特警』と呼ばれる警察の部署の本部だ。生体兵器を含む高度なレベルの科学技術が使用されたと認められる犯罪は、すべてこの科特警が担当する。

霞が関に本部を構え、捜査のプロ中のプロが集まる秘密の部署『警視庁刑事部所属、科学特別犯罪対策科』。この部署の名前を聞いた時、そんな組織をイメージした。

だが実際、本部は都心から離れた神奈川県との県境近くにある。

また本庁直属の組織というわけではなく、法律上は、東京都内にある所轄署。警視正を『署長』とする大規模警察署の一つということになっているそうだ。

『犯罪捜査は刑事部、パワードスーツ部隊は警備部、研究開発は諸々の研究所、というふうに担当が分散してたから、これらを一まとめにして専門部署をつくることになったんだ。でも規模からして、刑事部や警備部に並ぶ本庁の部の一つにするには小さすぎるから、

警視正をトップとする今の形にした。それにここは秘密部署だ。ややこしい仕組みにすればするほど、秘匿性も上がるだろうからな』
ちなみに出口は、本部が郊外にあるのは、危険な改造生物の収容施設があったりするためとも言っていた。

事件後の翌日から、龍彦はここ科特警の本部で、形式的ながらも一日中取り調べを受けている。なんでも医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法という非常に長い名前の法律に違反しているそうだ。

東大法学部卒の出口によると、その法律は、医療目的以外での人体改造やそれにより得た能力の使用を禁止していて、実際に刑罰も定められているらしい。だが今回の場合、全て非常事態の正当防衛という理由で、龍彦の異常な能力発揮や殺人・傷害などの諸々の罪は、すべて不問にされるそうである。それもあってか、取り調べでは改造措置を『受けた』ことに対する罪を問われるかどうかが最大の焦点となっている。だが龍彦自身は容疑を完全に否認している。また龍彦の体には手術の跡もなく、精密検査でも何も発見できなかった。人体改造の『故意性』を証明する証拠が無い以上、龍彦の变身という身体異常は、故意の改造行為とは断定できず、広い意味での『医療事故』が原因であることもありうるとして、現状では検察に身柄が送られることすらないまま、証拠不十分ということで龍彦に対する取り調べは終了しそうである。

（んなこたあどうでもいいんだ！ 問題なのは、犯人をとっ捕まえられなかったことだ！）

龍彦は思わず、目の前の机を拳で叩いた。

自分には犯人を捕まえるだけの能力があった。だができなかった。それどころか自分の殺した敵の死体も、証拠品として警察に明け渡すことができなかった。敵がうまいこと用意していたガソリンや特殊な薬剤で、原形をとどめないように完全に変質・焼却の処理がなされたのだ。さらにそのせいで、戦闘現場の病院もほぼ全てが炎に沈んだ。あの死体さえ残っていれば、敵の身元や正体がつかめたか

もしれないというのに。

「そういきり立つな。取調室の机をぶっ壊す気か？」
机を挟んで目の前に座っている出口は、意識が別の世界にとびかけていた龍彦に向かってこういった。

「犯人を捕まえられなかったのも、あの後病院が半分燃えて灰になったのも、全部警察と自衛隊の責任だ。おまえはただの一人の被害者、何の責任もねえよ」

「んなこと言ったって……」

自分には力があつたのに、家を守ることも、襲撃してきた敵に決定的な敗北を与えることもできなかった。今思うと、酒の席で美希がふと漏らしたこの意味がわかるような気がする。自分は、両親との思い出の場所を守っていかなければならないのだ。美希ではなく、男である自分が　力のある自分が。

（ならオレはどうすりゃいい？　もう壊れちゃったのに、何をすりゃいいんだよ……）

龍彦の両親はこの世にいない。彼らとの思い出は、あのマンションにしかない。部屋のフロアリングの上で寝転がり、ハイハイし、しまいに二本足で立ち上がっていった、龍彦や美希。壁に落書きしたり、窓ガラスを割ったり、フロアリングを傷つけたりしたときに、必ず厳しい声で叱った両親。そんな両親と共に写真やビデオに刻まれた、二人の子供の成長記録　どれも両親との立派な思い出だ。だがもうそれは、瓦礫の下で紙やプラスチックの破片と化している。もう二度と築き上げることなど不可能だ。思い出の場所　マンションが壊されて、初めて思い出の貴重さを知った。その二度と復活しない思い出が壊されて、両親と一緒に過ごした日々の貴重さを本当に改めて実感した。そしてそれと同時に、その貴重な両親を失った事実を、やっと全身全霊をもって、龍彦は受け止めきれたらしい。目じりが熱くなり、思わずおさえる。二年遅れて、両親の死んだ悲しみを、噛みしめているのかもしれない。

「クソっ……！」

龍彦は再び、机を叩いた。

「……もう止めるのはやめた。オレはおまえにかまわず説明を始めるから、ちゃんと自己責任で聞くんぞぞ」

出口の言葉は、半分程度しか耳に入らない。

「まず、さっきのあの長い名前の法律により、おまえには身体検査の義務が生ずる。その能力をきちんと解明・監視する必要がある」

龍彦はとりあえず頷いた。

「その頻度だが、一週間に五回、ここ科学特別警察の本部に通うことになる。時間帯は、おまえの学業に支障がでない範囲で結構だ。放課後とかな。同時に今日からおまえの身の周りに、警察の監視がつくことになる。おまえは一応、法律を犯しているという身の上だ。それにおまえの能力を狙った敵が現れないとも限らねえしな」

再び頷く。これは仕方のない措置だ。確かに監視されるのは気に食わないが、これでもマシな扱いだろう。人間を改造するのには気には逮捕の上に身柄を拘束するべき罪だったに違いない。

「そして最終的には、おまえの特殊な能力を、無力化する方向に事態を進展させる」

今度は頭が動かなかった。一瞬、意識に空白ができる。

(オレのこの力が、無くなる……)

自分が身につけているこの能力は、本来身につけてはいけないもの。それはわかる。倫理的・人道的にあつてはならない禁断の行為だということも、敵の戦闘力を経験しさらに自分自身の能力も通じて、身に染みて感じた。まだ不明な背後関係を抜きにしても、自分が獲得し得たこの能力が、とりあえず違法だということも理解できる。

今回の事件に自分は無関係だったとしても、自分がこの能力を有していれば、何らかの連中に狙われるかもしれない。自分の正拳突きで、鱗人間の肉体は、地面に叩きつけられたトマトのように潰れ、肉塊となつてはじけ飛んだ。今でもくつきりと覚えているこの一連の場面は、改造人間としての強すぎる能力を、ありありと示してい

る。これほどまでの能力を持っていれば、自分の身体は不審な組織にでも狙われかねない。いやそもそも、自分のことを『改造』した連中が、いつ自分の目の前に現れてもおかしくないではないか。そうなったときに自分の周囲にいる人間　姉の美希や学校の友達、さらにはたまたま近くに居合わせた不特定多数の人たち　を、途方もない犯罪に巻き込んでしまうかもしれない。自分が運悪く巻き込まれ、怒りに身を震わせた今回のような惨事に、今度は自分が赤の他人を巻き込むのだ。

（そんなこと絶対にできねえ！　できるかよ！　だけど　こいつをそんなに簡単に手放していいのか？　手放したら、もう一生手に入らねー能力なのに……）

この能力があるからこそ、自分はこの鱗人間の攻撃にも耐え、その後敵に反撃することもできた。これを手放すのは力と立場の放棄である。自分はこの能力を使用して、またあの敵に立ち向かうべきではないのか。被害者一同の代表として、被害者の中で唯一犯人に對抗しうる存在として、自分はこの犯人たちに復讐すべきではないのか。それなのに、その役割を自分から捨ててしまうのか。

龍彦は机の上に置いた手を握り締めた。

「そう素直には力を放棄したくねえって顔してるな。そうなんだから？」

龍彦は思わず顔をあげた。出口は龍彦の内心を見事に見透かしていた。そして龍彦の目の前で、いたずらっぽい、少し挑発的な笑いを浮かべている。

「脅威とは、何らかに危害を加える意思があり、かつそれを実行する能力を有する存在のことをいう。おまえは改造人間でこそあるが、その能力を、法を破る行為に使ったことは、一度もねえんだよな？」

「つたりめーだ。もう何度も言っただろ」

この三日間で、何度同じことを聞かれたことか。

「なら最終確認は終了。今日でちょうど、上から許可が取れた。というわけでこっちからも、切り出すべき話がある。ちょっと重要な

話がな」

「？」

取り調べの三日目で、なにやら話が別の方向に転がった。

出口の表情を見たが、これからどんなことを聞かされるのか、想像もつかない。何と反応したらいいのか、龍彦にはわからなかった。

「体にこれといった異常はないようです。もう歩いてても大丈夫ですよ」

「はい。ありがとうございます」

足元のスリッパを揃えてくれた医療スタッフに礼を言ってから、そのスリッパに足を入れる。

（やっと立てるのね）

具合は昨日から万全だったが、精密検査が終わるまで歩くことも止められていたため、少しでも運動したいとウズウズしていたのだ。

清子が今いるのは、正式な病院ではない。とある警察署だ。ここ
の警察署では、被害者や容疑者の身体を日数掛けて精密に検査する
仕事があるらしく、入院用のベッドもわずかだが存在する。清子は
そこで、借り物のパジャマを着ている。

（でも、さすがに私一人でこんな恰好のまま部屋の外に出るのも恥ずかしいしわね……）

自分は内臓破裂を多数起こし、いつ死んでもおかしくないようなケガを負った。しかしわずか三日でこの通り見事に回復した。ただし、全身にはツギハギの跡が残っている。そしてこの手術の跡は、単純にけがを治すただけではなく、清子の体にある生体部品を埋め込む作業によるものもある。

詳しい説明は、意識が戻った昨日に真面目そうな警部補の男から全て聞かされた。まず自分の両親と弟は残念ながら死亡。自分には本来姉に移植されるはずだった生体パーツが、わざわざ自分の命を救うために移植された。それは戦闘用の改造人間を生み出す最初の

試作品で、すでに開発に三〇億円という予算がつぎ込まれたそうだ。そのため自分には、そのパーツのデータを集めるための実験体になる義務が生じているらしい。内容は、週に五回ほど、この署でさまざまな検査が実施され、データを集めては解析を繰り返す。

（これが改造された手なの？）

右腕の袖をまくり、改めて手や前腕、肘のあたりを見る。縫合の跡がある他は、普通と何ら変わりない。自分でも改造前後の違いがわからない、いつもよく見ている自分の腕だ。『改造』という言葉から想像していた割には、全く平凡な印象を受ける。といっても『改造人間』なるものがどんなものなのかまだ何も聞かされていない。そのため特に具体的なイメージも浮かばないのだが。

（でも、まさかお姉ちゃんが創ったとはねえ……）

大学を中退したと思ったら、いつの間にか警察で、しかも第一線の研究者として働いているとは正直驚いた。まだ二十一歳、ストリートで進学しても大学四年生の年齢でしかないのに、この最新鋭の科学技術を詰め込んだ生体パーツの開発に深く関与しているのとだ。

（さすがだよ。そういうことも考えると、やっぱり私はお姉ちゃんに敵わないのかなあ……）

学校の成績で勝ち運動でも勝ったが、清子はまだ姉の涼子に対して自分が優れているなどと感じたことはない。比較的素直でさしあたりのない性格の自分に対し、涼子は自分の好きなこととことん熱中するタイプである。涼子はパソコンとそのプログラムをこよなく愛し、大学こそ親の強い意向で医学部に進んだものの、結局大学をやめて、高卒でソフトウェアの技術者という涼子らしい職業になった。親に敷かれたレールに特に文句も言わず、ある意味で気楽に過ごしてきた清子にとって、自分と涼子との間にある壁は大きく見える。そして今回の話を聞いて、さらに涼子との差が開いてしまった気がする。自分は所詮、親のレールの上でペーパーテストしか経験したことがないのだ。その両親が死んだら、自分にはそのレール

を延長するしかないのか……。

(私……これからどうするんだろう?)

不意に個室のドアをたたく音がした。

無言で開いたドアの隙間から中を覗き込んだのは、涼子だった。

「お姉ちゃん!」

「ひさしぶりね、清子。……具合はどう?」

「もうすっかり大丈夫。お姉ちゃんのおかげでね」

「清子を治療したりしたのは私じゃないわ。私が関与したのは、ソフトウェアの分野よ」

涼子は清子の表情をうかがうためか、一瞬部屋に入るのをためらったようだ。だが笑って反応した清子を見ると、やがて涼子の唇の両端も上がった。

涼子は改めて部屋に入り、ドアを閉め、そして近くの椅子に座った。清子もベッドに腰掛けた。

「……本当に、具合は大丈夫なの? 本来私の体格とか遺伝情報に適應させたパーツだから、本当に清子の体に適合するか不安で……」

「特におかしいところはないけど」

「いつもと変わらない体の調子だ。」

「だったらひとまず大丈夫ね」

涼子曰く、他人用のパーツを移植すると臓器移植における『拒絶反応』のようなものを起こすらしい。それも戦闘用の能力を秘めたパーツなので、症状はひどく劇的だと言う。

「ねえ、リユウは?」

「彼も、もうすっかり元気よ。彼のことはまたあとで話すから」

「そう。わかった」

全く、自分といい彼といい、なんと運が良かったのだ。

「でも本当に……、あなたが助かってよかったわ!」

涼子は椅子から立ち上がり、自分に抱きついてきた。涼子の顔にかかるダメガネのフレームが、少しだけひんやりと感じられた。

「……ごめんね、ごめんね! 私は警察にいるのに、何にも助けて

やれなかった。お父さんもお母さんも俊も、みんな助けてやれなかった！「ごめん！」

突然涼子の表情から笑顔が消え、涙が頬を伝った。本当に突然のできごとだった。

清子の両親と弟であると思われる三体の遺体が発見されたそうだ。マンションの一三階から落下しさらに別の攻撃も加わり、遺体は三体とも悲惨な状態だったという。

「私はね、唯一助かる可能性のあったあなたにだけは死なれなかつたの！だからあなたを改造にした。改造人間にした。本当にそれだけは許して……」

いつの間にか清子の目からも涙がこぼれ始めていた。

自分の両親と弟は死んだ。殺された。犯罪者に。不特定多数のうちの三人として。その事実、清子は心がえぐられるような感じがした。

（もう、涼子お姉ちゃんだけ……）

まだ『改造人間』というものがどのようなものかわからない。だがいずれにしても、改造人間になったことについて清子は涼子に腹を立てたりなどしていない。むしろ非常にありがたく思っている。

自分のために、社会的な立場を犠牲にして、公的物資の私的流用を行ってくれたのだ。そうしてまで自分の命を救ってくれた涼子に対し、清子は感謝してもしきれない。

「お姉ちゃん。私は別に、改造人間になったことについて、嫌になんか思っていないよ。本当にありがとう。私、お姉ちゃんの妹で本当によかった」

「もう、清子ったら」

まだ抱きついたらまだが、顔を見なくても、涼子が少しはにかなだのがわかった。

「せつかく命から助かったとこなのに、また変な話をするわね」

涼子はここで、抱擁を解いた。そしてまたもとの椅子に腰かける。

ダメメガネを指で持ち上げ、まだ赤くなつた眼を擦っている。

「どうしても、清子にやつてもらいたいことがあるの。これは強制じゃないけど、心して聞いてちょうだい」

涼子の声が、みるみると真剣身を帯びてくる。何を言われるのかさっぱりわからないが、清子は自分の口の中がカラカラに乾いていくのがわかった。

「清子には、警察管轄下の改造人間戦士として、私たちと一緒に戦ってほしいの」

「……それって」

つまり、改造人間に変身し生体パーツの戦闘力を発揮しろということ。だがこの言葉を清子は続けることができなかった。意外過ぎる言葉の内容に、思考が止まったのだ。

「言葉通りの意味よ。無茶を言ってるのはわかってる。でもね、今日本警察には、改造人間が必要な。あなたはよく見てないかもしれないけど、今回のマンションを破壊した敵は、たった二人の改造人間よ。それも素手でね」

清子は、かすかだがマンション倒壊の一部始終を覚えている。得体の知れない外見をした日本足で立つ生き物を、ちらりとだけ見たような気がする。だが最も克明に覚えている場面は、龍彦が何かの力で強烈な衝撃を受け、後ろに数メートルも飛んで壁に激突し、そのまま血だらけの状態で地面に崩れ落ちた場面だ。あれは強烈だった。

（マンションを素手で壊すってどういうこと？ 改造人間っていったいどんなやつらなのよ？）

改造人間たるものが、とてつもなく危険な存在であることは十分わかった。

でも、自分がその相手と戦い、倒すというのは……。

「私が、戦うの……？」

清子の確認作業のような問いに、涼子は渋い顔で頷いた。

「清子の体に埋め込まれた『Za^{ゼット・エー}』という生体パーツは、日本が初

めて独自に作り上げた、他の改造人間に対抗するに足りる能力を持つ生体人間兵器を作る基盤となるもの。そのパーツは清子の体の新しい臓器となつて、清子に改造人間たる能力を与えるの。清子が聞かされた通り、試作品段階であることは間違いない。でも、もう待つていられないわ。すぐにでも実戦に使いつつ、その都度データを収集し改良していくしかない。急がないと……私たちの家族みたいな死人を出したくないから」

「……………」
清子は自分に与えられた生体パーツが、想像していたよりもはるかに重要な意味を持っているということをやつと理解した。

このパーツをつけた人間は、この日本を暴力から守るといふ使命を負うのだ。しかも危機的状況の打開という強い期待が、取り付けられた個人一人に向けられる。対応策の遅れという大失態を取り戻すため、実際に悪と戦いつつ、次世代のために実績とデータをゼロから作りあげなければならない。

「本当は私だつて清子を戦いに駆り出さたくないわ！ たった一人だけの家族なもの！ 本来なら私が改造人間『Za』になつて、無理にでもこの役目をこなすはずだつたけど……………」

その言葉の続きに関して、清子は涼子の右膝が原因不明の難病で次第に壊れ初めていることを思い出した。

（そうか、お姉ちゃんはもう……………）

この計画は当初、人体実験にあたるとして上にはぐらかされたが、頭に来た涼子が自ら実験台を名乗り出ることで計画が認められた。だが涼子は、警察の戦闘員として活動するには身体能力が不足している。単なる不足どころか、もう何年かすれば右膝が完全に壊れてしまい、両足で歩くことすら不可能になるかもしれない。

（お姉ちゃんは、そういう意味でも悔しいのね……………）

三〇億円も（清子はたしか三十二億円と聞いたが）の開発費をかけても計画を推進した人たちと、難病を抱える右膝のために自分で戦いに出られないことを激しく悔しがる姉。彼らの強い意志を、清

子は引き継がなければならぬ。

清子はまた、今回の事件の犯人への憎悪も有り余るほどある。両親と弟を無残にも殺し、家を跡形もなく吹き飛ばし、何もかもを破壊したあの敵……いくら殺しても殺し足りない。捕まえて八つ裂きにしたって自分の気持ちは収まりそうにない。

(でも)

自分には戦えるのだろうか。たった二人で鉄筋コンクリートのビルを全壊させた敵たちと、自分のようなただの女子高生 他人を殴ったこともないような温室育ちの人間が、戦って勝てるのだろうか。せめて龍彦のように強くて度胸と根性がある人間なら……。

この任務は、自分に重すぎるのだろうか。過重なのだろうか。

(ばか！ こんなことだから、いつまでたっても臆病なままなんじゃない！ どうして私はこうも臆病なの！？ お父さんとお母さんと俊の仇を討てるのは、私しかないのに！)

自分は戦わねばならない。社会のためという公的な意味でも、殺された家族の仇討ちという私的な意味でも。しかし、不安なのだ。自分はただの優等生 型にはまるのが上手で、数学や語学やスポーツは得意だが、それ以外のことは何も知らない。自分は型の中にはまることで、人を殴ることも、自分が殴られることも、二度と外に出たくなるほどの大きな失敗も、経験していない。自分は恐れているのだ。殴られたり失敗したりして傷つくことを、ひどく恐れている。義務を与えられそれをこなすことには慣れているが、期待されることをめっぼう恐れている。

(あと一步、あと一步踏み出すだけなのに……！)

涼子の問いに対し答えられずに黙ったままにいる自分が、ひどく不甲斐なく感じられた。

「私も全面的にサポートする。だからお願い！ あなたにしかできないの！ あなたがやってくれば、私の無茶を見過ごしてくれた署長と、生身の体で改造人間に立ち向かわなきゃいけない他の隊員の命も救えるの！ 私たち警察を助けるとでもなんとでも思ってい

いから！ どうしてもあなたが必要なの！」

「お姉ちゃん……」

涼子は本気だ。いや、本気なのは涼子だけではないだろう。それ以外の人間もきつと、清子に強い希望を抱いているに違いない。

その涼子の言葉で、清子の中で揺らいでいたものが、だんだんと形を整えてしつかりと固まっていく。

（　　そうよ。私は色んな人の無茶があつたから、命が助かつたんじゃない……）

公共物の流用をした涼子、その無茶を許可した上司　いやそれだけではない。自分をあの危険な現場から運び出した救急隊員、強敵に対し勇敢に立ち向かって現場を押さえこんだ警察官、そして三十億円という税金を納めた日本国民……。あらゆる人のおかげで、自分は死なずに生きることができたのだ。だから今度は自分が、彼らに恩を返さず番だ。

清子は意志を固め、立ち上がった。

「私はお姉ちゃんや他の多くの人たちのおかげで、生き残ることができたわ。本当にありがとう。だから私にもその恩返しをさせてください。私、戦うわ。犯人たちと、テロリストと」

「清子……！」

清子のはつきりした言葉に、涼子の表情も緩みを見せた。

「……で、話って結局そういうことか」

「そういうことだ」

最初の一カ月は戦闘要員となるために基礎訓練をみっちりこなす。それが終わってからはまた普段通り学校に通うことができ、放課後や土日を使って訓練に打ち込む。急を要するような事件がある場合は龍彦も召集され、学校は休む。ただしここでの休みは欠席にはカウントされず、高校生としての進級や卒業にも影響しない方を警察側で取ることができる。住居は警察の一員としての活動を優

先するため、科学特警のすぐ近くにあるマンションに住むことができる。家賃は龍彦が気にすることではないらしい。

「……ホントにそんなうまいことができるのか！」

話を頭の中で一通り整理し、そして龍彦は勢い余って席から立ち上がった。

自分の身分が、名目上の犯罪者から一転し、限定的ではあるが警察の一員になれるのだ。さらに無関係な人間の住まない住居と、わずかながら給与もつく。こんなにうまい話はない。またこれなら自分の能力を遺憾なく発揮することができる。そして何より、マンション破壊の実行犯に対して報復する機会を、合法的に持つことができる。

龍彦の持っている懸念を隅々からカバーしてくれる、最良の案だ。

「そうだ。やるのか？ やらねえのか？」

そういう出口は、あくまでも意地悪そうな笑いが残っている。それはこちらをいい気分にさせはしなかったが、それでも龍彦は、このことを話さずにはいられなかった。

「オレは、正直に言うと、自分の能力を使いこなしてみたい。もう一回、いや何度でも変身してみたい。でも、これがとんでもなく危険なシロモノだってことも十分理解したよ。オレがこの能力を持つてると、変な事件に周りの連中を巻き込むんじゃないのか？ オレはイヤだぜ。姉貴や学校の連中を事件に巻き込むなんてよ……」

だが真剣そのものという気持ちで口を動かした龍彦とは対照的に、出口はまだ笑いを浮かべている。

「そういう不安を感じるのには、確かにわかる。だがな、それはテロに対して屈服するのと同じことだ」

意外な返答に、龍彦は思わず出口の顔を真正面から見据えた。

「おまえはテロリストに脅されるから、自分のやりたいことをあきらめるのか？ 逆におまえが戦わないからって、おまえの身の回りの安全が保障されるとでも思ってるのか？」

「それは」

間を空けずあまりに簡単に言葉を返されて、自分の口はうまく反応できなかった。

「それに、周囲にリスクを背負わせることが悪いと思う必要はねえさ。おまえだろうが竹内清子だろうが、俺だろうが賢治だろうが、誰がしようが、無関係なやつに向くりスクをゼロにするなんてことは不可能だ。そんなこと言ったらキリがねえだろうが」

言葉の最後は笑い声に消えた。

仮に自分ではない他の人が改造人間として戦っても、今度はその人間の周辺にリスクを負わせるだけ　つまりはそういうことだ。

（そうか…… そうなんだな。オレは姉貴やサイモンたちの心配をしてたけど、逆にそれは、姉貴やサイモンたちの心配しかしてなかったってことか。オレは、もっとたくさんやつらのことも、心配しなきゃならねーんだ……）

出口がどうしてあんな好条件を出したのかを考えてみたが、少し理由がわかった。自分が戦えば、とりあえず社会にとってプラスになるからだろう。テロと戦い、彼らを壊滅させることこそ、社会の根本的な目標である。自分や自分の周りの人間たちは、そのためのリスクを恐れてはいけない。皆がリスクを背負ってこそ、本当のテロとの戦いを遂行することができる。

大事の前の小事　あの忌々しい鱗人間は、自分に向ってこう言い放った。彼らの主張を認めるつもりは毛頭ないが、自分や周りの人間も、大きな目標を達成するために、危険を背負わなければならぬということか。

龍彦の、心の中の揺らぎが止まった。

オレは何をビビってたんだ！　オレらしくねーぞ！

龍彦は、椅子が派手な音を立てて転がり飛んでいくのも気にせず、勢いよく立ち上がった。

「決めた、オレは戦うぜ！　オレの能力を存分に發揮して、テロリストどもを壊滅させてやる。そうすりゃオレ自身がいたいどんな正体なのかわかるし、日本は安泰だし、一石二鳥だな！」

くよくよと悩んでも仕方がない。誰かがリスクを負わなければならぬ。どうせそれならば自分が暴れてみせる。今までゴリラの大量破壊兵器だのと呼ばれてきた自分だ。心配するよりも、ひたすら前に突き進んでいく方が似合っている。

「へへへ、やっぱり男はそれくらいの積極性がなくちゃなあ。おまえも、最初に会ったときみたいなふてぶてしい顔が戻ってきたじゃねえか。ん？」

出口はこちらを見ると、口を大きく開いて満足そうにそう言った。「言つとくけど、警察の仕事は楽じゃねえぞ。学業と両立するとなりゃあ、終電に乗れない日が毎日だぜ。それに、今やりたいって言っただけじゃだめだ。これから一か月の訓練期間をこなして、その訓練の結果で正式に戦闘員として採用するかを判断する。それでもいいか？」

「あつたりめーよ。こっちはそれくらいの覚悟はできてるぜ。なによりオレには、病院で改造人間を五体ぶっ潰した実績があるんだからな！」

棚からぼた餅というが、まさにこのことだ。これは神様が自分に与えてくれた、成功の機会なのだ。龍彦は、もう一度拳に力を込めて握りしめる。自分がうれしそうな顔をしていると、出口も右手の親指を立てて返した。

「ところで本格的な自己紹介を、いま一度しておこうか」
出口の親指が、自身の体のほうを向く。

「俺は科学特別警察、通称『科特警』の最高指揮官、出口太。地位は他の警察署の署長と同じ。階級は警視正。よろしくな」

「よろしく願います！」
体育会系のノリで、龍彦は目の前の最高指揮官に立ったまま頭を下げた。

すると取調室のドアが叩かれ、一声してから白衣の若い女性が入ってきた。

「ゼット・エーの彼女、承諾したようです」

「そうか。こつちも今ちょうど承諾したところだ。じゃあ合計で二人追加だな」

(ゼット・エーって何のことだ……?)

突然会話のカヤの外となった龍彦がいぶかしがっていると、その白衣の女性は龍彦の方を見てにっこりと笑った。

「紹介しよう。うちの研究開発部門のトップ、川井麻衣^{かわいまい}研究課長だ。もともとは技官出身だが、現在は出向人事ってことで、警察官として警視の地位にいる。研究課長と同時に科学特警の副署長も兼ねる」

「はじめまして」

龍彦も頭を下げてあいさつする。

「こちらこそよろしくね。えーと、大島龍彦くんよね。私は川井麻衣。あなたの能力の研究や検証でよく顔を合わせるから、顔と名前はよく覚えてちょうだいね」

「はい」

紹介された川井チーフは、髪型や体格などが清子に似ている。だが今の表情や声は、清子と比べるとずっと活発そうだ。

「それなら、もう顔合わせといきますか？」

「確かに、早いに越したことはないか。よし大島、取り調べは今日で正式に終了だ。ただし、今言った通りおまえの能力に関する調査は継続する」

出口は椅子から立ち上がり、龍彦を促して一緒に取調室を出た。

それから出口と川井は龍彦を連れ、廊下を歩いてすぐの小さな会議室の前に立った。

すると。

「あ、清子……」

「リュウ……」

部屋の前で、ばったりとジャージ姿の清子と鉢合わせした。それに。

「あら、龍彦くん」

「涼子さん……お久しぶりです」

「話は全部聞いたと思うけど、龍彦くんも、私たちと一緒に働くことにしたの？」

「はい。ぜひとも」

一年ぶりくらいに、清子の姉の涼子と言葉を交わした。清子とそっくりな顔立ちに、耳が下まで隠れるかどうかという程度のショートヘア。かけている赤いフレームのメガネはたしか度が入っていないという話だ。川井と同じく白衣を着ている。こうして清子と並んでいると、そっくりとはいえ涼子の方が大人びて口数が少ない人物ように見える。彼女の方が五歳も年上なので当然と言えば当然だが（ん？ 待てよ。今、龍彦くん『も』って言ったよな。まさか……）」
「さて、お互いに疑問があるところだが、詳しい話は中でしょう」
出口は龍彦と清子が互いに何か言いたげなのを遮った。

一堂は出口に促されて、会議室の中に入った。

部屋の中には、四人の人物が待っていた。まずは病院で一緒にいた中原警部補、そして軽い紹介を受けた高野三等陸佐。そして、病院で戦っていた『ゼロ』という改造人間。今は顔を隠すためのヘルメットだけを取り付け、上下の服はホームセンターに売っているような灰色の作業着を着ている。ヘルメットから溢れる髪は、別になんでもない普通の黒髪だ。

そして残りの一人は、若干白髪の交じる角刈り頭が印象的な、体格のいい男性だ。身長は一八〇センチ近く、体重も八〇キロは十分にあるだろう。スーツの内側に広い肩幅や厚い胸板が潜んでいるのがしつかりとわかる。

その男性の脇に、川井と涼子も小走りですんで並んだ。龍彦と清子と出口と、その六人とは向かい合って並んだ。

「俺の方から手短かに、右から順に紹介する。まず中原賢治警部補。現場で忙しく働きまわる優秀な捜査員だ。次に高野祐二・三等陸佐。自衛隊テロ対策部隊実現のための情報収集や、戦闘作戦の参考人としてちよくちよく顔を見ることになる。その隣が古川武警部。パワードスーツ部隊、通称『メカ』の隊長を務めるベテランだ。そして

川井麻衣・研究開発課長兼副署長と、竹内涼子・同副課長。二人ともわが特警の装備開発や科学捜査を引っ張っている。最後にこの俺が、ここ科特警の最高責任者、出口太。階級は警視正。以上だ」

龍彦と清子は、自然と手を叩いてスタッフ全員に拍手していた。紹介された人は、それぞれ軽く会釈をした。

（あれ、あのヘルメットの女は？）

「次はおまえたたちの番だ。まずは清子くんから試してみようか」
「はい」

清子は卒業式のときのような返事をして、一步前に踏み出して、軽く礼をする。

（なに？ 清子もやつぱり……）

「今日からお世話になる、竹内清子です。よろしくお願いします」
すつと一礼すると、今度は前方の方から拍手が聞こえてくる。

（やつぱ清子も、オレみたいに警察に協力するのか……）

警察が清子に生体パーツを『タダ』で与えるわけがないと思ってはいたが。

（いや、清子の場合、親父とお袋と弟をいっぺんに失ったんだ。恨みならオレの何十倍も強いだろーな。となるとその恨みを背負った志望動機はオレよりも切実なはずだぜ。でも復讐に突っ走るようなやつには見えねーし……）

復讐のためか、それとも他の理由なのか、龍彦には想像がつかなかった。

「次、大島」

「はい」

龍彦も清子の真似をして、一步前に踏み出して、軽く礼をした。
「今日からお世話になります、大島龍彦です。本っ当の意味で突然のことかと思いますが、よろしく願います！」

再び拍手が鳴り響く。だが若干だが、清子のときよりも古川警視と川井副署長の表情が硬いような気がする。気のせいか……。

「よし、最後だ。ワリいな、都合により最後になっちまった。こっ

ちの新人二人の意思が明確に確認できるまで、正体を明かせなかつたんでな」

拍手が終わると、出口は一番端に立っている、ヘルメットの女に視線を向けた。

「機密ですから」

彼女は何とも気にかけていなさそうに透き通った声で応え、一歩前に出た。

手袋をつけていた戦闘中には見えなかった、長くてきれいな指。そんな指の付いた両方を使い、頭からヘルメットを持ち上げた。ヘルメットが脱げるときに、中から長くてきれいな黒髪がするするとこぼれ落ちた。

龍彦と清子は、彼女の素顔と続く言葉を聞いて絶句した。

「立川雪菜たちかわ ゆきなです。二人と同じ一七歳です。よろしくお願いします」

その後すぐに、龍彦と清子の機能の確認に移る。正常に改造人間として稼働できるかの最低限の確認だ。改造人間に変身できなければ、そもそも改造人間として戦闘任務にあたることは不可能である。二人は別室に移され、そこで待機させられた。

その間に龍彦と清子は、互いがどういう成り行きで改造人間になったのかを語り合った。

「じゃありユウは、何にも知らないところで改造人間になったの？」

「そういうことだ。オレのなぐんにも知らないところでな」

龍彦についての話 無くなった腕がまた生えたり変身して敵をなぎ倒したりした話を一通り聞くと、清子は口を大きく開けて驚いた。

「……それって、怖くなかった？」

清子は少し顔をこわばらせ、当然と言えば当然すぎることを尋ねてきた。もちろん龍彦といえども、疑問や懸念が全くの皆無である

わけではない。

「そりゃ最初はビビったけど、ビビってるだけじゃ始まらねーよ。怖がる前に、興味を持つ方が先だな」

「ふうん。私は改造人間の話を聞かされて、自分が改造人間のための技術のおかげで命が助かったって聞かされたから、私はこの任務をやるうと決心したわ。それに私はこんな豪華なパーツをもらったんだから、その分の借りはしっかり返さないとしたしね。私にしかできないこの任務を、私はやり遂げるつもりよ。私の家族みたいな被害者を、もう絶対に出したくない」

最後の言葉は、龍彦の耳にも痛く感じられた。清子は清子なりの決心があつて、自分が戦いの最前線に出ることを選択したのだ。

「オレも今回みてーな被害をもう出したくねえ。そこはおまえと一緒にの考えだ。この仕事ができるのは今のところ、日本で三人しかいねーんだからな」

これが龍彦の選んだ道だ。龍彦だつて、家族を失う悲しみを、今更ながらであるが知っている。失われたものはもう戻らない。だから自分は、今あるものを守るしかないのだ。唯一とっていい肉親の姉・美希やこれから新しく住むことになるだろう家は当然のこと、それ以外にも学校の仲間や部活の他校のライバル、さらにその他の知り合いを、この日本ごとまとめて守るのだ。現実を受け止め、自分ができることを全力でやっていくことこそ、天国にいる両親が最も望んでいることだと、龍彦は考えた。

「リュウも案外真面目なのよね」
「オレだつてやるるときゃやるんだよ。それにオレは、自分の未知なる能力を試してみたいんだ。自分がいつどこで改造人間になったのか、ここで働くことで自分の正体がわかるかもしれないね。それを期待してる」

あのマンションを破壊した敵の言った通りなのかもしれない。ただ受身で待っているだけでは真実を知ることができない。メディアとネットの情報にしか触れていなかったら、自分が改造人間だとい

うことなど一息がつかないで過ごしていたら。だからこそ自分が主体的に動き自分の頭で考えない限り、自分に関するこの不可解な謎を解くことはできないのだ。

(オレはやるんだ。やってやるぜ！)

変身したとき以上に、全身が熱く感じられた。

それから二人に加え、立川雪菜という少女と、川井研究開発課長が部屋に入ってきた。いよいよ改造人間状態のお披露目だ。

「三人とも、指定の服装で来たのよね？」

指定の服……取り調べの三日目にはジャージにサンダル履き、そして下着にはスパッツを履いてこいと出口に言われた。ただし出口がくれた服と言えば、ジャージと学ランしかなかったので、龍彦は新たにスパッツとサンダルを調達した。

「それじゃ、今からその服装になってちょうだい」

「えっ、ここですか？」

叫んだのは清子だが、龍彦も同意見だった。要するに、龍彦の場合はスパッツ一丁になれということだ。

「三人はこれから一緒に活動するんだから、お互いに変身したとき、どんな外見でどういう状態かをしっかり覚えておかないとだめですよ？」

「た、確かにそうですね。わかりました……」

もつともな意見なのだが、清子は納得しきれていないようなあいまいな声で返事をした。龍彦は、言われるがままにジャージを脱いでスパッツ一丁になる。同い年女子二人　しかも幼馴染とこれから仲間となる初対面の女子がいる場所で、この格好になるのはいささか抵抗がある。だが中学のときの水泳の授業だと思って自分を納得させる。

しかしなんと、清子と立川雪菜の方はビキニタイプの水着になったのだ。清子は白くてフリルのついた水着。立川は黒の飾り気のない『普通』という言葉がぴったりの水着。これについては、龍彦は

心の中でちよっぴり感謝した。

別に下心からではないが、あらためて二人の同い年の女子と立川雪菜を見比べてみる。こうしてみると、立川は清子よりも一〇センチほど背が高い。清子の背丈が一六〇センチ代中盤なので立川のそれは一七五センチ前後ということになる。女性にしてはかなり背が高い方だろう。そしてそのスタイル抜群の体には、鍛えられたしなやかな筋肉が潜んでいるのがわかる。病院での戦闘のときと同じく、彼女の練度の高さを窺い知ることができた。

「龍彦くん、身長と体重は？」

三人を代わる代わる眺めていた川井が、水着の女性のほうに目に向けていた龍彦に尋ねてきた。

「身長は一八五センチ、体重は今一〇〇キロくらいです。身長はただ年に一センチくらいのパースで伸びてます」

「へえー、なら体格は十分合格ね。あつ、二人にはここでそういうことを聞かないから安心して」

川井は女子二人に向かってあわてた感じでそう付け加えた。

「では三人にはこれから、変身してもらおうわ。変身するには、自分の潜在意識というものをしっかりと追い求めてね。自分の意識の裏側に、変身する方法があるはずだから」

龍彦が病院内で変身したのは、戦いの最中に気持ちが高ぶったからだろう。今度は、自分の意思で能力を發揮する。

「自分の意識の裏……と」

目を閉じて、すべての意識を頭から捨て去る。

頭の中をからっぽにし、精神統一を行う。

心を完全に無にするよう強く意識する。

そうするとその中で、逆にだんだんとはっきりしてくるものが現れてくる。

これだ。

それに触れると、それははじけて一気に意識全体に広がっていった。

「よし！ きたっ！」

次の瞬間、全身の細胞がドクンドクンと波打つように鼓動を始める。全身の細胞が活発に働き、中のエネルギーが燃えて熱を発生しているかのような感覚。あのとき、病院で突然現れた感覚と同じだ。目をゆっくりと開ける。そこには、さきほどと同じ視界が目に入る。だが自分の体は、全くもって違っていた。

「ぬあつ……」

病院で見たのは手の部分だけで、防護服を脱ぐときにはいつの間にか変身が解けていた。初めて変身した状態の全身を見て、龍彦は何とも言えない声を上げた。

川井が用意した全身鏡に映る自分の身体。病院で見たようにほんのわずかに紺に傾いた黒色の、弾力性に富んだ硬質の皮膚が体の大部分を覆っている。ただし例外もある。膝や肘や肩などの関節と、大腿直筋やふくらはぎなど、スポーツよくテーピングを張るような部分のラインは、それよりも明るい紺色。暗いコバルトブルー色の、相対的にさらに弾力性の強い皮膚で上から厚く覆われている。顔は目や鼻などパーツの形こそ変わっていないが、目は白と黒の区別も無くなって、一色のレンズ状になっている。目と髪の毛の色は、膝や肘の色と同じ、青と紺の間くらいの色だ。

「こんな姿で街を歩いたら一発で通報されるな……」

「確かに極端な変身だけど、そう気持ち悪いってほどじゃないわね。うん。むしろカッコいいんじゃない？」

「そーかあ？」

龍彦は、清子の方を向いた。

そういう清子は、薄い黄色の下地に森を思わせる鮮やかなグリーンを散りばめた体の色をしている。髪の毛も緑色で、目は白目のところグレーになっているが、黒目が顕在なので龍彦よりはまだ人間らしく見える。

（警察なら、体を白と黒にして目を赤にすればピッタリなんだけだな……）

勝手なくだらないことを考えるのはやめて、さらに立川のほうを

見る。今日初対面の、立川雪菜の変身時の姿。

(あれ……)

黒に一滴だけ赤が混じったような色の、全身の大部分を覆う皮膚。それと膝や肘、髪の毛、レンズ状の目にある、赤と茶色の間にあるような色。

その姿は、色の基盤が青から赤になっただけで、色の濃さや全身のデザインなどは龍彦とそっくりだった。

「ん？ ……リュウと立川さんの、どこかしら似てませんか？」

「そういえば、確かに言われてみるとそうね」

清子と川井も、龍彦と同じことを考えたようだ。二人とも少々疑問の目で、龍彦と立川の二人を見比べる。ただ当の立川雪菜は、何を考えているのかよくわからない表情のまま、何も言わないで自分のほうをじっと見ている。

「まあとにかく、三人とも今日から仲良くしてね。三人で力を合わせて戦うんだから、しっかりと協力し合うこと」

「……はい！」

三人そろって、気持ちのこもった返事をした。

川井は何枚か自分たちの体の写真を撮影し、さらに三人順番に電子計測器のコードを取り付けてデータを収集した。だがそれらの作業は全体でわずか一〇分程度で終了し、川井はさっさと部屋を出て行ってしまった。

三人だけ残されて少しぎこちない雰囲気になったが、とりあえず変身を解いてまた服を着ることにする。変身を解くには、自分の高い能力を心の裏に小さく封印するような気持ちで心を沈ませる。これは単なる精神統一ではなく、本気で自分の心を丸ごと封印するつもりにならないと、なかなか変身は解けなかった。

(病院のときは、無意識にでも簡単に解けちゃったのにさ……)

変身ひとつとってみても、自分の能力は謎だらけだ。

「えっと、私は竹内清子。よろしくね、立川さん」

「こちらこそよろしくお願ひします。あの、下の名前で呼んでもい

いですか？ 竹内技官と被るので」

「確かにそうね。じゃあこっちも雪菜ちゃんって呼ぶわね」

「はい。清子」

服を着ながら自己紹介をし合っている女子二人。明るく人当たりの良い清子は、初対面の相手ともすぐに打ち解けた。ただ男である龍彦は、そういう女同士の会話の中には非常に入りづらい。

だがそんな龍彦の居心地の悪さを清子は感じ取り、会話に誘う。

「リュウも黙ってないで自己紹介したら？」

言われなくてもするつもりだったけどよ それは言わずに、龍彦は雪菜の方を向いた。

「リュウ……とは？」

「あ、えつとな……大島龍彦だ。よろしく。大きい島に、ドラゴンの龍って字に彦だ。でも清子は名前の漢字をとってよく『リュウ』って呼ぶから、その呼び方でも結構だぜ」

「……そうですね。この呼び方のほうが短くて使いやすいです。ではリュウ、立川雪菜です。雪菜と呼んでください。よろしくお願いします」

そう言う彼女の表情は、あまり大きく動かない。表情や口調を考えると、彼女はかなり口数の少ないタイプのようだ。龍彦にとってしゃべる機会の少ないタイプの人間なので、会話というかコミュニケーションが成り立つのか少々不安だった。だが唇の端や目元はわずかながら動くので、表情や感情はそこそこ読み取れる。

（それに、また美人だよなあ）

清子と雪菜という二人の美少女 と、「世界最北に生息するゴリラ」と言われる自分……。

だがしかし、彼女はいったい何のためにここにいるのだろうか。彼女の話については、龍彦も雪菜も全く聞かされていない。

「なあ、あんたは どうしてここにいるんだ？」

思わず聞いてしまった。横で清子が「会ったその日にそんなこと聞く普通？」と言いたげな顔をしていたが、別にかまうことはない。

「今から約一年半、出口さんによると、確か山中の施設で私は警察に身柄を保護されたそうです。それから私は、明日からあなたたちが受けるであろう訓練を受け、警察の一員として働くことになりました」

「保護されたそうです……？」

「何だかあいまいな言い方だ。」

「……私には、目が覚めてからはこの本部にいた記憶しかありません。その施設で何があったのか、それ以前に私が何をしてきたのか、そもそも何を見たのか、一切覚えていません。答えられなくてごめんなさい」

淡々と語る雪菜に対し、龍彦は突っ込みすぎてちょっと彼女に悪い気がした。隣で清子が眉間にしわを寄せて龍彦を睨む。

（じゃあオレと同じ、あさつての方向から現れた改造人間ってわけか……）

「少しだけ彼女に親近感がわく。」

（もしかすると、オレもそこに関係があるのかもな……）

彼女は、自分の能力の謎を解く鍵になるのかもしれない。無根拠なことではあるが、なんとなく龍彦の頭の中にそういうことが浮かび上がった。

「と、とにかく先輩として、明日からよろしくね、雪菜ちゃん！」

「気まづくなつた空気を払うように、明るく切り上げた清子。」

龍彦もその言葉に、もう一度決意を心に誓う。

「こつちこそよろしくな、立川さん」

「雪菜と呼び捨てで結構ですよ」

「あ、そう。じゃ、えっと……雪……菜？」

どうも龍彦は、女の子を下の名前で呼ぶというのは、あまり慣れていないようだ。

「はい、リュウ」

改造人間の未成年三人が帰った後、会議室には出口、中原、高野、川井、涼子の五人が机を囲んで座っていた。古川は都心にある通常の機動隊と打ち合わせをしに行った。

「竹内清子の測定値は問題ありません。移植予定者と違う人間に移植されたため、設計値よりもある程度は発揮される能力の数値が全般的に低めですが、この誤差は他人に移植したときの数値としては異例ともいえる少なさです」

「私と清子が、普通の姉妹と比べても遺伝的にかなり近かったからだと思います。ただまだ今日一日だけの測定で、実際に能力を存分にはつきしてみないとわからないこともあるので、あくまで初步中の初步の段階だということも考慮にいれておいてください」

川井がごく簡単にだが調べた『Za^{ゼット・エー}』についてのデータを報告し、最後に涼子が補足を付け加えた。体質の違いで、本人ように調整した生体パーツを別の人間に移植すると、たいていは能力を満足に発揮できない。場合によっては凄まじい拒絶反応がおこり、移植先の人体を破壊してしまうかもしれない。だが今回の場合、奇跡ともいえる順調さだ。

「たとえ相対的に能力が低下しても、結果論的に、竹内清子の『Za』の方が、もとの計画より高い数値をたたき出すんじゃないの？
右膝故障気味の涼子ちゃんにテロリストと戦ってもらうわけにはいかなかったわけだし」

「それはそうですね」
出口はZパーツのことを『戦力』と断言した。やはり出口は、竹内清子を明確に戦力とみなすようだ。

「私は最後まで反対しましたが、結局は誰かがやらなければならぬ、必要不可欠なものだという点では意見が一致します。このままZパーツを研究室の『置き物』にしておくのはあまりにもつたいないことですし、もしこの研究成果が認められれば、新たにZ計画を進展させる予算がもらえるかもしれません。出口さんの言うとおり、能力的にも、清子ちゃんは『Za』となる基準をクリアしています」

川井はあの日、清子にパーツを移植しようとした涼子に強く反対した。

「まだ清子さんは未成年なので何とも言えませんが、戦う任務なら体力的に、涼子さんよりも適当だと思います。一応自衛官の意見として」

高野もひとこと付け加えた。涼子も同じくうなずく。

「しかし今回のZ計画にはまいったもんだぜ。改造人間の開発を最重要課題と通達してきた省庁の連中は、『ゼロ』が偶然手に入った途端に消極的になる。言い訳もすばらしい。人権上まずいから

自分から至上命令として通達してきたクセに、自分で手を汚す必要が無くなるとすぐにこれだ。まさかZパーツを技術実証用だけにごまかして、実際の任務には『ゼロ』を当てる、なんていう意味不明な通達が来るとは、さすがの俺も想像できなかったな。そしてさらに朝令暮改、やっぱり戦闘任務も警察組織という枠内で、上の都合で勝手に設定した規制に則って『ある程度』こなしてくれ、なんて言われたときには、全身がひっくり返るかと思ったね。今まで開発につき込んできた莫大な予算と時間をいっぺんに無駄にしかけ、その上で現場を大混乱させるんだからな。この時は涼子くんと同じく、上の連中は全員脳ミソ腐ってんじゃねえのかって本気で思ったぜ」

「たとえ同じ兵器を持っていても、それが偶然手に入ったものか、自分で一から生産できるものなのかでは意味が全く違います。自衛隊の兵器を直輸入せずになんかライセンス生産するのはそのためです。とりあえず歳出の数字を減らすことで頭がいつぱいのお上にはそんなこと全くわからないでしょうがね」

高野も顔に似合わず、厭味ったらしいことを言う。

「その曇った目と脳みそのおかげで、結果的に私たちの時間と税金が無駄になっていくんです。清子がいなかったら、本当に右膝ガクガクの私が『日本政府初の改造人間戦士』になっていたかもしれませんが。数年で『車いすの改造人間』になるのかもしれないが」

「しかしそんな無駄はまだ軽いほうですよ。我々自衛隊なんかは、わざわざ税金を余計に使って戦闘機の性能を下げたりしてしまいましたから」

「ま、そんな自衛隊と比べりゃ確かにマシか」

出口は、さつきから黙っている中原に目をやった。

「どうした賢治？ さつきから黙ってよ？」

「署長、さつき大島龍彦の資料を見て、どうも気になることがありますまして……」

「どうしたんですか、中原警部補？」

川井も興味深そうに尋ねる。

「大島龍彦。彼は生まれてこの方、手術も輸血もしたことがないんですよ。外部から自分の体組織に手を加えられたと考えられる機会が全くありません。これが自分にはどうしても矛盾して見えます」

「だが結果的にあいつは変身した。ってことは、普通の人間じゃねえことはもう自明の理だ。あとはあいつの経歴を注意深く探ってみるしかねえさ。それに手術は正規の医療機関でやったとも限らねえだろ。とにかく、改造された時が絶対にあるんだ」

「まだ簡易検査ですが、通常の間人とは明らかに違う、系統不明のDNAも検出されました。この点からも、彼が体内に、自然状態以外の臓器を物理的に抱え込んでいることは、ほぼ確実です」

出口に続き、川井も反論を重ねた。中原は納得したのかどうかよくわからない顔で、井手口の方を向く。

「まあ、確かにまだ謎だらけですからね。赤の他人にパーツを無償で提供する。しかも相手に何も知らせずに。そんな団体の情報を、公安がうまいこと掴んでいるといいんですが」

「そういうことなら俺が掛け合ってみてもいいぞ。公安部には知り合いが大勢いるから、こんなSFチックで現実離れた内容についても、非公式に流してもらおう」

「ご活躍を期待してます、署長」

中原の言葉に、出口はまかせておけとどんと胸をたたいた。そし

て再び大島龍彦の資料をめくる。

「また新しい『G』が手に入ったとなると、Z計画にかけられる予算がますます減らされていくような気がします。大丈夫でしょうか？ 現に『ゼロ』を発見したときの例があります。Zパーツの開発責任者として、私はそこを非常に懸念しています」

川井の言葉に、涼子も強く首を上下させて賛同する。

「どうとも言えねえが、むしろ逆の結果になったりするかもよ。建物一つをこつぱ微塵にする敵が現れた。そしてこつちも偶然未知の『G』を手に入れた。だからZ計画を進める口実ができたし、さらには大島龍彦という得体のしれない『G』を検査・研究する予算までもらえるかもしれねーぜ」

「正直、そんなうまい結果になるなんて思えませんが……、ここも出口さんにおまかせするべきですね」

「おう。そこも俺が掛け合ってみる。そういうことは管理職にまかせときな」

川井の言葉に、出口は再びどんと胸をたたいた。

それから中原の方に向き直る。

「なあ賢治。おまえ、竹内清子や大島龍彦を科特警のメンバーに加えるのに、最後まで反対してたな。それも意外と強硬に。それに病院内で、大島に説教じみたこと言っただって？」

「彼らは事件の被害者です。その彼らを捜査に困り込むことは、正常な捜査をかく乱しさらに彼らの恨みをいたずらに増幅させることになり、私としては賛成できませんでした」

「まあ、このヤバい道に堂々と賛成されてもこつちは反応に困るけどな」

出口はそれ以上、中原のことを追及しようとはしなかった。

「何はともあれ、オレたちは奇跡的にも進歩を遂げることができた。未成年のガキ三人を頼りに進歩したつてもなんだか情けねえ話だけど、とにかくこれまでの硬直状態からは一歩 いや半歩抜け出すことができた。これからが正念場だぞ。限りある人的資源を有効

活用して、日本の安全のために全力を尽くす。いいな、みんな気合いいれとけよ！」

出口の言葉に、その場にいる全員が気持ちのこもった返事をした。

川井や涼子は資料を持参してどこかに出かけて行った。高野も資料を整えて会議室を出て行った。部屋に残っているのは、出口と中原の二人だ。

「今回襲撃してきた連中の動機などは思い当たりますか？」

「さあな。今のところは、涼子ちゃんの家族があそこに住んでたつてことぐらいしか、関係ありそうなことはない。大島の証言だが、敵がマンション攻撃について『抹殺』と漏らしてたそうだ。となると、標的は涼子くん以外の人物になる。そこからはまだ全くわからねえ。俺もいろいろと情報を集めてみる」

「よろしくお願いします」

「とにかくお前には、新人二人の世話役をしてもらう。短い活動時間しかない中で詰め込めるだけの能力を詰め込んでやってくれ。それと、これは特に竹内清子に言えることだが、おまえらは犯人に仕返すために仕事をしてるんじゃない、日本国の平和と安全を守るために仕事をしてるんだつてことを、肝に銘じさせる。まだ二人ともちんちくりんのガキだから、どこに転がっていくかわからねえからな。おまえのあの話、してやったらどうだ？」

「署長」

「ねえ涼子ちゃん」

川井は涼子の運転する車の助手席で、手元の二枚の写真を見比べる。

「大島くんと雪菜ちゃん、変身時の外見が似すぎてると思わない？ そっくりつてレベルを超えてるわよ」

「私もそれは感じました。外側の色が違うだけで、構造上・システム上は同じタイプのものだと思います。車でいえば、同じ車種の色

違いといったところですか」

「ならきつと、開発元や製造元も同じよね？」

「それもおそらくは……」

涼子もミラー越しに、少し硬い表情で同意した。

大島龍彦をたどっていけば、同じような改造を受けた立川雪菜の出自や、彼女の受けた改造に関する事についても解明できるかもしれない。二人の外見は、科学者二人に全く無根拠なことを思い込ませるほど似ていた。大島龍彦の発見は、単なる戦力の補強以上の意味を持つ可能性がある。

「……改造人間って、社会のいたるところにいるのかもれないわね。それも本人の自覚もないままに」

「そんなことになったら、もう誰もかもが疑心暗鬼になって社会が成り立ちませんよ」

「そりゃそうよね。道を歩くたびにすれ違う人間一人一人を疑う生活なんて、私だってまっぴらごめんよ。でも遅からずそんな状況になるのかも。人類が、自ら作り出した技術により怯えだす。ついに科学技術が、人類自身を超え始めたのかもしれないわ」

「現在の科学技術は、もはや人類に対し過負荷となっているということですか？」

「これを言っちゃうと、科学者として仕事の放棄になるんだけどね」

*

次の日、四日間の休み（ただし休日が含まれる）を終えて、龍彦は出口が高校時代に着ていた特大サイズの学ランと三〇センチサイズのローファーを着用し、今学校にやって来た。出口からは通常の学生服のほかに、背中に『天下無敵』と刺繍された学ランを勧められたが、それは丁寧に断った。

「おはよう龍彦。ケガはないみたいだね。……あらためて、大丈夫？」

教室に入るとクラス中の注目を集めたが、最初に話しかけてきたのは、サイモンだった。

「うっす、サイモン。おう、別にケガは無しだ。住むところも、もう見つけたよ」

「あ、そう……。でも、思ったより元気そうでよかったじゃん！」
わずか四日しか学校を休んでいないのだが、まるで夏休み明けのように学校が久しぶりに感じられる。学校が平和すぎて違和感を覚えるくらいだ。この四日間が普段の日常から、いかにかけ離れていたのかを改めて実感する。

「へっ、そんなに深刻そうな顔して心配しなくても大丈夫だって！

オレは天下無敵の大島龍彦様だぜ？」

「そうそう！ そのいき、そのいき！」

それから順々に、男友達に話しかけられる。龍彦はいつも通り、明るくハイテンションな会話をしている。でもいつもと違うのは、みんなが自分のことを心から気にかけてくれるということ。龍彦のことをしょっちゅう邪魔者扱いする一部の女子群も、今日はわりとさし当りのないことしか言っていない。

（みんな、ありがとな。これからオレはいろいろ忙しくなりそうだから）

これからはきつと、これまでの生活とは全く違う厳しい世界が待っていることだろう。出口や中原も警告したように、目をつぶっていれさえすれば味合わなくていい苦労を山ほど経験するに違いない。だがこのクラスにいる連中の顔をみれば、これからのどんな苦労も乗り越えていけそうな気がする。自信が湧いてくる。やはり持つべきものは仲間なのだ。

クラス全員が事件を知っているということからもわかる通り、あのマンション破壊事件は、全国ニュースでも大々的に報じられた。だが事件の詳細はばやかされ、やたらと『特殊』という単語が使われながら報道されている。もちろん改造人間や未知の衝撃波などと

いう情報は、上手に伏せられてある。

この事件で、各国大使館も日本への渡航を控えるよう注意情報を流すなど、ほんの十年前までには考えられなかった事態になっている。ニュースを通じた『第三者的な市民の視点』からこの事件を見返すことにより、龍彦にはあらためて、日本社会の安全性なるものが、もはや幻^{まぼこし}となつてしまったように感じられた。ただし、相変わらずだなどと思う点もある。

ニュースの中で、内閣総理大臣は治安出動命令に関する事後処理に追われていると報道された。龍彦が調べたネットでの情報によると、治安出動後には内閣総理大臣が速やかな報告を国会にしなければならぬらしい。

戦後の歴史で治安出動が命じられたのは、今回を含め三回しかない。そんな滅多に無いような緊急事態であつたはずなのに、首相はいつもよく聞く語彙とセリフを繰り返すばかり。国民にはなく、マスコミと野党に対するメッセージを述べているような印象を受ける。これでは答弁のための答弁である。野党も野党で、首相やその他閣僚の『対応の遅さ』を繰り返して非難し、コメントの最後には「首相の辞任を求める」または「内閣を退陣に追い込んでいく」というセリフを忘れない。さらに与党の幹事長は、今回の事件のことではなく、野党の国会での対応により、自身の党のマニフェストにある目玉法案の審議に影響が出ることを憂慮する発言ばかりしている。

そんなシーンが、連日朝晩のテレビから嫌でも目に入る。相変わらず、首相は内閣のメンツしか、野党代表は野党執行部のメンツしか、与党幹事長は自身の党執行部のメンツしか考えていないのだろう。胃袋と左腕が無くなるほどの大けがを負ったり、両親と弟が無残にも殺されたりした人がいるというのに、お上はのん気なものだ。のん気だという自覚そのものすら無いのかもしれない。こちらは怒りどころか吐き気がする。ニュース番組が、これほどまでにおもしろくないと感じたのは初めだ。

『誰かがやらねば、この国はすぐにでも滅びそうだな』

特殊強化服部隊、通称『メカ』の隊長の古川警部が冗談交じりに言っていたこの言葉。今では妙に生々しく感じられてしまう。科特警のメンバーが時おり口にする、政府・上層部への不満の意味が、わかった気がした。

（でも、テレビの前で文句を言ってるだけじゃ、何にも変わらねーんだよな）

楽観者は悲劇の中から希望を見つけ出し、悲観者は希望の中から不幸を見つける。自分は悲観者になってはいけない。大多数の一般国民とは違って真実を知り、対抗手段を持つている自分は、この悲観的ともいえる状況から光を見つけ出し、先陣を切つて前に進まなければならぬ。自分にはきつとそれができるはずだ。二年前に両親の死に直面したときと同じように、とりあえず脇目を振らずに前だけ向いて突っ走ることができるだろう。

明日から本格的な訓練が始まる。学校も一カ月ほどお休みだ。これからは自らの学校生活を懸けてでも、与えられた任務に全力を尽くすのだ。社会のために、何より自分自身の謎のためにも。

第1編(3) 覚醒、そして…(後書き)

前書きの通り、第1編の完結です。どうだったでしょうか。

読者の皆様に「続きが読みたい!」と欲していただけるといいな小説を、頑張って書いていきたいと思います。

第2編(1) 新生活(前書き)

久しぶりの投稿ですが、全くの序章です。中盤以降はまた今度の投稿になります。

更新が停滞していて、本当に申し訳ありません。

出口警視正は、警察庁の会議に呼ばれた。重要案件であった、改造人間対策について最終的な判断を下すこの会議で、参考人として召喚されたのだ。

具体的に言うと、ひと月前から改造人間警察官の拡充が検討されてきた。だがこれは、通常の警察官の話をしているのではない。とある事情により『改造人間』とされた未成年の少年少女二人を、制限付きで警察官としての地位を与え、治安維持等の任務に当たらせるといふ、著しく例外的な措置が考案されていたのだ。

最初にこの提案が出されたとき、多くの人間が何の冗談だという声をあげた。しかし実行を意図する側は、本気で相手を説き伏せた。持てる権限には大きな制限を設け、本人の情報を含む機密の保持は徹底するのでリスクは非常に低い、それに何より、すでに一件の前例があるではないか。そして説得の最後に、現在この時点でこれこそが我々の実行しうる最も有効な策であると念を押す。こうすることで、上層部も、一定期間内で本人の適性検査を行い、それも含めて判断するという回答を出してきた。

訓練と様子見を含んだ一カ月は過ぎ、そして今日、その本人の適性も含めた最終的な結論がここで下される。計画がいざ実行に移るとなると、上層部も慎重になるらしい。警視庁だけでなく、警察庁の刑事局や警備局からも担当者がやってきて議論になった。

竹内清子 開発された改造人間「Za」の被験者。身体能力「

良」、武道「良」、一般教養及び一般知能「良」、品行「良」。身辺調査でも特段注目すべきことは発見されず。年齢を別にすれば、警視庁の女性高卒警察官の採用基準を満たすと考えられる。

大島龍彦 原因不明の改造人間。身体能力「良」、武道「良」、一般教養及び一般知能「良」、品行「可」。身辺調査でも特段注目すべきことは発見されず。こちらも年齢以外、警視庁の男性高卒警

察官の採用基準を満たすと考えられる。

「こちらが具体的な、訓練成績の数字です。犯罪捜査よりも、まずは戦闘要員としての訓練を重視しました。自衛隊の駐屯地にも数回向かわせています」

「確かに、数字の上では採用に足る人物のようすな」

資料に一通り目を通してから、警視庁警務部から来た担当者がそうつぶやいた。

「お宅の言うことはわかる。だが三人の未成年に、このような権限を与えるのは少し不用心な気がしなくてもない」

「三人とも高校二年生という歳です。あと一年もすれば警察官の採用試験を受験できる年齢ですし、人物の方も、特別不適切というわけでもありません。それにあくまで応急的、一時的な措置とお考えください。並行して代替案も検討中です。もちろん我々としても、高校生に仕事の本分を任せっぱなしというわけにもいきませんよ」

誰もが知っている、もつともらしいことを言っただけでもらう。実際にこれは理にかなった言い分だ。高校二年生にもなれば、社会の一般常識くらいわかるだろう。警察側だって慎重に人物と能力を調べ上げた。また、彼らの存在が今の日本にとって必要不可欠であるということも明確だ。改造人間というものがどれほどの威力をもつのか、警察関係者全員の頭にそれは焼き付いている。

「厳正な運用と詳細な報告義務は、もちろんお守りいたします。ですからどうか、この案を承認していただきたい。今の日本を救うためのこの計画を」

最終的に、一つの結論が出た。 計画を承認する。

*

午前七時。携帯電話のアラームを止め、布団から這い出て来た。今日から一カ月ぶりの学校だ。

「うす」

龍彦がリビングに行くと、ちょうど清子と雪菜も朝食を食べるところだった。

「おはようー!」

「おはようございます」

昨日の訓練終了後、出口から、龍彦と清子を正式に科学特別警察の『戦力』として採用することが決定したと通達された。龍彦はそれを聞いてホッとしたが、出口によると「おまえは採用されて当たり前。もし、あれだけペーパーと実技ができたのに落ちるってことは、人物が最低ってことだからな」ということらしい。

さらにその後、今までの仮の住居から、本格的な住居が与えられることになった。科特警本部のすぐ近くにある3LDKのマンション。ただし、清子と雪菜との共同使用が条件だ。

『これが一番安上がりな方法だからな』

最初は戸惑ったが、家賃はいろいろな名目で警察の予算から出てくるのだ。他人に金銭を保証してもらう以上、文句を言ったらバチが当たる。

引越しの作業はそんなにかからなかった。龍彦と清子の持ち物など無いに等しかったし、雪菜も一七歳にしてはかなりシンプルな生活を送っている人間だったので、持ち物もそれほど多いというわけではなかったのだ。ちなみに雪菜は、ここに住む以前には、改造生物を収容する施設で寝泊まりしていたそうだ。緊急事態があればすぐに対応が可能ということで、本人はその場所を希望したらしいのだが、出口や川井といった多くのスタッフが、今回の機会に引越しを勧めたらしい。いったいどんな環境に住んでいたのか、気になるところだ。

そして昨日の夜から、三人での共同生活が始まった。

「あー、今日から学校か……」

「そうよ。どうしたの?」

「いや、久し振りだから、どんな顔して教室に入ればいいかちょっと迷ってるんだよ」

勉強は独習で何とか進めておいたのだが、なにしろ一か月も『公欠』を振りかざしていたので、学校の連中の反応が気になるところだ。

龍彦は炊飯器から丼^{どん}ぶりにご飯を山盛りにし、そこに納豆をかける。それから清子の作った焼き魚とみそ汁にも手を付けた。

「おお、うまい！」

「おいしいです、清子。料理が上手なんですね」

「そう？　ありがと」

雪菜も味をほめた。大盛りご飯がガツガツと進む、清子の料理は絶品だ。龍彦も両親がいないゆえ料理もある程度はできるが、自分の『とりあえず火を通った食材』とは全く違う。

部屋、椅子、テーブル、食器、料理　生活環境が何もかも変わり、まだ全く慣れない生活なのだが、これなら何とかまともな暮らしになりそうだ。

「そっぴや、た……雪菜、おまえは学校に行っていないのか？」

「私は普段、科特警の仕事がありますから」

何の興味もなさそうに、彼女はさらりとそう言った。

（学校には、通っていないのか……）

龍彦と清子が訓練のため学校を休んだ一ヶ月間、彼女が学校に通っている様子は一度も見たことがなかった。彼女もまたどこかの学校を休んで警察の仕事に携わっていたのだと、龍彦は考えた。しかしまさか、そもそも最初から学校に通っていなかったとは、ちよつと想像がつかなかった。

そういえば彼女は、記憶を失っているとも話していた。現在覚えている最も昔の出来事は、警察に身柄を保護されたときに受けた事情聴取だという。学校に通っていないのも、警察の仕事に協力しているのも、それに関連した事情によるのだろう。

がつつり朝食を食べ終わると、龍彦は食器を水に漬けておく。清子と雪菜はまだ食べている途中だが、龍彦はその間に素早くシャワーを浴びて、その後は三人分の食器を洗う。料理は聖子、部屋の掃

除は雪菜、洗濯とごみ出しと食器洗いが龍彦、というのが家事の分担だ。

そして午前七時三〇分になると、三人は各々が家を出た。龍彦は都立三本橋高校へ、清子は私立王満学院へと通学し、雪菜は科学特別警察の本部に『出勤』する。マンシヨンの三階から地上に降りると、まず雪菜一人だけが逆方向へと進む。龍彦と清子は、清子が私鉄の駅に乗るまで、通学の道のりは一緒だ。

「では、清子にリュウ。気をつけて」

「うん。雪菜ちゃんも気をつけてね。いつてらっしやい」

「またな」

お互いに軽く手で合図をしてから、二手に分かれた。だが声のトーンからか、雪菜の言葉は、どうも朝のあいさつらしく聞こえない。

「まさか、三人で暮らすことになるとはね」

「まさかのまさかだよな。安上がりになるんなら、オレはそれでいいけど」

「リュウにとってみればお得でしょ。家賃が三人で割り勘になって、おまけに女の子二人と同居できるんだから」

「ああ、ホントに夢みてーだよ……」

それは……まあ、本心といえば本心だが、いいこと尽くしというわけではない。家事の分担だが、より具体的に言つと、料理が清子、部屋の掃除が雪菜、そしてそれ以外の全て 風呂掃除やトイレ掃除、玄関掃除、洗濯、食器洗いなどの全てが龍彦の担当だ。おまけに3LDKのうちLDKを除く三部屋の割り当ては、清子の部屋、雪菜の部屋、そして龍彦の部屋兼物置、という具合になっている。さらに龍彦は、洗濯物の畳み方ができていないとか、トイレ掃除が雑だとか、几帳面な清子から散々注文をつけられている。「物事は、必ず良い面と悪い面がある」という言葉がまさにぴったりとくる生活で、浮かれた気分など生活開始から数日で消え去った。

「雪菜ちゃん、どうして学校に通ってないのかしら」

「さあな。理由なんて それらしいことがほとんどないついてく

るが、どれが本当の理由なのか判別できねえ……」

「やっぱり雪菜ちゃんも、学校に通うべきだと思つたのよね。何か理由があるんなら、何とかしてあげたいわ」

「そうだな……」

それは龍彦も同感だ。本人に通う意思があるのなら、絶対に彼女を学校に行かせるべきだろうし、それを他人が阻むことなどあつてはならないと思う。

それからほどなく、清子が利用する私鉄の駅についた。

「それじゃあね、リュウ。いつてらっしゃい」

「おう。おまえもな」

改札を抜けてゆく清子を見届けてから、龍彦は再び歩き出した。今の住居に引越したおかげで、龍彦は以前よりも学校に近い場所から通うことができるようになった。逆に清子は、通学距離がより長くなってしまったのだ。

（立川雪菜に、それと清子も……）

清子は雪菜のことをいろいろな面で心配しているようだが、龍彦は、同じように清子の心配もしている。先日のマンション全壊事件で、龍彦は唯一の肉親である姉が無事だったのに対して、清子は父母と弟という、多数の家族を失った。受けたショックは龍彦よりもはるかに大きいに決まっている。そんな彼女の心身が本当に大丈夫なのか、龍彦も不安でたまらない。

（清子も強がりなやつだからなあ……）

だが、今龍彦自身にできることは、戦闘訓練を積み、あの犯人たちを片っ端からひっ捕らえてやることだけだ。だから龍彦は、マンション倒壊の被害者 特に清子のためにも、絶対に強くなると、心に誓った。

徒歩二〇分ほどで、龍彦は三本橋高校に着いた。

「うおす」

勢いよく教室の扉を開けると、教室中の注目がこちらの方に集ま

った。

「た、龍彦……！」

「悪かったな、一か月も不在で。オレがいなきゃ、この教室は静かすぎるな」

そう言いながら、友人のナイジェリア系日本人

佐井門寛さいもんひろしのと

ころへと歩いて向かった。

「龍彦、この一カ月何してたんの？」

「生存者としての捜査の協力、それと事件が特殊過ぎたから、念のための健康診断だ」

「健康診断……？」

寛 通称『サイモン』や周囲の人間の顔が、驚きで歪んだ。彼らの頭の中で、毒物だの放射能だのという単語が走り回っているに違いない。

「別に毒物とかそういうモンじゃねーよ。瓦礫の中の化学物質とかを大量に吸い込んだ可能性があるから、今後の状況を考えて、警察の施設で長期的な検査を受けることになったんだ」

「龍彦だけ？」

「瓦礫の下に埋もれたやつ限定だ。ちなみにそれは、オレともう一人だけ。他に瓦礫の下敷きになった人は、みんな……」

というように、嘘に事実を半分混ぜて、科特警や改造人間に関することを覆い隠す。みんな自分の話を信じてくれたので自分は安堵する一方、機密を守るために親しい人間にも嘘をつかねばならない自分自身に対し嫌気がする。友人たちは本当に心から心配してくれているのに、当の自分は虚偽の塊。サイモンをはじめとする多くの友人の同情や善意を、自分は見事に裏切っているのだ……。

「それと、もしこれから何か変な状況になると、オレも警察に呼び出されるんだ。そのときは学校を休んだり早退するかもしれねーけど、変に思っなよ」

「そんなに大変なのかよ？」

「大変なんだよ。人が大量に死んだんだ。そうとしか言えねーだろ」

「あ、ああ……」

まだ少々もの言いたげなサイモンらに背を向け、龍彦は自分の席に移って腰を下ろした。サイモンたちはある程度話を分かったようだが、それ以外の連中　特に女子陣からは、まだいくらかの視線が龍彦に向いている。

何かにつけて注目されることは以前にもあつたが、今は以前のそれと全く違う。今回の場合は、『大島龍彦』としてではなく、『世間で有名な事件の関係者』として注目を受けているからだろう。まだ警察の仕事に協力するといっても、今はまだ任務らしいことは何一つこなしていない。今後本格的な仕事が入るにつれ、単位取得といった実務的な話ともかく、一般的な、いわゆる一人の『高校生』として学校生活を送れるのか、早くも不安になった。

(いやいや、ここで弱音を吐いてちゃだめだろ)

ちょうど予鈴の振鈴が、校内に鳴り響いた。その音で、龍彦は頭を切り替えた。

放課後になると、龍彦はすぐに学校を飛び出して、科特警の本部へ速足で向かった。アメリカンフットボール部には、一か月前にすでに退部届を提出してある。

東京都大田区内にある、科学特別警察本部の前にやってきた。敷地の周囲に、外側に向かって威嚇するかのようには有刺鉄線が張られている。その敷地内には、東京二三区内としては大きめの駐車場があり、さらに鉄筋コンクリートの建物が二つ建っている。うち一つが本ビルで、本ビルには通常の警察署のような機能の他、多くの研究施設が詰め込まれ、地下には改造生物や改造人間を収容する施設もある。実際に龍彦も、巨大なクマや紫色に変色した新種らしい毒蛇が、厳重な管理のもと『保護』されているのをこの目で見ている。他方の建物は小さめで、これは警察用の宿舎となっている。普段ここでは、本部の警備を担うパワードスーツ部隊の約五〇人が全寮制

の暮らしをしているが、ちゃんと女性用スペースも存在する。

全体としては、警察のマークやパトランプもあるので、ぱっと見る限りは普通の警察署のようだが。

（普通の所轄署よりは、絶対に近づきたくないって感じがするぞ！）
本部の門の前で、入口の警備担当者に専用のIDを示す。このIDは運転免許証のようにも見えるが、そこにはしつかりと『科学特別警察公認特別許可書』と記述されている。手でIDを見せる動作がこっ恥ずかしく感じられ、ぎこちない動作になってしまったが、警備担当者は何も不思議がらずにIDの写真と自分の顔を一目比べると、すぐに敷地内に自分を通してくれた。

それから龍彦は、自分の机が与えられているという、本ビル二階の第一事務室の戸を開けた。

「ただいま出勤いたしました。大島龍彦です。今日から正式なメンバーとして、よろしくお願ひします」

あらかじめ考えておいたあいさつを入口の前でしてから、龍彦は一礼した。中の人たちも予め予想していたのか、ざわざわとした簡単なあいさつが、部屋中から返ってきた。

「待ってたぞ。今日からあらためてよろしくな」

科特警の最高指揮官、出口太警視正が、にやにやとした顔でこちらに迫ってきた。最高指揮官らしく、彼の机は部屋の正面の中心に、部屋全体を見渡す形で置かれている。

「出勤したら、まずこの部屋に来て俺か川井課長かわいに出勤を報告するんだっとな」

「このIDを、警察手帳と交換するんですね」

ちらりと出口の机の位置から、部屋全体を眺めた。今この部屋にいるのは、自分の他に三人いる。出口警視正、中原警部補、そしてあの立川雪菜。

「そんじゃこれ、警察手帳な。無くしたらクビだぞ?」

「わかっていますよ。肌身離さず持ちますから」

さきほどのIDは、『科学特別警察の関係者』であることを示すに

過ぎない。龍彦（もちろん雪菜や清子もだが）は、このIDを出口か川井に提出し、引き換えとして本物の警察手帳を受け取る。これを持つことによってはじめて、龍彦は巡査階級の警察官として扱われるのだ。

出口から受け取った警察手帳を開いてみると、光沢を帯びた旭日章が、堂々たる風格でそこに存在している。

（おお……）

初めて手にする本物の警察手帳。改造人間の姿に変身するのと同じぐらい、全身に衝撃が走った。好奇心、不安、そして覚悟　あらゆる感情と思考が溢れてくる。

（これでオレは、敵と戦えるんだ……！）

竹内清子も来たら、また連絡する。それまで自分の机で待機している　それが巡査としての自分に出された、最初の指示だった。

待機の間も無駄にはできない。机の脇に積んである、法律のテキストを開いた。まず任務上で最も重要な、警察官職務執行法について復習しておく。さらに龍彦たち特別要員にだけ関わる例外規定にも触れて、頭に叩き込む。

まず龍彦たち未成年三人組は、単独で職務質問や令状の執行を行うことができない。必ず巡査部長以上の階級を持つ警察官が同行しなければならない。警察官としての多くの権限を、実行することができないのだ。また、改造人間としての能力の使用は、その地域を管轄する警察の警察本部長または警備部長の許可が必要である。普段は警視庁の管内で活動するので、たいていは警視総監か警視庁警備部長の許可を出口が得て、自分は変身し改造人間として職務を遂行する。これらの制限は、聞かされると非常に煩わしく感じられる。だが自分はまだ高校生であり、警察学校で教育を受けたわけでもないのだ、そう考えれば身の丈に合う規制だと頷ける。

しばらくすると、清子もやってきた、龍彦と同じように入り口であいさつし、同じように出口から警察手帳を受け取る。それから、今まで自分の机で書類作業を行っていた雪菜が立ち上がり、龍彦と

清子に活動用の作業着に着替えるよう促した。

着替えてから、地下の射撃場に行く。この一カ月の訓練の結果、龍彦と清子の射撃の実力はみるみる上達した。今のところの実力は、断トツの雪菜の次が龍彦、龍彦と僅差で清子という順だが、清子の上達率は凄まじかった。か細い腕で支えられた拳銃から発射された銃弾は、何発も的の中心近くに命中する。今日も同じように、清子は真剣そのものといった顔で的と対峙している。そのあまりの集中力に、龍彦は恐ろしさすら感じた。

(やっぱり清子のやつ……)

的を狙う彼女の目には、全身を鱗で覆われた改造人間の姿が映っているのではないかと自然にもそう感じてしまう龍彦だった。

(いや、オレだって……！)

自分もあの敵たちのことを思い浮かべる。自分や清子の平和な生活を一瞬で奪った敵。この銃口を、いずれその敵に向けるときが来るのだ。

(そのときは、確実に仕留めてやる！)

一発、また一発と引き金を引き、発砲の反動を味わうかのように、龍彦は拳銃を握った。

射撃訓練の後は、一階の道場に訓練の場を移した。そこでは警務課の渡部わたべ和弘かずひろ警部補が待っていた。彼は盛り上がる筋肉を備える三〇代中盤の男で、短く刈り上げた頭や熱心で一直線な性格が、いかにも武道家らしい。龍彦と清子は、雪菜と共に彼から格闘や逮捕術を教わっている。

三人が集まると、渡部は満足そうに頷いた。

「よし、三人揃ったな。今日はより実践的な訓練を行う。変なことを聞くがな、大島と竹内は、他人を殴ったことはあるか？」

「いいえ」

清子は即座に否定した。龍彦は何と返答しようか一瞬迷ったが、どうせ自分の情報は、身辺調査を通じて全部警察の耳に入っている

だろうと思ひ、率直に答えた。

「数えきれないほどあります」

少々挑発的な自分の物言いに對し、渡部の目が何かしらの興味を感じて光るのがわかった。

「ほう。ならば大島、他人に殴られたことはあるか？」

「自分が殴つた回数よりは少ないですが、あります」

龍彦は中学時代はケンカに明け暮れ、高校生になつてからも、その時代の話を知る連中から声がかかるほどだ。

「そうかそうか」

すると渡部は、おもしろがつて軽く笑つた。

「今日は、三人に防具を付けて、二人一組でお互いを殴つてもらつ。なあに、これは警察学校でやらされる訓練の一部だよ」

もう一度、言葉の意味を頭の中で噛みしめた。

(つまり、『実戦』に慣れる訓練つてことだな)

今までも格闘技の訓練があつたが、それは『格闘技』という一定のルール内での叩き合いに過ぎなかつた。今日は本気で人間を殴る練習だ。龍彦はともかく、温室育ちの清子には必要な訓練だろう。

正直、『格闘技』以外で清子が人を殴るなど想像できない。

二人一組ということは、まず女同士の清子と雪菜のペアで確定に違ひない。となると、龍彦の相手は。

「まだ話はあるのか？ 俺は待ちくたびれたぞ」

用具室の方から、能天気な声が出た。声の方を見ると、我が科学特別警察の最高司令官、出口太警視正が、全身を防具で固めた状態で大股で歩いて出てきた。

「竹内と立川が組になり、大島の相手は出口署長に務めてもらう」

「へへっ、殴り合いなんて久しぶりだなあ」

「出口さん……」

身長一九〇センチ超、体重九〇キロ超の出口警視正は、大学時代にアメリカンフットボールをやっていたそうだが彼は機動隊員などではなく、東大法学部を卒業し、在学中に国家公務員の上級試

験をパスしたエリート警察官僚のはずだ。こんな訓練の場に顔を見せるとは、いったい何のつもりだろうか。

「ほら大島、はやく準備しろ。念のため、体をほぐしておけよ」

「はい」

言われるがまま、龍彦はヘルメットをかぶり、胸当てをつけ、グローブを着用した。清子と雪菜もそれに続く。

「これでいいですか？」

龍彦は出口と向かい合って一礼し、拳を握った。

「おう。それじゃ、さっそく始めるとするか。 渡部さん、合図
お願いします」

「了解です。 まず壁側から先に殴れ」

渡部はそう言って手をたたいた。最初に殴るのは、龍彦と雪菜だ。それぞれが出口と清子に対し構えをとった。

「大島、思い切り殴れ。手加減するなよ」

「わかってますよ。しっかりと奥歯で噛んでくださいね」

そう言うってから、龍彦は足を踏み出し、出口の胸めがけて思い切り拳を突き出した。

派手な音を立てて、出口は後ろによるめいた。その後しばらく、殴った感触がグローブを通じて手に残った。

「やるじゃねえか！ 次はこっちの番だ。顔にいくぞ」

出口は、満足そうに笑った。

「俺だつて高校時代は、数えきれないほどの殴り合いをしたんだぜ」
渡部が次の合図を出した。出口は拳を握ると、強烈な一撃を龍彦の左頬に加えた。

（うはっ！）

まるでボーリングの球が当たったような重い一撃だった。ヘルメットを被っていても、あまりの衝撃を吸収しきることができず、龍彦は右側にバランスを崩して床に転げこけてしまった。

（いくらキャリア組っていつても、その筋肉は見せかけだけじゃねーんだな）

ならば、自分が相手を吹っ飛ばしてやる。負けず嫌いの血が騒いだ龍彦は、すぐに立ち上がって体勢を整えた。

三度目の相図を渡部が出した。

「オレも同じように、右手で顔を殴ります」

一声かけてから、龍彦は一度目以上に意識的に力を込めて、ヘルメットに覆われた出口の顔に拳を打ち込む。出口もさきほどの龍彦と同じように、よろけて床に尻をついた。

「へっ……。なんだ、まだ力が出せるんじゃないかよ」

床に尻をついたまま、出口は歯を見せて、挑発的に笑った。この人も、龍彦と同じタイプの人間らしい。

「次も本気でいくぞ」

「わかってます」

それからさらに、互いに一〇発以上殴り合った。龍彦と出口は、二人揃ってたくたくに疲れるほどの力を出した。清子と雪菜の方はそれほどでもなかったが、慣れない清子は、まだしっかりと人を殴るという行為ができていない。腰が引けて、子供のじゃれ合いのような攻撃になってしまふ。逆に雪菜に殴られると顔をしかめ、涙目になってしまふときもあった。そんな清子に対し、雪菜は凶悪犯罪者を叩きのめすつもりになって本気で殴れと清子に一喝した。

「大丈夫だ、清子くん。一週間もやりゃあ慣れるさ」

出口は苦笑しながら、清子を励ました。清子は疲れ切った顔になりながら、小さな声で出口の励ましに感謝の言葉を述べた。

（人を殴る……。そんなに難しいことだったっけか……？）

龍彦は、グローブを被った自分の拳に視線を落とした。

自分は、この拳でいったい何人の人間を殴ってきたのだろう。この先清子が一生かけて殴る相手の人数を、自分はすでに越えているのかもしれない。殴り合いに対する抵抗も、いつの間にか無くなっていた。

思わず、人類が清子のような人間ばかりなら、世界は平和なのにと考えてしまふ。

「殴り合いの訓練は、ここまでだ。今日から毎日これをやるぞ」

渡部の合図で、龍彦たちは防具を脱いだ。龍彦は相手をしてくれた出口に礼を言ってから、出口の分の防具も抱えて、倉庫に運んだ。その後も格闘技と逮捕術の訓練を行い、今日の訓練は終了した。

その後は膨大な書類の山を片付けたり生体兵器としての検査を受けたりと、夜中まで大忙しだ。

「清子、リュウ。ちょっと来てください」

「何だ、雪菜？」

「少し、話したいことがあります」

「話したいことだつて？」

龍彦と清子は、よくわからないまま歩き出す雪菜の後を追った。

雪菜は警務課の担当警察官に何かの許可を求めると、三種類の鍵を渡された。そして三人は拳銃保管室まで行き、扉を開けて中に入った。

「これです」

電気のついた部屋には、頑丈そうな金属のケースが数多く棚に置かれていた。その中から雪菜は一つを抱えて、床に置いた。雪菜は床に座り、龍彦と清子もケースを取り囲むようにして腰を下ろした。「これが話したいことつて……これのか？」

「これは、何が入っているの？」

龍彦だけでなく、清子も不思議そうな顔をしている。

「今、開けます」

雪菜は長い鍵をケースのカギ穴に挿して、ロックを解除した。そして雪菜は、慎重な手つきでそれを開けた。

開いた金属のケースの蓋が、かつんと音を響かせて床に触れた。それと同時に、龍彦と清子はその中の物に見入った。

（なんだこりゃ？）

中には、黒色で独特の金属光沢により鈍く光る銃が入っていた。ただし拳銃ではなく、自動拳銃と小型のサブマシンガンの中間のような外観をしている。自動拳銃が一回り大きくなったものだが、引

き金の前方に自動小銃のような弾倉がくっついている。

「これはパワードスーツ部隊『メカ』の隊員の標準装備です。J02、通称『轟』^{トウモン}。八九式小銃でも使われている、小銃用の五・五六ミリNATO弾を発射します。明日からは改造人間としての訓練も始まりますが、その時の射撃には、これを使います」

「五・五六ミリNATO弾だと？」

「それを拳銃から撃とうっていうの？」

龍彦と清子は一齐に声を上げた。龍彦たちは、訓練の一部として武器に関する講習も受けている。この弾薬を発射するような小銃は、両手で銃を構えて銃床を肩に当て、発砲時の反動を抑えるように設計されている。それだけ反動が大きいのだ。わざわざ弾倉が引き金の前方に取り付けられているのも、弾丸と火薬を合わせた実包が、手で握るグリップの中に収まらないほど大きいからなのだろう。そんな実包を片手で扱えるサイズの拳銃で撃とうものなら、反動で狙いは定まらないし、さらには手や肩までも傷めるだろう。実践の役に立つとは思えない。

「パワードスーツを着た隊員や改造人間ならば、発砲時の反動に耐えられます。小銃弾の破壊力は拳銃弾と比べて段違いに大きく、常識を超えた能力を持つ改造人間を相手にする私たちにとっては、心強い威力となります。拳銃サイズにしたのは、警察官の使用する武器として適当な大きさだからです」

まるで二人の心の中を読み透かしたかのように、雪菜はこちらが疑問にしていたことをすらすらと教えてくれた。

「これを使えるのは、日本では『メカ』の隊員を除けば、私たち三人しかいません。私たちは、このような強力な武器が必要なほど、強力な犯罪者に立ち向かうのだということ、もう一度思い出してください」

「それは……わかってる。オレたちが、一番危険な任務に就くんだ」

「私たちは、これを使える数少ない人間なのね」

「はい。私たちに、日本の安全がかかっています。あらゆる覚悟を持って、任務に臨みましょう」

龍彦も清子も、雪菜の言葉を重みを持って受け止めた。自分たちに課せられた使命を、再度自覚する。

だが 龍彦は、雪菜の顔を盗み見た。自分と同じ学年で同じく警察の仕事に協力している少女の横顔は、無表情かつ脱色されたような美しさで、とても同い年には見えなかった。

最初に龍彦が出口から彼女の説明を受けた時、彼女は警察によって作られた改造人間だと聞かされた。病院内での出来事だった。だがそれは、真相を隠す偽の情報だった。羽田航空で警察のパワードス
ーツ部隊が、カルト集団の改造人間に屈辱的な敗北を喫した直後

つまり一年半ほど前、全く別の事件での強制捜索により、彼女は民間の研究施設で身柄を保護されたという。発見された時は目を開けながら意識を失うという状態で、自分の名前と年齢以外、一切の記憶が無かった。押収された実験器具類や、同時に身柄を拘束された職員の証言から、彼女に対し日常的な記憶の消去が行われていたことがわかった。しかしその職員らも彼女の詳細な情報を全く聞かされておらず、彼女がそれまでどこで何をしていたのか、未だに何もわかっていない。現在わかっているのは、本籍地が京都にあり、その戸籍に書かれている両親も、おそらく便宜上の人物に過ぎないということだ。

あらためて思う。彼女はいつたい、何者なのだ……？

「リュウ、どうしましたか？」

「……いや、何でもない。それより、話つてのは、この銃を拝みながらオレたちを激励することだったのか？」

「できるだけ早く、私たちの任務の実情というものを知ってほしい
と思います、この『轟』を二人に見せることにしました。余計なお世話
だったでしょうか？」

「ううん、わざわざありがとう、雪菜ちゃん。明日からの訓練内容を予習できたし、助かったわ」

「そうですね。それならよかったです」

清子が礼を言うと、ほとんど感情を表に出さない雪菜の表情が、少しだけ笑ったように見えた。ただ、ほんの少しだけなのだが。

(……やっぱ、よくわからんやつだな)

一通りの訓練が終わった後、龍彦たちは一度私服　といつても学校の制服だが　に着替えて、本会議室に召集された。午後八時の定例会議に皆が集まるのに合わせて、出口が龍彦と清子の正式採用を報告するのだ。

会議室に集まった人員をみると、やはり科特警は『所轄』ではなく『本庁』に近い組織なのだと感じた。まず全人員のうち、半分ほどが白衣や作業着を着た技術スタッフである。その残りの半分のうち、大半が背広姿の人間　いわゆる刑事だ。そして制服を着たお巡りさんは、全体の一角にいくかどうかという数しかない。もしここが刑事ドラマの場面なら、科特警は所轄と本庁のどちらの立場になるのだろうか。

龍彦は詰襟の学生服姿で、清子は紺のブレザーと濃い灰色のスカートを着用した姿で、二人一緒に会議室の後方や右の机に座った。その直後に、雪菜が部屋に入ってきた。淡い緑のブラウスに濃い灰色のチェックのスカートという私服姿だ。彼女は学校には通っておらず、また上司からの一七歳の女の子らしい服装でいて目立たないようにしるという意向もあり、普段から私服姿でいる。雪菜は清子の隣ではなく、龍彦の隣に座った。

そして雪菜が座った直後に会議室前方の戸が開き、署長格の出口警視正と、技術部門のナンバー二である清子の姉・竹内涼子たけうちりょうこ技官が入ってきた。最初に出口が演壇に立つ。

「これより定例会議を始める。まず最初に、新たに二体の『G』……つまり改造人間が、警察の一員として編入したことを正式に報告する。　立川、大島、清子くん」

出口に呼ばれて、三人は会議室の前まで行き、会議室にいる大勢

と向かい合うようにして並んで立った。

「この大島と竹内清子の二人が、今日から正式に、巡査たる警察官としての資格を持つことになる。待遇は、立川と同じだ。でもまあ、自己紹介はとくに済んでるから、今日は察庁サツチョウから三人に与えられた、正式な愛称を紹介する」

（愛称だあ？ ……要するに、コードネームか）

そういえば、変身時の雪菜が『ゼロ』と呼ばれていたり、清子が『Za』と改造人間製造計画を含めて暫定的な名称を与えられていたことを、龍彦は思い出した。ただし、龍彦自身にはまだ『愛称』なるものは与えられていない。

「まず立川雪菜が改造人間として変身したとき、これを『てっしん』と呼称する。漢字は徹するの『徹』に、野球のバッティングで使う『芯』だ。しっかりとした芯を持ち、日本を守るという任務に徹してくれることを願う」

「はい」

雪菜はいったん出口の方に向いて、敬礼をして応えた。

「次に大島。おまえは『らいこう』だ」

「らいこう……ですか？」

おそらくは『雷光』か。

「おまえはな、雷みたいに光って爆発しそうだから、俺が命名した。以上」

出口の非常に手短な説明に、会議室全体が笑いに包まれた。

（へいへい。どーせオレは問題児だよ！）

きつと採用の段階で、地元の所轄署から龍彦についての評判が伝わっているに違いない。

龍彦は何か抱負でも言おうとしたが、出口は自分の返事すら飛ばして、清子の愛称の紹介を始めた。

「そして竹内清子は……『かいびやく』だ」

（かいびやく……ああ、はいはい、『開闢』のことだな。思い出したぜ）

日常ではあまり聞きなれない難しめの言葉に、龍彦は頭の中での音と意味を暗唱した。清子は思わず振り向いて出口と顔を合わせた。

「日本神話の天地開闢からとった。日本が独自に開発した初の本格的な改造人間として、この不安定な社会を鎮め、新たな世の中を切り開いてほしい。期待する」

「はい！ 日本の安全のために、全力を尽くします」

清子も出口に敬礼して見せた。出口の言葉により清子が一瞬で緊張したのが、龍彦にもわかった。それを見た姉の涼子にはにこやかに笑った。

（そうか。清子こそが、最も期待された警察自前の改造人間なんだよな……）

偶然に手に入れた『拾い物』である自分や雪菜に比べて、警察関係者が清子にかかる期待は並々ならぬものがあるに違いない。そのことを清子も自覚しているだろう。

だがたとえ自分は『ついで』だったとしても、凶悪な犯罪者と戦いそれに打ち勝つという意志には変わりはない。社会の安全を守るため、自分のように家と思いい出を滅茶苦茶にされた人をもつ出さないようにするため、そして清子の家族の仇を討つため、自分は拳を突き出し、銃の引き金を引くのだ。

「よし、三人とも席に戻れ。今日この時を以って、日本国は生体兵器の脅威に対し、初めて自らの手で作り出した対抗手段を用意できるようになった。ここまで紆余曲折があり、当初の予定よりかなり違った場所に着地することになったが、いずれにしろ我々にとっては大きな前進だ。力が手に入った以上、我々は日本の治安を守る者として、さらなる成果を期待されるだろうし、上からの圧力も大きくなる。だが物怖じすることはない。うちの仕事　つまり生体兵器絡みの事件をひたすら摘発することに、全力を注ぐだけだ。我々の仕事ぶりが日本の未来を左右するということをしっかりと頭に入れて、任務に臨んでほしい。私からの話は以上だ。　　っと、

隊長。何かありますか？」

「一つ質問があります。将来的に『開闢』『徹芯』『雷光』の運用具合は、どの程度まで広がるのでしょうか。今は犯人との戦闘任務、つまりは警備部門に限定することですが、改造人間には、常人が持ち合わせない優れた能力が存在します。警備や戦闘だけでなく、犯罪捜査や監視任務にも大きな助けになります。三体の改造人間を、警備系以外の任務にも就かせることは可能なのでしょうか？」

拳手をして立ち上がり、出口に対して問いかけたのは、『隊長』こと警備課長の古川武警部だった。彼はパワードスーツ部隊『メカ』の隊長でもあるベテラン警部だ。

（やっぱり生体兵器と生で触れ合ってきた人だから、改造人間のことをよく知ってるんだよな）

彼が熱心な改造人間計画推進者であることは、龍彦も知っている。最前線でその能力を肌で実感している古川は、改造人間の能力をもっと弾力的に活用しようと考えているのだ。

「隊長のおっしゃることはよくわかります。俺も実際、改造人間の高い能力を積極的に使わなければもったいないと考えていますし、当然運用の幅を広げる努力もするつもりです。ただ現状では、三体のうち二体はまだ訓練を始めて一カ月、残りの一体も一年ちよつとしか任務の経験を積んでいません。そのため、まずは最優先で戦闘技術を身につけさせ、捜査のスキルは現段階では二の次とせざるを得ません。中原警部補などが三人を捜査に付き添わせることもあるでしょうが、犯罪捜査にも重点を置いた運用は、しばらく不可能です。公安部門となると、さらに先でしょうな」

出口の回答に納得したのか、古川はわかりましたと頷いて着席した。

席についてそのやり取りを聞いていた龍彦は、自分たちの運用計画がすでにかなり先を見越しつつ策定中だということを実感した。現在はかなり厳しい管理下でしか改造人間の能力を発揮できないが、将来的に任務の幅が広がることも、充分ありうる。そして様々な任

務に、自分は適応しなければならぬのだ。

「もう質問は無いかな。では以上で解散だ」

出口はそういうと、資料の束を抱えてさっさと会議室から出て行ってしまった。他の人間もざわざわとあいさつを交わしながら部屋を出ていく。龍彦たちも周囲の捜査員たちに軽く頭を下げ、本会議室から自分たちの机のある第一事務室に行き、手早く書類をまとめ上げようとパソコンを起動した。

「リュウ、今日の報告書は書き終わりましたか？」

清子と雪菜はデスクワーク作業を終わらせて、まだパソコンに向かって文字を打ち込んでいる龍彦の背後で待機していた。

「あともう少しだ。よっと、これで終わりだ。これを科特警内のネットワークで出口さんのパソコンに提出つと……」

仕事ができる二人と違い、龍彦はデスクワークが苦手で、日ごろの日誌を書くのにも一苦労だ。もともと作文や読書感想文が苦手なのだが、その欠点がこんなところで響くとは思わなかった。

（ドラマみたいに、街をぶらついたり犯人と格闘するだけが仕事じゃねーんだな……）

データの送信を確認してから、龍彦はシャットダウンのアイコンをクリックした。ようやく龍彦が仕事を片付け終え、三人は、自分ら以外でただ一人この部屋にいる、中原賢治警部補の机まで挨拶しに行った。

「お疲れ様でした、中原警部補」

龍彦が最初に声をかけ、続いて清子と雪菜も同様に挨拶した。

「三人とも、ご苦労だった。これで区切りというか、けじめがしっかりとしたわけだな」

中原は、一度こちらを見てからそう呟いた。

「三人とも知っているだろうが、この一カ月だけでも、小さな事件ばかりだが、本庁や所轄署からの合同捜査や捜査官派遣の依頼が五回もあった。もし次にそのようなことがあれば、必要に応じて、おまえたちも捜査に同行させる。警察官として、思う存分働いてくれ」

「はい。そのつもりです」

清子がはつきりとそう答えた。それを聞いた中原はかすかに笑い、すぐに手元の書類のほうに視線を落とした。

「とにかく、三人とも今日はもう帰ってしっかり休め。この一カ月は、日付が変わる時刻まで働き詰めだった。万が一の時に備えて疲労を回復させておけ」

「ありがとうございます。お疲れさまでした」

三人はそれぞれ中原に頭を下げ、警務課で警察手帳と普段のIDとを交換してから、科特警の本部を後にした。

時刻は午後八時前。普段よりあまりにも早い退勤だ。

「なあ二人とも、晩メシはどうする？」

「そうねえ」

朝食はいつも清子の手作りだが、夕食はたいてい『メカ』の隊員たちと一緒に本部備え付けの食堂で食べるか、たまに出口、川井、中原、涼子といった上司に奢ってもらっていた。

「じゃあすぐに作れるカレーでどうかしら？」

「私は賛成です」

「リュウは？」

もちろん龍彦も、首を縦に振った。

「……で、買い物はオレの役割だな」

「そう。ひとつ走りで行ってきてね!」

「いつてらっしゃい、リュウ」

「了解だ」

清々しいくらいに笑う清子と何の色もない表情のままの雪菜を置いて、龍彦は歩いて二〇分ほどのところにあるスーパーに向かった。

龍彦がスーパーのレジ袋を持ってマンションに帰ると、さっそく清子は料理を始めた。その間に龍彦と雪菜は、それぞれ洗濯と掃除をこなす。

「リュウ、これも一緒に洗濯してください」

雪菜は自分の部屋から洗濯物用の籠を出してきて、洗濯機のある脱衣所にいた龍彦に渡した。

「了解だ。あの……下着類って白物の方で洗えばいいのか？」
籠の中には、複数の女物の下着が入っていた。もちろん雪菜の物だ。少し視線が釘付けになってしまったがすぐに頭が回転し、自分のと違い、女物の服は雑に洗ってはいけないと思つて雪菜にアドバイスを求めた。昨日の洗濯では色物と代物を一緒に選択してしまい、清子にこっぴどく叱られた。

「それらは全て、通常の洗濯物と同じように洗つて大丈夫です。ただし、きちんと白物と色物と色物で分けて洗つてください」

「あ、はいはい……」

雪菜は念を押すと、すぐにまた自分の部屋の中に入ってしまった。
(これを……オレの手で分類するんだよな?)

女物の下着を触ることが犯罪のように思えてしまい、手が止まる。とにかく無心になるのだと自分に言い聞かせて籠をひっくり返し、まず白に近い色の下着から洗濯機に入れて、スイッチを押した。

(女との共同生活も、少し問題があるな……)

それにしても雪菜からは、清子など他の同い年の少女とはずいぶん違った印象を受ける。

一七五センチ前後と女性にしては高い身長、背中まで垂れる艶やかな黒髪、深い色の大きな瞳。スタイルも抜群で、清子と雪菜の下着を洗濯するとき、明らかに後者の方が立体的な形をしていることがわかる。さらに射撃の腕は一級品で、格闘技の技量も、いざ実戦となつたら龍彦すら敵わないほど高い。おまけに高い知性と論理的思考力を誇る。容姿端麗・文武両道を全て兼ね揃え、まさに完璧超人を体現した存在だ。

だが、それ以外の要素が大きく欠落している。一七歳の少女ならおしゃれをしたり、好きな芸能人を追っかけたり、友達と遊びに行ったり、恋をしたりと、様々な話題に通じていてもおかしくない。しかし雪菜に関しては、そう言った話はこころ一月間全く耳にして

いない。会話は清子が積極的に話しかけているものの、雪菜から始まる話題は、ほぼ科特警やその任務に関係することである。自分や清子に対して非常に素っ気なくあたる一方、今のように驚くほど無防備な行動をとったりする。出会ってから一カ月が過ぎたが、まだ雪菜との距離感が掴めていない。

「なあ雪菜」

「何でしょう？」

ゴミ袋を取りに再び脱衣所にやってきた雪菜に、龍彦は反射的に話しかけた。

「……おまえ、趣味とかあるか？」

その直後、いったい何を言っているのだと自分で自分に突っ込んだ。

「好んですることという意味でしたら、やはり射撃の訓練でしょうか」

「そうじゃねーよ。例えば休みの日にすることとか、仕事以外で興味があることとか、雪菜の興味のあることが何なのかなって気になってさ……」

うまく言葉が出てこない。「趣味」の意味をすっかり砕いて説明しなければならぬとは、正直驚いた。

うるたえる自分とは対照的に、雪菜は澄んだ瞳でひたすらこちらを見ている。何の反応も示さない彼女に対し、さらなる気まずさを感じてしまう。

「休みの日に自主的にすることでしたら、ソフトウェアの勉強と散歩です。高い情報処理能力を持つ私たち改造人間は、先進的なソフトウェアを搭載しなければ能力を発揮しきれませんから。そのためにパソコンをよく使うので、目を休めるために散歩をしながら遠くを見ます」

「なるほど、なるほど……」

と言いつつも、内心でため息をついた。内容はともかく、理由については「趣味」とは言い難い、ちぐはぐな回答が返ってきた。ど

うやっても、雪菜の頭からは仕事のことを離れないらしい。

「何か他に、私に質問はあるでしょうか？」

「あ、いや、何でもない。いきなり変な風に聞いて悪かったな」

「別に変ではないでしょう。疑問があるのなら、質問するのが当然だと思います」

「……ああ、うん。とにかくオレの疑問は解決した。ありがとな」

「はい」

四五リットルのゴミ袋一枚を持って、雪菜は居間の方に去って行った。

「つたく、日常会話でこんなに疲れるなんて、初めてだぞ……」

「雪菜ちゃんのこと口説いてみたいけど、どうしたの？」

「おわっ、びっくりした！」

突然、背後の戸の方から、清子が現れた。清子は意味ありげな笑いを浮かべている。

「雪菜ちゃんに趣味を聞いたりして、……もしかして惚れちゃった？」

「そうじゃねーよ。それ以前の問題だ」

惚れるとか嫌うとかの評価を抱く以前に、情報不足だ。確かに美人ではあるのだが……。

しかし清子は龍彦の反論を聞こうともせず、洗面所の下棚からいくつか物品を取り出しにかかった。

そして清子は、すたすたと台所まで戻ろうとしたとき、再度龍彦に向って振り向いた。

「今さらながらに思うけど、私たち、こうして一緒にマンションにいるのは久しぶりね。たまたま外で会って話しこむことはあったけど、小学校のころみたいに、お互いの家に遊びにいったりは全然しなくなっただのよね」

意外な話題に、龍彦は少しだけ眉を動かして反応した。

「……中学入学以降、お互い完全に別々な環境になったからな。さらにオレは両親が死んで、オレの方がカリカリしてた時期もあった

し」

「そうね、確かに……」

清子がかすかに視線を下げたのを察知し、龍彦は、今の言葉は言うべきではなかったと後悔した。身近な人の『死』に関わる話は、清子の前では避けるべきだった。

「……すまん。今の言葉は忘れてくれ」

「ううん。気にしてないわ」

すぐに明るく笑う清子を見ると、小さいころから見ていた幼馴染とは、また違う顔に見えた。

小学校4年生ほどまでは、まさにマンガやゲームに出てくる典型的な幼馴染の関係だった。何かと無茶しがちな自分に対し、清子がそれを引き止めるという状態だった。だがそれから約六年、龍彦は、偏差値で一〇差をつけられ、学校の評価で二段階離され、学習や生活環境でも違いをつけられた。幼いころが、妙に懐かしく感じられる。

「また昔みたいに、私がリュウの抑え役を担うのかしら？」

「あ、ああ……」

外で気軽に話すのとは違い、不思議な緊張が、自分の体に満ちた。……またよろしく頼むぜ。姉さん？」

「わかったわ。かわいい弟くん」

清子は笑いながら、台所に戻って行った。龍彦もつられて表情が綻ぶ。

しかしその裏で、不安が広がる。あの笑顔の裏に、何かとてつもない爆弾を抱えていないだろうか。マンションの倒壊現場からは、未だに清子の家族の遺体が回収できず、葬儀も行われていない。それなのに……少なくとも自分の見ているところでは、清子は悲しげな表情を見せない。清子は強い。強いのだが、清子はその内心を決して表に出していない。幼馴染だから、何となくわかる。互いの心の隅から隅まで語り合えたような昔とは、違う。自分には清子の本心がわからない。だから、今の清子の強さがいつか壊れるのかもしれない。

れないと、こちらも思ってしまう。自分と清子は、昔のように、互いの心に通じ合っているわけではないのだ。

全く読めないスーパースーパー美少女と、壁ができつつあった幼馴染自分はこの二人との共同生活で、どのように振る舞えばいいのだろうか。自分は、いったい何をすべきなのだろうか。

悩まなくていいのに、悩んでしまう。気軽そうに気軽になれない自分が、そこにいる。

「出口さん、ちょっといいですか？」

「ん？」

出口が明日の本庁での会議に必要な書類をまとめていたところ、川井麻衣かわいまい研究開発課長がそれに声をかけた。

「大島さんと雪菜ちゃんゆきなの検証データが、ようやく出揃い始めました。ちょっとお時間いただけませんか？」

「おう。問題ねーぞ。どれどれ、その書類か？」

出口は川井から紙の束を受け取って、さらりと目を通した。そして、意外な事実いじやうなじじつに顔をしかめた。

「……大島と立川が、同タイプの改造人間か」

「はい。体内で検出されるDNAや分泌物質などを検証した結果、二人の体組織の構造は極めて似ているという結論に至りました。科学的にも、あの二人が同様の技術を用いられて生み出されたと、確証を持って断言できます」

立川雪菜は、約一年半前に、正体不明の改造人間として警察に身柄を保護された。常人を圧倒する身体能力と極めて鋭敏な感覚器官が最大の特徴である彼女だが、その能力のしくみについてはほとんど何も解明できていない。

そこへ、また正体不明の改造人間として大島龍彦が現れた。警察の把握しきれしていない改造人間がこんなにも社会にいるのかと、組織の首脳部は驚いていた。

それから時間を重ねるにつれ、二人の改造人間としての姿や能力が似ているのではないかと指摘され、その仮説をもとに研究を続けていたのだ。

「いやはやすごい偶然だな。同じ技術が二つ見つかるってことは、その技術がキーポイントだったことになる」

「同一の組織が絡んでいる可能性が高いですね」

「そうだな」

出口はもう一度、お札を数えるようなスピードで書類に目を通した。

「ところで、その二人の能力の解明は、いつまでかかりそうなんだ？」

「申し訳ありませんが、まだ見当もつかないというのが正直なところですが……。今回の一件がわかるだけで、一年以上がかかったわけですから」

「今まで捕まえた改造人間や生体兵器は、きちんと技術を検証し対処法を編み出して、身柄を拘束してその改造を解除していた。それができないってことは、立川や大島は、今までの連中よりも格段に技術レベルが上ってことなんだな？」

「そうですね」

出口の指摘に、川井は素直にうなずいた。

「コストや技術レベルを抑えるには、作った生体パーツ……つまり生体臓器を移植するのが一番なんです。『Za』……じゃなくて『開闢』もこの方式を採用しています。しかし『徹芯』と『雷光』の場合、この臓器を特定しようにも、あまりも多くて細かいパーツが全身に散らばっているんで、全く不可能な状況です。全身のありとあらゆる部位に通常とは全く違う遺伝子が存在するので、我々は、臓器移植型ではなく、ウイルスなどのベクターを使って人体そのものの遺伝子を導入する、遺伝子直接操作型として研究を進めようという方針を変更しました」

「わかった。そっちの仕事は科学屋に一任する。まあ、気長にやっ

てくれ。また新たな発見があったら、逐一に俺の方に報告を頼む」

「まかせてください。出口さんはまだ残るんですか？」

「明日、本庁で大事な会議があるんだ。書類に不備があると、警視総監から直々にお叱りを受けることになる」

「それはそれは大変ですね……。では、お先に失礼してもいいですか？」

「おう。お疲れ様」

川井が第一事務室から荷物を抱えて出て行ったとき、出口は、日付が変わったことを時計で確認した。

第2編(1) 新生活(後書き)

とりあえず序章だけアップしました。

事件後の3人、特に龍彦(と清子)に焦点を当てて、生活の変化を
実感している様子を主に書きました。批評をお待ちしております。

第2編(2) 肉食怪物、現る(前書き)

お待たせしました。第2編の中盤です。やっと警察らしく事件が発
生します。本当に遅れてすみません。

第2編(2) 肉食怪物、現る

次の日、龍彦はいつものように学校から科特警の本部に向かつて、雪菜と清子と訓練をこなしていた。だが突然、訓練中止の趣旨を中原警部補が伝えにやってきて、三人は作業着姿のまま会議室に向かうことになった。

「どうしたんですか、中原さん」

「改造人間絡みの事件だそうさ。三人も一応警察の一員だから、会議に出るんだ」

中原の言葉に、龍彦の体が敏感に反応した。清子や雪菜も、引き締まった顔になる。

(事件……)

科特警本部に出入りしてから約一カ月にして、初めて龍彦と清子は、警察側の立場として事件に臨むことになるのか。

三人が本会議室に入ると、中はすでに大勢の人員でこった返っていた。いつもより格段に多くの人が集まっている。

龍彦ら三人が着席してから、出口が登壇した。その脇には、二人の初老の男性が控えている。

「ただいまから、緊急の会議を始める。この会議では、発生した殺人事件の捜査について扱う。なお、今回の事件の捜査は、管内の所轄署、本庁刑事部、それと科学特別警察の三者合同で行うこととする」

出口の事件を宣言する言葉で、会議室内に緊張が走った。

(そうか。人が多いのは、所轄署と本庁の刑事がいるからか) 見慣れない顔が多いと思ったのはそのためか。

そこで出口は講壇を降り、四〇代前半ほどで中肉中背の刑事が登壇した。

「所轄の片山敦かたやまあつしです。第一発見者として、事件の概要を説明いたします」

同時にクリップで留められた捜査書類が配られる。龍彦は前の捜査員から束を受け取り、清子と雪菜の分も含めて取ってから、残りを後ろに渡した。

「先月二三日、都内の河川敷で男性の遺体が発見されました。男性の名前は東野修、三三歳の独身。都内在住で、職場は都内の工場で、派遣労働者として去年の三月から働いていたそうです。欠勤などもほとんどなく、真面目な人だったと、同僚や上司が証言しています」
手元の書類をめくると、被害者の写真があった。短めの刈り上げ頭で、人当たりの良さそうな男性だ。とても殺人事件に巻き込まれるような人間には見えない。

「しかしその後の調査により、片山敦はある詐欺グループの一員だったことが判明しました。事件に巻き込まれた時点では、すでにグループから抜けて年単位の時間が過ぎていますが、過去に詐欺事件に関わったこともあります」

同情の気持ちが一瞬で色あせた。善良そうな顔をしているというのに、なんてやつだ。

「二人目の被害者は、秋口政文。四三歳の男性です。同じ警察署の管内です。消費者金融に勤めていて、家族は妻が一人、子供はいません。マンションの一三階にある自宅のリビングで、遺体が発見されました。死亡推定時刻は深夜で、たまたま友人と旅行に行っていた妻が翌日に帰宅したところ、夫の遺体を発見したということですよ」
自宅内か……そんな声が、会議室のあちらこちらで聞こえてきた。龍彦自身も、同じように驚いている。

続いて講壇上の人物は、片山警部補から四十代後半ほどで体格のいい角刈り頭の男に替わった。

「本庁一課管理官の菊池良太です。合同捜査本部の本部長を務めます。この二つの事件では、最初に管内の所轄署と一課とで合同捜査本部を設置しました。被害者の遺体の傷に共通する点があったため、我々は連続殺人と捉え、捜査を行ってきました。しかし事件自体、通常では考えられないような点が多くあり、我々は特殊な科学技術

の使用を疑いました」

そうして、ここ科特警に事件が持ち込まれたということだ。

「まず発見された遺体の状態ですが、どちらも肉体を食いちぎられたように激しく損傷しています。こちらの写真を」

天井から降りてきたスクリーンに、二枚の写真が左右に並んで映し出された。

(うつ……)

おもわず吐き気を催すような画像だ。隣の女子二人　清子は口を押さえながら視線を逸らし、雪菜は顔をしかめながらもその写真に見入っている。

それにしても、犯人はいったいどのような凶器を用いたのだろうか。両者の遺体とも、頭から胸にかけて肉体が半分欠けている。頭蓋骨やろっ骨がごつそりと砕かれ、無残にも肉や内臓が露出している、凄惨^{せいさん}たる状態だ。菊池本部長の言うとおり、まさに食いちぎられたという表現がぴったりとくる。

「傷口からすると鋭利な刃物だと考えられますが、我々の抱く印象としては、切断されたというよりも、無理矢理に引き千切られたという感じです。遺体からは、人間ではない動物の歯形も発見され、さらに被害者以外の唾液らしき体液も検出されています」

さきほどよりも、さらに大きなざわめきが起こった。

「さらに秋口政文の件ですが、自宅部屋の玄関には鍵がかかっており、玄関のドアの外側を常時撮影する監視カメラには、それらしい人物は映っていませんでした。事件時、被害者宅の玄関からの人の出入りはなかったと思われます」

「つまり、犯人は玄関以外の場所から被害者の部屋に出入りしたということでしょうか？」

拳手をした中原警部補が質問すると、菊池警視は苦々しい表情でそれを肯定した。

「現状では、そう考えざるを得ません。秋口の妻は、事件推定時刻のアリバイがあります。妻以外の別の人間が犯人でしょう。窓の鍵

は開いていたので、おそらくはそこから……」

事件現場は一三階にあるマンションの部屋だ。玄関以外の出入り口など、理論上ベランダに面した窓しかない。壁・床・天井のいずれかに秘密の扉でもあれば別だが。

（おいおい。本気で言ってるのかよ？）

食いちぎられたような跡……ネコ科の動物らしき歯形……玄関以外の、おそらくは窓からの侵入……そんなことがありえるのだろうか。自分は一度、改造人間の能力というものを目の当たりにしたのに、そんな風に思ってしまう。

「そこで科学特別警察より、予想される凶器を挙げていただきたい。通常ではありえないような現象に数多く当たってきた専門家の意見を聞きたいのです」

「と、言われましたも……」

脇に控えていた、白衣姿の川井麻衣かわい まい研究開発課長が口を挟んだ。

「こちらではまだ、遺体や現場の検証もしていません。現状で明確な道筋を示すことは困難です。ただ、動物のものらしき歯形と被害者以外の唾液というのは重要ポイントです。その点を中心に、使われた技術を特定していきたいと思います」

「あの、突拍子ですが、人工的に作り出された人食いライオンなどというのも、やはり可能性があるのでしょうか……」

龍彦から見て自分から見て右斜め前に座っている、若い刑事が、恐る恐るといった口調で尋ねた。拳手をする手も、どこか頼りない。

「はい。もし例の歯形がネコ科の動物のものだとしたら、その可能性も十分にあります。さらにはライオンとは限らず、今までフィクションでしか見たことがなかったような怪物かもしれません」

川井の断言で、部屋全体に衝撃が走った。特に科特警以外の、所轄や一課の捜査員たちには、ある意味で受け入れがたい事実だったようだ。まだ具体的な凶器や技術も明らかになっていないのに、大なり小なり経験のある刑事たちが、戸惑いの色を隠し切れていない。（ベテランの刑事でも、そんな顔をするのか……）

先ほど手を挙げた若手といい、たとえ警察官といえども、生体兵器に対し恐れを抱くものなのか……。少しシヨックだが、あらためて気を入れなおす。ライオンだろうが怪物だろうが、犯人に対処するのは自分たち　一七歳の「ガキども」なのだ。

龍彦も、川井の言葉を心に刻んでおく。

「これまでに我々が推測してきたことは、次の通りです」

菊池警視が、所轄と一課の合同捜査本部で現在までに取りまとめた犯人像を紹介した。

まず予想される犯人像は、振り込み詐欺の被害者か、借金を重ねた人物であること。被害者を殺害する方法が残酷なことから、殺害目的は復讐や怨恨によるものと思われる。片山敦が詐欺グループの一員だったことも、怨恨による犯行を疑ったことから浮かび上がった事実だった。

振り込み詐欺の被害者という点とまず高齢者が思いつくが、片山敦が体重八〇キロ以上の大柄な男性で、さらに柔道の有段者だということからすると、犯人は高齢者とは考えにくい。むしろ犯人は成人男性で、消費者金融などで多重債務に陥ったか、犯人の親などが振り込み詐欺の被害者だったというような案が有力だと、今まで見られていた。

しかし、その点を科特警の刑事が否定する。『生体兵器』という概念を含むと、犯人を成人男性だとは特定できない、老若男女のあらゆる人物を容疑者としてみなければならず、体格や性別、年齢などの要素は全くあてにならないと反論した。

（確かに、それは言えるぜ）

龍彦は、ちらりと隣の少女二人を見て、その刑事の反論に対し静かに納得した。雪菜や、さらには真正銘普通の女子高校生である清子でも、生体兵器　つまり改造人間としての能力を使えば、格闘技経験のある成人男性も一撃で簡単に倒すことができる。

そしてこの建物の地下を思い出す。場合によっては、実行犯というより凶器そのものが人間以外の生物の可能性だってある。

(先入観を捨てなきゃだめってことか……)

自分も下手な予測で方針をしくじらないようにしなければと思う。さらにいくつかの案や議論が出たが、詐欺事件や借金問題の当事者または関係者ということ以外、有力な犯人像は浮かび上がらなかつた。

続いて捜査を実行する班の割り振りだ。ここでは、所轄と本庁一課と科特警が縄張り争いで対立を見せるのかと思つたが、それはどうやら自分の偏見だつたようだ。三つの組織の捜査官が比較的まねぶなく班に組み込まれた。土地勘に詳しく地どり捜査に適する所轄署刑事、重大事件の捜査経験が豊富で高いスキルを持つ本庁捜査一課の捜査官、生体兵器や改造人間など普通の常識が通用しない事件を多く経験し、先ほどのように的確な意見を述べることのできる科特警の専門捜査員。それぞれが長所を出し合い、事件捜査を進めていくのだ。ただもちろんのこと、『警察官もどき』ではない龍彦たちは、捜査班には加えられなかった。なにか改造人間としての能力を使うことがあれば、その時に適当な班に加えて活動させると言及されたのみだ。そして、捜査本部が所轄署から科特警本部に移ることも発表された。

「最後に私から一言」

出口はもう一度、スクリーンに殺害された被害者の遺体を映し出した。

「もうおわかりかと思いますが、犯人は、人間の上半身をごっそりと簡単に食いちぎる能力、または凶器を所持しています。防刃ベストはまず役に立ちません。通常の人間や生き物ではなく、まさに未知なる怪物を相手にするつもりで臨んでいただきたい。また、もし容疑者と思われる人物に接近する機会があつたら、必ず科特警の戦闘要員と一緒に連れて行ってください。こちらには、機械服を着た機動隊員約五〇人が常在し、さらに三体の改造人間もいます。常に想定外の事態が起こると考え、行動してください。よろしくお願ひします」

会議室全体に、再び緊張が走った。犯人が、非常に危険度の高い標的であることを再認識させられた。

ようやく会議が終わり、どやどやと雑談を響かせながら、各人それぞれ会議室から出て行った。時計を見ると、すでに午後九時を大きく回っている。

(かなり集中した話だったな)

警察業務の最前線を実感できた気がして、少し体が硬くなってしまう。

「リュウ、いつまで座っているのですか？」

「どうしたの？」

「あ、はいはい」

雪菜と清子に催促されて、龍彦はあわてて机から立ち上がった。それから二人の後を追って、会議室から出て行くとした。

しかし廊下に向かつて歩いている途中で、龍彦は学生服の裾を誰かに引つ張られた。

「おい、おめえが何でここにいるんだ？」

足が止まり振り向くと同時に、べらんめえ口調で問いただされた。龍彦の後ろには、所轄署の刑事らしき人物が立っていた。身長は一七〇センチ台前半だが、ガタイのいい『おっさん』だ。自分の気のせいか、こちらを弄んでいるような笑いが浮かんでいるように見える。

(……………?)

自分呼びとめた相手の顔を見るが、反応に困ってしまう。相手が誰だかわからない。

「なんだ、覚えてねえのか？」

「はあ……………」

もう一度、相手方の顔をよく見てみる。

四角い、白髪交じりの角刈り頭。ひしゃげたような目つきや皺のある顔は、数々の修羅場をくぐりぬけてきたベテランの証か。

「ああっ！ 思い出したー！」

にやけている刑事の顔が、ついに頭の中の記憶と一致した。

あれは確か、中学一年の夏だった。多摩川の河川敷で他校の不良たち合計五人とケンカになったのだが、その時に別の中学の連中がロケット花火を持ち出し使用したところ、近くの枯れ草に引火して煙が立ち、近隣住民に一一九番通報される騒ぎになった。

それからその場にいた全員が警察署に連れて行かれ、お巡りさんにこっぴどくしかられ、鉄拳制裁までくらった。そのときに自分が殴られたのが、いま目の前にいるこの刑事だ。

「四年くらい前に多摩川あたりの交番にいた、お巡りさんですよね？」

「おお、覚えてたか！」

そう笑いながら、がっしりした手で龍彦の丸刈り頭を叩いてきた。その動作は、まさに体育会系といえる。

そして自分とその刑事のやりとりを、清子と雪菜は何も言えずにただ呆然と眺めている。

「刑事さんこそ、どうしてオレに気がついたんですか？」

「生粋の悪ガキの顔は、忘れたくても忘れられねえからな。あのときだけじゃねえ。おめえ、管内でも有名な悪ガキだったそうじゃねえか」

「いやそれは……」

そここのところは、あいまいな笑いで何とか誤魔化しておく。

そこへちよつと、龍彦とその刑事のやり取りを見た出口が割って入った。

「どうしたんですか？　うちの新人りが何かしましたか？」

「いやあ、まさかこんなところで火遊びで捕まえたやつに会うとは驚きましたよ」

その刑事は出口に、笑いながら龍彦とのエピソードを話し出した。

この刑事　山石拓郎やまいしたくろう 巡査部長は、もともと警視庁管内の所轄署に勤務する刑事であり、龍彦が中学一年生のときは、たまたま交番勤務に格下げになっていたらしい。処分をくらった理由は、捕まえ

た暴走族を手錠のふちで殴りつけたのが理由だそうだ。そんな熱血刑事の山石巡査部長は、今回の連続殺人事件の初動捜査にも関わっていた。

「本来なら、もっと早く科学特別警察の方に事件を持ってくるべきだったんだ。被害者の死因が、まさか肉食動物に食いちぎられたこととは思わなかった」

「普通はそんなこと思いつきはしませんよ。ただこちらとしても、初動捜査には加わりたかったですがね」

出口の苦笑に、山石は眼をきよきよと動かして、黙殺するよくな形で対応した。

「で、その改造人間対策の専門つてのが」

山石の視線が、龍彦や後ろに控える清子と雪菜の方へと向く。

「オレたち三人ですよ。ちよつとそれぞれ、わけがありましたね」

どんな表情をしようか迷っている山石に対し、龍彦はわざとらしく自分たちの存在を主張した。すると山石は、すぐにまた若干挑発的にも見える笑いに戻った。

「まあ事情は聞かねえが、警察官として、巡査としての肩書があるんなら、こつちも警察官と同じ扱いをする。それだけは自覚しておけよ」

「はい」

山石はもう一度、高校生三人と若手幹部を一通り眺めてから、会議室を後にした。

「おまえも中々の有名人だな」

「もう昔の話ですよ……」

「何か昔だ。たった三年か四年前じゃねえかよ」

いたずら坊主のような顔で笑いかけてくる出口は、なんだか面白いような様子だ。

しかし、まさか地元のお巡りさんにこんな形で会うとは意外だった。人というのは、どこでどう繋がっているのか、まるでわからない。

「まあ確かに、おまえくらい勢いのあるやつの方がおもしろくて、こつちも助かる。でもあんまり無茶苦茶するなよ？」

「はい……」

出口は含み笑いを残したまま、書類を抱えて部屋から出ていった。その後ろ姿を見て、龍彦は安堵のため息が出た。警察の中でも説教づくしになるのかと、ひやひやしていたのだ。

その後はいつものように、三人は改造人間としての能力をフルに発揮して、射撃と格闘の訓練を続けた。捜査に加わる加わらない以前に、自分たちはまず戦闘要員として最低限の働きをしなければならぬ。いつ犯人との『もみ合い』が起こるか分からない状況なので、今の自分にできることは、そのときに備えて一回一回の訓練を最大限ものにするしかない。

「今日はこれくらいにしましょう」

正規の訓練後、警務課の許可を得てさらに三人で自主訓練を続けた。それが終わると、身体の精密検査を受けた。最初の頃は週に五日も検査があったが、現在は週に三回ほどに回数は減った。ただし検査の中身はより複雑になってきている。最近は毎回、全身素っ裸の状態で心臓検診で使うような有線を頭からつま先まで大量につけられ、細かいデータを収集される。どんどん扱いが人間離れしていくような気がしてたまらない。

そして最後の仕事として、公式の訓練日誌に内容を総括する。だが相変わらず事務作業は龍彦にとって辛い。

（一番伸び率が低いのは、格闘や射撃じゃなくて、事務の処理能力ってことかよ。これも改造人間の能力で始末したいところなんだが……無理だよなあ。そんな許可が下りるわけねーよ）

今日の日誌は、出口に直接提出することになっている。出来上がったワープロのデータを持って出口の所に行った。提出したのは、三人の中で龍彦が最後だったらしい。

「能力の伸びとしちゃ十分だ。期待した以上だな。高校生にしとくのがもつたいない」

「ありがとうございます」

意外なほどの高い評価に、龍彦も自然と表情が緩んだ。

「改造人間としての今のお前に言うことは、何もねえな。今まで通りの訓練を続けて、さらなる能力向上に励んでくれ。話は変わるが、三人での共同生活はうまくいってるか？ 事情を抱えた年頃の男女の三人暮らしだ。何か問題があったり、そういうことはないのか？」

「特に無いですよ。まだ生活が始まって数日しか経ってないじゃないですか」

特別に思い当たることは無い。家事の分担もうまく機能しているし、三人の人間関係は良好だ。少なくとも悪いということはない。

「ならいいんだ。もし何かあったら遠慮なく相談するんだぞ」

「出口さんですか？」

「俺じゃ不満か？」

「いえ、そういうわけじゃないです。ただ、署長格の出口さんが『お悩み相談室』みたいなことをするのが意外だっただけです」

「改造人間の、戦力としてのコンディションを保つのも俺の役割だ。だがそれは、結果的に普通人間としての　つまり大島龍彦、立川雪菜、竹内清子としての　精神の健康を保つことになる。あんまり不健康な状態で任務について、大失敗されるなんてことは御免だぜ？」

「わかってますよ」

そう言うと同時に、自分自身のコンディションが警察としての任務、ひいては市民の安全に直結しているということに、あらためて気付かされる。

（風邪をひいたんで調子が出ません、なんてことは許されねーのか……って当たり前か）

もう一度出口に礼を言ってから、龍彦は第一事務室を後にした。

「終わりましたか」

廊下の角から、突然、雪菜が顔を出した。

「ありゃ、てつきり清子と一緒に帰ったんだと思っただけだ」

「清子は先に帰りました。彼女は買い物に行っただけから自宅に戻るといつて一人で帰ったのですが、本当のところ、彼女は少し落ち込んでいるのではないかと、私は思いました」

あまり表情変化の少ない雪菜だが、今は心配そうに目を伏せた。

龍彦は驚いたが、心当たりも少しある。

「雪菜は、何か原因に心当たりがあるか？」

「ここ数日の彼女の訓練成績が、あまりよくありません。おそらくそれが理由なのではないでしょうか」

「そうだったのか……」

思い返してみると、昨日と今日の射撃で、清子はあまり的中心を捉えることができなかったような気がする。

龍彦と雪菜は、歩きながら話を続けた。

「オレはそれ以外にも、思い当たることがあるな」

「何ですか？」

「実はまだ、前のマンション破壊現場から清子の家族の遺体が見つかってない。葬式とかの予定もまだで、親戚や両親の知り合いから色々と葬式関係の話が入ってくる。その度にあいつは、死んだ家族のことを気にとめてるんじゃないのか」

「そうですか。ならば、そのことが原因で訓練成績も落ちているのでしょうか」

あの事件で、竹内一家のうち、両親と弟の三人が一度に死んだ。しかし正確に言うと死亡は確認されておらず、行方不明というところなのだが、一三階建てのマンションが跡形もなく崩れてからすでに一カ月が経っているため、事実上死が確定しているといっている。三人の遺体の発見を、清子や姉の涼子やすでに独立した兄のほか、多数の親戚が待ち望んでいる。

葬儀以外にも話題がある。清子の父親は病院の院長兼理事長とい

う立場でもあったため、財産の相続と病院の存続とが密接に関わってくる。まだ高校二年でしかない清子には馴染みの薄い話だろうが、病院を売却するかどうかについても周りの親戚があれこれと口を挟んでくるらしく、清子の心理的な負担になっている。

「その話については、私はどうすることもできません」

「そりゃそうだ。オレたちが首を突っ込めるような問題じゃねーよ」
残念だが、こういう問題は、他人が関わられるものではない。龍彦も、以前にだがそれを実感している。

本部の入口の警察官に敬礼してから、二人は科特警の本部を後にした。時刻は午後一時を大きく回っており、周囲の住宅地は闇に包まれている。龍彦は、雪菜の半歩後ろを保ったまま歩く。

「さすがだな。清子のこと、すっかり見てたのか。観察力が鋭いぜ」
「清子の訓練成績は客観的な数字で出てきますから、すぐ異変に気づくことができます。そして今日の清子は少し動揺しているように感じました。異変の原因が精神的なものであるということが楽に推測できます」

「なるほど」

論理的で明確な回答が返ってきた。

(いかにも優等生って感じだよなあ)

もし高校の学級に雪菜がいたら、いったいどのような位置づけになるのか想像したくなる。

しかしそこで会話がストップした。話のネタ切れだ。

(そりゃいや、こいつと二人で帰るのは初めてか)

事務的なこと以外の、全く別な話ができるかもしれない。そんな淡い期待を抱いていたが、残念ながら希望は叶っていないようだ。美人の女の子と色々話したいという考えが無いわけではないが、自宅まで一緒の人間と会うたびに会話が詰まるようではたまらないから話が続くようになりたいという、消極的な意味の方が強い。

「でも、ちよつと意外だったな。おまえが仕事に直接関係すること以外の話題を口にするなんてよ」

「どづいつことですか？」

「何ていうか、おまえって仕事以外のことに興味無さそうだから、オレたちの訓練成績やその下降の理由には言及しても、その理由を心配するってことが予想できなかったんだ」

「私が彼女のことを心配するのは、おかしいでしょうか？」

雪菜は足を止めて振り向いた。闇に浮かぶ真剣な眼差しが、龍彦を捉える。おかげで龍彦も少し驚いてしまった。

「あ、いや、その……すまん。そうだよな。おまえは清子のことを、本当に心から心配してるんだもん。それを不思議がったオレが間違ってた」

軽い調子にまかせて言ったことを後悔した。たとえ原因不明の改造を受けていても、たとえ表情があまり豊かでなくても、たとえ仕事や任務以外の生活要素が少なくとも、雪菜は龍彦たちと全く変わらない人間であり、一七歳の女の子なのだ。龍彦は、このことを失念していた。

「今の発言は撤回するし、謝る」

「確かにそう思われても仕方がない部分があります。私には、一五歳以前の記憶がありませんし、人間関係も科特警にしか存在しないと言え、他の同い年の人間と比べれば特殊な存在です。実際にも、今の記憶にある中で、同年代の他人を気にかける機会もありませんでした」

雪菜は訓練の時のような、感情を抜き取った表情で淡々と言葉を述べた。しかし目だけは、少し寂しそうに見えた。

(やつちまったなあ……)

心の中の罪悪感が増す。

「そんなに気にしなくていいですよ。特別視されるのには慣れていきます」

「悪かった。今からは、おまえをできるだけ特別視しないようにする。いい意味で、そこらにありふれた女子高生と同じように扱うわ」
「私も、わざわざリユウに余計な負担をかけているみたいですね」

「いやいや、そんなことはねーって。それよりも、早く家に帰るっせ」

話がどんどん深みにはまっていきそうなので、龍彦は話をいったん終わらせて、自分から歩きだした。雪菜も、いつもの整った表情のまま再び自宅に向けて歩き出した。今度は、二人はぴったり横に並んで歩いた。

「あ、そうだ。雪菜は、オレの改造のことについて何か知らねーのか？ いや、川井さんや涼子さんからおまえだけに聞かされて、オレには聞かされてないような話とか、そういうモンはねーのか？」

あの出口なら、いたずら心からそのようなことをしかねない。そもそもすでに警察に勤務して一カ月が経過したが、自分の改造についての話は一向に聞かされていない。『科学特別警察』と名付けられた警察の秘密組織なら簡単に解決できることだと考えていたのだが、今はそのあてがはずれかけている。

「特段そのようなことはありませんが、川井さんや涼子さんによれば、科学的に見ても、リュウの改造と私の改造が非常に似ていて、さらに私たちには通常の改造生物では見られない非常に高度な技術が使われているということです。おそらくリュウ……だけでなく私も含めてですが、裏には想像以上に複雑で大きな事情があるのかも知れません」

「事情って言われても、さっぱり予想がつかねーなあ……。いやそれよりも、オレとおまえの改造って、やっぱり同じ技術だったんだな」

最初に見たときから、どうも改造人間の能力を発動した時の姿が雪菜と似ていると感じていた。これならば、自分の改造について何かわかれば、雪菜が収容されていた研究所の手がかりにもつながるかもしれない。何とかして雪菜の失われた過去を取り戻すことに貢献できたらいいのだが。

「オレたちが同じ施設で、同時に改造されたってことも考えられるよな？」

「はい。十分考えられますね」

「ならオレの改造された時期と場所がわかれば、おまえもそこで同じ処置を受けた可能性が高いってわけだ」

しかし、龍彦は改造を受けたような記憶は全く無い。何度考えても頭の中に浮かばない。記憶が確かとなる小学生以降では、確実にそのような処置を受けていないと断言できる。いくらか曖昧になる三歳から五歳までの記憶にも、そのような事実は無い。

「んー、だとしたら、保育園に入る前か？ いやまさかな」

「そこまで時間を遡る必要は無いと思います。科学技術は一年単位で急速に進歩しますから、科特警のスタッフさえも困らせるような最高レベルの科学技術が、一〇年以上も前に存在するとは思えません」

それもそうだ。以前病院で初めて出口に出会ったとき、生体兵器を実際に使用した事件が起こるようになったのが一〇年ほど前だと教えてもらった。龍彦が保育園にいるようなころは、まだ生体兵器というものが実現すらしていなかった時代だろう。

「うーむ、わからん。そのうち何とかなることを祈るしかねーのかな」

「今は、別の新事実が発見されるまで待つしかありません」

雪菜の言う通りだ。今マンションに向かっている二人の足取りのように、ただひたすら、一步一步の証拠を積み重ねるしかないのだ。二人は、それ以上は何もしゃべらずに、マンションに帰った。

清子は普段の倍の時間をかけて買い物をし、自宅に帰ってきた。だが意外なことに、龍彦と雪菜はまだ帰っていない。龍彦が、いつも以上に書類作業に手間取ったのだろうか。

買った物袋をキッチンに置き、リビングの椅子に腰をおろして寄りかかる。すると、急に頭の中に色々なことが浮かび上がってきた。

(私ってば、全く……)

今日の帰り際の雪菜とのやり取りは、少しまずかった。ほんの少しだけ一人で考える時間が欲しかったただけなのに、あれでは自分から『異常あり』と堂々と発信したようなものだ。

もう一度、今日の訓練の場面を思い出す。なかなか的中心に、弾が命中しなかった。何かが自分を邪魔していた。結果的に雪菜や龍彦に大差をつけられ、報告書の提出の際には、出口にもここ数日の成績不振の理由を考えてみると言われた。

『父の病院をどうするかで親戚から色々注文が来ていて、そのことが頭から離れず、自分でも少し集中力を欠いていたと思っています』

『そうか。それなりの事情を抱えてるんだったな』
同じような状況でいる涼子の状況を知っているからか、出口はそれ以上深くは言及せず、ただ頑張れよとだけ言った。

出口に言ったことは事実であるが、それは原因の中のいち部分に過ぎない。主たる原因は、あの二人。特に龍彦との差を認識させられたからだ。ただそれは、戦闘能力についてではなかった。本当にシヨック受けたのは、龍彦を知っているお巡りさんがいて、龍彦と何気なく会話しているところを見たときだった。

生まれてから今まで経験した中身の違いを見せつけられた気がした。別に警察署に連行されるような行為そのものをうらやんでいるわけではないが、龍彦は清子よりもはるかに色々なことを経験している。交友関係も「縦」に広い。年上から年下、有名私立進学校から底辺高校、成績上位層から下位層、がり勉からチンピラまがい友人の九割が中学受験経験者という自分とは、環境の多様性が根本から異なっている。そんな彼に対し、何となくコンプレックスを感じてしまう。

家族三人を殺された自分は、家を失っただけの龍彦よりも、犯人を憎む気持ちは強いはずだ。仕事や訓練にかける思いも、龍彦に劣っているとは思わない。

(あいつらは……絶対にこの私が倒す！)

紫の鱗に覆われた連中のことが頭に浮かび、思わず床をぶつてしまった。

もう一度自分でも確認してみる。自分は、龍彦と同じかそれ以上に強い思いを持っている。しかしそれでも二人の実力の間には差が存在する。この差の原因は、ひとえに「経験」の差ではないのか。多様な人物に触れてきた龍彦が感じることを、自分は感じることができない。そういう精神的な面が影響して、龍彦が超えられる壁を自分は乗り越えられることができないのではないだろうか。そんな劣等感が不安となって現れる。こんな自分は、改造人間『開闢』として、これからやっていくことができるのだろうか。

*

昼休み。龍彦は学校の図書館で図鑑を開いていた。まだどんな姿の生体兵器かもわからないので図鑑など見ても仕方がないのだが、あの生々しい画像が頭から離れず、どうしてもじっとしていられなかった。

（肉食動物っていったら、どれも凶暴なんだろうな）

犬、熊、ネコ科のライオンやトラ……数ある種類の中で、いったいどの動物が一番近いのか。それとも異形の科学技術は、現在地球上にいる動物には似ても似つかないような生体兵器を作りだしているのかもしれない。仮にマンシヨンの一三階を外の壁伝いに上ったとしたら、今挙げた哺乳類はどれも向いていないような気がする。そこまで考えたとき、ポケットの中の、科特警から支給された専用携帯電話が鳴った。

（やべえ！ この携帯、マナーモードにできないんだっけ！）

緊急指令を聞き逃す可能性があるため、この専用電話は呼び出し音が最大となって固定されている。静粛な図書館で盛大にその音を鳴り響かせた龍彦は、あわてて図書館を飛び出して人気のない廊下で呼び出しに応答した。

「中原さん？」

『至急、本部に来てくれ。詳しい話はそこでだ』

その一言で、事態に何らかの変化があったことを悟った。

「わかりました。すぐに行きます」

教室に学生靴を取りに戻り、それから教務室で早退の届を出した。

「前のマンシヨンの件で警察に呼び出されてる」と言うと、担当の教員は、なぜかすぐに納得した。

高校を飛び出し、本部まで突っ走る。第一事務室に駆け込むと中原が待っていた。

「来たな、大島。至急準備をして、俺についてこい」

「いったい何があったんですか？」

「新たに二人の遺体が発見された。遺体の状態は新しく、殺害されてから一時間も経過していないそうだ。おまえの役割は、現場で遺体を確認することと、まだ近くにいないかもしれない犯人たちを警戒することだ。……それと、警察手帳。今は出口さんも川井さんも不在で、一時的に俺がこれを預かっていた」

中原が、内ポケットから龍彦の警察手帳を取り出した。龍彦は、

自分の持っている専用IDと手帳を中原と交換した。

「IDは警務課長に預けておく。おまえは、『轟』を装備してこい」
改造人間『雷光』としての、初仕事だ。

すぐに自分のロッカーに向かい、訓練の時に来ている作業着と手袋を引っ張り出し、学生服から着替えた。念のため、靴もスニーカーから支給された軍用の半長靴に履き換える。それから警務課で、超大型拳銃『轟』の使用許可をもらい、ホルスターと一緒に腰につり下げて中原のセダンの助手席に乗った。

「二人の遺体って、二人同時に殺されたんですか？」

「殺害されたのは、塗装工と工場作業員の二人組の男だ。どちらも暴力団の準構成員のような人間で、逮捕歴もある」

あまり善良な人間ではないということか。先日聞かされたのは、元詐欺犯とサラ金の……実質的な取り立て屋。どうも龍彦は、被害

者に同情できそうにない。

「そういえば、雪菜や清子は来るんですか？」

「いや、おまえ一人だ。立川は想定される生体兵器への対処法を策定しているし、竹内は呼び出してない。また別の場所で似たような事件が起きた時のために温存してある。ちょうどいい具合におまえと竹内の学校が離れているから、場所が違ったら竹内を向かわせていただろうな。そもそも、今回は三人揃っていく必要はない。おまえが来るのも、念のためということだ」

そんな話をしているうちに、黄色いテープが張られた『現場』に到着した。そこは広い河川敷にある公園で、周囲の半分ほどが木で囲まれて外から見えにくくなっている。いかにも、昼間から人殺しができそうなところだ。現場は、東野修が殺害されたのと同じ川の河川敷で、殺害された場所の雰囲気も近い。

車から降りた中原は、周囲を警戒している制服警官の方に足早に向かった。慌てて龍彦はついていく。

「科特警の中原だ。大島龍彦 改造人間『雷光』を連れてきた」

制服警官は少し怪訝そうな表情でこちらを見てきた。だがすぐに表情を変え、こちら二人に敬礼で応えた。中原は会釈してテープを潜^くっていったが、龍彦はこちらから敬礼をし直した後で、テープで囲まれた中に入った。

中では様々な人間が入り乱れていた。どんどん集まってくるスーツ姿の刑事、真っ先に現場に到着し現場保存にあたっていた制服姿のお巡りさん、作業着姿の鑑識員等々。そしてその奥に、自分が確認すべきものがあつた。

(うげっ……！)

映像で見るよりもずっと生々しい。片方の遺体は首を中心に噛まれたようで、首や頬の筋肉が真っ赤に染まり、折れた顎の骨も露出している。もう片方はさらにひどく、首だけでなく右肩から右目までの広い範囲で筋肉が露わになり、千切られた破片ともいえる肉がそばに散らばっている。

大胆かつ大雑把な性格の龍彦だが、さすがにこれには思わず目を背けてしまい、任務を終えて早く帰りたいと思った。

吐き気も感じてきた。自分は口を押さえて立っているのに精一杯だが、中原は現場の刑事たちと何か話を始めた。龍彦は何とか中原のところへ足を運び、口を押さえていた右手で隣の刑事に敬礼をした。先日の会議で見た、一課の管理官だった。

その管理官　菊池警視は、龍彦に軽く会釈すると、すぐに中原と話を続けた。

（しばらく生肉を見られねーかもな……）

大きく深呼吸をして、無理やりにも気分を入れ替える。冷静になるのだ。

「周囲の搜索で、何かひつかかる人間でもいませんでしたか？　これだけ大胆な殺し方をしたんですから、犯人も相当の返り血を浴びたでしょう」

中原の言葉に、龍彦も耳を立てる。

「ひとまずはここを管轄する署の管内に、さらには警視庁の複数の方面にも、犯人もしくは生体兵器が逃亡している趣旨を伝えた。だがまだ連絡はない」

菊池警視は、残念そうに答えた。

（まだこんなことをする危険物が、ここらをつろちよろしてるかもしねーのか……）

そう思うと、つい背伸びをして周囲を警戒してみたくなる。ここには大勢の警察関係者がいるので、自分のそれは無意味に近いのだが。

（とにかくとんでもねえ！　そんなの放っておくわけにはいかねーじゃんかよ！）

次に殺されるのは、社会のろくでなしではなく本当に善良な市民かもしれない。できるだけ早く、この脅威を特定し排除しなければならぬ。

龍彦はもう一度、遺体の傍に立つと、握る拳に力が入った。

再び中原の車に乗り、本部へと戻った。気がつけばもう夕方の五時近くになっていた。清子もすでに本部に来ているだろう。今日はもう学校には戻らず、何やら犯人の対処法を練っているらしい雪菜や清子と打ち合わせをしようと考えた。

「いきなりすまんかったな」

第一事務室のドアを開けた瞬間、あのちよっぴりふざけたような声が響いた。

「出口さん……」

「二人とも、お疲れさん。詳しい報告は、夕方の定例会議のときでよし。……賢治はまた合同捜査本部の方に顔を出してくれ。別の事件現場に行くことになる可能性があるからな」

「わかりました」

そう言っただけで中原は、自分の机で書類を整理し始めた。

「どうだったか？ 初めての殺人現場は？」

「あと一歩で盛大にゲロを吐くところでしたよ」

「そうかそうか。でもおまえは、もし急に生体兵器が周囲に出没でもしたら、ゲロ吐く寸前の状態でも、変身して戦わなきゃならんわけだ。そこるところはしっかりしてくれ」

「そりゃもちろん、さっきだってすぐに変身できるように意識してましたけど……そういうばさつきって、オレの判断で変身しても良かったんですか？」

犯人の警戒のために自分は出動したのだが、自分の本分である『改造人間』の能力を使用する場面については、中原から何も説明を受けていなかった。

「全然OKだ。もう本庁の許可は取ってある。今日夜の午前〇時までという短い期間で区切ったおかげで、簡単に許可が下りた。これが三日間とかだと、こっちの活動をかなり詳細に説明しないと向こうは首を縦に振らねえんだけどな」

もしかして出口は、龍彦が本部に来る前に、本庁に行つて警視総監やら警備部長から能力の使用許可をもらったのかもしれない。だからさつき、出口は席をはずしていたのか。フットワークの軽さに感心する。

「で、オレには何か指示はありますか？」

「特になし。暇があつたら、訓練に打ち込むことだな」

「雪菜が、犯人というか凶器の対策をいろいろ考えてるって聞いたんですけど、オレもそっちに加わっていいですか？」

「わかつた。立川と竹内清子は、川井くんや涼子くんと一緒に、第二コンピュータ室にいるぞ」

「ありがとうございます」

龍彦はすぐにそこに向かつた。

失礼しますと一声かけてから、龍彦は第二コンピュータ室に入った。中には比較的性能のいいコンピュータが、複数置いてある。出入り口のすぐ傍に、その四人はいた。

「川井さん、涼子さん」

「あら、龍彦くん」

まず椅子の脇でコンピュータの画面を見ていた川井がこちらに声をかけてきて、次に椅子の真後ろにいる雪菜と清子が振り向き、そして椅子に座つてコンピュータを操作している涼子が最後に反応した。

「今回の事件の凶器についていろいろ調べてるって聞いたんですけど」

「ちようどいいところに来てくれたわね！」

川井に促され、龍彦も画面を覗く。そこには、犬そののような動物の顔の輪郭と人間の上身の輪郭が、白い背景にそれぞれ黒い線で描かれていた。

「生体兵器は、犬型ですか？」

「歯形を見たところ、犬とか狼に近いのよ。これだけで生体兵器全体を断定することは不可能だけど、少なくとも口の構造は犬に近い

「つてことはわかったわ」

「それで、今は何をやってるんですか？」

「この通り」

パソコンを操作する涼子は、そう言いながら画面の図を動かして、犬が人間の上半身にかみつくシーンを再現した。

「食いちぎられた様子を分析して、噛む力の大きさなどを推測しているの」

人間の頭蓋骨は、人体の中で最も頑丈な部分と断言している。そこを噛み砕くには、よほど大きな顎の力を持っているということだ。腕など噛まれていたら、簡単にもぎ取られただろう。

「すごいわね……。これは車のフロントガラスなんて簡単に砕くわよ」

「川井さん。一つ、どうしても結びつかないことがあります。これだけ強力なパワーと、一三階建のマンションの、おそらく窓から侵入する能力は、相容れないのではないのでしょうか。パワーを重視すれば、体が大きくなって身軽さが減り、また目立ちます。窓からの侵入が得意になるとは思えません」

雪菜の質問に、川井は困ったように首をかしげた。

「そうなのよねえ。あくまでマンションの階段かエレベーターで内部から上の階に上がって、ターゲットの部屋の上下の部屋から侵入するってことも一時期考えたけど、刑事さんたちの話からすると、あの部屋の上下左右斜め全ての部屋は、みんな一日中人のいる部屋ばかりだったことだから、それは不可能よね」

「私もそれは少し疑問に思ってたんですが、やっぱりマンションでの事件は、何かマンションの壁をよじ登ったんですか？」

清子も質問を投げかける。

「それも、今後の捜査でわかることだわ。もし外からよじ登ったんなら、何らかの痕跡が残ってるはずなんだし……」

やはり一流の科学者である川井にとっても、何か判断を下すにはまだ材料が足りなさ過ぎるというわけか。

「なあ。何かこう、対処法はねーのか？」

今の分析状況では対処法などわからないだろうと思いつながらも、龍彦は雪菜に尋ねてみた。

「この生体兵器の最大の武器が顎ならば、口を閉じたところを狙って、上下から顎を抑えることが有効な対処法になります。たいていの動物は、口を閉じる力よりも、口を開く力の方がずっと弱いので、相手の動きをより簡単に封じることができます」

その話は龍彦も聞いたことがある。テレビなどで、ワニと人間が格闘する場面によくあるシーンだ。

龍彦と清子は、納得したように頷いた。

「また距離を空けた射撃での攻撃も有効です。人間はともかく、それ以外の動物を元にした生体兵器は知能が高くなく、こちらの意図を察して行動を変えろということをしません。動きも単調なものになるでしょうから、狙いは定めやすいはず。ただこれが改造人間だとしたら、話はまた少し変わってきますが」

「三人にとって問題なのは、実力要素よりも、実は法律や規則の規制じゃない？ いくら改造人間とはいえ、人間は人間。生きて確保することが大原則になるし、他の生体兵器が相手でも、せいぜい強力な麻醉銃で眠らせるのが限界ね」

「実銃を発砲するときも、狙いは胴体を避けるよう、きつと念押しされるでしょうね」

川井のため息混じりの言葉につづいて、涼子が言葉を足した。

「……そうなの？」

清子は雪菜に顔を向けて尋ねると、彼女はこくりと頷いた。

（そうだよなあ。実力的なことに加えて、そこも考慮しておかきやなんねーのか……）

何となく予想はついていたのだが、警察という組織は面倒だ。戦場の軍隊と違い、とにかく鉄砲を撃って敵を殺害すれば良いわけではない。警察は犯人の『逮捕』が主たる目的であり、生きたままでの身柄確保に拘る。もちろん龍彦だって、犯人を殺害するよりは手

錠をかける方がベストな解決方法だと考えてはいるが、雁字搦めがんじがらの規制でこちらの行動を拘束されるようなことはされたくない。こっちは命懸けで戦うのに、無茶苦茶な指示を出されたらたまらない。「とにかく私たちは、射撃と格闘の技術を高めなければなりません。今日の訓練では、格闘を中心に動きを確認しようと思います」「訓練なら、もう少し待つてくれるかしら？ 『開闢』の人工知能に搭載するソフトウェアが完成したから、清子にはそれを少し試してほしいの」

涼子が目にも留まらぬ速さでキーボードを打ちながら、訓練に行こうとする三人を止めた。

「そっか。私には、肉体面だけじゃなくて頭脳面の能力も付加されているのよね」

「今までの訓練で、人工知能を使わなかったのかよ？」

「知能があることはわかってたけど、これとって意識することも無かったし、そもそも使い方も教わってなかったし……」

「『開闢』は、単純な肉体面だけでなく、精神面つまり脳の機能を拡張する能力を持つ。脳の持つ、情報の処理と記憶の能力を拡張し、強化された肉体をより効果的に使えるようにするのも一つの研究目標だった」

「そのハードウェアを作ったのが私で、ソフトウェアを開発したのが涼子ちゃんの功績なのよ！」

割って入った川井の言葉は、前にも聞いたような気がした。

「でも私が作ったのは、パソコンでいうOSオペレーティング・システムにあたるソフトだけ。種々のアプリケーションは、まだ『開闢』に搭載されていないわ。それが一つ、昨日完成したの」

涼子はソフトウェアの名称を画面に表示した。

（視覚拡張プログラム……？）

「何ですかそれは？」

龍彦も、おそらく清子も抱いただろう疑問を、雪菜は口にした。

「用意するのは、ビデオカメラと専用ケーブル、それとこのソフト

が搭載された『開闢』。ビデオカメラと『開闢』を接続すると、このカメラが捉えた映像をそのまま『開闢』の脳に映し出すことができるの」

「それってかなりすごいじゃないですか！」

龍彦は、涼子の説明の内容にすっかり驚いてしまった。雪菜や清子も、予想外な内容にきよんとしている。

「涼子ちゃん、説明するより、実際に試してみた方が早いでしょ」
「確かに、それが一番ですね」

すると川井は、どこから取り出したのか、数えきれないほどのコードが繋がったヘッドギアを清子に被せ、椅子に座らせた。それから涼子はそのコードをいじり始めた。

「清子。これからあなたの脳に、このプログラムをインストールするけど、精神的なものをいじるようなものだから、もしかすると不快を感じるかもしれないわ。でも、ちよつとの間だから我慢してね。目を閉じて、じっとしてて」

「え、ええ？」

「大丈夫よ、清子ちゃん。痛くも痒くもないから。これにつながれているコードも、普段の精密検査で使ってるものと同じ仕組みなんだから、全く問題ないわ」

慌てる清子を、川井が宥める。龍彦の眼には、清子が完全に実験のモルモットとして映っている。

ソフトウェアのインストール自体には、二分もかからなかった。

清子も目を閉じたまま、特に不快そうな様子にはならなかった。

「さて、今度はこのコードを、このカメラに接続しま〜す！」

すっかり新製品を披露する販売員のような口調になった川井は、清子のヘッドギアのコードをコンピュータから抜き取り、そのプラグの一部分を市販のものらしいデジタルカメラに差し込んだ。そしてデジタルカメラを手で持って、スイッチを入れた。

「まだ、何とも無いですよ？」

「そのまま『開闢』に変身すると、違いがわかるわよ」

涼子の言う通りに、清子は変身を試みたようだ。清子は目を閉じ、傍からみると精神統一をしているように見えるくらいに集中していた。そして肌の色が次々に薄いレモン色になり、肘・膝・肩などの特定の部分に緑色の斑模様まだらが現れ、最後に髪の毛が根元から緑色へと染まった。

訓練の時に毎回見ている変身の様子だが、未だに龍彦は、見るたびに新鮮さを感じる。

「あ、あ、あれ？ 何か声が聞こえて、視界の隅に、小さい何かがある。カメラの記号……？」

「そう。その記号の情報に、変身するときと同じように意識を集中して。そうすれば、その情報が視覚化されるから」

わかりやすいのかわかりにくいのか、第三者の立場ではよくわからない涼子の説明。だが、人間に無いような能力を説明するには、人間が持ち合わせている感覚や概念だけでは、不十分なのかもしれない。

(それほどまでに、改造人間は通常の人間と違っていてことなのか?)
「はいじゃあ龍彦くん、こっち向いて」

龍彦は反射的に、彼女の持つデジタルカメラのレンズに視線を向けた。

「わっ！ いきなりリュウの顔がドアップで……！」

清子は椅子から飛び上がり、閉じていた目も開いて仰天した。

「そんなモンは見なくていい！ 川井さんも、ドアップで顔を写さないでくださいよ！」

「うふふ。どう清子ちゃん、今にも龍彦くんが襲ってきそうな距離感でしょ？」

「とりあえず、顔がくっつきそうなくらいです……」

清子と同様、龍彦もおもちゃにされたようだ。

(まあ、別にこれくらいのことには怒るようなことじゃねーんだけどさ……)

龍彦は、川井が自分の顔を、おそらくズーム最大で撮影している現

状を変えようとしたが、龍彦がもう一度しゃべり出す前に、涼子がこのやり取りを中断させた。

「大事なものは、どういう風に『見える』かなのよ。清子、カメラの映像が見えるからって、自分の目が見えなくなっただってわけじゃないでしょ？」

「うん。確かにそう。でもうまく感覚が説明できないわ……。どちらの映像も同時に認識できるし、それこそ目がもう一つ増えた感じかしら」

「今で十分いい説明になってるわ。人工知能は、通常の人間には無い、新たな感覚を生み出してくれる。今回は単純な視覚の拡張だったけど、ソフトウェアや外部機器の充実により、聴覚や嗅覚の拡張ももちろんできるし、さらには超音波による音響測定やレーダー探知などの能力を『感覚』として使えるようになるわ」

「すごい！」

「すごいです」

「すごい！」

龍彦・雪菜・清子の三人は一樣に興奮した様子で声を上げた。

実際、龍彦はまだ現状をうまく理解している自信がない。だが清子の言葉から、改造人間および他の生態兵器が、一般の常識では考えられない能力を持つということを、再度覚えさせられた。単純な身体能力や隣人間の謎の衝撃波といったハードウェアの性能の高さは幾度となく実感してきたが、脳の情報処理というソフトウェア能力の拡張は、初めてその実例を目にした。

清子は変身を解除し、龍彦や雪菜も、もう一度涼子と川井の説明を聞いた。

「仕組みを解説すると」

現在、公にある技術でもそれに近いものが存在する。網膜に不具合があつて目の見えない人に、機械でできた人工網膜を移植し、脳から延びる視覚神経と特殊な方法で接続する。そうすると、人工網膜が捉えた情報が神経を伝わって脳に行き、ものを「見る」ことが

できるようになるのだ。感覚器官だけでなく、運動器官でも同様なことができる。人は手や足を切断した後でも運動神経が脳とつながっていて、以前と同じように手足を動かそうと脳は神経を経由して切断面に向かって命令できる。この微弱な信号を利用した、本物の手と同じ感覚で動かせる義手も存在する。まさにサイボーグが実用化しつつあるといえるだろう。現に『メカ』で採用されたパワードスーツにも、この技術が使われている。

ただし、両目からの視力というものは本来人間に備わっている能力であり、人工網膜は感覚器官の代用をしているだけである。情報を伝える神経や、情報を「見える」ものとして認識する脳の部分は、通常の間と変わらない。二つの目の他にさらにカメラを脳につなげようと思っても、カメラの情報を脳に伝えるしくみもそれを認識するしくみも無い。同じく、三本目の手をつけようとしても、脳はそれを動かす感覚を持ち合わせていない。

これを解決するのが人工知能の役目だ。『開闢』の人工知能は頭蓋骨の中に本体を埋め込み、そこから人工の神経　もちろんこれは金属の導線などではなく生物と同じ有機体　を、頭蓋骨を通り抜け脳の表皮のすぐ下にまで広げてある。これは、ある特殊な器具で触れるだけで情報のやり取りができるようになっていて、カメラからの情報を特殊なヘッドギアを通して人工知能に送ることが可能となった。そして人工知能が、本来の脳の代わりにその情報を「見える」ものとして認識し、その認識をそのまま本来の脳が受け取ることにより、カメラの映像をまるで自分の目で見たように感じることができるというわけだ。これと同じしくみで、プログラムも人工知能にインストールできる。研究費用さえあれば、『開闢』の脳の情報に直接使った機械を操作することも可能になるらしい。

（すこすぎるぜ！　これが改造人間……！）

興奮でわずかに体が震えている。自分たちを始めとする改造人間地下に閉じ込められている数々の生体兵器、そして科学技術全般に對して、畏敬の念を感じざるを得なかった。

「このヘッドギアは、有線を使わずに無線で映像情報を受信できるタイプも開発されているから、次に『開闢』として活動するときは、それを使いなさい。カメラは一つだけじゃなくて、警察のパトカーやヘリに搭載されているカメラにも、専用の送信機を取り付けられればその情報をヘッドギアで受信できるわ。その能力を、今回の事件でもうまく活用できればいいわね」

「ありがとう、お姉ちゃん」

「私だけじゃなくて、その開発に協力してくれた大勢の技術スタッフ、それと開発費に使われた税金を納める国民にも感謝なさい。あなたの任務は、彼らを守ることなんだから」

涼子は無線式のヘッドギアの他に、送信機を取り付けた三つのデジタルカメラを清子に渡した。当然清子だけでは持ち切れないので、龍彦が三つのカメラを全て抱えた。

「よっしゃ、それじゃ三人で訓練」

「失礼します」

突然、中原が入口のドアを開けて入ってきた。

「捜査本部の要請により、改造人間一体の出勤をお願いします。川井さん、今は大丈夫でしょうか？」

「ええ、三人はすぐにも出勤可能だけど……さつき龍彦くんを連れていったばかりよね？」

「事件前後に、現場近くにいた人間を特定しながら、逐一本人を尋ねる方針になりました。早速、普段から河川敷を犬の散歩コースにしている六八歳の男性を特定し、これから所轄署の捜査員と共に、本人宅を訪問するつもりです。そのときに、誰か改造人間を同行させる方針となりました」

「万が一に備えるってことね」

「はい」

「わかったわ。許可します。三人の中で、ぜひ行きたいという人はいる？」

川井は龍彦たち三人に顔を向けた。

真つ先に龍彦は手を挙げる。

「オレが行きます。相手が何かわからないのなら、内臓が吹き飛んでも再生するオレが試してみるのが筋でしょう」

自分でも意外なほど、やる気が出ている。

「私も賛成です。格闘技術は『開闢』よりも『雷光』の方が高く、もし事情聴取に同席させるのなら、『徹芯』よりはるかに社会経験の豊富な『雷光』の方が適しています」

少し意外に、雪菜の推薦もいただいた。清子は何かもの言いたげな表情だったが、すぐに賛成の意見を表明した。その微妙な間が、何だか気になるが……。

「では、『雷光』を同行させます。よろしい？」

「ありがとうございます。よし、大島。再び準備だ」

部屋を後にする中原に、龍彦は急いでついていく。

（清子のやつ、いったい何を考えてるんだ？ 最近の成績を、また気にしてんのか？）

新型プログラムの話で盛り上がったのに、再び清子の心の負の部分に光が当たってしまったような感じた。

だが今は、任務が最優先。そのことは頭の奥にでもしまつて、龍彦は四時間前と同じ要領で支度をして、今度は出口から警察手帳を受け取り、中原と共に本部の外へ出た。

ヘルメットを脇に抱えて駐車場へ出ると、見覚えのある顔があった。

「おめえが来たか……」

「おっ、山石さん」

なかなか嫌そうな顔をしながら、山石は龍彦のことを迎えてくれた。隣にいる四人は、山石の部下だという若い刑事たちだ。

「改造人間とやらがどんなもんなのか、ちょっと試してみようと思つたんでな」

「山石さんが、オレたちに出動要請をしたんですか？」

「そうだ。他の所轄署員や本庁のやつらは、正直おまえらのことを

信用しちやいねえんだ。刑事としてのプライドもあって、まだ一七歳のガキに何ができるんだって思ってる」

それは、ある意味で当然の結果である。もし龍彦が刑事たちと同じ立場だったら、間違いなく同様のことを陰で囁いているに違いない。

「俺は、たまたまその改造人間に顔見知りがあったってことで、ちょっとした好奇心から呼び付けてみることにした。そういうことだ」

そこまで言うと、山石はくるりと背を向けて車の助手席のドアを開けた。山石と部下の五人は、それぞれ三人と二人に分かれ、車に乗り込んで発進した。

「俺たちも行くぞ」

中原と龍彦も同様に乗車し、山石たちの後をつけて車を発進させた。

龍彦が抜けたため、雪菜と清子の二人で訓練をすることになった。一応安全のため、二人は防具をつけることにする。

「格闘訓練では、動ける場所を一定の範囲内に制限し、その外側から三つのカメラで映像を撮影し続け、清子はそれも含めて自分の動きを判断します」

「視点が全部で四つになるわけね」

「はい。一対一ならあまり必要ないかもしれませんが、多人数を相手にし、また至近距離の格闘戦ではなく一定の距離を開けた銃撃戦のような場合、違う角度からの視線は必ず役に立ちます。まずは、多くの視野を認識しつつ行動することに慣れてください」

「わかったわ」

清子はもう一度目を閉じ、改造人間『開闢』となる。目を開くと、目の前には全身が暗い赤に染まった『徹芯』がそこにいた。かなり黒に近い赤色の皮膚が全身のほとんどを覆い、肘や膝などの関節部分・髪の毛・目などの体の一部分は、それよりも数段明るい赤色に

なっている。

(やっぱり、リュウと似てるわね……)

昨日、雪菜から直接教えてもらった。『雷光』と『徹芯』は、科学的見地に基づいた検討により、同じ型の改造だと判明した。つまりそれは、龍彦と雪菜が同じ環境にいた可能性が高いということを示している。

清子と雪菜は協力して、三つのカメラを訓練場の端にそれぞれ等間隔で設置する。それからあらためて、二人は中央で向かい合った。清子はそこで、新たに三つ増えた視界を確認する。

目で見た雪菜の正面の様子他に、真後ろ、左右前方の斜めからという四つの方向から見た様子が頭の中に浮かぶ。

(やっぱり奇妙な感覚よね)

頭の中での認識の仕方を端的に表せば、違うチャンネルに設定された四つのテレビが縦横に二台ずつ並んでいる光景といえる。しかし通常ならば、四つもテレビ画面があっても、集中して一度に見ることが出来るチャンネルは一つだけだ。映画と通販番組が同時に映っていたら、無理に両方の内容を同時に受け取ろうとすれば頭が混乱してしまう。実質的に一方ずつ交互に見ることしかできない。だが今は、四つの情報が同時に入ってきてても頭は正常にそれを受け入れる。感覚的には、複数の画面を眺めるというより、むしろ目で物を見ながら耳で音楽を聴く状態に近い。

「いつでもいいですよ」

雪菜はそういって、一見気楽そうな状態で構えた。

雪菜に遠慮はせず、清子から攻撃を仕掛けた。最初の突きは簡単に払われ、すぐさま蹴りを打ち込む。だがこれも読まれていて、雪菜は身体を後ろに引いて清子の攻撃をかわした。そうして開いた間合いから、雪菜は蹴りと拳の連続攻撃を繰り返した。

次には雪菜が攻撃を仕掛けてくることは予想できたので、こちらも攻撃を読みながら防御態勢をとる。

(私だって、負けてられない!)

清子は雪菜の拳を手のひらで軽く受け流し、拳の勢いを殺すと同時に低い姿勢で相手の無防備な脇腹を狙う。だが打ち出した拳は雪菜の肘により防がれ、逆にカウンター攻撃を招く結果になってしまった。それでもまだ反撃に出ようとしたが、そのために足を数センチ踏み出したタイミングを狙われ、雪菜が攻撃を仕掛けてきた。清子の反応が一瞬遅れたために、鋭い突きが清子の鳩尾の寸前まで迫り、そこで手が止まった。

「……………」
「私の勝ちです」

勝負が決まり互いに固まった状態から、二人はゆっくりと姿勢を戻していく。

（勝てなかった。新しい能力があったのに…………）

今まで一度も、格闘訓練で雪菜には勝ったことが無い。今度こそはと思つて挑んだのだが、結果はいつも以上に一方的だった。

「いったん休憩しましょう。私から話したいことがあります」

少し硬い声でそう言うと、雪菜はコンクリートの床に尻をついた。清子も同様に、変身状態を維持したまま、雪菜の隣に座った。真っ赤で機械的な目が、清子の顔を覗き込んでいる。何を聞かれるのか、だいたい想像がつくが。

「清子は、自分自身が不調に陥っていることを自覚していますか？」
やはりこのことだった。清子は無言のまま、顔だけ縦に振った。当然自分のことを自分がわからないはずがない。

「どうしてそうなのか、私は理由を聞こうとはしません」
これにも清子は無言でうなずいた。

「ですが私は心配しています。訓練成績そのものではありません。あなたのように活発で積極的な人が訓練成績の停滞で悩んでいることを、私は気にしています。もちろんリユウもです」

「ありがとう、雪菜ちゃん」

雪菜なりの言葉を、清子は嬉しく思った。表情からは何を考えているのかよくわからない雪菜だが、自分のことをちゃんと心配して

いてくれたのだと思えて、「ありがとう」と言わずにはいられなかった。

しかし、まだ気分が晴れたわけではない。

「不調を克服するには、今まで以上の努力をするしかありません。これは私の経験則です」

雪菜ちゃんでも不調になることがあるのね。何となく、そんな言葉が頭に浮かんだ。

「それは清子も、十分わかっていることでしょう」

「どうしてそう言い切れるの？」

「偏差値八〇以上を常にキープするあなたなら、実力を上げるには努力を積むことしかないとわかっているはずです。私は学校の試験について詳しくはわかりませんが」

「……………」

言われてみれば、そうかもしれない。勉強もスポーツも、結果が欲しいならそれなりの努力をしなければならぬことくらい、自分は知っている。そして今まで実践してきた。

「『開關』として実力をつけたのかつきたくないのか。つきたいのなら、努力を重ねるしかありません。今清子が重ねている努力は、目標と方向が一致している、正しい努力です。悩む必要はどこにもありません」

それはそうなのだが……いや確かにそうだが。

「すみません。言葉がうまくないですね、私は」

「ううん。雪菜ちゃんのおかげで、ちよつと楽になったわ」

努力しかない。当たり前前のことを、再び思い出すことができた。実力だろうが経験不足だろうが、とにかく現状を克服しようとする努力でしかそれは解決できないのだ。

「そうですか。それは私にとってもうれしいです。格闘訓練を再開しますか？」

「うん。お願い」

二人は再び立ち上がり、再び訓練場の真ん中に立った。

そう。努力しかないのだ。

向かったのは都内の住宅地だった。そんなに新しくできた団地でもないが、特に古い歴史があるわけでもない。新しめの家とボロな家が半々くらいにある。その中にある、古ぼけた二階建ての一軒家に、例の老人がいるという。

(遠野泰造^{とのおのたいぞう}、六八歳。六〇歳で大手家電会社を定年退職。その後は無職で、六五歳のときに妻と死別か)

車の移動中に、中原から渡された参考人の情報に目を通した。事件のおおよその発生時刻のころ、同じ河川敷の現場から三〇〇メートルほど離れた地点を、愛犬(大型犬)を連れて歩いていた。目撃者は、河川敷のすぐ側にある高校の生徒たちで、四限か昼休みによく参考人が歩いているのを窓から見る事ができるそうだ。またそれ以外にもランニングを日課としている。

(オレには、ただのジー様にしか見えなーけどな)

やがて車が静かに止まる。三台の車のうち、中原や龍彦を含めた二台の車が玄関前に、もう一台が住宅の集まるブロックの反対側に回った。もし参考人の裏口から何かが出てきて玄関とは逆の道路に出ても、カバーできるようにする。

「今回は、ヘルメットは使わなくていい。これでもかけて、目立たない部下のようにでも振舞ってくれ」

中原は、龍彦に度が入っていない銀縁眼鏡を渡した。

「わかりました。ちょっとオレには似合わなそうですけど」

少しでも素顔が隠せればいいのだと考えて、その眼鏡を装着する脇に置いたヘルメットの出番は無い。こんなものを被って住宅地に登場すれば、自然な雰囲気を見事にぶちこわしてしまう。今日はあくまで、参考人の事情聴取にやってきただけなのだ。

玄関側には五人配置された。中原を含む二人はそれぞれ二台の車の運転席で待機し、龍彦と山石と坂田^{さかた}巡査の三人が玄関へと向かう。

「おめえは参考人と、何も会話しなくていい。その代わり、もし何か異変に気が付いたらすぐに対応しろ。遠野が改造人間だって可能性も、あるんだからな」

「はい」

龍彦は、右の腰にむき出しの状態で釣り下げられている『轟』に意識がいく。

山石は、低い声で龍彦にそう告げると、玄関のインターホンに指を伸ばした。

ボタンを押すと、一回で応答があった。

「警察です。遠野さん、ちよつといいですか？」

山石がインターホン越しにそう告げると、しばらくして玄関の引き戸が開いた。

「はい。こちら遠野ですが……」

髪の毛が真っ白の老人が、戸の間から怪訝そうな顔を見せた。

「実は今日、この家の近くで人殺しがありましたね。念のため、この辺りの家に聞き込みさせていたでいてるんですよ」

さりげなく訪ねたことを演出するための、嘘の混じった山石の言葉。遠野は山石らの警察手帳を目で確認してから、玄関の戸を完全に開いて、龍彦たち三人を自宅の茶の間に招きいれようとした。

「おおつとー！」

龍彦は玄関に寝そべる大型犬を、思わず足で踏みつけそうになった。

一瞬、さきほどの涼子のシミュレーションを思い出してどきりとした。だがこのクリーム色の犬は、来訪者に対して全く吠えず、地べたから首だけ起こして珍しいものでも見るかのようにこちらを眺めるだけだ。

（大丈夫……なんだよな？）

特に異常な様子は感じられなかった。とりあえず、生体兵器ではないようだ。ほっと胸をなでおろす。

玄関はせまい廊下につながっているが、茶の間は玄関のすぐ脇に

あるため、玄関にいなながら茶の間全体の様子がわかる。台所とつながっている六畳の畳部屋には、丸い卓袱台ちゃぶだいとブラウン管テレビ、その他は種々の日用品がある程度散らばっている。老人の一人暮らしなのだが、生活感に溢れる部屋だ。

三人が靴を脱いで上がろうとしたところ、龍彦だけ山石に制止された。

「おめえは玄関にいろ。黙って俺たちの話を聞いてるんだ」

「……………」

言葉の意味がよくわからないまま、龍彦は玄関に靴を履いて立つたまま、じつとしていたことにした。

「すみませんねえ。こいつ新入りなんですけど、今日はスーツを切らしてるとかで。私の方から服を貸そうかとも思ったんですが、こいつ図体だけはでかいんで、人から借りた服を着れないですよ」

茶の間に座った山石は、作業着姿の龍彦を指差して無難な話題から遠野に話し始めた。遠野は若干戸惑いながらも、特に嫌そうなそぶりをみせることなく山石の顔を見る。

ただの世間話から始まり、やがては事件の話題となる。山石が中心となって話を聞き、それを坂田巡査が中心となって記録を取っている。

龍彦は、開け放たれた茶の間の戸を通して、遠野の顔を斜め前から見ることができる位置にいる。遠野は人の良さそうな顔で、ときおり笑いながら山石の質問に答えている。日ごろのランニングの成果か、比較的身体はしつかりしている。さきほど玄関から茶の間へ歩くときも、ごく普通の動作で、よろけるような様子も見せなかった。七〇歳近い年齢を考えれば健康な方だろう。しかし身長は一六五センチ前後、体重は六〇キロ弱といったところで、とても若者二人を殺害できるような人間には見えない。改造人間という可能性を捨てればの話だが。

（でもいくら超科学の改造技術でも、こんな年寄りを戦力化できるのかよ？）

しばらくすると、ちよつと外で煙草を吸うと言って席を外した山石が、玄関にやってきた。

「あのじいさん、何か知ってるな」

靴を履き終わってすれ違ふ一瞬に、山石は龍彦の耳元で囁いた。ベテラン刑事の勘が、何かを感じ取ったらしい。

（何か、ねえ……）

龍彦には、いまいちよくわからない。

ゆっくり外で一服してきた山石は、再び遠野との会話に挑んだ。

今度は前半と比べていくらか口調が強くなっている。

「本当に何も変わったところはありますか？ ほんの些細なことでもいいんです。それが重要な証拠になるかもしれない」

「やはり何度も思い出してみんですが、異常といえるものは見も聞きもしませんでした」

「一緒だったあの犬にも、何か変化がありませんでした？ 動物は人間より、はるかに周りの変化に敏感ですから」

「それも特には……」

だんだんと遠野の声に、苛立ちが表れてくるようになってきた。いくら否定しても山石が何度も同じような内容を聞き返してくるので、温厚な遠野もうんざりしてきたのだと簡単にわかった。

「もう何度も言ったでしょう？ 私は何も気づかなかつた。どうしてそんなに粘られるんですか？」

「卑劣な人殺しを、一刻も早く捕まえるためです。別にここまで粘って聞き込みをするのは、あなたに対してだけじゃありません。そんな苛々しないでください。他の住人にも同じようにやってますよ。我々は、残虐非道な犯人に手錠をかけ、牢屋にぶちこまなきゃなりませんのでね」

「もういい加減にしてください。私には、わかることは何もありません！」

遠野はついに声を張り上げて、積もった苛々（いらいら）を爆発させるように、卓袱台を叩いた。

それつきり遠野は何もしやべらず、聞き取り調査は終わりになってしまった。山石と坂田巡査は、今日の聞き取り調査について「感謝」の言葉を述べて、ゆっくりと畳の上に立ち上がった。

「そうそう、遠野さん。この辺りには、まだ犯人がうろついているかもしれない。そいつは脳みそがいかれた狂った人間かもしれないので、どうかお気を付けください」

「……わかりました。忠告には感謝します」

山石の「どうか」に力のこもった言葉に対し、遠野は淡々と簡潔にだけ応えた。

玄関で山石と坂田巡査が靴を履き始めると、まだ座っていた遠野も立ち上がり、玄関までやってきた。

「刑事さんたちも、お気をつけてください」

「ありがとうございます。こちらこそ忠告には感謝しますよ。」

ほら、行くぞ」

山石は、立ちっぱなしでいた龍彦に玄関から出るように促す。言われた通り、龍彦は路上に停車している中原の車まで歩きだした。

ちらりと振り返ると、まだ遠野は戸を開けてこちらの方を見ていたが、すぐに戸を閉めた。

(結局、オレには何にもわからなかったぜ)

警察の一員として取り調べに臨席できると思ったのだが、そこは少し残念だった。さらに外部から眺めていても、龍彦は何も特別なことを発見できなかった。もっと修業を積まなければならぬのだろう。

「あいつは何らかの関わりがある。監視をつけよう」

「何でそんなことがわかるんですか？」

龍彦には全くよくわからなかった。

「おっ、事件が起きた時刻に現場の近辺にいた人物のリストが送られてきたぞ」

薄暗くなってきた中に、山石の携帯電話の画面が光る。そういえば、今はすでに六月の中旬に差し掛かっていて、夏至の日も近い。

日の沈む時刻が一年で最も遅くなる時期でもある。

(もう七時なるのか。かなり長い話だったもんな……)

よくもまあこんな時間まで粘ったものだ、ベテラン刑事に感心してしまった。

「平日の昼間から河川敷をうるついている人間がそう多くないことぐらい、こんなリストが無くたってわかる。もともと一人ずつ疑ってかかるうと思ってたんだが、もう犯人ホシにあたったみたいだ」

どこか面白がっているような薄笑いを浮かべて、山石は独り事のようにつぶやいた。

「そんなに怪しかったですかね？」

「何となく、嘘をついている相手ってのはわかるんだ。こつちから『警察だぞ』ってアピールしながら一声かけると、後ろめたいことを隠してるやつは、最初の反応で目が泳ぐ。これは職務質問なんかでも同じだ」

「さすがはベテラン刑事」

「こつちいう術を身につけて、交番勤務のときに職務質問なんかで検挙の実績を上げると、上司が刑事講習に推薦してくれるんだ。これが刑事への第一歩だな」

「オレは刑事っていうよりは、武装警察隊みたいなモンですがね」

「あ、そうか。確かにそれもそうだな」

そのとき、三人は背後に気配を感じて反射的に振り向き身をかわした。

「坂田！」

山石は坂田巡査に体当たりし、坂田巡査に飛びかかってきたものから強引に遠ざけた。

「山石さん！」

龍彦は地面に着地した何かを足で蹴り飛ばそうとしたが、それは軽い動作で跳びはね、難なく龍彦の蹴りを避けた。

「……出て来たな、生体兵器！」

とび跳ねたそれは、遠野の自宅の玄関前に着地した。そして玄関

の戸が開き、さらに別の生体兵器も出現した。

最初に坂田巡査に攻撃しようとしたのは、全身が茶色や緑などの迷彩柄の毛で覆われている、犬のような生物だった。体長は九〇センチ以上、体高は七〇センチ近い。顎が大きく発達しており、開いた口から頑丈そうな歯を覗かせる。耳はピンと立ち、黄色よりも黄金色と言った方がふさわしい目が、ギラギラと輝いている。一目で闘争心旺盛な、危険な生物だとわかる。

玄関から現れたもう一体の方は、さらに大型だ。体長は一・二メートルほどで、よりがっしりした体型だ。地面をとらえる四本の足や胴体も太い。

「変身しろ！ 二体の生体兵器を捕獲するんだ」

車の中から身を乗り出していた中原が、そう叫んだ。

「了解です！」

初めての实战だ。そんなことを考えながら、龍彦は、内に秘めたるもう一人の自分、すなわち『雷光』として覚醒することを意識した。

体の中で何かが動く。それは忙しく自分の体の中を動き回り、強烈な目覚ましを全身にかけているような響きが感じられる。そして急に視界がすつきりし、聴覚も冴える。ただの人間のと看とは比べ物にならないほど鋭敏になった感覚、圧倒的に軽くなった身体。気がつけば自分は、全身が青色に染まっていた。そして最後に、邪魔な度なしメガネをはずし、地面に放り投げる。

「『雷光』、前方の犬型生体兵器を捕獲します」

龍彦が変身するとすぐ、小柄な方の犬型生体兵器が再びこちらに攻撃を仕掛けてきた。顎や前足の爪を使い、自分たちの肉体を引き裂こうとする。すぐに龍彦は山石たちの間に入り、顎の下を目がけて拳を繰り出す。

しかし拳は前足に防がれ、生体兵器は崩れたバランスをうまく空中で持ち直しつつ、アスファルトに着地した。

（あのデカイ方は？）

しかし玄関先に視線をやると、そこにはもう何もいなかった。

「もう一体は逃亡したぞ。あつちは俺の部下に追わせる」

「くそっ！」

今は山石の部下を頼るしかない。

目の前の生体兵器は、一瞬たりとも隙を見せず、またすぐに龍彦に噛みつこうと突っ込んでくる。今度はその動きを封じようと、龍彦はその前足をつかもうとする。しかし相手の機敏で柔軟な動きにより、生体兵器の右前脚は、龍彦の手の中からするりと抜けた。

(動きが速い！ 人間と全然違う……)

この間合いだと、銃を使えば隙だらけになる。殺害するにしても捕獲するにしても、まずは龍彦の体で相手を抑え込む必要があるしうだ。

「こちら中原。大型生体兵器が一体、都心の方向へ逃亡中。至急、

『開闢』と『徹芯』の出勤を要請されたし。進路は――」

中原は科特警本部へと連絡を入れている。山石と坂田は拳銃を抜き、もみ合う一人と一体の周囲に少し離れて展開し、この生体兵器が逃亡を企てても、すぐに射殺できるような態勢をとる。

(ちょこまかとしやがって！)

再び大型生体兵器は、後ろ足で地面を蹴り、龍彦の右肩あたりを目がけてとび跳ねた。頭が当たる寸前に顎を大きく開き、龍彦のがつしりした肩に丸ごと噛みつこうとする。しかし龍彦はひらりと右肩を引いてそれを避け、同時に自由な左手で生体兵器の腹を下から殴りつける。だがそれも力強い後ろ足によりブロックされ、有効なダメージを与えられない。

相手の着地位置を予測し、生体兵器と生身の山石や中原たちの間に入るように移動する。龍彦は相手の攻撃を避け、かつ周辺住民や中原たちを守ることを優先しているため、決定打となるうまく攻撃を仕掛けることができないでいる。

(こいつ、強化されてるのは顎だけじゃねーな)

三メートルほどの距離を開けてジャンプし、空中体当たりができる

ような跳躍力や、改造人間として大幅にパワーアップした龍彦の打撃技を防御する四本の脚など、運動能力や身体機能は一般の犬の比ではない。そのうえ非常に高い攻撃性を持つ。この犬型生体兵器は、ひたすら対象に危害を加えることのみを忠実にやっている。敵を殺すまで、あるいは自身の命が尽きるまで、ただ攻撃のみを続けるのではないかと思うくらい狂ったように暴れている。

生体兵器は何度が龍彦の上半身目がけて噛みつきこうとしてきたが、学習したのか、今度は足などの下半身を狙ってくるようになった。

右足に噛みつきこうとしてきたため、その右足で犬型生体兵器の顔を蹴り飛ばそうと足を勢いよく振る。しかし反射的に体を横に反らしてその蹴りの直撃を避けた生体兵器は、今度は振り上げた右足に再び飛びかかる。だが龍彦も片足で立ったまま跳ねてその攻撃をかわし、上がっている右足を、犬の背骨を思い切り踏みつけてやろうという気持ちで下ろす。だがこれも避けられて、足の裏はそのまま接地した。半長靴の底とアスファルトがぶつかる鈍い音が鳴る。

（早く何とかしないとなんだがなあ！）

生体兵器が『雷光』のみに攻撃を加えているならいいが、もし他の一般市民などに意識を向けてそちらを攻撃し始めたら、非常にまずい。

鋭敏になった聴覚により、こちら住宅街一帯に展開しているパトカーのサイレン音や、多数の警察官が展開して周囲を封鎖する騒がしいかけ声などが聞き取れた。それでも、近くの住宅からは住人の生活音が響いている。一歩間違えば、複数の民間人が生体兵器に殺されるだろう。

龍彦は思い切って、自分の体を張って強引に生体兵器を取り押さえることにした。腰を落として、視線の高さが六〇センチほどの犬型生体兵器と同じ高さまで自分の視線を下げた。

（よっしゃあ、どっからでもかかって来い　　）

と思った瞬間、生体兵器が地面を蹴って跳びはね、龍彦の顔面に噛みつきこうと口を開けた。開いた口の中から、真っ赤な舌と大きな

歯が龍彦の目の前に現れた。そのグロテスクな光景に少し背筋がぞつとしてしまった。

腰を引いてはだめだと自分に言い聞かせ、龍彦も十分に低い姿勢を維持したまま、前に飛び出す。相手よりも低い位置に頭を置いたおかげで、生体兵器の下側をとることに成功する。そして地面を踏む足を始めとした全身の力を利用して、生体兵器の顎の下を強烈に打った。

下から跳ね上げられるように攻撃を受けた犬型生体兵器は、体を仰け反らせてバランスを崩し、地面に横っ腹から落ちた。しかし着地後は一瞬で四本脚で立ち上がり、何事もなかったかのようにきれいな姿勢に戻った。

（よし、これなら速い動きに反応しやすいぜ！）

アメリカンフットボールの動きが、一部役に立ってよかった。

もう一度同じ姿勢で、生体兵器と対峙する。相手はさつきと同じようにこちらに向かって突撃してくる。だが姿勢は、さつきよりも若干低い。向こうも学習したのか。

龍彦も同様に相手の下顎を打った。しかし今度はあまりうまく攻撃が決まらず、相手をよろけさせる程度にしかならなかった。

だがさらに、こちらから連続攻撃を仕掛けるため、龍彦は大きく身を乗り出した。生体兵器はよろけた拍子に顎の力が抜けたらしい。開き方が緩くなったその口を、上下から両手でがっちり押さえた。龍彦も飛び出した勢いで地面を転がってしまったが、この口だけは絶対に離さないという気持ちで押さえ続けたため、生体兵器は龍彦に掴まれた頭から引っ張られる形となり、龍彦と一緒に地面に引きずり倒された。

地面でのみ合いも荒々しい。この犬型生体兵器は、体重は五〇キロも無いだろうに、とんでもない力で龍彦の手を振り切ろうとする。下手をすれば龍彦の方が振り回されそうな勢いだ、龍彦も踏ん張って、何とか自分が生体兵器の上に乗っかるうとする。

顎を掴んだ手に力を入れ、生体兵器の首を捻り、強制的に相手の

腹を地面に向けさせた。だがそのときに相手の前足の爪で両腕や顔を挟まれる。それでも龍彦は暴れる生体兵器の背中に押し掛かり、その生体兵器の動きを固めた。

「中原さん、ここからどうすれば……？」

両手で生体兵器の口を押さえているため、龍彦は自分で拘束具をかけることができない。どうすればいいのかうろたえていると、中原が静かにこつちにやってきた。

「今、顎に拘束具をかける。そのまま抑えている」

中原は、銀色に光るものを取り出した。中原は、まず手錠と同じような拘束具で生体兵器が口を開かないように固める。それから鎖でつながったもう一方の大きな金属の輪を、生体兵器の首にきつく締めた。顎と首を鎖で繋ぐことで、がっちり口と口の動きを封じる仕組みだ。

それらが緩んでいないかどうかをもう一度確かめてから、中原は別の拘束具を龍彦に差し出した。

「そのまま慎重に手を離して、こいつの前後の足をセットで、左右別々に繋ぐんだ」

「はい」

言われた通り、竜彦は右の前足と後ろ足、左の前足と後ろ足をそれぞれ拘束具でつないで固定する。拘束具をかけるときでさえ、この生体兵器は頑強に抵抗して龍彦の手の甲にさらなる傷を負わせた。そして最後に中原は、生体兵器の体に合わせて縦に二本ある鎖を、もう一つの拘束具でつないだ。これで前後左右全ての動きを封じることができた。これでやっと、龍彦は力を抜いて立ち上がった。

改めて周りを見ると、パワードスーツを着た『メカ』の隊員たち十数人が展開している。その中の二人がこちらにやってきて、犬型生体兵器を回収していった。全身を拘束具で固められても、未だに攻撃の意思を緩めようとせず、なお反抗しようともなくその姿が、何だか哀れに感じた。

「そうだ、もう一体の方は」

「今、俺の部下が追跡してる」

龍彦の頭の中を読んだのか、山石は落ち着いた声で言った。

「大丈夫か？ 腕と顔、血だらけだぞ」

「あつ……」

そう言われてから、鈍い痛みに気がついた。上着の裾から肘にかけての部分は見事に引き裂かれ、赤いどろりとした液体を吸い込み、赤く染まっている。右手で自分の頬をそつと触ると、血が滴る。かなり切りつけられたようだ。だがなぜだろう。不思議に痛みはそんなでもない。

（この傷も、すぐ治るのか？）

腹に穴をあけても再生した自分なら、この程度の傷くらいどうってことないはずだ。

「すぐオレも追います！」

「おいおい、おめえは自分の身を心配しろ」

「いえ、このくらいの傷だったら、すぐに再生しますよ」

「本当に大丈夫なんだな？」

山石に続き、中原も疑り深い顔をした。だが中原は、脇に抱えていた『雷光』用のヘルメットを龍彦に手渡した。

「次からはこれを被れ。今度は堂々たる戦闘任務としての出動だ」

「はい」

顔の血を作業着の上着で拭い、ヘルメットを被った。このヘルメットには、素顔を隠すという意味の他に、今回のような頭部への攻撃から身を守る意味もある。

「だがおまえの任務は、逃亡した生体兵器を追跡することではない。そっちの任務は『徹芯』や『開闢』任せ。俺たちは、まず遠野の自宅を搜索する。また別の生体兵器が隠れているかもしれないんだからな」

中原の言うことは正しい。龍彦は少々焦っていたようだ。

そのとき、携帯電話の着信音が鳴った。山石が自分のポケットから携帯電話を取り出した。

「どうした仲井^{なかい}? ……なに! 見失ったあ?」

その一言で、その場が凍りついた。

「……わかった。うん……はいはい。そうだなあ、あとは本庁のへりに頼るしか」

見失った 不安感が、心の中で急速に増大していく。それと、出現と同時にもう一体を逃がすという隙を作った自分を恨んだ。

携帯電話を切った山石は、開き直ったようにこちら側に向いた。

「あとは本庁のへりだけが頼りです」

「仕方ありません。上空からの追跡に期待しましょう」

中原と山石でそんなことを話していると、本庁から来たらしい初老で七三頭の警部が部下を引き連れてやってきて、家宅捜索が始まった。

まず龍彦が先頭になって、屋内で何か不審な点を感じないかを見る。それから数人の『メカ』の隊員たちと一緒にその場の安全を確かめてから、中原や山石、先ほどここにやって来た本庁の辻警部^{つじ}などの捜査員が、入念に室内を見て回る。

「あれ、遠野もあの犬もいないぞ……?」

一階から二階までの全ての部屋を確認したが、さきほどまで家にいたはずの遠野とその愛犬の姿が見当たらない。

(どういうことなんだ?)

とりあえずその旨^{むね}を『メカ』の分隊長に報告し、全員でもう一度捜索してみたが、彼らを発見することはできなかった。

「大島巡査」

玄関近くに戻ってきた龍彦を、辻警部^{つじ}が真つ先に呼んだ。捜査一課の係長を務める辻警部は、七三頭・四〇歳前後の年齢・真面目そうだが全体的に特徴の無い話し方……などが作用して、刑事よりも行政官という言葉が似合う。

「遠野泰造はいたか?」

「いえ、姿は確認できませんでした」

「そうか。いつの間に逃げたのか……」

そのことだが、龍彦は何か引つかかるところがあった。その何かはまだ自分でもわからないのだが。

「先ほど二体の生体兵器がいましたが、もしかすると、あれらが遠野とペットの犬であると考えられます」

中原の言葉で、龍彦もピンと来た。

「あ、オレもそう思います。大型のと小型のとがいましたが、それぞれ遠野と犬の体格にぴったりだと思います」

「なるほど。そういうこともありうるのか」

辻警部はいくらか感心したように頷きながら、さらに別の部屋へと入って行った。

だがそう考えると、龍彦はさらに落ち込んでしまう。改造人間一人を逃がしたということは、容疑者と生体兵器のセットを丸ごと逃がしてしまったのと同じだ。

(頼むから、逃げたのを見つけてくれよ……)

龍彦はもう、神に祈るしかできなかつた。

第2編(2) 肉食怪物、現る(後書き)

第2編の結末までは、もっと早く投稿できそうです。

また第4部までを見たら、誤字脱字が多くて本当にすいませんでした。漢字の変換ミスや、タイプ時のミスなどがそのまま残っている個所が多くあり、大変読みにくかったかと思えます。

また改めて自分の文章を確認しますが、可能ならばその誤字や脱字を改善したものに切り変えようかと考えています。第6部からはもっと慎重にチェックしてから投稿しようと思うので、お許しください。

第2編(3) 改造人間という存在(前書き)

すみません。第2編の完結までもう少しお待ちください。第1編のように3部で完結ではありません。第2編(3)で完結だろうと思っていた方々、期待を崩してしまい申し訳ありません。

あと1部、最悪でも2部で完結できると思います。

では、第2編(3)をお楽しみください。

第2編(3) 改造人間という存在

警視庁本部が緊急実施した一斉検問やヘリによる捜索にも関わらず、逃亡したもう一体の犬型生体兵器を発見することができなかった。夜の九時半まで遠野宅にて周囲を警戒していたのだが、現場幹部の辻警部や生体兵器との戦闘に当たった龍彦・中原・山石の三人は、いったん本部へ戻るよう出口から指示が入ったのだ。

(クソっ……！)

帰路につく中原の車の中で、龍彦は唇を噛んだ。

「気にするな。一体のサンプルを生きたまま確保できたんだ。改造原理や対処法を、すぐに研究開発課が明らかにするだろう。そして機会が来たらまた、全力で戦えばいい」

いくらか柔らかい表情で、中原は意気消沈している龍彦を励まそうとした。

「確かに、それもそうなんですがね……」

ふと窓の外に視線をやる。あの猛獣が、逃げる途中で民間人を巻き込んだりしていないことを心から願った。

科特警の本部に着くと、すぐに報告会が始まるどころだった。龍彦はまず血だらけの服を何とかしなければならぬので、自分の口ツカーの中にある唯一の衣類 黒の半袖Tシャツを着て、合同捜査本部の設置された本会議室に向かった。最初は後ろの方にぽつんと空いた席に座ろうとしたが、中原からは、なぜかできるだけ前方に座れと指示された。

そして本庁一課管理官の菊池警視が進行役を務める報告会が始まった。時刻はすでに一〇時近い。

「もうお分かりでしょうが、今日は事態が急変しました」

菊池警視はその言葉の後に、本日昼ごろに河川敷で男性二人が殺された事件の概要を簡単に説明した。

今回殺されたのは、飯島哲士いいしまてつしと喜多川浩太きたがわこうたの二人。暴力団員の準

構成員ともいえる身分で、今までの逮捕歴には傷害と恐喝が複数並んでいる。こういうことを考えてはいけなのだろうが、龍彦個人としては、殺されたのがこういう類たぐいの人間であってよかったと思う。社会の中の有害な要素が二つ消えたのだから。

「その後から現在にかけての説明は、中原警部補、山石巡査部長、そして大島巡査から直接に報告していただきます。よろしくお願いします」

菊池はそう言って演壇から降りた。入れ違いに呼ばれた三人が前に出る。

まず中原が、演壇に上がらずに発表した。

「科特警の中原と申します。本日午後五時五〇分ごろ、私と山石巡査部長やその他四人の捜査員、さらに大島巡査を伴い、現場近くにいたとされる遠野泰造の自宅へと向かいました。その後は」

大島「巡査」という言葉が、再び龍彦の心を打った。この肩書にふさわしい働きができたのか、また自問自答する。

中原と山石が交互に説明する形で、遠野泰造の自宅に向かってから大型生体兵器を見失うまでの状況を詳細に報告した。特に龍彦が小型の方の生体兵器と戦い生きたまま身柄を拘束した部分は、他の捜査員からも積極的な質問があり、龍彦自身も前に出て質問に答える機会が何度もあった。好奇心の目をした捜査員たちからあれこれと聞かれたが、一番印象に残ったのは、「私たち一般の捜査員でも、生体兵器の身柄確保は可能なのか。戦った者として率直な意見を聞かせてほしい」という質問だった。

その質問者は、三〇歳前後の体格のいい男性だった。体力勝負ならば、人生の中で一番油ののった時期だろう。そんな男性捜査員が、実力面での不安を吐露したともいえる質問をしてることが、非常に意外に思えた。

しかもプロの捜査員たちの前で、駆け出し　どころか例外もいいところの自分が、実力面について意見するのだ。慎重に言葉を選ばなければならぬと龍彦なりに熟慮し、「不可能ではないが、拳銃

などの武器が全く使えない格闘戦が主となるため、生身の人間では非常に危険なので、積極的な戦いを避けるべき」という趣旨の言葉を申し上げたところ、山石が横から出てきて、はつきり「無理だ」と断言してしまった。そのときの山石は、表情からわずかながら恐怖を感じ取ることができると、表情が強張っていた。自分のような悪ガキを追い回して怒鳴りつける血の気の多い『オヤジ』が怖気おしげづいたような顔を見せたのだから、それはそれは強い印象を龍彦に与えた。

それから、外部との連絡係を担う出口が、本庁のへりによる搜索や検問について説明した。

「へりによる搜索は午前一時まで、検問はそれより一時間前の午前〇時で終了します。以降は科特警が追跡調査を行います」

現時刻を考えれば、へりや検問はすぐに無くなる。できればこの搜索が終わらないうちに遠野が見つかってほしい。

「続いて、この犬型生体兵器の詳細について、科特警の技術部門の職員により説明していただきます」

菊池の言葉の後に、川井が演壇に登った。

「科特警の副署長兼研究開発課長の川井です」

川井は一礼して、天井からスクリーンをおろし、部屋の電灯を暗くした。そしてスクリーンには、今日龍彦が戦った生体兵器の写真が映った。

「まずこの犬型生体兵器ですが、我々は以降『狂犬』バーサーカーと呼ぶことにします」

これはびつたりな名前だと龍彦は思った。

「この『狂犬』バーサーカーの特徴は、犬型の姿を維持しながら猫のような柔軟性と瞬発力を備えているところ、非常に強い噛む力、さらには攻撃性です」

一般的な犬に比べて、脚が短くて全身の関節が柔らかく、短い距離を速く走ったりジャンプしたりという動作に向いているらしい。また噛む力はとてつもなく強く、歯の硬度は鉄を上回るものへと変

化しているため、鉄を噛めばくつきりと歯形が残るといふ。

(手を噛まれてたら、簡単に食いちぎられてたな)

さすが、人体の上半身を骨ごとガツポリと噛み砕いただけはある。「そして、この『狂犬』^{バーサーカー}のもう一つの姿がこれです」

もう一つの姿　妙な言葉に、部屋中の捜査員たちが首をかしげた。龍彦は、やっぱりかという気持ちになった。

スクリーンの画像が変わると、この部屋にいるほとんどの人間が息をのんだ。

(あの犬だ……)

遠野宅の玄関で寝転がっていた、あの大人しそうなクリーム色の犬である。

「普段は通常のペットと全く同じ外形をしています。体内の興奮物質が一定以上の量に増えると、生体兵器の姿に変身することがわかりました。逆に興奮が収まると、元の犬の姿に戻ります。注射の痕もいくつか発見されたため、誰かが外部から興奮剤や鎮静剤を打つことで変身の相互変換を行っていたものと推測されます。現に私たちも、鎮静剤を打って普通の犬の姿に戻しました」

会議室全体がどよめいた。特に、生体兵器を見る機会の少ない所轄や本庁一課の捜査員たちは、みな表情が崩れている。

通常の人間が改造人間という生体兵器の姿に変身できるのなら、人間以外の動物が変身できたっておかしくはない。その点が龍彦の頭の中に入っていないかった。あの犬にももっと注意を向けておくべきだったのだ。

「また逃げた大型の方ですが、これは恐らく、遠野自身が生体兵器の姿へと変身したと我々は考えています」

部屋の隅々から、驚嘆の声が上がる。

「そんなことが可能なんですか？」

前の方に座っている若い捜査員が川井に尋ねた。

「人間から四足歩行の動物に変身しても、おかしくはありません。体内にそのような動きを可能にする特殊な生体部品があれば、可能

です」

大して興味もなさそうに、川井は答えた。

「ですから犬型の生体兵器を見ただけで、それを勝手にただの動物だと思い込んでだめだということです。それが人間である可能性も十分あります。人間は他の動物と違って知能が高く、どんなことをしてくるかわかりません。そして厄介なことに、それが元々人間なのか動物なのか、明確な判断基準がありません。くれぐれもご注意を」

ため息が混じった反応が、部屋中から沸き起こる。

(つまり、『狂犬』^{バーサーカー}を見たら全部人間だと思ひ込むくらい慎重にならないとだめなわけか)

例えばの話、目の前にいるのをただの犬だと勘違いして、その場でポロつと捜査上の秘密を口にしたりしないよう、十分注意しなければならぬということだ。

「次に、秋口政文殺害の件についてです。秋口が殺害されたマンシヨンの外の壁で、一定間隔で縦に刻まれた微妙な傷跡を発見しました」

スクリーンの映像が切り替わり、傷の拡大写真が現れた。マンシヨンの壁の塗装が、微妙に剥がれているのがわかる。

「この傷は、秋口の部屋のちょうど真下から始まり、秋口の部屋の高さで無くなっています。おそらく犯人は、この壁をよじ登って秋口の部屋に侵入したものと思われます。全体の傷跡から、犯人はここを上下に『往復』したことがほぼ明らかになっています」

配られた捜査資料の束をめくり、秋口の住んでいたマンシヨンの全体図を見る。秋口の部屋の真下は、柵や自転車小屋があつてマンシヨンの敷地の外からは見えない。そしてある程度の高さまで登ってしまうと、夜ということもあり自転車小屋付近を歩く人間の視界に映りにくくなる。『狂犬』^{バーサーカー}と戦った自分の意見としてだが、あれほどの身軽さがあれば、マンシヨンの一三階まで壁を伝ってよじ登ることぐらい楽勝だとも思う。

「ただ、秋口政文を殺害したのが遠野泰造なのか、それとも他にも『狂犬』^{バイサーカー}に変身できる人間がいてその人物が秋口を殺したのか、それはまだわかりません。東野修^{ひがしの}の件も同様で、現場が互いに近くて環境も似ているとはいえ、同一犯による犯行だと断定できる証拠はありません」

「事件の背後に何らかの組織が絡んでいて、その組織が犯行を計画し、遠野ら改造人間に実行を指示したということも考えられます。改造人間を生産するには、多くの資金とそれなりの設備が必要です。これらの事件が単なる遠野^{トビ}の単独犯行という可能性は、むしろ低いでしょう」

出口が口を挟んだ。

「同一の組織が犯行を計画・指示したのなら、東野^{ひがしの}と今回の二人の事件現場が似ているのも納得できる」

菊池警視も頷いた。

その後によろやく、今後の捜査方針について意見がまとめられた。まとめ役は出口だ。

まずは逃亡した遠野泰造の身柄の確保。これは猛獣を檻の外に放しているのと同じであり、一般市民への潜在的な被害が十分考えられる。できるだけ早急に彼を発見し、自由を封じること。

「ただし『狂犬』^{バイサーカー}の存在は、非公表とします。世間一般には、あくまで『遠野泰造』として指名手配してください。もし改造人間という存在が公になれば、世間は大パニックになるでしょう。いらぬデマまでが広まり、人々が互いに相手が改造人間ではないかと疑心暗鬼になります。現在の社会がこれ以上ややこしくならないように、機密の保持は徹底していただきたい。我々の任務は、社会の安定と調和を保つことです。そのことを念頭に置いて活動してください」

次は『狂犬』^{バイサーカー}の製造元の摘発。厳密に言うと、この仕事は今の捜査本部の管轄には含まれない。しかし事件の解決と不可分であるため、科特警が捜査を進める。この仕事には、科特警の公安課が現在全力を挙げて当たっているが、今後は公安部からの応援を頼む方針

であると出口は告げた。警視庁公安部から応援を頼むのは、犯行の目的や動機が全くわかっておらず、さらに背後に何らかの組織の関与が考えられる以上、テロ組織などの組織犯罪の摘発を得意とする公安部の力が不可欠と考えられたからだ。

最後に人員の割り振りだ。遠野とのおのの搜索、東野ひがしのや秋口を殺害した犯人の特定、生体兵器製造施設の発見など、やらなければならぬことは多い。龍彦ら未成年三人は、常に改造人間として戦えるように心の準備をしておくように注意された。ついに犯人の生体兵器と遭遇した。今後は他の捜査員に同行する機会も増えるだろうから、心しておけよと出口は言った。

やっと報告会が終了した。順次会議室から出ていく人の流れができていた。龍彦は今回の戦闘について、捜査本部にとはまた別に、科特警のスタッフにも報告しなければと思ったため、最後に部屋を抜けようと座って待っていた。そうしていると、雪菜と清子がこちらにやってきた。

「リュウ、お疲れさまっ！」

「怪我は無いですか？」

二人とも、足元が半長靴だ。やはり二人にも出勤命令が下ったのか。

「おう。怪我は確かにしたが、オレの抜群の治癒力でもう治った。

ほら、ここに結構深い傷があったんだけど、もう瘡蓋かさぶただけだ。作業着は血だらけになったよ」

腕まくりをして傷跡を二人に見せた。噴き出た血の量を考えれば、傷は間違いなく腕の動脈にまで達していたはずなのだが、今はもう、完全に血が止まり、瘡蓋もぼろぼろと剥がれ落ちつつある。本当に自分でも不思議だ。

「あんまり無理しない方がいいわよ？」

「無理するために、この治癒力があるんだろーが」

「しかし油断は禁物です」

「まあいいじゃねーかよ。だいたい、もう一体の方は逃がしてるん

だ。褒められた成果じゃあねーわな。 オレが出動してる間、二人は何してたんだ？」

「私と清子は訓練を中断し、日高警部補ひだかの車で『狂犬』バーサーカーを追跡する車両に追いつこうとしました。しかし途中で目標喪失の通達が入り、結局一度も外で変身せずに本部へと帰ってきました」

「追いつき次第、私たちは変身して車を降りて、『狂犬』バーサーカーを自分の足で追いかける予定だったの。私たちが移動している間に出口さんが私たち二人の変身許可を取ったところまでは良かったんだけど……」

「無理もない。『狂犬』バーサーカーは隣接するビルを斜めに飛び移って逃げたという報告があった。こうなると車は左折と右折を繰り返しながら走らなければならず、スピードも出ないし走る距離も長くなってしまふ。おまけに都心に近付いて建物の高さが高くなっていけば、地上から見えにくくなる。ある意味、どうしようもないのだ。」

「これから科特警は、独自の生体兵器を用いて遠野泰造の捜索を行います。遠野の行方が分かり次第、すぐに私たちは出動することになります。今夜は本部に泊まり込むことになるかもしれませんが……」

「おい雪菜、独自の生体兵器って何だ？」

科特警の生体兵器と言えば、自分たち改造人間しか思いつかない。雪菜はいつたい何の事を言っているのだろう。

「それも含めて、出口さんや川井さんから話を聞きましょう」

疑問を感じている龍彦と清子に、雪菜は早く第一事務室に行くよう促した。

第一事務室にしばらくいると、出口と川井が帰ってきた。ただ、涼子の姿はどこにも見えない。

出口と川井は三人の姿を見つけると、三人を出口の机の前に集めた。

「今後の三人の活動について何だが、まず今夜は三人とも残業だ」

残業 その言葉を聞いて感じたのは、一般的な拒否感ではなく、緊張感だった。

(まだ任務が継続するんだな)

今夜は徹夜になりそうだ。

「順を追って説明する。まず科特警が保有する、最高レベルの嗅覚を持つ警察犬を捜査に駆り出して、一刻も早く遠野を探し出す。三人のうち二人は、警察犬を抱えて直接ビルの上をたどり、もう一人は地上の車でそれを追っていく。遠野を見つけるか、または何か新たな情報を手に入れることができたからそこで一度追跡は終了だ」

「匂いの追跡なら、私たち三人でもできるんじゃないでしょうか？」

『開闢』はもちろん、『徹芯』や『雷光』も強化された嗅覚を持っていると思っただんですけど……」

清子の言った疑問には、川井が答えた。

「これから使う生体兵器の嗅覚には、たとえ変身後のあなたたちでも敵わないわ」

「その生体兵器つてのは、いったい何なんですか？」

科特警が持つ生体兵器と聞いて待ちきれなくなった龍彦は、身を乗り出して尋ねた。すると出口は引き出しから写真を一枚出して、机の上に置いた。

「こいつがその生体兵器だ。名称はそのまま『嗅覚犬^{きゅうかくけん}』だ。これは通常の犬の百倍以上も敏感な嗅覚を持っていて、どんなにわずかな匂いでも逃さずとらえ、標的までの道を正確にたどってくれる。日本警察がひそかに備える生体兵器の中で、最も使い勝手のいいやつだ」

写真を見る。写っているのは、白と茶色の毛が生え、耳がピンと立った中型犬だ。どうみてもただのペットにしか見えないのだが……。

「……これが生体兵器なんですか？」 ^{バーサーカー}『狂犬』みたいに変身したりするんですかね？」

「変身なんてしねえよ。嗅覚を強化しただけの生体兵器だ」

「人工の嗅覚器官を移植しただけだから、それ以外の部分は通常の犬と全く同じ。変身はしないし、する必要も無いの」

造られた目的は、純粹に匂いの追跡のためだけか。

それから分担を決める。二人が匂いを追いかけ、残り一人が車に乗って想定外の事態が起きたらバックアップする。最初は運動能力の優れた『徹芯』と『雷光』が追跡、情報処理など多彩な機能に優れる『開闢』を待機させるという案もあったが、すでに改造人間と一戦を交えた龍彦の疲労を考慮して、龍彦が中原の車で様子をみることになった。

この任務の目的はあくまで調査であって、改造人間の拠点を一気に潰しにかかるわけではない。担当する人間は、龍彦ら三人の他は、中原をはじめとする三人の捜査員と、技術面でサポートする川井のみだ。

龍彦は、中原と寺尾しへい巡查の乗る車の後部座席に乗った。血が固まった服に代わる新品の茶色の作業着を与えられたが、妙に真新しく落ちて着かない。

(ヘルメット、拳銃共に異常なし)

装備を点検しつつ車の外に目をやると、雪菜と清子と川井が、一匹のコリーと遊んでいるのが見えた。あれが『嗅覚犬』だ。

彼女たちと仲良くじゃれ合う姿を見ると、生体兵器どころか警察犬にも見えない。生体兵器という単語を聞くと、『狂犬』バーサーカーのような凶暴で高い戦闘力を持つモンスターのようなものを想像してしまうのだが、あのようなコリーまでも「生体兵器」と呼ぶのは、龍彦としては、なぜかすつきりしない。

そんなことを考えていると、すぐに車が出発した。数十分車を走らせると、『狂犬』バーサーカーが最後に確認された場所についた。我々の三台の車のうち、龍彦やらが乗っている二台の車がビルの路地裏に止まった。

車の中でヘルメットを被り、人目を避けるようにして車から降りる。そして龍彦・雪菜・清子の三人で行動を確認する。雪菜は『嗅覚犬』うかがけんの綱を手で掴んでいる。

「ではこれから任務を開始します」

「了解。おまえら気をつけろよ」

「わかつてるわ」

そして雪菜と清子は、それぞれ「徹芯」と「開闢」に変身した。

雪菜は「嗅覚犬きゅうかくけん」の体を片腕で抱えたが、それでも「嗅覚犬きゅうかくけん」は嫌な顔一つしない。それどころか愛嬌のある可愛らしい様子のままだ。二人は車や小さな建物の屋根を段階的に上り、目的のビルの屋上に上った。それを見届けた龍彦も、中原の車に戻る。

「遠野の匂いを捉えました。移動します」

車のスピーカーから、雪菜の声が聞こえた。追跡開始だ。

追跡を始めてから一時間半。つい数分前まで、雪菜は清子と一緒に、建物と建物の上を飛び移る移動方法だったが、やっと地面を歩く時間が増えてきた。スタート地点から北西の方角に進んできたが、そろそろこの辺りで、遠野は変身を解除し、通常の人間の姿で地面に降りたのだと考えられる。

(そう考えるのが自然です)

ここまで来れば、遠野が隠れそうな建物に目星がつくかもしれない。

「中原さん、この近辺に改造人間の本拠地となれるような施設は無いでしょうか？ 遠野の匂いは、もう大きな道路にしかありません。遠野は自分の行く目標、つまり我々にすれば何らかの手がかりがつかめる特定の場所に行こうとしたのかもかもしれません。この辺りは住宅街ですから、ただ闇雲に逃げるのならその中を逃げ続けてもいいはずですよ」

雪菜と清子の約五〇メートル後方をゆっくりと車で走っている中原に問う。

「それはありえるな」

被っているヘルメットに内蔵されたマイクと小型スピーカーで、互いに会話ができるようになってる。

『それらしい施設はいくつかある。化学工場、ハイテク部品工場、農業研究所、それに案外老人ホームなんてのもありかもしれない』

『中原くん、その地図の内容をデジカメで撮って、その映像を『開闢』に送信してあげて。人工知能で記憶できるはずだから』

中原たちとはまた別の車に乗っている川井が、指示を出した。

清子は数秒間目を閉じて、それから地図の情報を受け取ったことを中原に告げた。

「人工知能へのデータ保存が完了しました。この地図を参考にして匂いがどこへ向かっているか推測したいと思います」

『それと、二人はいつたん変身を解除しろ。そしてヘルメットを脱げ。夜だから助かったが、その姿は怪しすぎる』

雪菜は清子と自然に目が合った。今まで気がつかなかった。

二人はすぐ近くで隠れながら移動している川井らの乗る車に戻り、その中で変身を解除した。

「どう二人とも？ 自分の鼻でも匂いを嗅ぎ分けられたかしら？」

「一応できましたけど、犬のように地面を這うことはさすがにできないので、注意しないと意識から消えてしまいそうです」

「私も清子と同じです。それに、変身後の姿のままでの調査任務は不適切です」

だからこそ、動物の姿をした生体兵器が必要になってくるのだ。

『おまえら、そろそろ交代するか？ もうだいぶ歩いただろ』

運転席のスピーカーから、龍彦の声が響いた。緊張からか、若干声が張っている。原因は、生体兵器と初めて冷静な状態で戦い、その強さをあらためて体感したからだろう。

「いいえ。私は大丈夫です。リュウはすでに犯人側に顔が割れていますから、こっそりとした調査には不向きです。清子はどうですか？ 匂いの追跡だけなら、私一人で犬を引いて歩けば十分です」

「私もまだ全然歩けるよ。そんなにバカにしないでよね」

清子は力の抜けた返事をした。雪菜は清子のことを注意深く観察し、精神的に何か変わったところが無いかチェックする。清子の精

神状態がまだ不安なのだ。

(清子はいつも笑っているので、何を考えているのかわかりにくい……)

二人はヘルメットを脱いで、再び車の外を歩く。作業着に半長靴という装備でもまだ目立つだろうが、夜であることがせめてもの救いである。

「私だって、雪菜ちゃんやリュウに負けたくないからね」

雪菜と二人だけ外に出たところで、清子は通信マイクに拾われないうちに注意しながら、雪菜だけにそう言った。そのときの彼女の表情は、前よりも生き生きしているように見える。

「そうですね」

雪菜は犬に地面の匂いを嗅がせ、道を先導させる。

「雪菜ちゃんって、リュウと同じ改造なんだよね。そのことについて、どう思う？」

「どう思うと言われても……、特別考えることはありません」

清子がなぜこの話題を出してくるのか意図がわからず、雪菜は戸惑いながらも無難な答えを返した。

「最初にその話を聞いた時、私は結構興味が湧いたわ」

「なぜですか？」

「単純に、おもしろそうと思ったからよ。知らない人間同士が、どこか過去で繋がっている可能性があるなんて、なんか神秘的でかっこいいじゃない」

「そう思うのも尤もですね」

清子でない別の人間でも、おそらくは同様に好奇心を示すと思う。雪菜も、龍彦の存在には興味がある。もちろんそれは、自分と同じ改造を背負う者として、自分の謎の鍵を握るかもしれない人物としての興味だ。

「もし『徹芯』と『雷光』の仕組みが解明されたら、二人はやっぱり、普通の人間に戻されるの？」

「そうなるはずですよ。それが原則です」

医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法。この法律は原則として、人体を自然でない状態にし、かつ社会的に認めるべきでない状態にする技術を、故意に人体に利用することを禁止している。違反者は、その状態を医学的な行為により強制的に解除され、その後懲役刑がつく。基準が曖昧だと批判されることもあるが、雪菜や龍彦のように常人からかけ離れた身体能力やその他の感覚を持つ状態は、明らかにこの法律に抵触する。

「もしそうになったら、警察の改造人間は私一人になっちゃうのね。それを考えると少し寂しいわね。あつ、雪菜ちゃんはやっぱ普通の人間に戻りたいのかな？ それなら今の発言は、ちよつと良くなかったかしら……」

「別に気にするような発言ではないですよ」と言いつつも、自分の心に問いかけてみる。

自分は普通の人間に戻りたいのか。戻りたいというより、戻るべきだと自分は考えている。そもそもこの問題は法律で定められた基準があり、自分の意思が介在する余地は無い。今までそのような捉えていた。だが改めて自分の意思を問われると、はっきりと答えが出てこない。

（私はいつたい、どうしたいんでしょう？）

それから雪菜と清子は、何もしゃべらなくなった。もう日付が変わった。しんと静まり返る中を歩き続けていたが、突然「嗅覚犬きゆうかがいぬ」がその場に止まった。地面の匂いをより詳細に嗅ごうともぞもぞと動くが、その場から一步も前になくなった。

（ここが遠野のやってきた、最終地点でしょうか？）

足を止めたのは、三階建てのビルの前だった。街灯の明かりを頼りに、ビルの看板に書かれた縦書きの文字を読んだ。

『安中ペット保護協会（ペットを捨てるなら、私たちのもとに）』

一行は、連絡を受けて張り込みに来てきた班と入れ替わる形で

撤回した。本部に戻ったのは、午前二時過ぎだ。

「中原さん、これからどうするんです？」

何も出番が無くてやる気を持って余っていた龍彦は、廊下を歩いている途中に、中原に尋ねてみた。

「安中^{やすなか}ペット保護協会を緩やかに囲むようにして、検問を敷く。遠野はこれで完全に足止めされる」

雪菜と清子が、犬の散歩のふりをして目を付けたビルの周囲を観察して回った。さらに雪菜は変身し、改造人間の鋭い嗅覚を用いて自らも調べたが、龍彦たちがやってきた道以外、遠野の匂いは検出されなかった。とすると、遠野はまだあのビルの中にいる可能性が高い。

「早く殴りこみに行きたいって、顔に書いてあるぞ」

「そういうわけじゃありませんけど……」

あまりよろしくない中原の冗談に、龍彦は気まずそうな返事しか返せなかった。さつさと殴りこみたいのではなく、早くこの事件を解決したいと思ったのだ。

第一事務室では、先に帰ってきた雪菜や清子や川井が、出口の机のところまで報告しているところだった。

「おう、来たな！」

出口に手招きされて、龍彦と中原も、出口の周囲を取り囲むような位置につく。何となく、龍彦は雪菜と目が合ってしまった。

「まずこれを見てくれ」

出口は、自分のノートパソコンを回し前後の位置を変え、龍彦たちとその画面を見せた。

そこに映っているのは、あの安中ペット保護協会のホームページだ。緑や黄色の敗色が多いデザインのページが優しそうな雰囲気を出し、会長の指名や電話番号、メールアドレス、さらに丁寧なことに顔写真まで載っている。

「ホームページまであったんですか……」

少し啞然としたように、清子が言った。龍彦も同じ気持ちである。

このホームページを見ただけでは、とても改造人間に関わる団体だとは思いつかないはずだ。

「ホームページの他に、駅前でビラ配りもしてるらしい。どうしても手に負えなくなったペットを無償で引き取り、他にほしがる人に譲るなり販売するなりしてるんだ。主な収入元は、外部からの寄付だ。ホームページにも、寄付が実行できるページがある」

出口が画面のボタンをクリックすると、寄付画面に切り替わる。先月に集まった寄付金の額と、それに対する感謝の言葉が表示されている。

「先月の寄付は一〇万円か。集めたものだな」

ページに載っている金額の数字を、中原が刺すように見ている。「ペットを集めたのも、おそらくは実験用の動物の確保が目的ならうまく納得がいくわね。研究者として最も悩む問題は、資金不足。でもこれなら材料もたくさん揃うわけだし、世間の目もやさしくなるだろうし」

川井は感心したように、顎に手を当てている。

「肝心なのは、このペット保護団体と遠野泰造が、どこで繋がってるかって点なんだよなあ。まあそこは後から調べるとして、まずはこの施設に立ち入り、何か改造人間に関する証拠を掴みたい。だけど現時点の証拠だけじゃ、令状は出ねえ。明日から、団体のある建物から出てきた人間や車に所持品検査をやってみるが、相手もそこまでバカじゃねえだろうから、あんまり期待はできそうにねえなあ。あくまでここは資金や材料の確保が目的で、研究・開発の施設が別にある可能性が高いだろうから、そんなに決定的な証拠が手に入るとも思わん」

「良くて関連団体との資料の押収が限度ですね」

「我々捜査員は、遠野の人間関係を洗ってみたいと思います。この団体との繋がりを持った人物を発見できるかもしれませぬ」

「そうだな。そこは捜査本部とも調整しておこう」

今報告できることは、このくらいか。しかし今日は、大きな成果

を上げたのだ。夜更かしをした甲斐があるというものだ。

今後もさらなる事態の変化がある可能性もあるということで、龍彦・雪菜・清子の三人は、今夜は本部に泊まり込むことになった。しかし今は本庁や所轄との合同捜査本部が設置された最も忙しい時期であり、寝られるような場所は少ない。『メカ』の隊員たちの宿舎も大きいものではなく、すでに満杯状態だ。

というわけで、雪菜や清子、川井らの女性陣は仮眠室で、龍彦や出口などの男たちは、何と部屋の床で眠ることになった。

(こりゃ、ドラえもんよりひどいだろ)

机の下に潜って、床に仰向けになる。当たり前だが、低い天井
机の引き出しの裏が見える。

「新米のやつは机の上で寝ようとするんだけどな、落ちたら痛えし、落ちるのが怖くてよく眠れねえんだ。床でぐっすり眠れるようになったら、おまえも一人前だ」

隣の机の下に潜った出口の声でした。

「警察官って、そんなもんなんですかあ？」

「警察官だけじゃなくて、霞ヶ関の本省勤めとかになったら、これ
ができなきゃ仕事にならねえんだよ。俺は警察庁だからまだマシだ。
俺の友達は厚生労働省に入ったけど、ああいう分野は政権を担当す
る政党により政策がコロコロと変わるから、また大変そうだな。国
会会期中は、たまに月曜に出勤して土曜の朝の始発で帰ったりする
んだとさ。労働問題を担当する厚生労働省が、全官庁の中でトップ
レベルのサービス残業を課してるなんて、シャレにならねえよ」

「うっへえ……」

さすがは『強制労働省』だ。

「とにかく眠って休め。おまえは替わりが利かねえんだからな」
「はい、わかりました」

しかし慣れない環境の中で、龍彦はなかなか眠れなかった。しか
も夏休みの宿題を最後の日に終わらせるときの徹夜後と違い、心が
全く落ち着こうとしない。『バサカー狂犬』と対決した興奮がまだ収まり切

らないらしく、体が寝付こうとしないのだ。こんな状態で、朝までにいったいどのくらい体が休まるのだろうか。

社会人としての厳しさを、しっかりと体感した龍彦だった。

翌朝に目を覚ましたら、腕時計が朝の七時を指していた。学校に間に合う時間なのだが、本部に泊まり込む状況を考えれば、これは寝坊に入るだろう。

「やべっ！」

慌てて起きたら、机の脚に頭をぶつけ、机が揺れた。

(いつつ……)

ぶった頭を押さえながら、龍彦は机の下から出た。周囲を見渡すと、中には涼子しかいなかった。他の机には誰もいない。

「おはようございます」

「おはよう。やっと起きたわね、龍彦くん」

「他のみんなはどこに行ってるんですか？」

「出口さんは霞が関の方に行っただし、他のみんなは新たな事件現場に行っただわよ」

「新たな事件現場!？」

「今朝午前五時三〇分ごろ、公園に死体があるって通報が入ったの。肉と臓器が周囲に散らばっていたそうよ。雪菜ちゃんや清子も、そっちに向かったわ」

「……すみません。俺だけ寝坊して」

「みんなで龍彦くんのごことは寝かせておこうってことになったのよ。昨日は初めて『雷光』としての実戦を経験したわけで、心も体も疲れてるからって、出口さんが起こすなって徹底させたの」

「そうだったんですか」

大雑把な印象がある出口の気配りに、感謝せねばならないだろう。涼子が指差した方向を見ると、龍彦の机の上に炊飯器が置かれていた。さらにその脇には、売り物の惣菜と漬物類がある。

「その釜のご飯、全部食べちゃって。コンビニのお弁当もあるけど、それだけじゃ龍彦くんはお腹なかいっぱいにならないでしょ？」

「あ、はい」

炊飯器の中には、茶碗で約四杯分のご飯が残っていた。その炊飯器は、以前から出口がここに持ち込んでいたものだそうだ。

まだ温かい白米ご飯を、ありがたくいただくことにした。近くに箸が見当たらないので、そのまま杓しゃもじ文字を使って食事を進める。

食事の次に問題となったのは着替えだ。しかし龍彦のロッカーは空で、タオル一枚すら存在しない。今日はこのままの格好で過ごすしかないだろう。

（着替えをロッカーにでも入れとくべきだったな。次からは、そうしておこう）

それから一時間は、龍彦は黙々と書類作業を進め、そして八時の定例会議に間に合うように本会議室へと入って行った。そこでちょうど、雪菜と清子に会った。

「おはよう、リュウ」

「おはようっ！」

「おす」

雪菜と清子は、意外にも健康そうだ。

「死体見てゲロ吐いたりしなかったか？」

「雪菜ちゃんも平然としてたけど、私はここまで戻りかけた」

清子は自分の喉の辺りを指して、嫌そうな顔をした。

「オレも吐く一歩手前だったな。　って、こんな話してる場合じやねーよ」

三人は急いで、開いている席に駆け込んだ。

そのうちに、出口が演壇に登った。菊池警視は現場検証のため今は不在だそうで、代わりに出口が会議を進めた。

今度の被害者も男性だ。今回は首の頸動脈を噛まれただけで、それ以上は死体に損壊が無い。歯形の大きさから、人間ではなく中型から大型のペットが変身した『狂犬バサッカー』が殺したと推測される。被害者

の身元はまだ確認されていないが、血液や尿から違法薬物が検出されたそうだ。

「チンピラとゴロツキばかり殺されてるわけか」

鼻で笑いながら、龍彦は呟いた。

すると近くの三〇歳くらいの女性捜査員が手を挙げて、発言の機会を求め立ち上がる。

「今までの被害者の共通点は、何らかの反社会的行為に手を染めた経験です。犯人は、自分が正義の味方のもりなのでしょうか」

「犯罪者や暴力団員は社会の害虫、自分はそれを駆除する社会の救い手……」といったところだろうな」

所轄署の片山警部補も、その捜査員に同意する。

（まあ、オレも犯人の気持ちかわからんでもねーけどな）

龍彦は、あのマンション破壊事件の被害者だ。幼馴染は、両親と弟の三人を、一度に失っている。そんなことをしでかす犯罪者やその予備軍ともいえる人間が死んでも、龍彦は全く何も感じない。いやむしろ、さつさとくたばりゃよかったのにとさえ思っている。さすがにはつきりとは口に出さないが、龍彦だけでなく、みな心の中でそう思っているのではないか。

「これ以上の被害者を出さないためにも、『バーサーカー狂犬』の存在を一般に公表してはどうでしょうか？ 見知らぬ犬には近づかないよう、警戒を促す必要があると思います」

突然、四〇歳前後の男性捜査員が口を開いた。

「悪くは無いと思いますが」

片山警部補も同意し、出口の方を見る。

「私も公表は必要だと考えます」

最前列の席でそれまで黙っていた、辻警部も立った。

「このままの状況では、さらに被害者が出ます。『バーサーカー狂犬』の能力、およびこれまでに殺害された被害者の共通点を公表し、似たような立場の人々を中心に保護すべきです」

会議室の中でも、片山や辻に同意するような雰囲気傾いてきた。

だが辻警部の言葉を疑問に思った龍彦は、出口に見てもらえるように手を挙げた。

「なんだ、大島？」

「もしこの情報が公表されたら、犯人は殺害対象の種類を変え、他の善良な市民まで殺し出すかもしれません。ヤクザモンやチンピラを保護するために、潜在的な被害者の範囲を広げちゃまずいんじゃないですか？」

本会議室にいる全員の視線が集まる。言うてはいけないことなのだろうが、あえて口に出してみた。

生体兵器の事実や事件の細部にまでわたる情報が公開されたら、逆に犯人側を追い詰めて無茶な行動を誘い、事件の解決をさらに面倒にするのではないのだろうか。

「その理屈は通用しない。ヤクザモンだろうが犯罪者だろうが、命は命だ。我々はそのような命も含めて、被害者が最小限になるよう努力しなければならない」

辻警部は、表情を全く動かさない。何の感情も感じられない。辻は、龍彦と言い争いをするのではなく、当たり前前の常識を龍彦に言い聞かせるかのような意識でいるのだろう。

「正義の味方気取りの犯人が公の世論から叩かれるようになったら、犯人たちはその世論さえも『悪』と判断し、攻撃に出るかもしれない。我々は犯人たちと関わりのある施設を発見するなど、着実な成果を上げています。犯人たちを刺激するべきじゃないとオレは思います」

こんな考えが龍彦の頭をよぎったのは、以前に鱗人間うろこにんげんと対峙したときの言葉を思い出したからだ。

『現代の奴隷に、我々の任務を妨げることなどさせはしない！ 貴様には何もできせん！』

龍彦と戦った鱗人間は、あの時点では立場上ただの民間人だった龍彦のことを『現代の奴隷』と言い切った。ごく普通の市民を、敵視とは言わないまでも対立する存在と考えたのだ。世間一般の常識

で反論したって、テロリストはそれを「悪」としか看做さない。「幸い」なことに犯人たちは現在、主に社会的に好ましくない人間を「悪」としている。それならば、犯人たちが自分たちのことを非難した世間一般をも敵と看做す前に、事件を片付けるべきだと龍彦は考えたのだ。

「大島巡査の意見は、まず前提が間違っている。犯人たちが、善良な一般市民を襲わないなどと誰が保障できるんだ？ 確かに今までの被害者らは、全員何かしら他人に恨まれることをしてきた人間だ。だが、それは単なる偶然かもしれない。だいいち犯人たちが正義の味方気取りをしているというのも、我々の勝手な推測に過ぎない。相手から犯行声明でも届いたのならまだ話はわかるが、現段階での推測を前提とするのはおかしい」

片山警部補も、龍彦に反論した。

「今回は、公開やむなしだと思いますがね」

よつこらせと言いながら、会議室の右の前方に座っていた山石が立ち上がる。

「確かに大島の意見は、前提が怪しい。それに生体兵器の存在を公表すれば、公にした捜査が可能になる。むしろ今よりも円滑に捜査が進むと俺は思います。それに、やはり命の価値に差をつけるのはよくない」

「……………」

大物刑事三人に反論されると、さすがの龍彦も返す言葉が見つからない。

（そういうもんなのか…………）

善人だろうが悪人だろうが、命の重さに変わりはない。こんな言葉を本気で信じている人間などいないと龍彦は思っていたが、長年社会の汚さを見てきた大人たちから諭されると、そんな自分の考えが、なんだか間違っているように思えてきた。

「屁理屈も理屈のうちだが、所詮は屁理屈ってわけだ」

出口は発言した龍彦のことをおもしろがるように、少し笑ってい

た。

「まあ私は、『^{バイサーカー}狂犬』の存在を公表することには大反対ですがね」
「それはなぜですか？」

意外なことを言った出口に、辻警部が真つ先に尋ねた。

「この情報を公開するメリットとデメリットを天秤にかければ、すぐに結論がでます。まずメリットは、この事件の捜査がより円滑に進むということです。山石巡査部長の言う通り、公表してしまった方が、我々としても捜査がやりやすくなるでしょう。生体兵器の存在を知って驚いた世論の勢いに任せて、ペットの一斉検査なんてのもできるかもしれません。この事件の捜査だけを考えれば、都合のいいことだらけです」

「では、デメリットとはいったいなんでしょう？」

出口は少し間をおいてから、再び話し始めた。

「以前にも申し上げました。生体兵器や改造人間の存在が公になつてしまうと、世間に与える衝撃が大き過ぎ、社会がパニック状態になります。まず人々が、互いを信用しなくなるでしょう。お互いに相手が実は改造人間ではないのかと、疑い合います。そして能力が高い人間は、何でもかんでも改造人間だと指をさされてしまいます。頭が良ければあれは遺伝子に改良を加えたからだ、足が速ければあれは改造のおかげだ、というふうにです。そして遺伝子という才能にすぎる風潮を後押しすることになります。能力は努力で得るものではなく、遺伝子の改造などの科学技術で手に入れるものだという雰囲気^秀に社会全体がなれば、これまで我が日本を支えてきた価値観、教育、文化などの土台がすべて崩れます。そりゃ、なれるなら誰だつてなりたいと思うでしょうよ。強くて頭のいい改造人間に」

出口の顔も声も、もはや完全に皮肉の一色と変わっている。

「存在自体が公表されれば、必ず改造人間をヤミで作ろうとする連中も現れてきます。そして改造人間になれた者となれなかつた者との間には、必然的に熾然たる格差が生じます。改造人間になれなかつた者は、あらゆる分野のあらゆる意見を動員して、改造人間や生

体兵器の製造に反対するでしょうね。レッテル張りにぴったりな言葉には事欠かないはずです。人ならざる者、生態系への脅威、遺伝子組み換え作物 などなど。こうなったら、社会に安定など望めません」

(……………)

会議室はしんと静まり返り、誰もが出口の話に聞き入っている。

「この改造人間という存在は、現在日本が抱える中で最も複雑でデリケートな問題だと、私は考えます。それをむやみやたらに世間に公表していいものなのでしょうか。私は非常に慎重になるべきだと思いますが」

「それはすべて、あなたの推測の域を出ません」

「ではお聞きします。辻警部は初めて『狂犬』を見たとき、どんな気持ちになりましたか？ 他のみなさんも考えてください。生体兵器の存在を知った時、これは認めてはいけない、存在してはいけないものだと、わずかでも思いませんか？ 改造人間と聞いただけで、いらぬ予想を勝手に抱いていたりしませんでしたか？」

今度は誰も出口に反論できない。辻や片山は黙ったままだ。龍彦に一般の捜査員で生体兵器に対応できるのかとずばり質問した男性捜査員も口を開かない。『狂犬』に直接攻撃された山石は、気まずそうに顔を背けた。

「この部屋にいる方々はみな、警察官としての教育を受け、滅多なことでは動じない冷静さを持っていることでしょう。しかしそんな我々でさえ、改造人間の真の能力を知ってしまった今は、生理的な拒否反応を示しています。世間一般は、我々よりもずっと物事に過敏に反応し、根拠のない情報に流されやすいものだというのを、忘れてはいけません。『狂犬』の公表には、考えられないほど大きなリスクがあります。公表は絶対に控えるべきです。反論があるならどうぞ」

有無を言わさぬ口調の出口に反論できる者は、ここにいなかった。

(出口さんは、そんなことまで考えてたのか……………)

出口の言葉を聞くと、龍彦もなんだか心配になってきた。あり得ないことではない。

もしも龍彦が、普通の人間であったと仮定してみる。普段は周囲と全く変わらない人間が、突然凶暴な肉食獣に変身するなど聞かされたら、他人のことが信用できなくなるだろう。改造人間というものもその能力が明らかになっていけば、自分ならその能力に魅力を感じ、改造人間になることを望むようになるのも否定できない。そしてもしなれなかったら、もしなることができないと確信してしまったら……、果たして自分は、改造人間たちに何の負の感情も抱かずに接することができるだろうか。いや、できないと思う。表では『改造人間といえどもオレたちと同じ人間だ』などと聞こえのいいことを口にしても、心のどこかで彼らを妬み、軽蔑するようになるかもしれない。具体的にいえば、インターネット上で、出口がレッテル張りとして例に挙げたような言葉で、改造人間たちを罵るようになるのではないだろうか。

(どうせ小せえやつだよ、オレは。でもオレと同じように、世間の器も小せえのかな……)

出口一人の意見で、『狂犬』の公開は見送られることになった。

会議の終了時に、龍彦の左右に座る雪菜と清子の顔を見た。二人とも、何とも言えない複雑な表情をしている。普段は表情の変化が少ない雪菜でさえ、出口の言葉に心を打たれているのが顔からわかった。

「私たちは、改造人間なのよね……」

清子が呟く。龍彦は、それに対して返す言葉が見つからなかった。雪菜も同じらしい。

「清子、ちよつといい？」

後ろを振り向くと、少し離れた席のところ涼子が清子を手招きしていた。

「視覚拡張プログラムの調子を見るから、データをとらせて。すぐに終わるわ」

「うん、わかった」

清子はすぐに涼子のところに行こうと席を立った。

「ごめん。先に二人で訓練してて」

「いえ、どうせですから、私たちも別の作業をして待っていようと思います」

別の作業というのは、おそらく書類を片付けたりとかそういうことだろう。龍彦は少しだけ頭が痛くなった。

雪菜は出口のところを駆け寄って何か話をする、すぐに龍彦についてくるように言った。

「これから何すんだよ？」

「事件ファイルを参照してみたいと思います。リュウもついてきてください」

「過去に起きた事件資料の閲覧だ。これは俺と川井くんの許可が無いと閲覧できねえモンなんだ」

「そんなの見て、何するんですか？」

「ちょうど良かったわ。私からも二人に話があったのよね」

白衣姿の川井もこちらにやってきた。

龍彦は、これから何をするのかさっぱりわからないまま、雪菜と出口と川井の三人について行った。

出口と川井に先導され、龍彦と雪菜は本部の地下へと下りた。地下二階には頑丈そうな扉がたくさんあって、見るからに威圧感のある廊下になっている。

「出口さん、私は単に過去の事件の参考記録を閲覧したいと言っただけなんです」

「いいんだ、いいんだ。これはこっちの都合で、おまえらに見せなきゃならん機密資料があるんだよ」

機密という単語に、龍彦は反応した。

「機密なんてモンを、オレたちが見る必要があるんですか？」

「アホ。必要だから見せるんだらうが」

それもそつだ。龍彦は素直に言うことを聞くことにする。

出口と川井は、ある鋼鉄の扉の前で止まった。二人は扉の両脇にある機械にカードキーを通し、さらに脇のボタンで長い暗証番号を押した。

扉の向こうで、頑丈な鍵が解除される音が聞こえた。出口が扉を引き、四人は中に入った。その中は真つ暗だ。

「よつと」

出口が扉を閉めて内側から鍵を閉めると、それに連動して中の蛍光灯がついた。

部屋の中にあるのは、棚に収められた多数のファイル。それら全てにマル秘の赤印が書かれていて、緊張を誘う。

「ここにあるのは、警察が扱った生体兵器絡みの事件のうち、特に重要度が高く社会に与える影響が大きいだらうと考えられる事件の資料だ。それともう一つある。おまえたち警察の改造人間の仕様書だ。ちなみに、本来改造人間を表す言葉に、正式には『G^{ジイ}』ってコードネームがあるんだが、お役所以外じゃ通用しにくいからあんまり使われなくなった」

自分たちの仕様書、つまり能力の原理や範囲の全てだ。

「立川、おまえが事件資料を閲覧するのは、俺たちの話を聞いてからにしてくれ」

「はい」

出口は真剣な表情になった。続いて話し手は川井に移る。

「今から話すことは、あなたたちの改造原理について新たにわかったことよ。本来は、今この部屋にある資料に上書きされるべき事柄なんだけど……、今から話すことは、公式の記録には一切残さないことにします。またこの部屋を出るまでに聞いたことは一切他言無用。知っているのは、私と出口さんの他には、涼子ちゃんを含めたごく一部の科学技術スタッフのみ。中原警部補や古川隊長、それに清子ちゃんも知らないことよ。いいわね？ これは、あなたたちの身に関わることなのよ？」

龍彦と雪菜は、ゆっくりと首を縦に振った。返事一つにこんなに

慎重になるなど、今まで経験したことがなかった。

「二人の改造原理について説明するわ。まず清子ちゃんの『開闢』の場合、普通の人間に特殊な人工臓器を移植することによって改造人間にすることは、二人も知っているわよね。だから改造人間をやめさせたければ、その人工臓器を手術で取り除けばいいし、理論上それらの臓器があっても無くても、本来身体に備わった機能には全く影響が出ないわ。でも二人の場合、あなたたちの遺伝子そのものに変異が加えられていて、その変異遺伝子が改造人間『徹心』『雷光』への変身を可能にしているの。だから改造人間の能力を無くすには、その遺伝子を取り除く遺伝子治療をしなければだめだし、またその遺伝子が無くなると体にどんな影響が出るのか全くわからない。ここまでは理解できたかしら？」

うなずく。素人レベルのバイオテクノロジーの知識があれば、川井の話は理解できる。

「これらの問題が二人にどんな影響を与えるのか。まず一つは、現行の法律に則った改造の除去が困難になること。遺伝子の除去が身体にどんな影響を与えるか未知数な以上、強制的な解除は法的にも倫理的にも問題になるわ。そして二つ目の大問題は、あなたたちが将来子供を設けたときに、その子供もひよつとしたら改造人間として生まれてくるかもしれないということよ」

「そうか！」

子供は親の遺伝子を受け継ぐ。親が改造人間の遺伝子を持つのなら、子供にもそれが受け継がれる可能性がある。

（オレの子供も改造人間かもしれないのか！）

頭上から巨大な岩が落ちてきたような、そんな衝撃だった。

「これは別に、子供をつくるなって言っているわけじゃないの。現在そういう事実が発見されたということ、あなたたち二人に伝えただけ。将来にわたる不都合が確定したわけじゃないから、そんなに深刻にはならないこと」

（そりゃそう言うけどさ……）

考えれば考えるほど、これが非常に重大な出来事のように思われる。生まれた子供が改造人間だったら。龍彦自身はともかくとしても、その子供自身や、その母である将来の龍彦の配偶者は大きなショックを受けるに違いない。考えたくはないが、あまりのショックの大きさに、自殺に及ぶ可能性だってある。

(だいたいそれならオレは、人間と言えるのかよ?)

それが原因で、自分や雪菜は社会から指をさされる状況になるのかもしれない。

「今川井くんが述べたことを公式の記録に残さず、さらに科特警の中でもごく限られた人物にしか知らせない理由を、おまえたちは理解してるか?」

その言葉で、龍彦は出口の方を向いた。横目で雪菜を見るが、雪菜も少なからず衝撃を受けているようだった。当然だろう。

「どうだ大島、わかるか?」

「与える衝撃が大き過ぎるから、ですか?」

会議のときの出口の話を思い出した。

「正解だ。この話題は危険過ぎる。警察や日本政府の上層部にさえ知られるのはまずい」

「私とリュウが遺伝的な改造人間だという事実は、そんなにデリケートなことなんですか?」

「デリケートもデリケートだ。もしそんなことがバレてみる。その日から、おまえらは人間扱いされなくなるぞ」

いきなりのとんでも発言に、龍彦と雪菜はびっくりした。出口の表情がより厳しくなり、口調も鋭くなった。

「昨日活躍した『嗅覚犬』^{きめうかがけん}だが、あれは元々、遺伝子直接操作型と臓器移植型の二種類が考案されて、どっちを採用するか警察庁の判断を仰ぐことになった。当時、俺は警察庁の課長補佐としてその選定作業に携わったんだが、そのときの開発研究グループは、コスト重視で遺伝子直接操作型を勧めてきた。一度母体を製造しまえば、あとは繁殖させるだけで簡単に個体数が増やせるからな。だけど強

烈な反発が、警察上層部や環境省から沸き起こった。もしそれが野生に逃げ出したら、優れた嗅覚を武器に生存競争を有利に戦い、日本の生態系を変えてしまうのではないか、また「嗅覚犬」^{きゅうかくけん}が他の犬と交配し、予期せぬところで予期せぬ能力を持った個体が誕生するのではないか、そうになったら大変なことになる、もつと物事は慎重に進めろって苦情が噴出したんだ」

ちょうど現在論争になりつつある、外来種や遺伝子組み換え作物に対する批判と同じだと、龍彦は感じた。

（「嗅覚犬」^{きゅうかくけん}は遺伝子組み換え動物、オレたちは遺伝子組み換え人間ってどこか）

「環境省が文句をつけてくるのは当たり前だ。何てったってそれが環境省の仕事だからだ。注目すべきなのは、役所としての立場上、地球環境と関わり薄い警察庁の人間の大多数も、遺伝子直接操作型に拒否反応を示したってことだ。最初はそんなでもなかったが、時間が経つにつれて『遺伝子汚染』なんて言葉も堂々と使われるようになってだな、ついに警察庁長官直々の命令で、臓器移植型を採用することが決定した。研究用にあつた遺伝子直接操作型の個体は全て不妊手術を施され、今は遺伝子のみがここ科特警で冷凍保管される」

遺伝子汚染 ある遺伝子の型を持つ個体群に、同じ種で交配可能だが別の遺伝子の型を持つ個体が流入して雑種が生まれ、本来無かつた遺伝子のタイプが広まってしまふ現象を、否定的に表す言葉である。メダカなどが顕著な例だが、一口にメダカといっても、住む地域ごとに遺伝的な特徴を持っている。近年の環境保護ブームの一環としてメダカの放流が各地で行われるようになったが、そのときに全く別の地域に生息するメダカを放流したため、在来のメダカと交配し、遺伝子の型の多様性というものを失わせてしまふ結果となった。

もし、ある遺伝子の型の個体が消えてしまえば、それを復活させるのは事実上不可能だ。よって今では、その遺伝子多様性というも

のの大切さが、世界で認識されている。

一方で、この『遺伝子汚染』という言葉には批判もある。在来の「純種」を良しとし交配した「雑種」を悪と看做す考えを助長し、それは人種差別を連想させるとの主張もある。離島に生息する固有種を遺伝的に守るため、外来種と混血した個体の駆除が実施されたこともあったが、一部勢力から大きな批判を浴びた。実際にこれを人間に当てはめると、黒人と白人のハーフなど、異人種間で生まれた人間を無差別に殺害しているのと全く同じことになる。そのため汚染という言葉を避けようとする人もおり、英語では『遺伝子移入』というニュアンスの単語が使われている。

「それからまたしばらく経った後に、日本で初めて改造人間の犯罪が起こった。前に病院で話した、羽田空港での事件だ。あれを機に警察も改造人間を配備することになったってのも前に話した通りなんだが、これも一筋縄にはいかなかった。最初警察庁は、改造人間の開発を主導した。でも開発が始まる段階から、どうして政府が率先して『人間の改造』などというあってはならないものを作ろうとするのかって批判が集まった。警察庁の上層部は、推進派の現場警察官と反対派の法学者・哲学者との間に挟まれ、開発が始まってからも混乱し続けた。そして何とか『Za^{ゼット・エー}』今の『開闢』を実現するための生体パーツの基本構造が完成したが、今度は現場警察官の中で揉め始めた。みんなが『改造』を拒否して、反対派に回る人間も出たよ」

ちなみにだが、それで移植する人間がいなくなり上層部も態度を変え、再び計画が停滞。そんな混乱を見かねた涼子が腹を立て、涼子自身が実験台になる代わりに計画の続行を了承させた。そうして回り回って清子が『開闢』になったというわけだ。

（そんなにまで、生体兵器や改造人間に拒否反応を出されるなんてな……）

知らず知らずの『改造人間』という立場の自分としては、かなりシヨックだった。視線が落ちる。頭が重い。

「生体兵器や改造人間に対する反応がどんなモンなのか、どうして俺が『狂犬』^{ハイサーカー}の公表に強く反対したのか、そしてなんで俺たちがこんな嚴重警護の場所でおまえらに話をするのか、わかったか？」

龍彦には、もはや頷く余裕は残されていないかった。

（オレは、世間から歓迎される存在じゃねーんだな）

どこに現れても根の深い批判に晒される生体兵器。それは自分も例外では無さそうだ。しかも自分は、遺伝子という形で後世に能力を残す可能性がある個体だ。そんなことが周囲に知れ渡ったときのインパクトは『嗅覚犬』^{きゅうかくけん}や『開闢』のときの比ではない。

もう一度、昨日の夜の報告会での捜査員たちの顔　特に『狂犬』^{ハイサーカー}を語ったときの山石の表情が頭に浮かんできた。「本庁や所轄のやつらは一七歳をあてにしちやいない」などと言っていた、世の中の汚いものは全て見てきたであろうベテラン刑事でさえ、恐怖を感じるといふ反応だけしかできないでいた。もし他の人間も全て、龍彦をあの顔で見えるようになったら……。

（それこそオレは、誰も信用できなくなるじゃねーか！　世の中の全部が自分の敵に見えちまう……）

だがそんなふうになんか自分になることにも、龍彦は耐えられそうになかった。

「話の重大さはわかったな？　もう一度言うが、今の話はこの部屋の外では一切するな。たとえ賢治や清子くんにもだ。もし話を打ち明けたいんなら、事前に俺と川井くん相談しろ」

「話は以上。龍彦くんは、今日は学校を休んでちょうだい。午前中は訓練、午後から捜査班に同行して」

「わかりました」

と返事をしたのは雪菜だけだ。龍彦は無言のまま、今いる部屋から出た。

龍彦と雪菜は、訓練場へと歩いた。龍彦はショックのせいで、足取りがおぼつかない。

（くそつ。オレはいつたい、何なんだ！？）

自分は人間なのか。人間として認められるのか。答えがほしい。できれば肯定の答えがほしい。

「リュウ」

声と同時に左肩を叩かれた。体が過剰に反応し、背筋が伸びきるという間抜けな動作を、雪菜に見せることになった。

「動揺しているのが一目でわかるほど、様子がおかしいです」

「……それくらい動揺してるんだよ」

雪菜の方は、いたっていつもと変わらない様子だ。どうしてそんなに平然としていられるのか、龍彦には全く理解できなかった。

（それとも、心の中じゃ動揺してて、表情に出てないだけとかか？）

それもそれですごいと思うが。

「おまえの方はどう思ってるんだ？ 見たところ、何にも感じてなさそうだけど」

「私にとつてもショックでした。まさか遺伝子まで組み換えた改造になっているとは、予想していませんでした」

雪菜の表情がしばむ。やはり雪菜も、彼女なりに悩んでいるらしい。

「しかし、それに悩むことと、動揺することとは別だと思っています」

「はあ？」

よくわからない。龍彦は、雪菜の顔を凝視した。雪菜はまたすぐに、いつもの無表情へと戻った。

「おまえは動揺してねーのかよ？」

「自分の改造がどうであれ、自分が他からどう見られようが、私たちの日本国および国民を守るといふ任務に変わりはありません。ただ以前と同じようにしていればいいだけです。自分の改造が気にはなっても、これからどうするかという迷いはありません。リュウが動揺するのは、改造人間をどう見るかという周囲の視線を気にしているからではないですか？ 気にしてもどうしようもないものを気かけ、自分の精神的な安定を崩しています」

「気にしてもどうしようもないって」

淡々と、しかし指摘するところを的確に突いてくる雪菜の言葉は部分的に正しい。龍彦は、自分が改造人間であるという事実自体よりも、改造人間を見る他人の目というものを恐れている。他人の目を気にしても仕方がないというのも、少しわかる気がするのだが。

「オレたちは、遺伝子レベルから根本的に他の人間とは違うんだぞ？ 将来何が起こるかそれこそわからねーんだぜ？ それを気にしてもどうしようもないの一言で納得できるかよ。おまえがなんでそんな冷静でいられるのか、オレには理解不能だぜ」

「将来に対する不安も、まだ確定的ではないと川井さんも言っていました。今私たちが認識すべきことは、私が『徹芯』であり、あなたが『雷光』だという事実のみです。遺伝的に異なるうが、その事実が変わりはありません」

「それだけじゃねーぞ。オレは大島龍彦だ。大島秀則と大島秋子の息子だ」

「では、リュウが確定されない出来事を気にすることで、何か利益が得られますか？ それを気にする利益よりも、あなたが精神的に不安定になることで起こる損失の方が遥かに大きいのではないですか？」

「算数みてーに、足し算と引き算だけで単純に考えられるか！」

「割り切ってください。改造人間として戦える者は、日本中で三人しかいません。リュウには責任があります」

「そりゃそうだが……」

どうして雪菜は、そんな簡単なふうに考えることができるのだろう。

「オレには動揺する自由も無いってのか？」

「ありません」

きつぱりと言われてしまった。これにはもう、龍彦は何も言い返せなかった。

「とにかくすぐに訓練を始めます。いつも通り、きつちりとこなし

てください」

最後にそれだけ言うと、雪菜は龍彦を置いてさっさと歩いて行ってしまった。

(つたく、何なんだよ……)

龍彦は、その場に足が止まってしまった。さきほどの出口とのやり取りが、また頭の中を回ってきた。

改造が遺伝するなら、将来生まれるかもしれない龍彦の子ども改造人間になる可能性がある。もし世間で改造人間反対の運動が盛り上がりつつあったら、その子は生まれた瞬間から社会に恨まれることになる。生まれてくる子には何の罪も無いというのに。

(親父、母ちゃん。知ってたのか？ オレが改造人間だってことをさ？)

今は亡き龍彦の両親は、龍彦が改造人間となった時期やきつかけを知っていたのだろうか。

(オレは、みんなと同じように、人間として振舞っていいのか？ みんなはそれを許してくれるのか？)

龍彦は、しばらくそこから動けなかった。

出口と川井は、龍彦と雪菜が出て行った後も、機密部屋の整理を行っていた。

「この忙しい時期に、しかも朝からこんな話を二人にして、大丈夫だったでしょうか？」

「いずれは話さなきゃならねえことだ。それならできるだけ早い方が、あいつらも自分たちで考える時間が長くとれていいだろ」

「『雷光』や『徹芯』のコンディションが低下すれば、事件捜査にも影響がでます」

「俺たちは常に、何らかの事件を抱えている。殺人事件はそんなに頻繁に無いにしても、別に今回の事件だけが特別ってわけじゃねえ」

出口としては、これは秘密にしておいたところで意味がないこと

だと思う。いずれはあの二人も、情報の隠ぺいによる矛盾を感じ取るはずだ。

「話は変わるが、遺伝子直接操作型つてのは、あんまり発見例が少ないんだよな。一般に流通してる遺伝子組み換え作物はみんなこの遺伝子直接操作型と言えるのに、何でなんだ？」

「米に含まれるビタミンAを増やすとか、猫のアレルギー成分の分泌を抑えるとか、その程度の性質を付け加えるだけなら簡単です。しかし様々な身体能力や感覚を強化するとすると、遺伝子全体のバランスを考えつつ膨大な数の遺伝子を組み換えなければならぬため、製作の難易度は一気に上がります。一方で臓器移植型は、人工臓器を作るという時点で最初の技術的ハードルが高くなりますが、個体全体ではなく臓器を一つ作るだけなら、あまり全体のバランスを考えずに様々な能力を付加しても問題ありません。体の基本的な機能は、あくまで移植される生物が基本的に備えているものを頼りますから」

「なるほど。ビタミンA強化米ならともかく、兵器にも使える遺伝子操作は臓器移植型でないとなかなか難しいってことか。今、遺伝子直接操作型関わった事件を探してるんだが、ほとんど見あたらねえな。あつたとしても、人間はもちろん哺乳類ほにゅうの例は無い。せいぜいハチやクモなんかの虫が限度だな」

人間を対象にした遺伝子直接操作型の生体兵器は、今まで全く例が無かった。そもそも、そこまで高度な技術やノウハウが、地球上に存在しているとは思いつらい。

「ついに遺伝子改造された人間が出てきたな。巷ちまたじゃ遺伝子ドーピングなんてのがちよろちよろ話題に出てきたりするけど、これはもうそんなレベルの話じゃねーだろ」

「もちろんそうです。人類史上、前例の無い事態ですよ」

遺伝子技術に関して色々な議論がされるようになってから久しい。出口は龍彦や清子の学校の教科書を拝見してみたが、高校の社会の教科書にも、クローン技術や遺伝子組み換え作物の内容が載るのが

もはや当たり前となつてきているようだ。

だがそのような世の中の動きに、出口は失笑してしまう。クロール人間など教科書の特集記事の勢いとは裏腹に、いったいどれだけの人がこの問題をまともに議論しているだろうか。科学技術　この場合は生命工学が、我々が当たり前だと思つている社会のシステムをどれほどまでに変容させるのか、誰が真剣に考えているだろうか。

はつきり言えば、全くと言つていいほど議論はされていない。話をしてるのは、生命工学に実際に携わつている一部の科学者や技術者のみである。その他大勢の一般国民は、話を耳から聞くがそれで終わりだ。どこか遠い未来の話、自分にはほとんど関係の無い話だと捉え、今がまさに変化の最中であるとは、これっぽっちも思っていない。一般的な国民だけでなく、いわゆるエリートといわれる社会科学系の人間も鈍い。特に我が国は理系・文系の粹意識が強く、どうも科学の話をしたがらない。自然科学と社会科学は全く別のものだとも考えているのだろう。だがそれは大きな間違いだ。

「出口さんは、生体兵器の情報を公表することに慎重でしたな」

「川井くんは公表に賛成なのか？」

「積極的だつたわけではありませんが、刑事さんたちの発言を聞いたら、『^{ハイサーカー}狂犬』の公開はやむを得ないのかなとも思いました。

最終的には、出口さんの意見が正しいと思いましたが」

「『^{ハイサーカー}狂犬』を公開したら、今度は、実は改造人間もいるんじゃないかって噂が立つて、大島たちがやり玉に挙がるよ」

「やっぱり、ずるずるとそうなるでしょうかね……」

「ああ。そうならおしまいだ。俺は、今の社会が改造人間を受け入れるのは無理だと確信してる。大島や立川はきつとみんなが人間だと認めてくれるから、コソコソとしないで堂々としていればいい。なんて綺麗事は社会には通用しねえ。わざわざ改造人間の情報を公開したところで、遺伝子工学を中心とする科学技術全体を警戒する世論が、一気に盛り上がるだけさ。そのうち、科学技術があ

るからいけないんだ、バイオテクノロジーがあるからこんな問題が起きたんだと、国民は科学技術自体を叩き始める。それで日本の科学技術政策が停滞したら、それこそ日本全体の不利益になる。日本には、核兵器だけを指差して、あたかも原子力技術そのものが絶対悪であるかのように主張する人間が存在する。今の日本国民には、そんな主張に振り回されない程度の賢さがあるとは思えねえな」

「では出口さんは、いつになれば日本が改造人間を受け入れられるようになるかと考えていますか？」

「川井くんなら、『自然権』って言葉くらい知ってるよな」

「国家や憲法などの成立に関係なく、本来人間は誰しもが生まれながらに平等で、幸福追求の権利を持っているという考え方を、自然権思想と言っんですよね」

この言葉は、高校の社会の教科書に必ずといっていいほど掲載されている。この自然権の中に基本的人権などが含まれる。近現代の政治システムは、人々の自然権をいかにして守るかということを念頭に置いて確立された。自然権思想とは、現在の政治の仕組みや我々の自由観・平等観・人間観などを根本から支えるものなのだ。

「この自然権の中に出てくる『人間』とは何のことなのか この問いに社会全体が答えられるようになったらだな。大学で法学を専攻した者として、俺もこの答えを探そうと思う」

今まで深く考えてこなかった、『人間』の定義。これからの時代は、科学者も、哲学者も、法学者も、そして一人ひとりの国民も、この答えを探す努力をしなければならないだろう。もちろん出口と川井は、龍彦や雪菜を『人間』だとみなすことに異論は無いし、逆にそれ以外の見方は許されないと考えているが。

社会の安心安全を守る者として、龍彦や雪菜の持つ『人権』を守るのも、仕事のうちなのだ。

第2編(3) 改造人間という存在(後書き)

どうだったでしょうか。やっと「事実の羅列」から「物語」らしくなってきたような気がします。ネット小説にしては格段の多い文字数ですみません(第2編が未だ完結しないのもそのせい...)。ちなみにここで出てきた、人工網膜や神経の信号で動く義手、アレルギー成分を抑えた猫などは、現実ですでに実用化しつつあるようです(情報源がもし知りたければ、感想ページに一言そうお書きください)。本当に、近年の科学技術の進歩はすごいですね!

第2編(4) 生命の魅力(前書き)

おまたせしました。第2編がやっと完結できます。

第2編(4) 生命の魅力

雪菜はため息をつくしかなかった。

ここ二日の訓練では、龍彦は見るに堪えない無残な状態だった。射撃では的を外し、格闘では清子にさえ互角以上に戦われ、雪菜には瞬殺された。事情を知るはずの　　というより事情を知っているからこそというべきか　　雪菜は厳しい言葉ばかりを浴びせ、間に清子が割って入る場面もあった。

結局今日も、龍彦は警察の一員となつてから最低レベルの成績で訓練を終了した。不思議がった清子が龍彦に色々と尋ねて突っ込むが、雪菜はさつさと訓練場から退散した。

龍彦と口論になりかけた三日前以来、龍彦はあまり雪菜に話しかけようとしなくなった。

(あれほどの動揺を見せるなんて……)

龍彦がショックを受けるのは理解できる。しかし自分の遺伝子のことなど、気にしても仕方のないことだ。いずれは科特警がしかるべき措置をとるのだし、なぜあれほどまでに心を乱すのか、雪菜にはわからなかった。

清子の場合、まだ忘れられない彼女の家族の死がスランプに影響しているの、雪菜も心配になった。悲劇的な外部要因のせいだから、清子独力での解決がなかなか困難だと思つたのだ。だが今回の龍彦は、悩まなくてもいいことで悩んでいる。今の状況を一時的にでも黙認しさえすれば、それでいいのだ。現に雪菜自身は、完全にとは言わないでも、心の切り替えができている。

(しかし、もう少し柔らかい言葉を選ぶべきだったかもしれない) 自分の言葉が龍彦の動揺をさらに悪くしたのなら、それは逆効果になってしまう。

(それでもリユウ、そして清子も、今の日本に必要な存在です)

龍彦は、雪菜の想像以上の働きをした。四日前の昼間までの雪菜

は、正直なところ龍彦　と清子を含めるが　の實力をあまり信用していなかった。四日前の遠野宅への訪問時、中原に同行する役に龍彦を薦めたのも、一度痛い目に遭わせて気持ちを入れ直させようとしたのが主な目的で、さらにそんな龍彦の姿を清子が見れば、彼女も龍彦以上にシヨックを受けて、甘い考えは全部吹き飛んでいくだろうという計算もあった。

しかし龍彦は、生体兵器一体の身柄確保という最低限以上の成果を出した。そしてその龍彦の『初戦果』に刺激されたのが清子だ。挫折感が彼女の心を覆いつつあったが、ここに来て再びモチベーションを高めてきている。超優等生の精神力は、やはり馬鹿にはできない。科特警の任務には、一七歳という年齢では耐えがたいほどのプレッシャーがあるのだが、二人はまさにそれを撥ね除けようとしている。

(……いえ、私も彼らと同じ年でした)

ときどき忘れてしまう感覚だ。自分と二人の間にある決定的な差それは生活感の有無である。その差が壁となって二人と自分とを隔て、つい自分は全く違う種類の人間だと思いついてしまふのだ。さらに今回の龍彦の言動で、再びそれを自覚した。

(違う。壁自体も私が作り上げている。二人は私の仲間なのに……)

清子は雪菜に対し積極的に話しかけ、打ち解ける機会を作ってくれている。龍彦も、清子ほどはつきりとした態度ではないが、壁を取り除こうとしてくれている。特別扱いすることを悪いと思つたらしく、この前は周囲の一七歳と同じように考えるところでくれた。それなのに自分は、二人にうまく応えることができていない。

(私は人間らしくない。でも清子とリュウは、そんな私を引き込もうとしてくれる。二人に感謝の気持ちを伝えたい……)

自分の気持ちを伝えるのがこんなに難しいなんて　。再びため息をつく雪菜だった。

ここ三日間の龍彦は、捜査班に同行して各地の企業や研究機関などを回った。改造人間の痕跡を探すためだが、成果は芳しくなかった。

作業着と半長靴では目立つとの反省点から、龍彦も他の刑事のようにスーツと革靴を着用しての任務となった。スーツと靴は他の誰かから借りることになるのだが、身長一八五センチかつ体重百キロの龍彦が服を借りられるのは、同じく大柄な出口くらいだ。しかしその出口のスーツさえ、出口よりも肩幅の広い龍彦は窮屈に感じた。特に上着と靴は、ストラップと違いベルトなどで調整ができない。よって仕方なく、上は出口が普段着として活用している白の半袖ポロシャツで、靴は龍彦のスニーカーで間に合わせるようになった。

もちろん行く先々で、ここが犯人の拠点かもしれないと慎重になる面もあったが、ラフな格好で、さらに拳銃を堂々と腰にぶら下げて一般企業を訪問するのは、何だかあまり良い気分がしなかった。

そして夜の報告会に、龍彦は出席した。今日は雪菜も清子も、作業着ではなくそれぞれ紺色と灰色のスーツ・スカート姿だ。ただし、足元はハイヒールではなく踵の低い靴である。

これらの衣装は、おそらくは龍彦と同じく借り物だろう。

「あれ、リュウはスーツじゃないの？」

「ああ。オレの体格のせいで、服を借りられる人がいなかったんだ。出口さんの上着でも無理だったぜ。にしてもおまえら、なかなか似合ってるぞ」

普段見慣れない格好なので、二人からは大人びた雰囲気がある。龍彦のような「間抜けそうな新人」には見えない。ああ、これが自分と、雪菜や清子との差なのか……。

「ありがとうございます、リュウ」

「へえ、リュウが女の子を褒めるなんてね」

清子は、龍彦をからかうような目で見た。

意識的に褒めたというよりも、自分との比較の感想が思わず口に出ただが、そんな言い訳をしようがないと思うので、龍彦

はこれ以上何も言わないでおく。

清子と違い、雪菜は言葉とは裏腹に少し困ったような顔をしている。もしかして、龍彦にきつく言ったことをまだ気にしているのだろうか。

(まあ、そうだな。オレも正直まだ少し気まずいし……)

龍彦は、あれ以来雪菜と積極的な話ができないでいる。いや、いつも通りでもそれほど話はずむわけでもないのだが、今は雪菜と二人だけで話ができないでいる。

席についてしばらくすると、出口と菊池警視が、三五歳くらいの細身の男性を連れて本会議室に入ってきた。

「これより報告会を始めたいと思います。今日はまず、組織犯罪対策部からの捜査員を紹介したいと思います」

「組織犯罪対策部の大岡おおおかと申します。資金洗浄などの捜査をしております」

資金洗浄という怪しげな言葉に、龍彦の神経がピクリと反応する。また悪い出来事が明るみになったのか……。

大岡警部補によると、殺人事件とは別に、本庁の組織犯罪対策部が、安中ペット保護協会に目をつけていたらしい。暴力団関係の組織から多額の金が、様々な手口で安中ペット保護協会に流れ込んでいるというのだ。

中でも多い手口が、ペットの販売取引を通じて、暴力団関係者から販売代金として安中ペット保護協会に資金が送られ、さらに協会側からも暴力団のフロント企業との取引によって資金を還元するというものだ。

「資金洗浄の捜査では、このペット取引というものは資金のやり取りを複雑化させるための副次的な手段に過ぎないものだと考えられています。しかし生体兵器という存在を考えると、むしろ『ペット』の売買こそに意義があったように思えます」

安中ペット保護協会が、暴力団へ生体兵器を供給していた可能性が濃厚ということだ。

（殺人犯が正義の味方気取りかと思つたら、その親玉はヤクザと結託してたのかよ……）

さらに展開がわからなくなってきた。犯人たちの動機が、再び謎に包まれる。

「代表である安中秀春は、資金洗浄などの容疑がすでに固まりつつあります。協会ビルへの強制捜査の令状が出るのも、時間の問題です。しかし殺人事件や生体兵器の実態を知った以上、我々も改造人間の出勤を願うところなのですが」

「ただし現段階では、資金洗浄容疑での強制捜査に、改造人間の出勤許可が出るかどうか不透明です」

出口の言葉に、室内の空気が重くなる。

殺人事件を捜査する側としては、強制捜査をはずみとし生体兵器絡みの証拠を集め、一気に組織の摘発、そして殺人事件の犯人の検挙につなげたいところだ。資金洗浄で追う側も、安全面を考えれば、拳銃一丁を懐に持っただけの状態で、凶暴な生体兵器がいくつ居るかわからない中に足を踏み入れることは避けたいだろう。

だが現時点では、協会のビルの中に生体兵器がいるという情報は、遠野の匂いを辿ったということだけしかない。これだけで龍彦たちに変身の許可が出るのかはわからない。

会議室の中では色々な会話が交わされる。

「安中の逮捕状を取ることが先決だ。安中を捕まえてペット協会のことを吐かせればいい」

「その安中が改造人間だつたらどうするんだ？」

「それならもう、十分な証拠になるじゃないか」

「安中は色々なところを回って寄付のお願いをしているらしいな。行方を捜して身柄を確保すること自体は簡単だろう。写真をホームページに載せているくらいだ」

「だが安中が改造人間の疑い濃厚と示さなければ、逮捕の作戦時に改造人間を投入することができない。生身の人間で立ち向かうには危険過ぎる」

「もう一人でも、協会と関わりのある人間が改造人間だとわかるようなことがあれば、話は違ってくるんでしょうが……」

やはり問題は、安中ペット保護協会と生体兵器との繋がりを証明しなければならぬということだ。これがなければ、いくら資金洗浄など他の罪で強制捜索の令状が発行されても、龍彦たちは何もできない。

「ひがしのゆみ東野修や秋口政文を殺害した犯人について、何かわかったことはあるか？ 容疑者の中に協会と関連のある人物がいたりしないのか？」

「現時点では、どちらの捜査線上にも、それらしい人物は挙がっていません。ただこの二つの事件は、まだ容疑者の列挙すら完全に行われているとは言い難く、今後新たな情報が発見される可能性も十分にあります」

山石の疑問に、本庁の若い刑事が答えた。

ちなみに遠野のペットである犬の販売元なども調べたが、安中ペット保護協会の名前は出てこなかった。おそらくは遠野が個人的にペットを協会に持ち込んで『バサーカー狂犬』へと改造してもらったのだろうが、それは記録に残らない出来事である。

「遠野の人間関係や行動範囲を、さらに洗ってみます。電話やメールの通信記録、銀行口座の記録などを調べ、そこで協会との繋がりが少しでも見つければ、その証拠を遠野の匂いを『きゅうかけん嗅覚犬』で追った事実と合することで、上層部の納得を得られるかもしれません」

中原の意見に、出口は心強そうに頷いた。

「安中ペット保護協会の摘発は、不可能なことでは全くありません。むしろもう時間の問題と断言していいでしょう。そして最終的な実行力は、科特警が主導することになります」

その点については、捜査本部長の菊池警視も出口に同意する。

「順調に事が運べば、数日中にも必要な証拠が揃うかもしれません。協会への強制捜索が実行できれば、事件の全容解明へと大きく前進することができます」

そして前回と同じように、捜査班の確認などで報告会は終了した。出口は大岡警部補と話しながら部屋を出て行った。

（数日中にも、強制捜索が可能になるかもしれないってことだよな）

菊池警視の言葉は、そういう意味だ。

（つたく、それだつてのにオレは……）

もたついている自分に腹が立つ。清子がいつの間にか復活していたのに。

自分が根っからの改造人間だと考えると、恐ろしさを感じる。自分にとって通常の間人などごく簡単に殺せてしまうという事実は、改めて考えてみれば、とんでもないことである。自分の能力『雷光』としての能力を發揮することにためらいを感じるようになった。おかげで訓練の成績は最悪だ。昨日は清子相手の格闘で、敗北寸前まで追い込まれた。最終的に負けはしなかったが、痛い事実だ。

「リュウ」
肩をそつと叩かれた。清子が心配そうにこちらを見ている。気がつけば、もう半分以上の間人が部屋からいなくなっていた。

「雪菜ちゃんは、先に帰ってるってもう出て行ったわよ」

「……そうか」

以前の雪菜の指摘通り、自分は動揺し過ぎている。これでいいはずがない。

清子と一緒に本部の玄関を出たが、会議室から玄関までの間、清子は一言もしゃべらずに龍彦の全身をじろじろと、つつくような視線で見ている。

「雪菜ちゃんと、何かあったんでしょ？」

本部からしばらく歩いたところで、清子が口を開いた。こちらのことなど何でもお見通しだと言わんばかりの口調である。

「リュウも雪菜ちゃんも、意外とわかりやすいからね。雪菜ちゃんは考え方が合理的なぶん、行動から原因を推測しやすいし、リュウは隠し事があるときに決まって視線を合わせないところが、昔から

変わってないわ」

清子は軽く笑った。

（そついや、小学校で悪さをして黙ってても、後から清子には必ずバレたんだっけ……）

何も無いようには振る舞えないが、正直に全てを話すことも今の段階ではできない。ここはある程度、嘘と事実を混ぜて話すのが良いだろう。

「会議でベテラン刑事がビビってるのを見たりしてるうちに、科特警以外の普通の人間が、どういう目で改造人間つてのを見るのかわかった。本当に怪物を見るような目だ。オレは、自分の意思で改造人間になったわけじゃねえ。今さらなんだが、改造人間の自分に疑問が湧いてきた。それを同じ立場の雪菜に話したら、気にしたって仕方のないことだろって逆に突き返されたよ。『あなたが何であれ、任務に変わりはありません』って身も蓋も無いこと言われたから、オレもちよつと腹が立って口論になったんだ」

一応嘘をついているのだが、龍彦の心はどんどん揺れてきた。

「確かに、オレは任務さえしっかりしてればそれでいい。でも、自分から改造を受けたわけでもねーし、いつ普通の人間に戻れるかも全く見当がつかねー今の状況だ。その改造人間としての任務を他人から強制されてるような気がして、オレは混乱気味だ」

後半の言葉は、正直に龍彦が感じている悩みだ。改造人間を化け物として見るということは、人間として見ないということである。そして任務と成果だけを期待されるような存在になつてしまい、それが嫌になつても、自分はそこから離れられない。義務がDNAにまで刻まれているのだ。辞表を机に叩きつければそれで終わりというような、簡単な状況ではない。

龍彦の言葉を、清子はただ黙って聞いていた。

「私も、人工知能の方はもう取り除くことができないから、一生改造人間でいることが確定してる人間のうちね。でもそれ以外の生体パーツを取り除けば、頭蓋骨を叩き割られない限り改造人間とはバ

れないから、リュウとは少し立場が違うわね」

そうだった。清子も事の大小を別にすれば、同じ現実が待っているのだ。ますます龍彦は、自分の言葉が独りよがりでダメな発言に聞こえてくる。

「世の中には、どうしてもやらなければならない事が、必ずあると思うのよね。例え他人と比べると理不尽に見えても、それは仕方ないわ。自分と他人は別の人間なんだし。人それぞれに義務があつて権利がある。当然じゃない？」

大人だ　龍彦が清子の言葉に対して思ったのは、ただそれだけだ。

「参考になるかどうかかわからないけど……。私の兄さんは、病院長の長男つて立場でしょ。想像がつくと思うけど、私のお父さんとお母さんは当然、兄さんに医者になれつてしつこく言ったの。それで兄さん、高校生の時にグレたのよ。大して強くもないのに威張つて見せたり、夜遊びしたりして、俺は医学部には行きたくないんだつて反抗したのね」

昔の記憶を、龍彦も掘り起こす。清子の兄は一〇歳上だから、その兄が高校生のときといえば、龍彦はまだ小学校低学年か保育園にいるころだ。確かにその頃、幼馴染の『清子ちゃん』には、金髪の『お兄ちゃん』がいた気がする。

「ある日、お父さんと兄さんが一対一で話をする事になったの。それ以外のメンバーは、周囲で口を出さずに見物ね。兄さんはそのときも、何で自分の自由にさせてくれないんだ、自分が何をやるうが自由だろつてお父さんに食らいついた。私も小さいながら、兄さんが可哀そうになった」

清子の言葉に、だんだんと力が入っていくのがわかった。龍彦は唾をぐくりと飲み込んだ。

「でもお父さんは、兄さんに向かってこう言ったの。『おまえには他人が持ちえない能力と環境がある。医学部に入るための頭の良さ』と、親が病院を持っているという環境は、他の人がどんなに望んだ

つて手に入らない。人間は、自分の利点を最大限に生かして社会に貢献する義務があるんだ。だから俺は、おまえを自由という名目でほうっておく無責任な真似はできない。おまえを立派な医者にし、日本のために尽くすことができる人間にすることが、俺の責任なんだ』
強い言葉だった。私は小学二年生でしかなかったけど、今でもはつきり覚えてるわ。それを聞いた兄さんは、一念発起して勉強を再開して医学部に合格し、世襲のボンボンなんて陰口を言われながらも、今の道にいる」

清子はいつの間にか、すがすがしい顔になっていた。

「私は今でも、敷かれたレールの上を行くだけの自分が嫌になることがあるけど、お父さんのこの言葉も間違ってるとは思ってないわ。リュウは改造人間として、他の人が為し得ない任務を実行できるんだから、それがリュウの、社会の中の役目じゃない？ たとえ周りから怪物だと思われても、自分の義務は果たすべきだし、自分の義務を果たしていれば、周りの視線なんてきつと気にならなくなるわよ」

「なるほど……」

「リュウは私よりも、警察官としての仕事にはずっと向いてるわ。リュウは最初に『^{パサーカー}狂犬』を捕まえた。私にとってリュウは、一番身近な目標。そんなリュウのことを、きつとみんなが認めてくれるはずよ」

人は生まれながらにして平等　などということはありません。
持って生まれた才能や生まれた場所の環境は、どうしたって自分の努力だけでは変えられない要素だ。より恵まれた要素を手に入れることができないだけでなく、放棄することも含めて不可能なのだ。
龍彦の場合も、改造人間という状態が恵まれているかどうかはともかくとして、現在の状況は似たようなものだろう。自分の持てる最大の力を発揮する義務を負うというのは、自分が今悩んでいるほど、そんなに嫌なことなのだろうか。

（やっぱ親が地位の高い職業についてると、言うことが違うよなあ。

オレじゃ、そんな言葉は思いつかねーぜ」

清子の言葉のおかげで、気持ちがだんだんとすっきりしてきた。「ありがとな。自分じゃ気づきそうにない意見だった。オレは、自由と無責任をごちゃ混ぜにして記憶してたみてーだ。オレは、自分に与えられた責任を果たす意思が、今はつきりと固まった」

周囲から求められたやるべきことをきっちりやる。最も基本的なことだが、意外と難しい。でもこれさえやっていけばそれでいいのだ。周囲の視線なんて気にする必要は無い。自分は自分、改造も含めて自分なのである。

「元気が出たんなら、よかった。やっぱりリュウは、まだまだ私の弟みたいな存在ね」

「それは認めるしかなさそうだなあ」
照れくさくなってつい笑ってしまったが、龍彦は言葉通りの意味で、清子に尊敬の念を抱いている。清子もにっこりと笑った。それは、幼いころから変わらない、他人を満足させるやさしい笑顔だった。

龍彦は自宅マンションに戻ると、先に帰っていた雪菜を話があると言って外に呼び出した。清子にはすでに話してあるため、龍彦と雪菜の外出には何も言わなかった。

人に聞かれてはまずい話をするため、龍彦はマンションから少し離れた川の土手まで雪菜を連れていった。

「急にすまん。でも、どうしても話しておきたかったんだ」

「話とはいったい、何ですか？」

雪菜は、若干だが不思議そうに首を傾^{かし}げている。

「この前おまえから言われたこと、正しい面があると思った。だいたい警察の仕事をやりたいつて言ったのはオレなんだし、自分が現時点で考えるべきことを、悩みとか動揺の言い訳で、蔑^{ないがし}ろにしちゃいけねーよな」

一つ一つの言葉を慎重に選びながら、龍彦は話を続ける。

「ここ数日、オレはおまえに叱られてばかりだった。だから明日の訓練で、オレは動揺が消え去ったってことを証明してみせる。自分の持つ力を存分に使って、おまえにこれ以上非難されないような抜群の成績を出す。そうすれば、オレが復活したって認めてくれるか？」

龍彦は、雪菜の目をまっすぐ見つめてそう言った。雪菜は少し口をもごもごと動かした後、わずかにだが笑いを浮かべて返答した。

「リュウも、考え方が落ち着いてきたようですね。では明日の訓練以降、今までで最高の成績を収めてください」

「わかった。やってみせる」

意外にも大変なことを、しれつと言われた。龍彦は苦笑しつつ承諾するしかない。

「私としても、リュウが復活してくれた方がうれしいです」

どうしてうれしいのか　と聞こうとしたがやめた。清子が悩んだときと同じく、雪菜の純粋な心配なのだ。聞き方によっては雪菜を傷つけかねないと思った。

「だけど雪菜、もう一つ、聞きたいことがある」

「聞きたいこと……？」

「おまえは、自分が改造人間として警察の仕事についていることをどう思ってるんだ？　事務的な答えじゃなくて、おまえ自身の意思を聞かせて欲しい」

「どうしてそんなことを聞くんですか？」

唐突な龍彦の問いに、雪菜はきょとんと意外そうな顔をした。

「オレは自分の改造に、正直まだ不気味さを感じてる。けどそれはオレという一つのサンプルのデータだ。実務上の先輩として、同じ原因不明の改造を受けた被験者として、そして同じ仕事に就く同い年の仲間として、おまえの考えてることが知りたい。話したくないのなら、話さなくていい」

未だに龍彦が自然な会話をつくれぬ同居人は、アソビもない小

綺麗な正論を、何の感情も示さずに言う。その姿に近寄り難さを感じ、また龍彦はそんな印象を抱いているせいで、雪菜に余計な反発をしてしまったように思えた。

だからここは、相手を理解することから始めなければならない。お互いのことを知らなければ、腹を割った話などできるはずがないのだから。龍彦は一步踏み出してみた。

雪菜は戸惑った表情を浮かべてしばらく黙ったままでいたが、意を決したというふうに関を上げた。

「自分でも、よくわかりません。私の意思と言われると難しいです。私が憶えている最も古い記憶は、科特警の本部で目を覚ました時のものです。目を覚ました時、私は自分の名前と年齢以外、一切のことを憶えていませんでした。成り行きで科特警の一員として働くようになったときも、仕事を手伝うのが当たり前のように感じました。そして以前は『ゼロ』、現在は『徹芯』として任務に当たっています」

「改造人間じゃなくて、普通の人間に戻りたいとは思ったことねーのか？」

「そうですね……。法的にも政治的にも、私が『徹芯』して活動するのはアウトでしょう。ですから私自身は通常の人間に戻らなければならぬと思っっていますが、戻りたいというのがと厳密には違つかもしれません」

「そうか……」

雪菜の本音といえる言葉は、聞けなかったようだ。

だが龍彦は、雪菜の言葉に驚きつつも、一部ではなるほどと納得してしまふこともあった。

雪菜は自分の意思を持つための基礎的な知識が、欠落しているのではないのだろうか。自分の名前と年齢以外のほぼ全ての要素趣味や遊びや友人関係、生活一般の内容そのものだけでなく、それらに対する人間的な感覚までも、頭からすっかり消えている。だからこそ雪菜自身が主体となる感情的な意見を持ってないでいるし、逆

に事実を論理的に積み上げただけの結論はすんなりと受け入れるの
だろう。

（雪菜）

どこかの謎の研究施設で受けた記憶の消去というのが、人間にこ
れほどまで大きな影響を与えるのかと、龍彦はシヨックを受けざる
を得なかった。それと同時に、雪菜にこのような仕打ちをした人間
たちに対して怒りが込み上げてくる。

「すみません。人間らしくなくて。私は異常です」

急に雪菜は、どんどん暗い表情へと変わっていった。やっぱり聞
かない方が良かったかと後悔した。

「そんなこと言うなよ！ オレは別に、おまえが悲しむ顔を見るた
めにこの話をしたんじゃないぞ？」

「ありがとうございます。リュウが私のことを仲間として理解しよ
うとしてくれていて、よくわかります」

普段は無表情で冷静な側面しか見せない雪菜が、悲しげに笑った。
龍彦は胸が痛くなってきた。

「リュウや清子がスランプから抜け出てうれしいというのは、私の
個人的な考えだと思います。このような感覚を得ることができたの
も、同じ年の仲間のおかげです。リュウには感謝しています」

雪菜は龍彦に軽く頭を下げた。雪菜の口からはなかなかさうい
う言葉を聞くことができないので、龍彦はどういう反応を見せたら
いいのか困ってしまう。

「例えば」

「つい唐突な内容をしゃべってしまう。」

「オレや清子みたいに高校に行きたいとか考えたことはねーの？」

口でしゃべると同時に、自分は質問することしかできないのかと
自分自身に突っ込む。だが雪菜はちゃんと答えてくれた。

「以前までは特に何とも思っていないんですけど……、リュウや清
子を見てみると、私も通ってみたいと少しずつ思うようになってき
ました」

雪菜の表情が、どことなく恥ずかしげに見えた。

「今まで私が学校に通っていなかったのは、謎の改造人間として見る目が今以上に厳しくて、警察スタッフの頭にも全くそのことが行かなかったことが大きいです。まだ改造人間の精密検査も全くの手探りの状態で、一週間七日をまるまるかけて適当そうな検査を思いつくままやっているという状況だったので、学校へ行く時間そのものも全くありませんでした。現在リュウや私たちが受けている検査は、その実績の積み重ねにより定型化されたものなんですよ」

「なるほど」

「また私は記憶喪失で、高等学校という存在自体を理解しておらず、私は高校進学の言葉が頭にありませんでした。今思うとかなりの常識はずれですが」

これはかなり深刻な知識の欠如だったのだと、龍彦は表情の裏で思った。高校の意味すら忘れていた当時からすると、現在の雪菜はかなり知識を吸収したようだ。

「学歴の問題を考えるなら、確かに高校卒業は避けて通れない道です」

「なんだ、将来やりたい仕事でもあるのか？」

雪菜の将来の夢という話題には、やっぱり龍彦も興味がある。

「社会のために尽くすことです。具体的な仕事はまだ思いつきませんが、雇われる身なら、学歴という肩書きがどうしても必要になりますから」

「そうだな」

「私は改造人間のままで、通常の人間に戻っても、この日本のために役に立つ仕事がしたいです。リュウの夢は何ですか？」

「オレは……」

龍彦はもともと、特別これがやりたいという仕事は無い。両親共々スポーツ選手だったが、スポーツ選手になりたいと思っていたのは、小学生の頃までだ。現時点でやりたいことと言えば。

「オレは、『徹芯』と『開闢』がなんで作られたのかを調べたい。」

オレたちに降りかかった最大の謎を全容解明するのが目標だ」

雪菜の夢の話聞いて、彼女のことを本当に健気でいいやつだと思っただ。真面目で一生懸命で、社会を愛する気持ちが人一倍強い。龍彦なんかよりもよっぽど心が美しい人だ。そんな彼女を実験動物のように扱っていた連中、そして改造人間として作り変えた連中を特定し、問いただしてやるのだ。なぜ自分たちを改造人間にしたのかと。

龍彦の答えを聞いた雪菜は、再び笑った。今度の笑いは、少し嬉しそうだ。

「同じ改造を背負う者として、それは心強いです」

「あ、ああ……」

錯覚だろうか。笑う雪菜がいつもよりも輝いて見える。何というか、急に人間らしくなったというか……。

(これは)

口元を緩めただけの小さな笑いでしかないのだが、龍彦にはそれがとびきりの笑顔のように見え、自分の心が怪しく揺れ動くのがわかった。

「リュウとこれだけ多く話したのは、きっと初めてですね。リュウと話せて楽しかったです」

「おう……って、普段からもっと話せばそれでいいんだけどな」

「……その通りでした。そろそろ行きましょう。早く寝て明日に備えることも、任務のうちです」

そう言って雪菜はくるりと背を向け、帰る方向に歩き出した。

龍彦もついて行くが、どういうわけか以前のように雪菜の隣を歩くことが恥ずかしくなり、結局は雪菜の背中を追いかけるだけになった。

その夜、龍彦はあまりよく眠れなかった。

努力は必ず実るといふ言葉は、本当らしい。

三日後、遠野が安中ペット保護協会の関係者と頻繁にメールをやりとりしていたことが通信記録から判明し、さらにその関係者と思われる者と直接会うなどしていたことも、都内の飲食店の聞き取りでわかった。捜査員たちが睡眠不足になりながら調査を続けた成果だ。

出口は組織犯罪対策部の捜査員と合同で、改造人間三体を投入する許可を本庁警備部へもらいに行った。資金洗浄やその他の組織的犯罪の疑いで強制捜索を実行する際に、同行させるためだ。『狂犬^{バーサーカー}』である遠野の通信記録や『嗅覚犬^{きゅうかくけん}』を用いた調査結果を合わせて提出し、資金洗浄やらどんな容疑でも、相手側に改造人間という戦力が存在することを前提としなければならぬと主張した。さらに出口だけでなく、組織犯罪対策部のベテラン刑事にも口添えをしてもらった。

七三頭の、まさしくエリート官僚と言いたくなる警備部長がやってきて、提出書類などに目を通した。パラパラと書類の枚数を数えるくらいのスピードで紙が動くが、それは決して手抜きをしているわけではない。少しでもおかしいところがあると、その都度書類をめくる手が止まり、質問がとんでくる。豪快な性格の出口でも、警備部長の文字を読む視線が一点に止まると、つい構えてしまう。

確実に一〇回以上は質問を受けたが、警備部長は、三枚の改造人間投入の許可証 それぞれ『徹芯』『開闢』『雷光』用 に署名しハンコを押してくれた。

桜田門のビルから出て行くとき、出口は小さくガッツポーズを取った。

(予想してたよりも遥かに大規模な……)

完全に日が沈みきつた夜に、龍彦は中原の運転する車の助手席から外を眺めた。後部座席には、雪菜と清子が座っている。三人はすでに顔を隠すヘルメットまで被り、外からは顔が全く見えない。そ

して今日は周辺の機動隊員のように、「POLICE」のロゴの入ったベストをはじめ、様々なプロテクターで全身を被っている。先日龍彦が『狂犬』^{バーサーカー}の爪で負傷したことを反省し、硬質素材の防具を着用することとなったのだ。ただ、薄い鉄板なら噛みちぎることもできる『狂犬』^{バーサーカー}に対し、一般の警察官が使用する装備がどこまで有効なのか疑問はある。しかし頑丈な装備パワードスーツなどになればなるほど重量も増すので、運動性との兼ね合いでこの形になった。

安中ペット保護協会の周辺の道路は全て封鎖され、ヘルメットと警棒を装備した機動隊員があちらこちらで警備に当たっている。その警備を抜けてさらに協会ビルに近付くと、周囲にはすでにパワードスーツに身を包んだ『メカ』の隊員らが展開していた。約五〇人の部隊全員がここに集結しているということである。それらの全体像は、物々しいといったらこの上ない。しかもこれら全てが、最初の部隊が到着してからたった二分以内で展開されたというのだ。驚きである。

ビルから五〇メートルほど離れたところで車が止まる。一人の隊員が近寄ってきて、中原は窓を開けた。

「お疲れ様です。古川警部」

「中原も御苦労。ここから三人は、私が預かることになるな」

全身を覆うパワードスーツのヘルメットが取れると、『メカ』の隊長、科特警の警備課長でもある古川警部の顔が出てきた。

龍彦たち三人は車の中で座ったまま頭を下げ、車を出てからさらに古川に敬礼をしてみせる。

「『徹芯』『開闢』『雷光』……三人ともいるな」

「はい」

三人それぞれが返事をする。いつの間にか中原は、車に乗って包囲網の外に引き返していた。

「これから安中ペット保護協会への強制捜索を実行する。私が執行令状を持って入る他、三人が先頭に立ち、相手の抵抗があった場合には実力でこれを排除する。その後ろから『メカ』の隊員たちが突

入し、生体兵器を取り押さえると共に、逃亡しようとする生体兵器の足を止める。ちなみにおまえたちを含む全員に、腕部と脚部になら発砲も許可が出ている。最悪それらの包囲網から生体兵器が逃げ出しても、さらに外側には一般の機動隊員が控えている。彼らも訓練を積んだ立派な警察官だ。何があっても任務を遂行するくらいの覚悟はあるから、安心しろ。あまり緊張せず、判断を誤らないように気をつけるよ」

すでに付近の住民を一時的に退去させる措置もとられているようだ。機密関係で、野次馬やマスコミへのアタリも厳しい。さきほど中原の車で通行止めの検問を抜けるとき、その奥に向けてデジタルカメラを向けていたオタクキーな風貌の若い男性が、整理にあたっている警察官にきつく叱られているのが見えた。

「隊長」

一人の『メカ』の隊員が、古川を目掛けて走ってくる。金属でできたパワードスーツは重量もあるだろうに、走るスピードは普通の人間より速い。以前の病院のような狭い室内ではなく、屋外だとその性能が顕著だ。その意外な速度に、龍彦は少しあっけにとられてしまった。

「例の『狂犬』^{バイサーカー}が五体、ビルの玄関前に出てきました。そのうち二体は大型で二足歩行をしているので、おそらくは人間が変身したものとかわれます」

「わかった。すぐに私も、この三人を連れていく」

続いて古川は、ヘルメットに内蔵されたマイクとスピーカーで、出口に連絡をつないだ。

「こちら古川です。署長、『狂犬』^{バイサーカー}を確認したとの情報があります、はい、はい、わかりました。状況を発信し続けます」

古川は二人に向き直ると、改造人間に変身するよう命じた。

「生体兵器の存在が確認された。現時刻を持って、変身を許可する。命令責任者は私だ」

「はっ！」

龍彦は、雪菜や清子と一緒に目を閉じた。

（今日こそ犯人を捕まえてやる！）

意識の中で何かが光り、それが全身へと広がっていく。この感覚、毎回変身するたびに、別の自分に生まれ変わっているのではないかと思ってしまう。昨日も一昨日も、訓練開始以来最高の成績を収めた。今日は昨日よりも強い自分、今までで最も強い自分になるのだ。ならなければならぬ。

再び目をあけると、周囲の様子がより明瞭にわかる。そして通常の何倍もよく見える目が、ビルの玄関先に立つ五体の『狂犬』バーサーカーを視認した。

「『轟』トウゴウも異常なし！」

確認した銃を、再び腰のホルスターに収める。それ以外の装備も、通常通り取り付けられている。

龍彦ら四人は、機動隊が持つ大型の盾　ライオットシールドを各自が持ち、それに隠れながらビルに最も近い住宅の塀の陰に隠れた。相手は暴力団とつながりがある団体で、銃を持っている可能性もある。こうして慎重に接近せねばならない。もつとも、龍彦らの接近に相手は一発の銃弾も発射せず、玄関先の『狂犬』バーサーカーたちも無反応だった。

準備が整ったことを古川は無線で出口に連絡し、盾を慎重に使いながら物陰から出ていく。そしてジリジリと相手に近づいていき、五体の生体兵器から約一〇メートルという位置で止まった。

「安中ペット保護協会　資金洗浄および諸々（もろもろ）の余罪で、強制捜索を実行する。これが令状だ。それと玄関に立っている五人　いや五体は、『医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法』違反の現行犯として逮捕する」

言つと同時に、パワードスーツ姿の古川は立ち上がった。右手に盾を持ち、左手に持った強制捜索令状を高々と示す。

「あまり面倒なことは起こさなくても構わない。素直に我々を建物の中に入れてくれるか？」

「却下だ」

二本足で立ち腕組みをしている『狂犬』^{ハイサーカー}は、低い男の声でそう言った。犬の顔そのままなのに人間の声が聞こえてきたのが、少々意外だった。

「こちらはこちらなりの抵抗を示す。あんたたち警察のいいようにはならない」

（ああ！ メンドくせえ！）

自信たっぷりその声が龍彦を苛立たせる。いささか滑稽にさえ聞こえるが、相手が穏便には降参しないという意味表示であることには変わりなく、周囲には緊張が高まった。

「戦闘やむ無し、ですか」

つまりは、今雪菜がつぶやいた、その通りである。

「なかなか調子のいい相手じゃねえか」

ヘルメット内のスピーカーから、出口の挑発的な声がした。出口は、古川など複数の隊員のパワードスーツに取り付けられたスピーカーから、こちらの会話を聞いているらしい。

「三人とも、作戦の確認だ。合図があったら、まず改造人間の三人が主体的に『狂犬』^{ハイサーカー}を攻撃し、動きを止める。足を鉄砲で撃つたり顎を骨ごと折つたりしてもいい。とにかく殺さなきゃ問題なし。そして戦闘力が低下した個体を、『メカ』が個別に拘束具をかけていく。いいな？ おまえらはひたすら攻撃に走れ。あとの細かい指示は隊長に従ってくれ」

「わかりました」

「了解しました」

「わっかりやした」

その後、古川は何度か投降を促したが、玄関の相手はそれを突っぱねた。

「警察がやってくることも、予想してなかったわけじゃない。これも自分たちの計画に過ぎない」

ということだ。

古川はやれやれといった感じで、肩をすくめた。その動作が忠実に実行できるほどのパワードスーツの動作性能の高さに、場違いながらも再び感心する。

（そろそろだな……）

古川がマイクでやってくるよう呼び掛けたら、三人は素早く古川の前を固め、それから五体の『ハイサーカー狂犬』の排除にかかる手順となっている。

交渉が完全に決裂した空気になり、龍彦は今か今かと攻撃開始のタイミングを窺う。中学時代、陸上競技の短距離競技をしていたころを思い出す。「よい」で腰を上げてからスタートの瞬間を待つような、そんな気持ちだ。

『強制排除！』

言葉の最初が聞こえた瞬間、龍彦は三人の中で一番速く飛び出した。ワテンポ遅れて雪菜と清子も出てくる。

『ハイサーカー狂犬』たちは龍彦が出てくると、すぐに攻撃を開始した。五体全てがまず龍彦に飛びかかってくる。大きく開いた口が五つ、こちらに向かってくる。

（前回と同じ手が通用すると思うなよ！）

龍彦は一步後ろに飛び退いてその攻撃を避けた。すると同時に銃声が響き、小型の『ハイサーカー狂犬』が二体、後ろ足を撃たれてその場に倒れた。早速清子が発泡したのだ。

（助かったぜ！）

残りの三体のうち、龍彦はまず小型一体の顎を両手で引つ掴み、『メカ』の隊員に期待して後方へと投げ飛ばす。そしてすぐに大型の二足歩行で移動する個体にこちらから殴りにかかる。

龍彦は相手の鳩尾を目掛けて拳を突き出すが、相手は二本足で立つたまま、ひらりとそれを避け、逆に鋭い爪で龍彦の頸動脈を狙う。龍彦も上体を後ろに引いて、爪が描く軌道から首を移動させる。振り下ろされた相手の右手の爪が空を切ると同時に、龍彦はその右手を上からがっちり抑えた。そして肩まで腕を回して固定し、肘関

節を折ろうとするが、相手はしなやかな動きで龍彦の中から腕を抜き取った。

（もとが人間だと、やっぱり違うな。状況を見て適切な動きをとってくる）

人間が変身したタイプと戦うのは初めてだが、やはり動きの一つ一つが複雑で、人間なりの知能の高さを垣間見ることが出来る。大型なぶん動きのスピードはわずかに遅いが、パワーは有り余るほどだ。相手の足（後ろ足）で踏みしめたアスファルトに爪が刺さり、踏ん張るとアスファルトが簡単に削れる。相手はその破片を、龍彦に蹴り飛ばしてきた。

「この野郎！」

龍彦は破片を手刀で叩き落とし、姿勢を低くして相手の懐に飛び込んだ。相手は再び爪で攻撃しようとするが、今度はその攻撃の内側に入り、裏拳で相手の肘の内側を打った。同時に相手の足を踏みつけ、低い姿勢を上を持ち上げる勢いを利用して、強烈なアッパーで相手の長い顎の下を打った。龍彦がしっかりと足を踏んでいるために、相手は後ろによるめいて姿勢を保つことも適切な受け身を取ることもできず、バランスの悪い花瓶のように地面に倒れ、ぶつかる衝撃をまともに受けてしまった。龍彦は倒れた相手に隙を与えず、足を片手で掴んで後ろの『メカ』部隊まで相手の体を荒っぽく投げ飛ばした。

（手じゃなくて足を封じるのも効果的だな）

もう一体も、雪菜が片腕の骨を追って肘を逆向きに曲げた。だがそうしているうちに、ビルの玄関には新たに二体の『ハイサーカー狂犬』の姿が見えた。

「強行突破だ。気をつけろよ？」

「はい！」

古川の指示で、龍彦は屋内に他の敵が隠れていないか注意しつつ、玄関の二体を手早く気絶させた。

狭いビルの一階には、『ハイサーカー狂犬』の姿は見当たらない。床や壁、天

井をもう一度入念に確認するが、やはりいない。

「リュウ」

雪菜が横から顔を出す。雪菜も清子のように、すでに拳銃を抜いていた。

「大丈夫だ。一階には何もねーぞ」

雪菜たちも一通り室内を見渡すと、雪菜は通信機で出口や古川にビルの中を制圧する趣旨を伝えた。すると古川も、『メカ』の部隊を動かそうとする。

「一個小隊、ついて来い！」

パワードスーツの集団が、ビルの一階に押し寄せた。

龍彦たちは、次いで二階の制圧にかかる。強化された聴覚で、階段付近に敵がいなかを判別する。耳を立てるが、生物の呼吸音や心臓の鼓動の音は聞こえない。

（玄関で七体も出てきたつてのに、こっちは空っぽか……）

「リュウ、拳銃は必要ありませんか？」

雪菜は自分自身の『轟』（ドカドカ）を指して尋ねてきた。

「オレは素手でいく。ここは狭いし、先頭になって殴り込むなら射撃は不利だ」

「わかりました。射撃が必要になったら、私と清子で対処します。

清子もそれでいいですね？」

「オツケー。わかった」

龍彦の後ろで構える二人が、いつも以上に頼もしく感じられた。

二階に繋がる階段を、周囲の様子に気を配りながら一段ずつ慎重に登る。

「三階の方から、呼吸音が聞こえたわ！」

「それも複数です。動作音も聞こえます」

清子と雪菜に続いて、龍彦の耳も上の階に潜む生物の音を捉えた。

「二階に不振な点が無いのなら、まず二階を確実に抑えるぞ」

三人の後ろからついて来る古川の指示により、まず二階の制圧を確実にすることにした。

「私が階段口を監視していますから、リュウと清子で室内を回ってください」

「了解」

二階の様子は、カーテンが閉まっているのか、薄暗い。加えて機械音や水流音がする。ただひたすら規則正しい無機質な音が聞こえてくるのみで、生物由来の音と比べると、雰囲気はまさに死んでいるかのようだ。

階段の壁に背中をくっつけながら上り、先頭の龍彦は壁の陰から二階をのぞき込む。

「何だこりゃ……！」

暗い中でも見える『雷光』の目は、くっきりと部屋の様子を捉えた。それを見て驚いた龍彦は、立ち上がって二階に飛び出してしまった。

二階は、生体兵器の製造現場だろうか。コンピュータなどの電子機器や業務用冷蔵庫に似た銀色の装置、そして大型のガラスケースに液体と一緒に入っている、数々の生体兵器。

「これって……、全部が生体兵器なの？」

龍彦に続いて出てきた清子は、驚愕のあまり口をぽかんと開け放った。

雪菜は上の階に気を配りつつも、苦い顔をした。

さらに古川や彼の率いる隊員たちも、興奮で呼吸を乱している。

「電気つきます」

龍彦は、部屋の電灯のスイッチを入れる動作で、気持ちを入れ替えようとした。蛍光灯が光り、その光はくっきりと、ガラスケースの中に入った様々な種類の生体兵器を照らす。

龍彦は部屋の中に不審物などが無いか見て回りながらも、まるで展示されているかのような生体兵器に見入った。

そこにあるガラスケースは、全部で約二〇個。縦が二メートル、直径が約一メートルの円筒型。その中に透明な液体と一緒に生体兵器があるわけだが。

(見たことの無いモンばつかだな……)

『バイサーカー狂犬』の姿はなかった。しかしもつと不気味な姿をしたものばかりだ。

赤色の毛が生えた凶暴そうなゴリラ、体長一メートル近くもある巨大なナメクジなど、本当にSF映画のようだ。

「あとは、怪しげなマッドサイエンティストがあればってとこだが……」

だがそんな軽口を叩いてみたところで、龍彦の驚愕による動揺は抑えられなかった。この屋内の雰囲気と合わせた気持ち悪さは、カエルの解剖などの比ではない。以前に噛みちぎられた遺体を見たときと並ぶかそれ以上だ。

「リュウ、見て……」

龍彦の反対側で部屋をあさっていた清子が、声を震わせながら何かを指さした。

ガラスケースの中にあるのは、俗に言う動物だけではなく。直立二足歩行が可能な個体　ひよつとすると人間かもしれない個体まであった。

カエルのようにぬめった黄緑色の肌に覆われ、髪の毛など体毛は全く生えておらず、口・鼻・耳・目など顔を構成するパーツが非常に小さくなっている。退化という言葉がぴったり合う。黄緑色の「のつぺらぼう」は、この部屋にいる全員に強い不快感を与えた。

「こいつ……人間なのか？」

顔　というよりは頭部の全面という言い方が適切かもしれないが　からは、男女の判別がもはや不可能だ。大胸筋が発達しているのも男かと思っただが、股間には『男のしるし』がついていない。乳輪や臍へそも無く、外形に凹凸をつくるものを一切取り除いたのだらう。

「ここには生体兵器のサンプルがたくさんある。全て我々の作品だ」不意に三階の方から男の声が聞こえてきた。階段付近に立つ雪菜は、上に向けて『轟トドメ』の銃口を向けている。

階段を降りる足音がする。靴を履いている音だ。

降りてきたのは、全部で四人。三人の高齢者と言えそうな男性たちと、三〇歳くらいの髪を明るい茶色に染めた女だった。その中の一人に、あの遠野泰造がいた。

「この上の三階は生体兵器や普通のペットの置き場、四階は事務室や会議室だけ。ここにはもう、私たちの他にはあと二人しかいない。その二人は普通の人間で、四階の会議室にいるわ」

茶髪にウェーブをかけ、ジーンズにTシャツというラフな姿の女は、腕組みしながら躊躇いなくそう言った。ヘルメットやパワードスーツで身を固めた集団に囲まれていることなど微塵にも気にしていなさそうな堂々とした態度に、こちらは警戒度を引き上げる。

「ここにいる連中は全員、重要参考人として身柄を拘束する。抵抗しないことを望む」

「まさか！」

その女は、こちらを馬鹿にしたように笑った。

「警察が来るのも計画のうち。無抵抗では済まないわ」

素直に従う意思は無い。彼女の宣言に、遠野らが『バーサーカー狂犬』に変身する前にケリを付けるか、一歩引いて様子を見るか、龍彦を含めその場にいる全員が迷った。

だがその一瞬の隙に、女以外の三人は姿勢を低くし、同時に三人の皮膚や骨格が不自然に動いた。龍彦らが迷ったわずかな合間に、三人は『バーサーカー狂犬』へと変身したのだ。

「クソっ！」

龍彦が手をこまねいて見ている間に、一体は階段脇の窓を割って外へ出て行き、最も近くにいた雪菜が反射的にそれを追いかけて割れた窓から飛び出した。次の一体は階段付近で固まっていた『メカ』の隊員たちに突撃し、古川らをドミノ倒しにして一階に抜ける。それと同時に、屋外から悲鳴にも似た叫びが響いた。

階段下で他の隊員に押しつぶされながら倒れている古川は、それでも通信器で連絡を入れた。

「どうした！？ …… わかった！ すぐに行く！ 外で拘束具を抜け出したのが二体いる。『開闢』と私たちで片付ける」

「はい！」

古川は怒鳴るように指示をだした。

「残りの二人は『雷光』に任せた。身柄の確保を最優先に実行しろ」清子や古川とその部下たちは、龍彦と容疑者二人に交互に視線を送ってから、転がっているのかと思えるくらい慌てて降りていった。

結局、階段部から最も離れた位置にいた龍彦は、茶髪の女と遠野の『狂犬』と一緒に取り残された。

「これは、いつぞや出会った警察の改造人間か。ヘルメットを被った三人の中で、唯一の男だからわかる。ヘルメットで顔を隠していても、そのゴツい体格は隠せないぞ」

古川たちの慌てようとはうって変わって、しんみりとした声で遠野が話しかけてきた。

何度も思うが、やはり人間が素体だと、『狂犬』^{バーサーカー}となってもしつかり二足歩行ができるようだ。

「あんたが遠野泰造か？」

「何かの罪状で逮捕状が出ているのかな？」

「医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法の違反で、逮捕する。そつちのあんたも、重要参考人として身柄を拘束する…… つつても、どうせ素直に従う気なんてねーんだろ？」

古川が令状の執行を宣言しているため、隣に巡査部長以上の警察官がいなくとも、龍彦一人で容疑者を逮捕できる 規則を頭の中で暗唱する。

「そしてもう少しく調べれば、殺人の証拠でも出てくると？」

それについては、龍彦は無言のまま何も答えなかった。

「君、大卒か？ 理系か文系かによって、先に話す内容が変わってくるんだが」

「こっちは逮捕状を執行するのに、容疑者に自分の学歴を知らせる必要なんてあるか？」

無駄口を叩く遠野の言葉を無理やり遮った。仮に教えようと思っても、「現役高校生です」とは口が裂けても言えない。

まだまだ若いなと、『^{バーサーカー}狂犬』の姿でも、遠野が鼻で笑ったことがちゃんとわかった。意外にも人間臭さが残っている。

「このガラスケースの中にある物は、全て研究段階にある生体兵器だ。ただし、今のところ実用化しているのはこの犬型だけだ」

遠野は自身のことを指さした。

「ここにあるのは、全部売り物か？」

「そうだ。売り場のショーウィンドーだと思ってくれ。製造工場は、また別のところにあるのでね」

「遠野さんには、組織の運営についてほぼ任せているわ。おかげで私は、本分の研究業に専念できるの」

隣の女はゆっくりとした足取りで、一つのガラスケースまで近づき手を当てた。龍彦は警戒を緩めない。

「ここにある生体兵器は、核心技術の開発こそ私が担当しているけど、製品の企画や市場調査は全て遠野さんが仕切っている。私の夢を具体的な形にするのに、遠野さんは不可欠な存在」

口から「夢」という単語をしゃべる女からは、外見とは裏腹にいくらか子供っぽい印象を受けた。

「あそこの黄緑色のやつは、人間なのか？」

先ほど見た、あの気味悪い二足歩行ができそうな個体だ。

「そう。人間を使った生体兵器　つまり改造人間よ。筋力を強化すると同時に、戦闘において最低限必要な機能だけ残して、残りは取り除いた。特に消化器系を大胆に削り、胃を摘出して腸も短くしたから、かなりの軽量化が実現したわ。ミキサーでドロドロにした物しか食べられないけど、そのぶん安い価格で高い戦闘能力を実現できる。開発が完了次第、売上が期待される製品よ」

その言葉で、龍彦は顔を引きつらせてしまった。

「そんな非人道的なモンを作ってまで、金儲けをしようと考えてんのか！」

全身から嫌悪感を発散させて、龍彦は叫んだ。

やっっていることがおかしい。彼らの頭の中には、人間の尊厳という概念が無いのか。

「別に私たちは、金儲け自体が目的じゃない。お金は夢を実現するために必要なだけ。そのお金を手に入れるために、こうした商品開発と販売が必要なのよ。あなたたち公務員と違って、私たちには、お金が黙っているだけじゃ入ってこないからね」

「だから顧客に、暴力団も入ってるのか」

「その手の人たちには、運び屋になってもらっているだけ。警察から四六時中目をつけられている暴力団にやすやすと商品を提供したら、私たちまで一発でしっぼが掴まれる。私たちの主な顧客は、内戦が起こった外国の組織とか、逆にとりあえず騒ぎを起こすことだけが目的の目立ちたがり屋、つまり警察から見たテロリストという連中よ」

「そのような者たちは、警察や自衛隊と違って資金が圧倒的に乏しい。だから安全性やアフターサービスを全て犠牲にしても、コスト最優先で戦力を調達しようとする。そういう顧客を満足させるのも、我々の役目だ」

女の言葉の最後に、遠野は自分の『市場調査』の結果を付け加えた。

「でも、非人道的な行為をしていい理由にはならねーはずだ」

「私もこれがベストだとは思っていない。非人道的とは安全性の欠如のことだ。だが安全性をよく確かめようとするれば、価格は一気に跳ね上がる。今私は、低価格と安全性・高機能の相反する条件の中から、ベストな均衡ポイントを探している。社会の隅にいる連中の基準ではなく、ごく一般の人々が受け入れられる基準を探し、販路を一般人にも拡張したいと思っている。今のところ、この犬型が最もそれに近い」

「一般人まで金づるにして、改造人間にする気かよ。もしかしてあんたらの夢ってのは、人類全部を改造人間にして、あんたらがその

頂点に立って支配者になるとか、そういうことなのか？」

「そんなむごたらしい支配欲なんか無いわ」

茶髪の女は一つ笑ってから、意味ありげに窓の外を仰ぎ見た。

「一七年前の対馬での核テロ事件。実はあれ、ある研究組織の拠点を意図的に壊滅させたんじゃないかって噂が立っているの」

「は？」

唐突過ぎる話題の転換に、龍彦は間抜けな返事しかできなかった。その女は、窓の外の遠くを見たままだ。

一七年前、歴史上初めて国家以外の集団が核兵器を爆発させた。龍彦がちょうど生まれた年に、長崎県の対馬に不法上陸したテロリストが、持参した核兵器を暴発させたとかいう事件。この事件は世界を震撼させ、テロリストや核兵器の存在がクローズアップされるようになり、歴史の流れを変えたとまで言われる。この事件が遠因となつてかは知らないが、日本を含めた世界中でテロが頻発する不安定な世界へと突入した。

核兵器に使われる核物質の量自体は、実は原発や原子力潜水艦の原子炉に搭載されている量とはケタ違いに小さい。また爆発した場所も山中で人口がまばらな場所でもあったため、日本という国家が吹き飛ぶような事態にはならず、まき散らされた放射性物質も回収されたり雨に流されたりして、今は全く危険の無い土地になっている。

しかし彼女が何の話をしているのか、龍彦には全く理解できなかった。

「その拠点施設は山中の地下浅くにあつて、地表上の核爆発で施設や研究員の全てが壊滅。地下に埋まった施設は現場を調査した自衛隊にも発見されず、その研究施設の存在を知っていた関係者が何年もかけて証拠隠滅した」

「何を言ってるのか、さっぱりわからねーぞ？」

「そしてこの壊滅した研究所では、現在の科学技術の百年先に行くほどの、私たちからは想像もできないレベルの研究が行われていた。

そしてそこで研究者たちが目指したのは、究極の生命の創造……」

女はうつとりとした目でこちらを向いた。びしっと大人っぽい化粧をした顔に、子供のような無邪気な表情を浮かべている。

「その噂を聞きつけた世界中の研究者は、好奇心に駆られた。そしてその中から私みたいに、死んだ研究者に猛烈に憧れて、その夢を自分が実現しよとする人が出てきた」

女はもう一度、ガラスケースに手を置いた。

「ここで開発された技術は、全て生命に新しい可能性を与えるためのもの。決して金儲けが目的じゃないわ。生体兵器を使った事件がどんどん増えているのも、研究者たちが競って研究開発を重ねた結果の副産物に過ぎない」

「何なんだ、究極の生命の創造って……？」

科学者の言葉というより、哲学的、宗教的な響きのするそのセリフ。龍彦などの一般的な人間には、曖昧で神秘的な魅力を感じさせる。

「遺伝子をいじくれば、通常の犬とは比べ物にならない運動能力を持つ個体が出来る。生命工学以外の技術をさらに応用すれば、鉄をも噛み砕き、時速百キロの速度で一〇秒以上走り続けることのできる犬、さらには大型改造人間まで生み出した。これはまさしく進化、大いなる発展よ。あなたは生命と科学が秘める無限の可能性を追跡することに、何の興味も感じないわけ？ あなただって改造人間ならわかるでしょう？ 科学の力で、今まで考えられなかった能力を、あなたは肉体に宿しているのよ？ どんな理由でもいいし、そもそも理由も無くたっていい。ただ面白そうと感じる、人間なら誰でも持っている知的好奇心は無いの？」

「私は六五歳のとき、この話に出会った。当時は会社を定年で辞めてから、散歩やランニングや読書で暇を潰す日々が五年も続き、妻も死んだ。あとは老いの進むまま、体は弱り頭はボケながら死んでいくのかと思っていた頃だった。偶然にも改造人間というものの存在を知り、そして半信半疑ながらも、大型の最初のプロトタイプの

実験体になった。そうして犬型の個体に変身してみれば、まず普段と視線の高さが全く違う。さらに老衰で弱ったはずの視覚や聴覚や運動能力が、信じられないほどに強力になった。目は新聞の細かい字から一キロ先のナンバープレートまで遠近を問わずくつきりと物を捉え、耳はあらゆる音を細かく詳細に聞き取り、そして車よりも速く走れるようになったんだ。初めてそれを体感したときは感動したなあ。老いを吹き飛ばしたようなすがすがしい気分がしたし、やはり人間はすごい、老衰になって当たり前だと思っていたのに、まだまだ捨てたもんじやないかと驚いたよ。彼女の話とは少しずれるかもしれないが、それ以降私は、人間を含めた生命の可能性というお題に魅了され、彼女に積極的に協力するようになった。今までの会社人生で蓄えた知識や経験を遠慮なく放出し、今は彼女の指示のもとで組織の運営を統括する立場にいる」

犬のおぼけと言いたくなる風貌の遠野だが、今にも飛び上がりそうなくらいに心が躍っているのが目に見えてわかった。
(こいつら、改造人間になることに後ろめたさを感じてない。確信犯だ)

二人の言うことも、龍彦は理解できる。自分が初めて改造人間の真の姿に変身したときは、その能力に圧倒され、感動を飛び越して感激していた。『^{ハイサーカー}狂犬』の分析を聞いたり、『開闢』の新たな能力をその傍で^{そば}確かめたときは、科学技術のもつ神秘的な要素に惹きつけられた。二人が生命の可能性を追求したり、『究極の生命』とやらを研究したりしたくなるのも、好奇心をくすぐられるからだ。その魅力は、よくわかる。

だがそれでも、犯罪に手を染めていい理由にはならない。遠野は殺人罪が濃厚だし、それ以外にもこの組織のメンバーに殺人罪で裁かれるべき人間がいる。暴力団との取引や資金洗浄などの罪もある。

「あんたらが純粋な探究心で、究極の生命を生み出すことに全力を上げているのもわかった。だけどそれなら、国や大学の研究室にで

も雇ってもらったらどうなんだ？ それなら堂々と研究ができる。わざわざ違法だったり違法すれすれの手段で資金を手に入れたり、テロリストみたいなキチガイに戦力を提供するなんて、世間から見りや到底許されることじゃねーぜ」

「君は何しにここに来た？ さっきのあの長い名前の法律の違反を、取り締まりに来たんじゃないのか？」

遠野の言葉に、龍彦はハツとなって思い出す。

「その法律や、それ以外の大小様々な規制が、私たちの研究を邪魔しているの。国家なんて、自分たちに都合が悪い事はもちろん、これから都合が悪い方向に進みそうというだけでその要素を排除しようとする。所詮はそんなもんよ。だから私……私だけじゃなくて私と同じ目標を持つ人間は全員、既存の組織を信用していない」

本人はかっこいいと思って言っているのだろうが、龍彦には、社会に対する反抗心には聞こえない。学校で反抗し、廊下を自転車で走ったりする中学生と一緒にだ。

「おまえらには、国家と両立できないような、後ろ暗いところがあるんじゃないのか？ というより、社会に反抗するのが格好い程度にしか思っただけじゃねーのか？」

龍彦には、科学技術の研究を取り締まるうという意思は無い。危険な兵器をホイホイと製造して社会の安全を脅かす存在を摘発し、脅威の目を摘むのが、龍彦の仕事のうちだと思っている。それだけだ。

「なぜ警察は改造人間や生体兵器の存在自体を規制し、取り締まっているんだ？ 君たちがやっていることは、憲法で保障された学問の自由の侵害だ」

「おまえらが学問で得られたものを、犯罪に利用してるだけだろ！ つい大きな声になってしまった。国家を信用しないと宣言して犯罪を堂々としている者たちに、憲法がどうのこうのと言われたくない。理屈をこねる犯罪者に、龍彦は腹が立ってきた。

「私は本当に、普通の市民にも改造人間を勧めたい。例えばこの犬

型だって、普通じゃ絶対に味わえない能力が味わえるし、実際に役に立つ。車は要らず、老人は杖が必要無くなる。そして単純な便利さだけじゃなくて、自分の肉体の強さに精神的な満足感を得ることができる。心の健康も実現可能だ。最初は気味悪いと世の中は思ってもしれないが、きつと社会はその良さを理解し受け入れてくれると信じているよ。君は改造人間の、兵器としての悪い側面だけに注目し過ぎている」

「危険なものを、社会に放っておけるか！ そのせいで、何十人や何百人の人間が死んでるんだ」

「君がしようとしていることは、自動車で人を轢き殺すことができるから、自動車の保持を禁止しようとするのと同じだぞ」

「どこがだ！」

「じゃあ、どこに違う点があるんだ？ 全面的に開放しろとは私も言えないが、社会的な損得を勘定すれば、車の免許程度に規制を緩和したつていいんじゃないのか？ 第一、警察的規制を敷くにしても、実際に人を殺したりしなければ、研究開発自体まで規制する必要はないんじゃないのか？」

答えられない。正直、適切な答えが思いつかない。

「君は厄介事に何でもかんでも蓋をして、とにかく規制してしまえばいいとしか考えない人間だ。身の回りの法律を一つ挙げて、どうしてそんな法律があるのか、どうしてその法律が必要なのか、今まで考えたことなんて無いだろう？ もう一度聞くんが、君は何をしに、何を取り締まりにここに来たんだけ？」

「……………」

強制捜索の名目は、資金洗浄の容疑。しかし龍彦ら警察は、殺人の容疑者・遠野の存在の手掛かりや、改造人間を製造する施設を発見しようとして期待してやってきた。

「私の殺人の罪は認めよう。兵器の実験の一環として、私を含めた複数の者が、人を殺害したことも正直に自供する。だが、改造人間の存在自体の取り締まりには、断固として抵抗させてもらう。改造

人間は、日本政府が考えているような、ヘンテコで危険なものじゃない”

遠野のその言葉に、龍彦は頭が揺れる思いがした。彼の言葉に、おかしなところは見当たらなかった。

(オレだって、ヘンテコな目で改造人間を見てほしくない……)

改造人間に対する考え方　偏見が少なからずある政府上層部たちよりも、遠野たちの方が改造人間や生体兵器をずっと公平に見ているような気がする。警察が取り締まる根拠となる法律や規則も、偏見を元に作られたと言えなくもない。

「ここにある技術は、人類に新たな幸福をもたらす、人類全体の大きな夢なんだ。それを潰すことなど、絶対にさせない”

犬の頭をした遠野の顔からは、空気を振動させるような強い迫力が伝わってきた。

自分の任務の残りは、遠野に拘束具をかけるだけだ。だが、龍彦の意識はベルトに装備してある拘束具に全く向かない。

(オレは、殺人犯の遠野たちを捕まえに来た。だけどそれ以外の件こいつらを、改造人間だからってだけで逮捕していいのか?)

情報も何もかも隠蔽して規制している日本の役人たちより、改造人間の利点を合理的に説明し、科学技術の良いところを社会全体で賢く使おうとしている彼らの方が、正しいことをしているように思えてくる。彼らの活動の本質が狂わなければ、以前に出口が言っていたような、改造人間へのバッシングという事態も避けられるのではないか。そしてそれを最も願っているのは、もしかして改造人間たる龍彦自身なのかもしれない。

(だけど)

左の拳を握り、彼らの意見に落ちる寸前で踏み留まる。遠野の黄金色の視線と龍彦の視線がぶつかった。

「確かに、改造人間を社会の発展のためにうまく利用しようとする考え方は、オレも納得できる。世の中には確実に、改造人間を勝手に『兵器』や『戦争』と連動させて平和主義の敵だとレッテル貼り

をする無知なやつらや、『自然の原理に反する』の一言で頭から否定する連中がいる。そういうのから比べれば、あなたたちの柔軟な考えの方がよっぽど好感が持てるさ。だが現実は違う。今までの新発明と同じように、生体兵器や改造人間に真つ先に注目するのは、軍人が犯罪者だ。その犯罪者に改造人間が行き渡らないよう原因を根元から絶つことは、たぶん世間の連中も納得する。鉄砲の所持や製造に関する厳しい規制と同じようにな。自動車みたいな甘い扱いじゃ許されねえ。そして生体兵器を規制する法律があり、オレはその違反者を捕まえに来た。あなたらはもう、法律によって取り締まられるべき、犯罪の根っこなんだよ」

遠野が顔をしかめるのがわかった。鋭い歯が口からちらりと見えた。

「あなたたちの活動のせいで、過激な暴力思想を持つやつらに強力な生体兵器や改造人間が行き渡り、悲劇を生み出してるんだ。あなたらがどんな理念を掲げようとも、今の活動を止めない限り、テロリストたちの勢いは小さくならねーだろーな」

龍彦は左手の拳を解き、自分のベストに印刷された「POLICE」の文字を指した。警察の一員となるときに、心の中で誓ったことを思い出す。

「オレは、世の中の暴力を退治して、悲しむ人間がもう出ないようにするために警察官になったんだ。暴力を実行するやつだけじゃなく、暴力を助長するやつも、オレは許さねえ。もう一度宣言するぜ。遠野泰造、医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法の現行犯として逮捕させてもらう。女のアントも身柄を拘束する」

「君も、所詮は権力の手先に過ぎないということか」

「ごちゃごちゃとうるせーぞ。どうせ素直に従う気も無いんだろーし、拘束具をはめてやる」

「それは断る」

「てめえ……」

龍彦が近づいて遠野の体を掴もうとする直前に、遠野はさきほどにも一体が飛び出して割れた窓に突っ込んだ。

「待ちやがれ！」

ちらりと女を一目見てから、龍彦も窓から飛び出した。女は二人の様子など全く意に返さないというふうに、薄笑いを浮かべたままだ。

「こちら『雷光』。おそらく最後と思われる遠野泰造と一緒にビルから飛び出しました！ 組織の主要人物の女が今もビルの中にいます。すぐに『メカ』を派遣して身柄を拘束してください」

飛び出してから空中でヘルメットの通信を入れ、出口につないだ。「わかった。すぐに隊長の方に伝える。おまえは遠野を捕まえる。

逃すなよ？」

「了解！」

着地した先は、二階建て一般住宅の屋根の上だった。遠野は一軒先の屋根の上に、四本の足を置いて頭をこちらに向けている。

「前に会った時のように、私が下手のままへこへこするとは思うな」「てめーこそ、今度は尻尾巻いて逃げるなよ！」

封鎖された夜の住宅街を見渡すと、地上には『メカ』の隊員やらが龍彦たちを発見してこちらを指さしているのがわかる。だが『徹芯』や『開闢』の姿は見えない。

「警察側の改造人間を倒せば、改造人間の大きな宣伝になる。営業や宣伝の統括者として、ぜひ利用させてもらおう」

遠野は軽いひとつ飛びでこちらの屋根へと飛び移り、龍彦の腹や腰の高さを狙って攻撃を開始した。大きな顎や前足の爪での攻撃は、今までの『狂犬』^{バーサーカー}に比べてスピードが速く、技と技の間が切れ目なくつながっている。

（隙が無い。ただのサラリーマンってわけじゃねーのか）

今までの『狂犬』^{バーサーカー}の攻撃が断続的なリズムだったとすると、遠野の攻撃はなめらかにつながった一連の流れだ。

「私は大学時代に、ボクシングと柔道をしていたんだ。活発だった

若い頃が懐かしいなあ」

昔を懐かしむ口調は、まるで同窓会での会話のようだ。

龍彦は基本的に全ての攻撃をステップや跳躍で避けた。下手に堂々と防御すると攻撃の流れに吞まれると考え、遠野の攻撃の筋を見極めることに専念した。

「しかし今は、その若い頃さえも上回る能力がある。こんな素晴らしい技術を根こそぎ禁止しようなんて、日本はどうかしている」

「おまえは、その素晴らしい技術を悪用する連中を、手助けしてるじゃねーか！」

遠野の右手の攻撃を龍彦は肘でブロックし、相手の肩を突き飛ばした。しかし遠野の体を下から突き上げることはできず、遠野との間にわずかな間を開けただけに過ぎなかった。

そのとき、複数の銃声が聞こえた。周辺にいる『メカ』の隊員たちが発泡したのだ。

しかし遠野は、それをあらかじめ予想していたかのように屋根から屋根へと激しい動きで移動し、狙いをはずす。そしてもう一度龍彦の近くへと寄ってきて、攻撃を再開した。

遠野の動きは、とても六八歳の老人とは考えられない。今までの人類では決して得ることのできなかつた能力だ。これが魅力的なものに見えるのは、それこそ仕方のないことだと思う。龍彦も、立場が違えば『狂犬』^{バーサーカー}の力を強く欲する人間になっていたかもしれない。(これだけすごい力だからこそ、悪人も善人もみんなが欲しが。だけどこれが社会に広まれば、出口さんが言ってたみたいに、本当に人間はおかしくなるかもしれない……)

遠野が横から前足を振り回してくる。龍彦はその肘を下から拳で突き上げる。後ろ足でバランスを取る遠野はなおも逆の前足の爪で龍彦の脾腹を抉ろうとするが、龍彦は後ろに身を引き横からの攻撃を交わす。そして遠野は攻撃が終わった両前足を屋根に置き、口を開いてから全身のバネを利用して飛びつき、龍彦の下半身を狙う。龍彦はそれを横に移動して交わしつつ片方の前足に蹴りを入れ、相

手がわずかに怯んだ隙に隣の屋根へと飛び移って逃げた。

(そうか。オレが近くにいと、『メカ』の人たちも銃で遠野を撃ちにくくなるんだな)

龍彦は一瞬、遠野から逃げることに専念しつつ遠くから『轟』^{トウゴウ}で銃撃しようかと思った。だが四足で全身をバネのように使って動く『狂犬』^{バーサーカー}の方が瞬発力やスピードに優れ、銃撃に適するだけの距離を龍彦から取ることができると不安がある。またその戦法をこちらが選択すると、気づいた遠野が逃走に出るかもしれない。こうなると遠野が逃亡中に一般人に何か被害を与えるかもしれないし、日本の警察官は背中を見せて逃げる相手に銃を撃てないので、厄介なことになる。

(オレなら躊躇なく撃つけどな)

しかし騒ぎがこれ以上大きくなりかねないので、その戦法はやめておくことにした。

(さっさと片付けねーと。まだ他にも改造人間がいなくて決まったわけじゃねーのに……)

第2編(5) オレだって生体兵器

清子はビルの二階から一階を駆け抜けて逃げ出した『狂犬』^{バイサーカー}を追っている。ビルの玄関の外では多数の『メカ』の隊員が銃を構えていたにも関わらず、『狂犬』^{バイサーカー}はその射撃を全く気にしない様子で地面を駆け、二階建て住宅の屋根の上にワンジャンプで飛び降りさらに逃走を企てた。すかさず清子も屋根の上に飛び乗り、追跡を続けた。

出口に通信を入れる。

「こちら『開闢』です。『狂犬』^{バイサーカー} 一体が南東方向に逃亡しています」
「そのまま追ってください。その方角だと『徹芯』も追いかけてる方向だな」

と出口が言ったところで、遠くに屋根の上で格闘する一人の人間と一体の四つ足動物を発見した。

「私も『徹芯』の姿を確認しました」

遠くの方では、雪菜とその相手のも、清子とそれに追いかけている個体に気がついたようだ。

すると雪菜の相手をしていた『狂犬』^{バイサーカー}が、突然清子の方に走ってきた。同時に追跡中の個体も方向転換し、二体の『狂犬』^{バイサーカー}が清子に襲いかかる。

(くっ……)

しかし清子だって訓練を重ねてきた。二体の噛み付き攻撃をかわし、一体の頭の横を右手で殴った。

「離れてください！」

雪菜の言葉と同時に銃声が鳴り、一体の『狂犬』^{バイサーカー}の後ろ足に二発の弾丸が命中した。その個体は衝撃に体を震わせて、斜め屋根の上に倒れるとそのまま重力に引かれて屋根から地面に落下した。

「『徹芯』は地面に落ちた個体に拘束具をかけて。もう一体は私が引きつけるから」

「わかりました」

清子はまだ健全な個体を積極的に攻撃した。突きや蹴りを出しつつ、雪菜が屋根から降りて地面にいる『狂犬^{バーサーカー}』を無理やり抑えているのを確認した。

(このっ！)

仲間がやられて動揺したのか、相手は単調な動きになってくる。ワンパターンな前足での攻撃と、間が空いたときに突っ込んできて口で噛み付こうとするだけのようだ。

急所を攻撃できないかと考え、清子はもっと深めに前へ踏み出して攻撃にかかる。相手の顎を下から殴り上げる攻撃も行い、何とか相手の体勢を崩そうとするが。

「あっ！」

相手の左前足が降りおろされ、その爪が清子の右肘に当たった。

幸い直撃は避けられたが、強化プラスチック製のプロテクターが割れ、肘にも痛みが走った。

一瞬だが清子に隙ができてしまった。相手はそのときを狙って攻撃しようとするが、再び響いた銃声がその足を止めた。屋根の下から雪菜が銃を撃ち、そのうち一発の弾丸が『狂犬^{バーサーカー}』の後ろ足を掠^{かす}ったようだ。

このときを逃^{のが}しては、清子は再び前に踏み出し、相手の前足を蹴り飛ばした。その痛みに驚く『狂犬^{バーサーカー}』の口を、清子は両手でしっかりと閉じた。

しかし口を閉じられた相手は、凄まじい力で藻掻く。龍彦から話を聞いていたが、想像以上だ。何とか手は離さずにすんだが、清子は相手の爪から肩や腕に攻撃を受け、プロテクターがポロポロと碎けた。さらに清子とその『狂犬^{バーサーカー}』は、勢い余って一緒に二階の屋根から地面に転げ落ちてしまった。

その落下の衝撃にも、改造人間『開闢』の体は難なく耐えた。地面に落ちてもお清子はその手を離さないと踏ん張っていたが、駆け寄った雪菜が暴れる『狂犬^{バーサーカー}』の四つの足と顎に拘束具をはめると、

清子の手から力が抜けた。

「大丈夫ですか？」

「うん、何とかね」

攻撃された箇所のプロテクターを外して傷を確認してみるが、どれも浅い傷だ。このプロテクターのおかげだろう。

すぐに『メカ』の分隊の五人がやってきて、二体の『狂犬』^{バーサーカー}の身柄を預かった。雪菜はその分隊長に口頭でいくつか報告した後、すぐに出口に通信を入れた。

「『徹芯』です。出口さん、『開闢』と共に二体の『狂犬』^{バーサーカー}の身柄を確保しました」

『よくやったぞ。あとは『雷光』が、今二人がいる所と逆方向の場所ので『狂犬』^{バーサーカー}の遠野泰造と格闘中だ。同じように住宅の屋根の上で暴れる。二人ともサポートに行つてやれ』

「安中ペット保護協会のビル内の搜索では、他に改造人間はいなかったんですか？」

「中で主犯らしき女と数人の事務員を拘束したが、もう改造人間に変身するやつはいなかった。おそらくは遠野が最後だ。そっちに集中しろ」

「はい。わかりました」

雪菜が通信を切ると、清子はすぐに『轟』^{ドイン}を取り出して言った。

「よし、また頑張るわよ！」

「行きましよう」

雪菜の指示に従いながら、清子は龍彦がいる場所を目指して走った。

龍彦の蹴りは空を切り、遠野の噛み付きも龍彦の右肩からわずかに外れた。

(こいつは相当な腕前だ。さすがは組織の『副社長』ってとこだな) 周辺には『メカ』だけでなく機動隊や一般の警察官まで集まって

きており、その規模は優に百人を超える。『メカ』の隊員たちは銃を手にしているが、龍彦にはば密着している遠野には発泡できないでいる。

『聞こえるか、『雷光』？』

「はい！」

突然内蔵スピーカーから聞こえてきた出口の声。遠野との格闘に集中しつつ、龍彦はその声に耳を傾けた。

『残りの生体兵器類は全て確保した。おまえのところには『徹芯』と『開闢』がすぐに応援に行くと思うから、それまで頑張れよ』

「わかりました。安心してください、何とかしてみせますよ」

『当たり前だ。期待してるぜ』
通信はそれで切れた。

（あとはこいつだけか）

他の『狂犬』^{バースカー}より一段も二段も上の実力を持つ遠野だが、残り一体となればこちらのものだ。

「てめー以外の仲間は全員捕まったぜ。さっさとお縄につくんだな」
「仲間の喪失は、戦いを止める理由にはならない。言っただろう？
これは宣伝なんだ」

遠野は、あくまでこのまま戦いを貫き通すつもりらしい。

「宣伝したって、もう組織の製造工場は抑えられてるんだ。意味ねーだろ」

「この商品の宣伝とは違う。警察という国家権力の象徴に打ち勝てば、生体兵器や改造人間に備わる力をアピールできる。それと同時に、科学技術に対して開かれた我々と、情報の隠蔽しか思いつかない警察のどちらが正しいのか、証明できる。我々は一人じゃない。たとえ我々の組織が打撃を受けようとも、同じ価値観を持つ人々に希望を与えるのが、私の使命だと思っている」

「またもウンチクをごちゃごちゃと」

そのとき、遠くの方に二体の人影が見えた。

『こちら『徹芯』です。大丈夫ですか？』

やってきたのは、『徹芯』と『開闢』の二人だ。二人とも、それぞれ『^{バーサーカー}狂犬』を倒したらしいが。

「少し離れて！ 私が銃で狙うわ」

「いや、銃は使うな！」

こちらから家二軒分の間を開けホルスターから銃を抜いた清子に、龍彦は怒鳴った。

「こいつはスピードが速いから、オレから距離を空けられない。『徹芯』と『開闢』でこいつの後ろをとれ。三人で挟み撃ちにする」

すると遠野はその言葉を聞いたからか、龍彦の手を叩いて背を向け、後ろの様子を確認しようとして頭を捻った。

（三人もいりゃ、サポートが期待できる。もう恐くねーぞ！）

龍彦は無理矢理な動きで、遠野の右前足を左手で掴んだ。当然遠野は激しく抵抗する。

「おまえらもこいつを抑えろ！」

遠野は口や前足だけでなく、体を曲げて後ろ足でも龍彦を引つ掻こうとする。掴んだ右前足の爪が手首に当たる。左前足の爪は龍彦の首を掠りそうになったが、こちらも龍彦は右手を使い、力づくで抑えた。遠野の両方の後ろ足が龍彦の腹を覆うプロテクターに当たり、爪が刺さってプロテクターにヒビが入る。しかし龍彦は遠野の体を力いっぱい振り回し、口での噛み付き攻撃だけは、なんとか避ける。

「警察には負けない！ 科学が勝つ！」

「うるせえ！ いい加減にしやがれ！」

龍彦は自分のヘルメットを被った頭を、犬の顔をした遠野の鼻を目がけて思い切り叩きつけた。ガツンと大きな音がした。

犬の顔のくせに、遠野が目を閉じて痛がるのがわかった。ぶつ付た鼻どころか、上あごの骨まで折れたらしく顔の形が変形し、歯と歯の間から赤い血が垂れている。しかし龍彦も相当な衝撃を受けた。ヘルメットのちょうど額に当たる部分^{ひたい}が割れ、顔を覆うフェイスシールドの上半分にもひびが入った。

「てめーの負けだ！ 観念しろ！」

両前足をがっちりと掴んだまま、龍彦は遠野の体を地面に腹這いにして、顎を含む頭を右膝で地面に押さえつけた。これなら口も開けないだろう。

「今、拘束具をかけます」

雪菜と清子が駆け寄ってきて、全ての足と顎を金具できつく締めた。拘束具をかけられると、遠野はもう抵抗らしい動きはしなかった。顎は正面衝突した車のように前後に縮み、片方の足はだらりと地面に垂れるだけ。遠野は龍彦の頭突きにより顎の骨が砕け、さらに最後のもみ合いで右前足を脱臼したようだ。

「『雷光』は、すぐに出口さんに報告をしてください」

「おっと、そうだった」

格闘戦で興奮したおかげで、そういった事務的な任務を忘れるところだった。

「こちら『雷光』です。遠野泰造と思われる『狂犬』ハイサーカーを、確保しました」

「よし、やったな。あとは現場近くにいる『メカ』の隊員たちに任せて、協会のビルの方まで来てくれ」

「わかりました！」

龍彦は拘束具で固められた遠野を抱えて屋根の上から飛び降り、すぐ近くの『メカ』の隊員に引き渡した。そのときには隊員たちが、龍彦の割れたヘルメットを見て気にかけてくれ、さらには敬礼までもしてくれたので、嬉しかった。

そして三人は、『メカ』とは別々にビルまで戻った。

「リュウ、大丈夫？」

三人で道歩く途中で、清子が龍彦の割れたヘルメットをまじまじと凝視してきた。

「頭突きが決め手になったんだが、まさかヘルメットが割れるとは予想できなかったぜ……」

「ヘルメットを脱いだらどうですか？ それだと危ないですよ」

「でも変身中にこれ脱ぐと顔がバレるから、ダメなんだろう？」

「今回は応急処置ですから、問題ありません」

「そうなのか」

ヘルメットを脱いでみると、確かに額の部分を中心として、ヘルメットとフェイスシールドに縦の割れ目が走っている。割れ目は頭頂部まで達しており、もう少し頭突きの方が強ければ、ヘルメットが左右に割れ落ちたかもしれない。が、ヘルメット

「少し額に血がついていますよ」

「そうか？」

額を袖で拭いてみると、確かに血の跡がついた。しかし傷は小さい。

「もう血も止まってるみてーだ。割れた破片が刺さってたりしてなくて良かったぜ」

「本当に大丈夫ですか？」

雪菜が半歩前に進み、龍彦の顔を注意深く観察してきた。それは雪菜にとって特別変わった行動ではないのだが、なぜか龍彦は雪菜の顔 特に瞳が近いと感じ、ぶつかった視線を慌てて逸らした。

(前は全然気にならなかつただけだな……)

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねーんだ」

「……なんかリュウ、変よ？」

「清子まで、何言ってるんだよ……」

全く自分ときたら、他人に悟られるくらいの変化が外側に出ていたとは。任務中だというのに、何をやっているのだろうか。

それから龍彦は、その表に出かけた恥ずかしさを、何とか体の奥に引き戻そうとがんばった。

三人揃って、再び協会のビルの中を徹底的に搜索した。龍彦は予備のヘルメットを被って、一般の警察官らと一緒にビルの書類や機材を運び出した。特に大型の機械を運ぶのには、龍彦たち改造人間

の強化された腕力が役に立った。

特に驚いたのが、あの『本社ビル』の四階に、大量の生体兵器が籠に入れられて保管されていたということだ。そちらは在庫で、龍彦たちが見たガラスケースが展示品ということになるのだが、その在庫の数は、全て合わせる軽く百を超えていた。それらは全て押収され、科特警に運ばれてくることになっている。この大量の生体兵器への対応も、また大変な仕事になりそうだ。

そして三人は出口が運転する車に乗り、一緒に科特警の本部に着いた。時刻は午後十一時を過ぎた頃だ。

「三人とも、よく頑張ったな。あのビルは、組織の『本社』にあたる場所だった。あそこを調べたら、関連する製造施設も見つかって、古川隊長率いる『メカ』はそっちに出動してる。これからどンドンここに押収した生体兵器が運ばれてくるぞ?」

廊下を歩きながらそんなことを言われても、三人は肯定も否定もできずに苦笑いするしかない。

第一事務室に入り、出口は三人を自分の机のところに呼び寄せた。「もう夜も遅いが、手っ取り早く今日の一連の任務の簡単な報告を書類にまとめてくれ。ワープロを使って五〇〇字くらいの感想文でいい。それをオレは、早く本庁に提出しに行かなきゃならん。詳しい報告書は明日でいい」

「あのその前に、私たちは普段着に着替えてきていいですか?」

清子は汚れて擦れた活動服を気にしているようだ。確かに、三人とも事務作業どころではない。

「竹内と立川はいいぞ。大島は、壊したヘルメットの損壊届を書いてからにしろ」

「……それも明日じゃだめなんですか?」

「こんなのすぐ終わるだろ。忘れる前に、まず最初に書いておけ」

「へい」

こういう事でいちいち書類を書かなければならないのが、とても煩わしい。

「失礼します。 出口署長」

しかし雪菜と清子が部屋を出て行く前に、一人の白衣を着た中年の男性が入ってきた。研究・技術系の職員だ。クリップで挟んだ書類の束を脇に抱えている。

「押収した生体兵器の検査は順調です。検査の結果、拘束具や麻酔薬をかければ動きを抑えられ、それ以外に隠された能力などは無いと結論が出ました。検査が終了した個体を、順次処分場に移送したいと思います」

「それじゃあ、俺の許可がいるな」

「処分場って、何ですか？」

その単語が引っかかり、龍彦は自然と口から疑問の言葉が漏れた。いや、それは疑問ではなく。

「まさか……」

自分が感じているのは、疑問ではなく拒否感だったりする。

「法令で定められた対処だ。生体兵器は、元の通常の姿に戻せるのなら、可能な限り戻すこと。どうしても不可能な場合は、人間以外の動物を素体とする生体兵器は生殖能力を奪った上で隔離、改造人間の場合は嚴重な警備のもとで無期限拘禁することとする。ただし、動物の生体兵器は、もう専用の隔離施設が満杯で、最後の手段となる殺処分が認められている」

出口は、龍彦が言いたいことを察知して説明した。

「今回殺処分されるのは、遺伝子直接操作型のネズミとカラスだ。合計で三〇体。酸欠により窒息死させた後に、死体は焼却処分される」

「そんな！」

反射的に、不快感いっぱい声をあげてしまった。

処分場に閉じ込められる生体兵器の姿が頭に浮かび、自分自身と重なる。龍彦だって同じ遺伝子直接操作型であり、改造を元に戻るのが今のところ難しい点で共通している。違いは、素体人間であるか否か、そのことでしかない。明日は我が身というか、後の自分

が同じ目に遭うのではないかという恐れを感じるのだ。

「まあ、気持ちにはわかる。だがこれが決まりだ。生体兵器を扱っためにお上を納得させるには、こういう措置が必要なんだ。お偉いさんたちはこの問題に関しちゃ極めて敏感だから、あんまり騒ぎ立てると、こつちが目を付けられる。わかってくれや、な？」

出口は眉間にしわを寄せつつも、龍彦を優しく宥めるような口調と仕草で、冷静に反応するよう求めた。

言葉だけ聞くと、ただ科特警という組織の保身のための発言のようには思える。だが出口の妙に心配そうな表情は、暗に別の意味を語っていた。もし騒ぎ立てると、上層部から目を付けられるのは出口や科特警ではなく、改造人間である龍彦自身 ということだ。出口や龍彦と同じく事情を知っている雪菜は、口を閉ざしたまま一言もしゃべらない。表情で、雪菜も痛々しく思っていることはわかった。

（お偉いさんから見ても生体兵器の仲間と思われるような言動は慎めと……そういうことか）

異論があるのに、自分の安全を守るためにそれを言えない。こういう場合、黙ってしまう自分がとても陰湿かつ卑怯で嫌に思えてくる。まるで、校内でのいじめを見て見ぬフリをしているような気分である。

だが龍彦は、それ以上出口には反論してみせなかった。出口の言葉は、何より真実を語っていると納得せざるを得なかったからだ。

出口が書類のハンコを押すと、技術職員は書類を持って部屋から出ていった。雪菜と清子も重苦しい表情のまま、更衣室へと向かった。

第一事務室には、龍彦と出口の二人しかいなかった。

「やっぱり、いい気分はしねえよな」

ハンコの印面をティッシュペーパーで拭きながら、出口は複雑そうな顔をした。

「おまえ、自分も処分されるんじゃないかって、そう思ったんだろ

「？」

「……はい」

やはり出口はわかっていたようだ。

「生体兵器のインパクトの大きさを、つくづく思い知らされますよ。本当に、誰がこんなものを思いついたんですかね」

とそこまで言いかけて、協会のビル内で女としたやりとりを思い出した。

（そうだ。あの話、出口さんにしておいた方がいいな。でも、話づらいぞ）

報・連・相が社会人の基本だと思うのだが、あのSFじみた内容を大真面目で語るのは何だか照れくさい。

「あの、出口さん」

龍彦は、遠野と一緒にいた女が口にした、一七年前の『ツシマ』の件について、ゆっくりと話した。あの核爆発が起こった場所の地下には秘密組織があり、外部と比べて遥かに進んだ科学技術の研究が行われていたこと。その主たる研究内容は『究極の生命の創造』とかいうことらしいこと。核爆発で施設や人員が壊滅した後は証拠が消されたこと。そしてこの噂に強い興味を抱いた人間たちが、あの女のようにひっそりと世界中で研究をしていて、自分なりに『究極の生命の創造』の研究をしていること。などなどそっくりそのまま話した。

「オレは最初、妄言のように聞こえました。でも遠野といたリーダー格の女はこの話を本気で信じているようで、その子供みてーに目を輝かせて話しているのを見ているうちに、何だかオレも、単純な嘘には思えなくなってきました」

「そうかそうか。リーダーが自らそんなことを言ったのか」

出口はそう言って笑ったが、その笑いがどこか嬉しそうな様子を含まれていたので、龍彦はますますよくわからなくなってきた。

「おまえは、その噂は本当だと思うか？」

「え、そりゃ」

生体兵器や改造人間の現実を知る前の龍彦なら、こんな話など相手にしなかつただろう。しかし今の龍彦は、その日常を大きく凌駕した科学の世界を見ている。今まで全く信じられなかつた内容が、現実として目の前にある。

『おまえは物事を知らな過ぎる。いま目の前にある現実　いや正確にいえば、現実とみなされているもの　これにしか目が行っていない』

土手っ腹に風穴が開いて今にも死にそうだった龍彦に、あの憎き鱗人間が言った言葉が蘇ってくる。自分の常識が次の瞬間に非常識となることを、龍彦は思い知らされた。

そういうことを考えてくると、単純に否定できない。どう答えればいいのか、自分でもわからない。

「結論から言うとな、それは俺たち警察も疑ってることなんだ」
「……え？」

まさか　はつきりそう言われると、最初は何を言われているのかよく呑み込めなかった。

「冗談じゃねえ。ホントだぞ。現場に証拠が残ってたわけじゃねえんだが、今回の女と全く同じ話をする人間を、警察は今までに一〇人近く捕まえてきた」

意外過ぎる現実だ。まさか妄言より真実に近いとは……。

「日本で最初に生体兵器が使われたのは、今から十一年前。それより一年遡った年に、アフリカの内戦で、小規模だが世界で初めて生体兵器が使われた。そして例の事件が一七年前だ。対馬での核爆発事件の後、そこで壊滅した組織の噂が一年ぐらいかけて世界に広まって、それに刺激された研究者が研究を開始し、四年から五年で生体兵器を実用化し、実戦投入する。流れとしちゃびつたりなんだ。

いずれおまえや立川や竹内にも話そうと思ってたんだけどな。ちなみにこれを知ってるのは、おまえが遺伝子直接操作型だつて知ってるメンツと一緒だ。ただし、オレより階級が上の上層部にも、知ってる人はいる」

「そんなことが、本当にあったんですか……」

龍彦の中の常識が、また一つ崩れ落ちることとなった。

「今のおまえに話せることは、ここまでだな。続きはまたそのうちな」

出口はやんわりと話を止めた。

それから程なくして中原が、そしてさらに雪菜と清子が戻ってきた。第一事務室にはいつものような雑然とした雰囲気に戻ってきた。龍彦は色々な考え事が頭から離れなかったため、今日の書類作業はいつも以上に長く時間がかかってしまった。

身柄を確保した改造人間たちの自白から、捜査本部が扱ってきた殺人事件の犯人が明らかになった。遠野が言っていた通り、多くの改造人間たちが『兵器』としての性能確認のために人を殺して、さらには動物が素体となった個体にも人を殺させていた。遠野の場合、自分の愛犬を使ったらしい。

捜査本部が求めていた殺人事件は解決した。だが安中ペット保護協会が行っていた生体兵器の流通ルートなどはまだ全容解明されていない。技術開発の要^{かなめ}だった女 柴浦梓^{しばのり}が逮捕されたため、生体兵器の製造には大打撃を与えられることは確かだが、資金調達などで対外的に組織の代表者として振舞っていた協会の会長・安中秀春^{やすなかひではる}の行方はわかっていない。

安中ペット保護協会のビルを制圧した翌日から、龍彦と清子は学校への通学を再開した。そうして単位を取り、学校が終わってからまた科特警に『出勤』するという生活に戻った。犯人の身柄確保後は、龍彦たち素人にできる有効な仕事は無い。

「よう、今出勤か？」

「山石さん」

本部の玄関に入るとすぐ、山石がいた。

「捜査は順調ですか？」

「ああ、もちろん。いくら相手が改造人間でも、『落とす』ためのやり方は変わらん。その点じゃやっぱり、改造人間も人間と同じだな」

そのようなことを言ってもらえると、龍彦としては気が楽になる。山石は煙草を吸うと言い、入って来たばかりの龍彦を本部の建物の外に連れ出した。

「今回みてえな事件、俺は警察官人生三〇年の中で初めて経験した。まったく、犬相手にたじろぐなんてなあ」

建物の陰で、山石は口にくわえた白い煙草にライターで火をつけた。一服してから煙を吐き出す。

「俺だつてそれなりの修羅場をくぐり抜けてきたさ。ナイフ持った暴走族なんて何人も素手で取り押さえてきたし、盛り場でヤクザモンを四人いっぺんに叩き伏せたことだつてある。だけどあの生体兵器だけは、何とか自分と相手の距離を開ける以外、おめえに頼ることしかできなかった」

「別にオレも、自分の任務をこなしただけですよ」

「いやいや、本当のことだ。おめえはよくやったよ」

「ありがとうございます」

褒められたことには、素直にお礼を行って嬉しかった。

「おめえはあれを取り押さえるとき、恐くなかったのか？」

「そこまで恐くはありませんでしたね」

全く恐くなかったといえは嘘になる。しかし龍彦は、自分でもよく果敢に戦えたと思っている。自分を支えたのは、改造人間の戦士なんだという自覚。

「オレが捕まえなきゃダメだつていう使命感みたいなモンもありますし、あとは自分も改造人間だと思つと、何だか安心するんです。拳銃を持つと安心感が増すみたいな、そんな感じですかね」

「はっはっは、そうかそうか」

実は調査の中で、龍彦は変身を前提としないで普通の拳銃を携帯し、捜査に同行したことがある。そのときは一般企業への聞き込み

だったが、その前日に同じようなことをしに丸腰で行ったときと比べると、安心感というか、良い意味での緊張感をすっかりと持てたことを覚えている。『狂犬』^{バイサーカー}と対決をしたときに進んで自分から飛び出すことができたのも、鋭くなった五感と強靱になった身体、そして何より反則と言える回復力の裏付けがあつたからだと言えなくもない。

「おめえでも、そういうふうと思うんだな。実は遠野たち改造人間と話してみると、同じような傾向があるんだ。改造人間に変身できる状態だと、拘束具をかけていられようが強気を崩さない。でもこのスタッフが変身できないように処置を打つと、途端におとなしくなつて今までじゃべらなかつたことを次々としやべるようになる」
龍彦もそのことは否定しない。

「その改造人間の能力つてのは、麻薬と似たところがあると俺は思った。危険だが魅力的な匂いで人を惹きつけ、人は一度その能力を味わうと、やみつきになる。人間としてはある意味それで当たり前なのかもしれないが、世間にこの存在が知れ渡つたら、みんな改造人間の味をしめるだろうな。おめえの上司が言つてた通りだよ。こりゃあ、日本全体がおかしくなる」

「……………」
「すげえ世の中になつたもんだ。俺が若い頃なんて『改造人間』なんざ夢の中の出来事だつたのに、それが現実になつたんだ。俺たち人間は、いったいどうなつちまうんだろうな？」

残念ながら、その答えは龍彦にだつてわからない。ただ龍彦たちには、間違つた方向に社会が向かないように全力を上げる義務ならある。

山石は大きく煙を吸つてそれを味わい、再び口から煙を吐いた。そしてしばらく龍彦は、山石と警察の仕事の愚痴や喧嘩の武勇伝で互いに色々語り合うこととなつた。

「で、立川を高校に通わせるには、都立三本橋さんほんか王満学院おうみつがくいんのどつちが適当だと思う？」

出口は第一事務室にいる中原・川井・涼子に向かって問いかけた。「立川の学費を『徹芯』の能力拡張」の名目で税金から出すのなら、公立の三本橋が適当でしょう」

「あら中原くん、でも都心に近い王満に『配置』した方が、都心での重大事件にすぐ対応できるんじゃない？」

「清子や龍彦くんのサポートを無視するのなら、いつそのこと二人とはまた別の方向にある高校に通わせ、地理上に三人で三角形を作るのが適当だと思います」

三者三様、全く異なる意見が出てきた。

「……要するに、平たく言えばどこでも良さそうだな。わかった、この件は俺一人で扱うことにする。そんな深刻な内容じゃねえもんな」

雪菜には悩みができた。最近なぜか、龍彦が目を合わせてくれたのだ。雪菜は龍彦と二人で話したことをきっかけに、自分からさらに龍彦と清子に向かってコミュニケーションをとらないとだめだと感じた。二人が自分のためにしてくれているのに、こちらからも努力をしなければいけない。

特に龍彦は、今回の組織の制圧では三人の中で最も活躍した。今までで最高の実力を発揮すると宣言したら、その通りのことを実行した。雪菜はその勢いと精神力に大いに感心し、すごく見直したと言ってもいい。あの夜のようにもつと色々な話を彼としてみたいと思った。

しかし龍彦は、その夜の前後から、どうも様子がおかしい。清子の方はいつも通りにこにことしてくれるのだが、龍彦は雪菜が顔をのぞき込むと、気まずそうに視線を逸してしまう。

雪菜はそのことを川井に相談した。すると川井は、にんまりと可笑しそうに笑った。

「それは龍彦くん自身に聞いてみたら？」

「なかなか自分から尋ねづらいです」

「どうして？」

「それは……」

なぜだろう。聞かれると理由はわからないが、何となくそういうように聞くことに躊躇ためらいを感じる。

(躊躇う理由なんて無い……はずです)

「とにかく本人に聞いてみたらどう？ 龍彦くんの正面に密着して上目遣いになって、『どうして私のことを見てくれないの？』って言えば、きっと答えてくれるわよ」

「……………」

その場面を想像すると、一気に顔が熱くなるのが自分でもわかった。こんな経験は、記憶にある中では初めてだ。

「龍彦くん、なかなか男前よね」。粗雑そうだけど、ちゃんと雪菜ちゃんのことも考えてくれる他人思いの面もあるし」

いつの間にか隣にいる川井が、耳打ちをする。

「そ、それは関係無いのでは……？」

と自分で言いつつ、頭の中に龍彦の顔が浮かんでくる。いったい自分は、何を意識しているのだろうか。

すると背後から、足音が聞こえてきた。

「あつ、川井さん、こんにちは」

雪菜と川井が二人で後ろを振り向くと、そこではちょうど話題となっている龍彦が挨拶で頭を下げていた。

「おす、雪菜」

「リュウ……」

出勤してきた龍彦は、学生服姿のままだ。しかし雪菜は、さきほどのやり取りのせい龍彦の顔をまともに見ることができない。

「龍彦くん。雪菜ちゃんが、どうして自分と目を合わせてくれない

のかつて不思議がってたわよ？」

「川井さん！ 私はリュウのことが好きなわけ」

「あら、そうなの」

そこまで言つて、雪菜は慌てて自分の口を塞いだ。完全なる自爆だ。油断できない。川井は、完全にこの場の雰囲気面白がっている。

その言葉を聞いた龍彦は、恥ずかしそうに脇に視線をずらした。

ああ、まずい……。

「二人とも、可愛いわ〜。青春っていいわね！」

一番上機嫌なのは、川井である。スキップしながら鼻歌を歌いだしそうなくらい気分が高揚している。

「川井さん、一つオレから提案があるんですが」

「提案？」

しかし龍彦は、声だけなら真剣なままだ。

「はい。オレと雪菜に関わることなんです」

その日の訓練が終わり、三人揃って自宅マンションで夕食を食べていたとき、龍彦は話を切り出した。

清子に、龍彦と雪菜が身体の遺伝子ごと改造を受けた改造人間で、その能力が子供にも受け継がれる可能性があることなどを、清子に伝えることにしたのだ。もちろん、出口と川井の許可も取っている。清子相手ならば、初めから知っておいてもらえば信頼関係を崩さないですむ。それに下手に隠し通しておいてある時にバレるというシチュエーションよりは、龍彦側から進んで内容を話した方が、清子に与える驚きもいくらか緩和されるだろうと考えたのだ。

「つーわけだ。オレと雪菜は、安中ペット保護協会のビルにあつたような『遺伝子組み換え生物』なんだ」

清子は話の最初から最後まで、目をまん丸くしていた。しかし全ての話を聞き終わると、緊張が解けリラックスしたような表情にな

った。

「それは確かに、びつくりだわ。リュウも雪菜ちゃんも、自分のわからないところで改造されていたわけだし」

「出口さんと川井さんからこのことを聞かされたときには、オレだつてもちろん驚いた。正直今も、オレは自分自身が人間なのかどうか、はつきりとは自分で断言できねーんだ。オレのことを人間として認めていいのか、そういう迷いがある」

社会を守る警察組織の一員であることは、何の疑いようも無い事実である。それは自覚した。だがそのことを抜きにして、自分が『人間』なのかと問われると、どう答えていいのか自分でもわからないのだ。もちろん龍彦の意思は、人間社会の仲間として存在したいと思っっているのだが。

「雪菜ちゃんはどう思ったの？」

「私も、今はリュウとほとんど同じ気持ちです。私はこれまで、自分が人間かどうかは全くどうでも良いことで、ただこの日本を守る役割さえ忘れなければそれで良いと、そう思っていました。しかしリュウや清子といると、私も二人と同年の仲間であることを嬉しく思うようになってきて、それと同時に私は何者なのかという問いが心の中で大きくなってきました」

龍彦に「動揺する自由など無い」と言った雪菜だが、心の中では明らかになつた現実に対して自分なりに悩んでいた。龍彦はあの土手で話をしたときに少しだけその話を聞いていたが、今日雪菜はそれを清子にも打ち明けたのだ。

「リュウも雪菜ちゃんも、私の仲間。遺伝子が操作されていようが私と同じ人間だと心から思ってるし、逆に二人を人間扱いたくない人がいたら、私はその人を許さないわ」

清子は堂々とした口調で、高らかに宣言した。以前に清子が話していたのと、全く同じ答えだった。

「そう言ってもらえると、助かるな」

「清子が仲間で、本当に良かったです」

龍彦は、再び安心感が胸いっぱいに広がって気が楽になった。

「あ、でも改造人間の能力が子供に遺伝するんだったら」

清子は、龍彦と清子を交互に見ながら、ポンと手を叩いた。

「いっそのこと、リュウと雪菜ちゃんて結婚しちゃえばいいのよ」

龍彦は、すすっていた味噌汁が気管に入り激しく咳き込んだ。咳き込むことで、今度は鼻にまで逆流した。

「と、突然……何言い出すんだよ!？」

鼻と口をティッシュペーパーで抑えながら、龍彦はできるだけ穏当な反応ができないかと考えた。龍彦の正面に座る清子は、龍彦を見て満足そうに笑った。

「ああ、なるほど。どうも最近リュウの様子がおかしいと思ったら、リュウってば、雪菜ちゃんのことを好きなのね」

「いや、だから」

と無理矢理に反論しようとしたが、鼻に入った味噌汁がその邪魔をする。龍彦は、自分の顔が火照るのがわかり、顔を隠す意味もあつて、ティッシュで鼻をかんだ。

清子の右隣　つまり龍彦の斜め前に座っている雪菜は、龍彦とは反対の方向に首をひねり、そっちを向いたままじつと動かない。

「川井さんから聞いたけど、雪菜ちゃんがリュウの話をするときは、他の話題と違ってイキイキした感じになるんだって」

「ですから、そういう特別な意味では」

「あれえ、雪菜ちゃんにしては珍しく赤くなっちゃってる!」

「いえ……………」

思わずこちらに振り向いた雪菜だが、清子の言葉で顔を真っ赤にしている。色白の雪菜が、今にも沸騰しそうなくらい赤いのだ。

赤くなって黙ることしかできなくなった龍彦と雪菜。その二人を完全に手玉にとって面白がる清子。

(清子のやつは、やつぱり上手だ……)

ある意味で、もう白旗を上げるしかない。

「それじゃあ、ゴールドンカップル誕生ってことでいいわよね?」

龍彦は、偶然視線をこちらに向けていた雪菜と目が合った。もうどうしたらいいか全くわからないくらい冷静さが消えていた。

龍彦は、その日のそれ以降の出来事はよく覚えていない。だが次の日から、龍彦と雪菜は互いのことを「両思い」の相手だと認識するようになった。清子の誘導は少々強引な展開だったが、良かったといえば良かったに違いない。

「これから、まあ……よろしくな、雪菜」

「はい。こちらこそ、リュウ」

清子と涼子は、現在は葬儀場にいる。四日前、清子たちの父母と末っ子の弟の三人の遺体が発見された。正式な死亡の確認が行われ、一ヶ月以上も放置されてきた葬儀を行うことになった。

清子は王満学院の制服で通したが、涼子や兄は黒い喪服で葬儀に臨んだ。

一〇歳上の兄は二七歳。新米の医者としての臨床研修の最中だが、すでに立派な社会人として、おじやおばが手伝う中でも、葬儀の手配などで中心的な役割を果たした。遺族を代表して言葉を述べるところでは、さすがは長男、生まれて初めて兄がかっこいいと思った。葬儀の参列者には、親戚以外にも、医学界や財界関係の要人が多数訪れ、父の人脈や社会的地位にまた驚かされた。しかしその中に少数、親戚でもなく社会の重鎮でもなく、また父の小さい頃からの友人でもない人たちがいた。何となく、雰囲気でわかる。

遺体の火葬が終わるなどして葬儀が終了し、これから親族だけで集まろうとしたとき、清子と涼子と兄の三人は、真面目そうな中年の男性から声をかけられた。

「私は、^{わたくし}都内で児童福祉施設を運営させていただいている団体の、小宮山と申します」

男性のポケットから、ハンカチが少しだけ出ているのが見えた。

「私どもは長年、竹内一郎様から多額の寄付金をいただいております、文房具や布団などの道具を購入することができました。また施設にいる子供たちへ、半ば贈与に近い多くの奨学金を出してください、そのおかげで大学へ進学できた子もたくさんいます。団体や子供たちを代表して、お悔みと共に感謝の言葉を述べさせていただきます。本当に、ありがとうございます」

そう言つて深々とお辞儀をする男性を目の前にして、清子は一気に涙が溢れでてきた。

（お父さん……）

父がそのような福祉活動に携わっていたとは、全く知らなかった。厳格で曲がったことが大嫌いという父だった。しかし子供を愛し、妻を愛し、そして社会を愛する偉大な男であったのだ。

（お父さん。私は今、警察の中で改造人間として戦っています。信じられますか？ でも本当です。この任務は、ほとんど私にしかできない重大な使命なんです。私はお父さんの考え方を受け継ぎ、私のやり方で社会に尽くしていきます。お母さんも、そんな私を心配しないでください。私には、心強い上司や仲間がたくさんいます。それと俊は、頑張る姉を天国からしっかり見ておくように）

涙を拭い、心の中で祈る。

だからみんな、どうか天国で安らかに眠ってください。

第2編(5) オレだって生体兵器(後書き)

第2編が完結しました。

今回は、事件の解決そのものというより、生体兵器や改造人間に対する問いに事件を利用した…と思われるも仕方が無い話ですね。事件のことに加えて、龍彦の改造人間としての悩み、清子のコンプレックス、雪菜の「アソビも無い」状態からの成長、などなど書くべきことがたくさんあり、気が付けばまたもや膨大な文字数になってしまいました…。よく考えたら、第1編と合わせて半分ぐらいの文字数に圧縮できるかもしれませんね。

第3編からの構想はすでに出来ていますが、またダラダラと文字数が伸びそうなので、気長に待っていてください。だらしなない作者で申し訳ありません。

ありがとうございました。

第3編(1) 第一種使用(前書き)

だいたいこれで第3章の前から4分の1くらいです。長い文章です
いません。

第3編(1) 第一種使用

龍彦は今、姉の美希^{みき}と喫茶店にいる。美希と会うのは、マンション倒壊事件の当日に彼女が病院に見舞いに来て以来、約二ヶ月ぶりだ。

大島家の自宅が壊れてから、美希は恋人のマンションに二人で住むようになった。相手は確か、法学部三年の弁護士の子息だと聞いていたが。

「龍彦、最近の暮らしはどう？ 女の子二人と同居してるんでしょ？」

「そつだよ。前にも電話で話しただろ？」

美希は清子のことも知っている。雪菜のことは、別のテロ事件での被害者で、記憶喪失と精神的なダメージがあるというふうに話しておいた。肉親とはいえ、機密は守らねばならない。

「姉貴も、陸上の方はどうだ？」

「この前に百メートルで一〇秒九〇を出したから、調子も十分。今年の世界陸上で日本記録を更新してみせる」

「言ったな」

「ええ、そう宣言したわよ」

この勝気な性格、確かに自分の姉だと龍彦は安堵した。

ちなみに現在の日本記録保持者は、龍彦たちの母、大島秋子である。もう二〇年近く前の記録だ。それを娘が更新しようとしているのだから、マスコミをはじめ世間が注目しないはずがない。

「明日で七月ね。あと一ヶ月ちょっとで世界陸上かあ。……その前に、定期試験があるんだつた」

「東大つて確か、二年の前半までの成績で学部と学科分けするんだつて。姉貴は行きたい学科とかあるのか？」

「行きたい学科より行きたくない学科の方が多けれど、だいたい決めた」

「どこだ？」

「一番は生命系。遺伝子工学とか、そういうバイオテクノロジーをやってみたい」

龍彦の飲んでいた紅茶が逆流した。

「？ どうしたの？」

「あ、いや、何でもねーよ」

ここ最近の龍彦は、『遺伝子』とか『生命工学』という言葉に敏感に反応するようになっていた。

「最近、ちよつと変な中古小説を読んだんだ。秘密組織が遺伝子を利用して運動能力に優れた人間を大量生産する話で、それが頭に浮かんだ」

もちろん小説を読んだというのは嘘である。しかしそれ以外の話には真実が混じっている。

「それは研究者として、やっちゃいけない領域ね。確かに今の技術を使えばできないことも無いけど、それは人間の品種改良。気持ち悪いわ」

姉は少し不快な様子でそう言った。しかし残念ながら、美希の目の前には『品種改良』された人間がいる。

「姉貴の大学の研究室でも、秘密裏に改造人間を作ったりしてない？」

「無い無い。小説じゃあるまいし。前に大学の講演でそっくり同じことを質問した男子がいたけど、もしそんなことがあったら、その研究室の教授どころか大学総長のクビが飛ぶらしいわよ。刑事罰の規定もある立派な犯罪だって」

美希は笑ってそんなことを答えたが、龍彦は内心、笑ってはいられない。龍彦は実際に、改造人間や生体兵器をこの目で見た。それも単なる「運動の得意な人間」ではなく、「通常の間人では絶対に敵わない存在」だ。百メートルを一〇秒台や九秒台で走ることなどもはやどうでもよくなるレベルだった。そしてその開発者も逮捕している。

(姉貴が笑ってられるのも、改造人間なんているわけないって思ってるからだよな)

そう。世の中の人間のほとんどは、美希と同じようななんの实感も持たずして物事を考えている。人間の『改造』なんて気持ち悪いが、しかしそんなことは実際にありえないから大丈夫さ。

もし美希が、実際に人間の『改造』が行われていることを知ったら 龍彦も改造人間だと知ったら、どういう反応をするだろうか。龍彦としては非常に気になるが、想像したいとも思えない。

(改造人間……オレや雪菜は本当に、社会から人間扱いされるのか？)

*

七月一日。夏休みまであと二〇日と少しとなり、都立三本橋高校二年一組の教室は、夏の暑い空気に包まれている。それに加えて、今朝はさらに異様な熱気で教室はいつぱいだ。

「立川雪菜です。今日からよろしくお願いします」

朝のホームルームで、セーラー服姿の雪菜が自己紹介をしておじぎをした。その姿にクラスメイト 主に男子の視線が釘付けになる。それはそうだ。身長一七五センチのスーパー美人が転校してきたとなれば、男なら黙っていられない。

ここまでの展開は予想済みだ。そしてその後には雪菜は、あるテロ事件の影響で以前の記憶が無く、みなさんの質問にはあまり答えられないのでその点は理解してくださいと述べた。すると一転、クラスメイトからの視線が憧れから同情へと変わった。これで、無遠慮にも雪菜に質問しようとする連中はいなくなるだろう。

雪菜は真ん中の列の一番後ろの席に座った。龍彦の席は、一番窓側の前から三列目。学校にいる龍彦の姿を雪菜に見張られるような気がして、何だか緊張する。

とにかく、今日から雪菜の高校生活が始まるのだ。もちろん龍彦も、

これを全力でサポートしたいと思う。

ホームルームが終わり、龍彦も一限の授業の準備をしようとしたところ、肩を叩かれた。

「……サイモンか」

「すごい転校生が来たな。龍彦って、あの立川さんと知り合いなんでしょ」

「オレと同じように、テロ事件の事後処理に付き合わされてる」

ナイジェリア系二世の、佐井門寛サイモンひろしだった。

「じゃあ、部活もきつと無理だね。背が高いからバレー部やバスケットからお誘いがきそうなのに」

「時間的に不可能だな。まあ、仕方ねーよ」

「龍彦も、アメフト部に戻る気は無いのか？」

「そりゃ無理だ」

残念ながら、今の龍彦に部活動をやる余裕は無い。高校の授業に出ることすら危ういのだ。

「龍彦を見てると、警察の事後処理って忙しそうだな。ここ最近は学校に来ない日も多かったし、本当に単位とか大丈夫なのか？」

「大丈夫……なはずだ」

出口は何とかして進級に支障がでないようにすると言っていたが、龍彦は心配だ。

（ホントに大丈夫なのか……？）

そうしているうちに、一限の数学担当の教師が入ってきた。

雪菜が高校にやってきてから最初の授業が、いよいよ始まる。

出口、川井、涼子、それと自衛隊の高野祐二・三たかの ゆうじ等陸佐の四人は、科特警の研究開発フロアの部屋で、それぞれ向かい合って椅子に座った。

四人はそれぞれの立場から、情報交換をすることが目的だ。ちなみに高野も、龍彦と雪菜の事実を知る一人である。

「え、まずこれより、自衛隊一イケメンの高野三佐より、自衛隊の改造人間導入計画について説明してもらいます。みなさん、拍手！」
出口の掛け声で、出口と川井は大真面目な拍手を、涼子は普通程度の拍手を叩いた。

そして、角刈り頭なのに美形の顔が目立つ高野が説明を始めた。
「防衛省は、すでに『メカ』で運用されているパワードスーツの導入を決定しました。まずは一個小隊規模で試験的な運用を開始し、状況によってさらなる部隊の拡張も視野に入れています」

「そうだな。科特警の『メカ』も、現在は五〇名のところ、二年かけて三倍の一五〇名に増員するつもりだ」

そうすると今度は本庁機動隊との関係がまた取り沙汰されると思われるため、運用についてはさらなる変更の可能性もある。科特警の組織自体も改変させられるかもしれない。

「そして改造人間 政府の正式名称では『G』^{ジー}となつていますが、この導入の可否については、まだ上層部も具体的な決定を出していません。最大のネックはコストです」

「『Za』^{ゼット・エー}計画の開始から清子ちゃんにパーツを移植するまでにかかった費用が約三〇億円です。しかしそのうち多くは初期開発の費用なので、以降の量産を前提にした実質的な製造および移植にかかるコストは、一体当たり三億円ほどになると見込まれています」

川井が手元の資料を読み上げた。

「まだ高いなあ……。佑二、戦車の値段つていくらだっけ？」

「一〇式戦車が約九億円、九〇式戦車が約八億円です。ちなみに同世代のロシア製の戦車だと、約三億円と安いです」

つまり改造人間を製造するには、一昔前の戦車を配備するのと同じくらいの費用が必要になるということだ。このため防衛省制服組でも、改造人間を自衛隊に配備するかどうか意見が割れている。対テロ・ゲリラ部隊の拡充が急がれる一方で、従来の国対国の戦いに備えるための部隊は正面装備の削減につながるとして警戒している。特に装備のハイテク化・高価格化が著しい海上と航空の両自衛隊は、

改造人間を配備する費用を捻出するために高性能レーダーや新型護衛艦の配備が止まらないかと気が気でないらしい。

「川井さん、もう少し機能を落とした安価なモデルは開発できませんか？ 本体を配備するだけでこのコストだと、改造人間に見合った武器の開発やその後の訓練にまで予算が回りません」

「高野さんの意見ももつともです。ですが製造にかかる費用の大半は、生体パーツが移植者の体に馴染むかを厳密に検査し、生体パーツを移植者に適応させるための調整に当てられています。安全上、この費用はどうしても省略することはできません。一方でもつと単純な仕組みの改造人間にしようとする、それこそ普通の人間に毛が生えた程度の戦力にしかありません。現行の『開闢』には、遠く及ばないでしょう」

「テロリストみてえに、安全を度外視して無茶苦茶なまま改造するわけにもいかねえしな。そこは必要不可欠な経費だろ」

日本政府はテロリストのように、「運が良ければ死なない」程度のリスクのある改造もできない。もちろん人体実験などもつてのほかだ。そのため改造人間の開発コストが、テロリストと違って桁違いに大きくなる。これがテロリストとの争いで最大の弱点であり、日本を含めた世界各国の政府が生体兵器絡みの事件でなかなか手を有効な打てない理由の一つでもある。

「プロトタイプを作ってもう終わりか……。警察が自前で確保した改造人間が実質的に一体だけってのは、情けねえな。前の事件での運用だって、仮に『開闢』の一体だけだったんじゃかなり不便だっただろし」

「初期費用の他に、維持費はどのくらいかかるでしょうか？」

「身体と一緒になった臓器のため、ハードウェアにかかるメンテナンスはそれほどありません」

「ただ『開闢』の場合、人工知能の機能を維持するのに予想以上の労力がかかることがわかりました。現在はプログラムのバグや不具合を外部から修正しているので、ソフトウェアの整備にそれなりの

時間と費用が必要です」

涼子は川井の話に付け足しをして、足元に転がっていた、『開關』が外部機器と情報を送受信するヘッドギアを拾った。

「もともと『開關』は私になる予定だったので、このようなプログラムの修正は私の身体の中で解決するはずでした。しかし清子への移植により、私などの開発スタッフがヘッドギアを通じて外部機器からプログラムを調整しなければならなくなりました。今は清子にプログラミングについて一から教えている状況です。『開關』と同じ生体パーツを多くの人間に移植して量産した場合、同様のことが言えます。外部スタッフによるメンテナンスの費用、または改造人間となった者たちへの教育コストのどちらかがかかります。これらの手間とコストは、残念ながら開発中に見落とされていたものです。清子という予定外の人間が『開關』となることで、量産化した場合の条件に近づくことになった。幸か不幸か、それにより問題点が明らかになったのだ。

「費用・性能の両面で、改造人間の量産を数十体単位で実行することは現時点で難しいです」

そう締めくくる川井の顔に、若干の悔しさが滲む。

改造人間計画のコードネームは『Z』^{ゼット}から始まり、『Y』^{ワイ}、『X』^{エックス}と長期的な世代交代を実現していく予定で、さらに同世代の中でもアップデート順により『abc』の小文字を付けて区別することになっている。そして最初のプロトタイプが『Za』^{ゼット・エー}。現在の『開關』になる。しかし当初見込みの予算を遥かにオーバーした額がすでに使われた結果、今の時点では、『Y』^{ワイ}や『X』^{エックス}どころか『Zb』^{ゼット・ビー}が登場する気配すら無い。上層部が計画を考案した頃の、最初の勢いはどこへやら。

「この話は先送りだな。次、大島と立川の研究についてだ。川

井くん、頼む」

「はい」

川井は手元の書類ではなく、パソコンの画面で説明を行うことに

した。

「……『徹芯』と『雷光』の特殊な能力が明らかになってきました
が、これは今までの常識を覆すほどのものでした」

川井のその言葉には深刻さが込められている。出口は先を促した。
「龍彦さんと雪菜ちゃんの遺伝子を詳しく解析した結果、二人は人
間を遺伝子操作で『改造』した改造人間ではなく、DNAレベルか
ら構成された新たな生物種である可能性が高いと判明しました」

「新たな生物種だって？」

「人間とは子供がつかれない、人間とは全く違う生物という意味で
す」

出口と高野は深く息を吸い込んでから、ため息にも似た様子で息
を吐き出しながら唸った。聞いてはならない一言を聞いてしまった、
という顔だ。

「元になつた生物は何だか、わかりますか？」

高野は驚きの一方で、冷静に話を進める。

「地球上の全生物を三つに分けるドメイン、真正細菌、古細菌、そ
して動物を含む真核生物のうち、どれにも当てはまらないかもしれ
ません」

「おいおい、じゃあ哺乳類かどうかも怪しいのか？ 見た目は完全
に人間だぞ？」

出口は素っ頓狂な声を上げた。

「エネルギー代謝の一部でも、真核生物には見られない仕組みを二
人は有しています。龍彦さんとゴリラのどちらが人間の近いかと言
われれば、間違いなくゴリラです」

川井は今のところ最も有力な仮説を、パソコンの画面で解説する。
「二人の体は、一つの生物の個体である状態と、多数の個体がくっ
ついた群体の状態を併せ持つかのような働きを見せています。一見
すれば人間と全く同じ姿や生理現象を違和感なく保っていますが、
厳密に調べると体の仕組みが人間……を含めた真核生物とは全く違
います。身体を構成する部品が、非常に簡略化されています」

「どういうことだ？」

「人間なら、同じ循環器系でも血管とポンプ役の心臓というふうに機能が分割されています。しかし龍彦くんたちの場合、心臓の機能が止まっても、他の血管がまるで心臓のように脈動を打ち、全身に血液を送り込む働きを代替すると予想されます。また皮膚呼吸の機能も優れており、呼吸器系が完全に機能不全に陥っても、致死を回避するのに十分な酸素を得られるような仕組みが隠されています。ただし、通常はこのような人間とかけ離れた機能は眠っており、生命の危機に晒されたときに発動する仕組みになっていると思われるます。これと同様なカバー作用が、臓器単位ではなくもっと細かい単位で確保されています」

「だから心臓や肺にダメージを負っても、死なないで済むんだな」

「さすがは不死身の個体ですか」

出口と高野は、感心して頷くしかない。

「また人間姿の一身体を群体と考えると、さらに細かい個体単位での生存が可能であるとするデータも多数あります。この説をとれば、体の一部分が欠けても死なずに済み、さらに栄養さえあれば体が再生する現象を容易に説明できます」

「確かに、あの再生能力は尋常じゃなかったな」

単なる修復機能だけではなく、わずか数時間で人間の腕一本が生えたそのスピードも驚くべきものだった。

「多数の個体が集まった群体が今の大島くんの姿だということは、中枢神経系 特に脳の仕組みも人間とは全く異なるということですよな？」

高野の疑問に、川井は首を縦に降って肯定した。

「その話は、私の方からさせていただきます」

川井に代わり、涼子がクラゲのような生物のCG映像をパソコンに映し出した。

「頭蓋骨の中にあるのは、見た目や物質こそ人間の脳と似ていますが、機能的には全くのダミーです。ではどこでその機能を担ってい

るかというところ、実は全身に張り巡らされた神経細胞そのものが、情報の処理・伝達・記憶を全て行なっています。体全体が脳そのもの、と言いましょか。コンピュータで例えると、全身に小さなコンピュータがたくさんあって、それらがネットワークで繋がれているというイメージです」

「それで十分イメージできる。だがそれだと、体の一部でも負傷すれば、中枢神経の機能もダメージを受けるんじゃないのか？ 全身が脳ってことは、膝を打ち付けて打撲しただけでも脳震盪みたいなケガになるわけだろ」

「そこがまた巧妙にできているようです。神経の機能と蓄積された情報が、全身に何重にもバックアップを張られているとしか考えられません。仕組みはまだ全くわかっていませんが」

「リスクの分散ということですか……」

「リスクの分散といえば、さっきの群体説の延長で、生殖細胞も全身に数多く存在することがわかりました。それも全体重の何パーセントか何割かを占めるというレベルでたくさん存在します。おそらくこれが、身体の再生に大きな役割を果たしているのでしょう」

生殖細胞は、それ以外の体細胞と比べて決定的に違う点がある。

それは無限回に渡って分裂することが可能であり、またそこから多くの種類の細胞に分化可能ということだ。

生殖細胞から一般の体細胞へ 筋肉細胞や皮膚細胞、赤血球などの血液細胞に変化することは可能だが、その逆は不可能だ。これは細胞分化の不可逆性として知られているが、分化した後の体細胞から再び万能に分化できる細胞を、二〇〇六年に日本の大学教授が世界で初めて開発した。あくまでこれはマウスでの実験だが、世間では『iPS細胞』として、その開発の成功が知られている。

「以上が、『徹芯』および『雷光』の研究報告です。これを受けて、『徹芯』と『雷光』の統一した種名を、暫定的に『人型的生命体』と呼ぶことにします」

「あまり、固有名詞らしくない名前ですね」

「意味自体は、人間と同じ姿で知能を持った生命体ということになります。現状でそのような生物は、龍彦さんと雪菜ちゃんの二人以外知られていないので、暗に二人の種を指す言葉として、ちょうど良いと考えました」

「俺も、その呼び名でいいと思う。決定だな」

「ただ、一つ気になることがあります」

高野が手を上げた。

「大島くんも立川くんも、年齢は一七歳、胎児でいた期間も含めると一八年近くです。とすると、『人型的生命体』は今から一八年以上に作られたということになります。これは、有り得ることなんでしょうか」

高野は、主に科学屋の川井や涼子に向けて発言した。

一八年前というと、一九九〇年代だ。バイオテクノロジーの歴史では、九〇年に遺伝子治療が開始され、九四年に世界で初めて一般販売用の遺伝子組み換え作物が出荷された。さらに九六年にはクローン羊が誕生するなど、バイオテクノロジーを注目させる出来事が多くあった時代だ。それが二一世紀の爆発的な発展へと繋がっている。

しかし遺伝子工学などの創生期とも言えるその当時に、『徹芯』や『雷光』レベルの新生命体を直接作り出す技術があったとは、とても考えられない。二一世紀となった現在でさえ、今までに存在し得なかった多細胞生物を一から生み出した例は存在しない。せいぜい元ある生物の遺伝子組み換え、または新種のバクテリアの開発が限度だ。

一堂が黙り込んだ中で、涼子が手を挙げた。

「出口さんは、一七年前の対馬での核爆発を、どう考えていますか？」

「どうって、あそこに本当に『超科学研究所』みたいな施設があったかどうかってことか？」

「はい。私は、その説がいよいよ現実味を帯びてきたなと感じてい

ます。龍彦さんと私は五歳差で、高校まではマンションのお隣同士でした。妹と同年であるということもあり、彼が誕生した頃からその姿を見てきました。ですが私は、彼が生まれてから『新種の生物』に生まれ変わるような出来事をどうしても覚えていません。しかし、彼がもともと一七年前に『人型的生命体』として生まれてきてそのまま現在まで成長したのなら、逆に何の疑問もありません。『そうになると、今度は大島くんの父母も『人型的生命体』だという疑いが出てくるわけですが』

「姉の美希さんの遺伝データをとらせてもらいましたが、彼女は全く普通の人間でした。おそらくは、何らかの方法で龍彦くんの母親故大島秋子氏の子宮に、『人型的生命体』の受精卵を着床させたのではないかと、我々は予測しています。代理母出産の技術はすでに実用化済みですが、それを生物種間を横切るように概念を拡張したものです。我々がまだ把握していない技術で、異種生物の受精卵を人間の子宮に着床させ、出産まで実行したのでしょう」

世間でも、発掘したマンモスの遺伝子をゾウの卵子に入れ、それをゾウの子宮で育ててマンモスを復活させようとする研究もある。川井は、高野の的を射た質問に対し、データを示しながら説明した。「今まで、その対馬の出来事を口に出す連中を俺たちは何人も捕まえてきた。俺たちの方も、そういうウソみたいな話を可能性の大きい事として調査しなきゃならんだろうな」

出口は顎を撫でながら、今後の方針についてまとめた。

「まず『人型的生命体』の事実は、大島と立川にはしばらく伏せておく。さらに事実が発見されてから、まとめて話すようにする。今はまだ、あいつらに事実の切れ端を告げられるだけで、中身のあまるまともな話をしてやれそうにない。次に、対馬の核爆発事件の情報収集だ。警察の方は俺で探るが、核爆発の現場を調査したのは自衛隊だ。そこは佑二の担当だな」

「やれるだけのことをやってみます」

「それと、大島が胎児でいたころの記録も調べてみる必要があるな」

俺の方から、大島秋子がかかった産科医に当たってみよう。他に何か詰めておきたいことはあるか？ 無かったら、秘密会議は解散だ」

出口の合図で、緊張の糸が切れた四人の肩から力が抜けた。川井と涼子は再び研究関連の仕事に戻ったが、出口と高野はしばらく椅子に座ったまま、さらに話を進めた。

「このような場合、法的な二人の立場はどのようなものになるんですか？ 人間として扱われるのか、それとも遺伝子組み換え生物として扱われるのか。日本には、遺伝子組み換え生物を規制する法律がありましたね」

「『遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律』だな。生物多様性条約の実施を国内で行うための法律だ。二〇〇四年に施行されてる」

この法律は、主に環境保護を主眼に置いて制定された。一方で科特警が管轄する『医療および生命科学に関する科学技術の利用規制に関する基本法』は、主に暴力的、軍事的な能力を持つものについて特に規制している法律で、こちらは警察が主に執行を担当することになる。

「この法律のよると、遺伝子組み換え生物が隔離された施設の外に出ないようにして使用するのが『第二種使用等』、それらの措置無しで使用するのが『第一種使用等』だ。第一種使用等をするには、主務大臣が学識経験者の意見を聞いた上で許可を出すことになっている。法律の定義通り解釈すれば、大島や立川は、野放しの第一種使用等になるんだろうな。本当なら、すぐにでも上層部に報告すべきなんだが、どうもその勇気が出ねえんだ」

「二人の身の安全を考えれば当然でしょうが、まさか大臣も学識経験者も『不許可』の判断を下すことは無いと私は思います」

「俺も、学者たちがいきなり隔離処分や駆除を命令するとは思ってねえよ。だがな、許可を伺いに行くことは、つまり大島たちの自由や権利が許可制になるってことだ。俺はそれが気に入らねえ。あいつらは『人間』だ。生物学、自然科学の世界だと人間じゃない

のかもしれんが、社会科学の立場からすれば、れっきとした人間だ。人間が生きるのに、政府や官庁の許可なんて必要無い。許可を貰いに行けば、大島たちが人間じゃないと認めることになる。」

人が生きようとするのに国家の許可は必要ないし、ましてや国家が存在しなくとも、生命と財産を守る権利は存在する。これが民主主義の原点となった、侵すことのできない永久の権利である。

「いずれはいい時期に、まとめて事実だけは上層部に報告する。おまえもこの事は、本当に絶対秘密だぞ？」

「わかっていますよ。」

帰りのホームルームでは、龍彦は少ししょんぼりとしていた。雪菜の頭の良さに圧倒されたからだ。

英語の授業では予習も復習も辞書も全く使わずに見事に難しい英文を読んでみせ、数学でも何も問題なく発展的な内容の問題を黒板で解いてみせた。また科特警の仕事柄か、自然科学や政治経済の内の憲法などの知識も豊富で、クラスのみんなを驚かせた。

(……やばいぞ。雪菜のやつ、相当頭がいいんだな)

今までもちらほらとそのことを実感することがあったが、日本の学校教育の場で、それが心に焼き付くくらいにはつきりとわかった。翻って龍彦自身の成績が気になる。

「先月やった記述模試の結果を返すぞ。」

担任のその言葉で、教室内には複雑な声が溢れた。

出席番号順に呼ばれて、担任のところまで模試の結果と採点者の総評が載っている冊子をもらいにいく。龍彦も呼ばれて、A4サイズの結果用紙とB5サイズの冊子を受け取った。

(まつ、いつも通りの成績だな。警察の仕事しながらにしちゃ出来だろ)

それから担任のつまらない話が終わると、HRは終了し解散となった。

龍彦は、ふと思いつくことがあって配られた冊子を開き、求めるページを探した。

（いたな。竹内清子、全国八位か）

東京・王満学院・理系・二年・女　総合得点九〇〇満点中、八六五点。得点率は九六パーセント。

（清子も非常に頭がよろしいようで……）

龍彦の成績も悪いわけでは絶対に無いが、清子と雪菜の二人と比べれば絶対に見劣りするし、ぱっとしない。

「リュウ、一緒に帰りましょう」

「おお、そうだな」

雪菜は龍彦の方にやってきた。雪菜に呼ばれて、冊子をカバンにしまって立ち上がる。何人かのクラスメイト　特に女子がこちらを指さしてひそひそと話したりしているが、それは気にしても仕方がないので無視を決め込んだ。

「今日はどうだったか？　初めて三本橋に来た感想は？」

「最初は少し緊張しましたが、昼休みの学生食堂などは特に楽しかったです」

「そりゃ良かった」

今日一日で、また一段と雪菜の表情がよく動くようになった気がする。同年代の男女が多く身近にいるということは、人間にとって思いのほか大切なんだと龍彦は思った。

「それじゃ、帰るとするか」

「はい」

鞆を担いで教室から出ていこうとすると、サイモンが呼び止めた。

「龍彦、やっぱり部活には戻らないのか？」

「ああ、すまねえ。お誘いは有難いんだがな」

「アメフト部が一番体重が重くて一番足の速い龍彦がいなくなったから、チームに大穴が空いたよ。ランバックの穴は僕が埋めることになった」

「一〇〇メートルを一〇秒四〇で走るおまえなら、十分だろ」

「龍彦には敵わないよ。全中陸上100メートルのチャンピオン、大島龍彦には。アメフト部が無理なら、個人競技の陸上部に入って不定期に顔を出せばいい。龍彦だったら、陸上部の全員が歓迎するさ」

「……………」

二年前の陸上全国大会で、龍彦とサイモンは出会っている。100メートル走の決勝で、龍彦はサイモンと百分の一秒差の10秒70のタイムで優勝した。

龍彦は高校でアメリカンフットボールを始め、中学の全国大会の時から体重は二五キロも増加し、現在は100キロほどあるが、脚力はむしろ上がった。体育で行う50メートル走でも100メートル走でも、サイモンには確実に勝てる。そんなだから、サイモンが龍彦を熱心に部活に誘うのも理解できる。しかし。

「今は、どうしても無理なんだ。悪いな」

「そうか」

残念そうな顔のサイモンに対し、少し悪い気がした。彼は、最近学校を休みがちな龍彦を心配し、何とか普通の高校生生活に引き戻そうとしてくれている。龍彦には絶対に譲れない事情があるが、その心遣いには本当に感謝している。

「おまえはオレの分も部活を頑張ってくれ。それじゃあな」

「また明日」

サイモンに軽く手を振って、龍彦は教室に背を向けて歩きだした。そして雪菜がついてくる。後ろから「美女と野獣」と呟く女子の声が聞こえたが、それは龍彦も認めざるを得ないくらいの確かな描写なので、何も言い返せない。

（オレも雪菜のことは言えねーのかもな。オレだって、もう普通の高校生じゃねえ……………」

あのマンションが崩壊した日以来崩れた日常が、元に戻る日はやってくるのだろうか。

（いや違う。今の状況は、オレ自身が望んだんだ。部活ができねー

くらいで、オレは何を辛気臭い顔してるんだか……)」
心の中で、自分の甘さに喝を入れる。龍彦は、高校生活の一部を犠牲にするかわりに今の特別な地位にいるのだ。サイモンと同じ高校生活もほしい、などという贅沢は許されない。
(きつと、オレに隠された謎を見つけてみせる。すまん、サイモン……)

それから雪菜と二人で、科特警の本部まで歩いた。そしていつも通り、本部の玄関をくぐり第一事務室に入った。

「あら雪菜ちゃん、制服姿も可愛い〜！」

事務室に入ると、いきなり川井がこちらに駆け寄ってきて、雪菜の全身をくまなく目で確認した。

「こ、こんにちは川井さん……」

雪菜は困りながらも、とりあえず挨拶をする。

「龍彦くんも、雪菜ちゃんは可愛いと思うでしょ？」

「そりゃあもう」

突然話を振られたが、ここは狼狽えずにはつきり言おう。

「めちゃくちゃ美人ですよ」

本人の前で言うのは、かなり恥ずかしい。実際に雪菜は、かなり美人な方だと思う。

「いえ……ありがとうございます」

雪菜も照れたようで、視線がどこか落ち着かなくなっている。

「二人とも、初々しくて見てるこっちがムズムズしてくるわね」
相変わらずの川井だった。

「で、二人とも、いつパパとママになるの？」

一瞬、その質問の意味が理解できなかった。

「な……何が言いたいんですか？」

「もし将来二人が結婚して、さて子供を作ろうと思ったときに、やっぱり精密な検査が必要になってくると思わない？ そのためのデ

「夕収集を前もって積み上げておかないとだし、普通の人間の産科学が通用しない事態になる可能性も排除できないわ」

龍彦は、雪菜と顔を見合わせた。確かに、河井の言葉は正しい。龍彦たちは、自分たちのことについて何もわかっていない。

「でも、できるだけ早い時期に赤ちゃんができれば、二人の研究開発も一気に進むのよね。龍彦くんが中卒でもいい仕事ができたらいいんだけど」

「中卒でいい仕事があったって、そんな」

「そうだ。出口さん、龍彦くんたちの『勤務』に期限ってありませんたっけ？ 龍彦くんが高校中退して科特警で働いで、高認を取ってから一八歳で高卒警察官として就職すれば、今からでも二人はパパとママに」

「ならなくていいです」

龍彦も雪菜も、まだ一七歳。社会的立場を考えると、子育てなどできる状態ではない。

「川井くん、あんまりからかうなよ。立川が真っ赤になってるぞ」
第一事務室の正面の机から、出口は入口付近でのやりとりを見つめていた。

出口の指摘通り、雪菜は龍彦の隣で顔を赤くしている。雪菜に赤くなられると、龍彦も恥ずかしくなる。

「署長、ちょっといいですか？」

いつの間にか、龍彦たちの後ろには制服姿の古川隊長がいた。古川は龍彦たちの間をすり抜けるようにして部屋に入り、それから座っている出口の正面に立った。それから二人で少し話をしてから、出口は立ち上がって部屋から出ていった。

「本庁からの連絡で、ちょっと行ってくる。事件みたいだが、大したことなさそうだ。川井くん、副署長として頼むぜ」

「はい。何かあったら、すぐに連絡してください」

「わかってる」

出口と古川は、足速あしはやに科特警の本部の外に出ていった。

「そついや、川井さんが副署長でしたね。川井さんって、警察官じゃなくて技官の身分じゃありませんでしたっけ？」

「うん、まあ採用は警察官じゃなくて専門職員の枠よ。でも今は、出向扱いで一応警視の肩書きがあるの。科特警だと技術研究が重要だから、ナンバー2の副署長は技官出身の人が就くことになってるのよ」

「そついうことだったんですか。じゃあやっぱり、大学は理工系ですか？」

「理工系じゃなくて、医学部だったわ。医者免許もちやんとあるわよ。ちなみに涼子ちゃんとは、同じ大学の先輩後輩よ」

「ってことは」

慶大医学部か。私立大学の医学部の学費はサラリーマンの平均年収より遥かに高いと聞くが、そこに六年間通って医者免許も取得したのに、医者より遥かに安月給な公務員になったのは、いったいなぜだろうか。龍彦の目には不思議に映る。

「確か涼子さんの方は、医学部を中退したんでしたよね」

「そうそう。それで警察職員になった理由がまた」

「ぶっ飛んだ経緯なの」

再び後ろを振り向くと、そこには清子の姉・竹内涼子がいた。

「あ、涼子さん。こんにちは」

「どうも、龍彦くん。話の続きね。私って昔っからコンピューターマニアで、中学生からハッキングのいたずらをして楽しんでたんだけど、大学一年の夏にハッキングのせいで警察に捕まっちゃって。そのときは悪質な行為じゃないって警察の人にも認めてもらったら、そこでハッキングの腕を買われて、警視庁に来ないかって誘いがあった。正直医学部に入ってもおもしろくなかったし、中退して警視庁の職員になったってわけ。あと『開闢』のソフトウェアの設計を任されたのは、実力での出世かな」

耳が出るか出ないかというくらいにショートカットの下で、涼子は思い出し笑いをしている。やんちゃな頃……といってもまだ二年

前のことを頭に浮かべて、懐かしがっているのだろう。

しかし、龍彦にとってそれは驚きの話だった。

「……それは初めて聞きましたよ？」

「このことは清子も話してないし、知っていたのは私のお父さんだけ」

清子よりも物静かで真面目そうな印象の涼子だが、清子どころかある意味で龍彦よりもやんちゃな性格の人だった。人は見かけによらないというのは、本当なのだ。

（よく考えりや、科特警は日本の将来を左右する研究をしてる部署なんだから、ただの凡人がいるわけねーよな）

ひと癖やふた癖ある人物だからこそ、ここにいられるのかもしれない。

そんなことを話していると、清子もやってきた。

「少し遅れました。電車が故障したみたいで……」

走ってきたのか、少し息を切らしている。

「全員揃ったみたいなんで、オレたちも訓練を始めます。川井さんからは、何かオレたちに連絡みたいなのはありますか？」

「特になし。いつも通り三人で訓練をしていてちょうだい」

「わかりました」

龍彦たち三人は、日課のトレーニングを開始した。

警察のお世話になってから二ヶ月近くが経過した。そろそろ警察の仕事の方が自分の『日常』となっているなど、龍彦は思った。

「『新人類』の最後の一人の所在が確認できた」

「ホント！ やっぱ日本にいたの？」

「そのようだ。最後の一人は、日系の男だ」

「今度も男？」

「女が五人見つかった後に男が二人見つかったただけだ。ともかくこれで、記録にある七人が揃ったということになる」

「男二人に女の子五人かあ。バランス悪う……」

「とにかく、彼やもう一人の女子とも接触を図る。最初は誰が会いに行く?」

「あたしとナターリヤで行くわ。最後の二人と、今すぐにも会ってみてみたい」

龍彦たち三人は、射撃・格闘と普段通りの訓練を終えた。

前回の『バーサーカー狂犬』との戦いでは、格闘や至近距離での射撃が主だった。『バーサーカー狂犬』は高い運動能力や歯・爪による破壊力が際立ったが、飛び道具の類は持ち合わせていなかった。今後、マンシオンを破壊したあの鱗人間のような、衝撃波などの遠距離からの攻撃手段を持つ敵と戦って勝つには、射撃能力が不可欠だ。

三人で訓練の反省をしてから、地下の射撃場を出た。そしてシャワーを浴びてから、再び集合して三人で第一事務室へと向かう。

「おい清子、おまえのところは、記述模試の結果は返ってきたか?」
「うん。今日返されたけど」

「冊子におまえの名前が載ってたな。全国八位か。偏差値はいくつだった?」

「たしか、全教科の偏差値は九一だったわ」
「九一……」

さして興味も無さそうに、さらりと非凡な数字を言った。

これは点数ではない。偏差値が九一なのだ。偏差値とは、平均点を取れば五〇となる値である。龍彦は、九一なんて偏差値が存在するとは今まで知らなかった。

ちなみに内訳を聞くと、数学・英語・物理・化学が満点で、国語が二〇〇点満点中一七五点、公民の科目が一〇〇点満点中九〇点だそう。龍彦は、清子に勝てた科目は一つたりとも無かった。

（本当にこいつはどうなってるんだ? オレは『雷光』の能力を使っただってこんな点数はとれなさそうだし）

とにかく、清子の能力は非凡なものであるとつくづく思い知らされた。

「清子、あなたに協力してもらいたいことがあるんですが、いいですか？」

「いいわよ。どうしたの？」

雪菜の申し出を清子は承諾した。

雪菜は清子を連れて、コンピュータルームに向かった。龍彦はあまり関係なさそうだが、その場の流れで二人について行った。

部屋の鍵は開いていて、龍彦たち三人は勝手に中に入ることができた。中には誰もいない。

雪菜は部屋の奥から、『開闢』用のヘッドギアを持ってきた。清子はこれを装着することで、人工知能を通してプログラムをインストールすることができると言う。

「『開闢』のための新しいプログラムを作ってみました」

「雪菜ちゃんが作ったの？」

「はい」

雪菜は据え付けのコンピュータの電源を入れ、画面にプログラムの概要を開いた。

「視覚の働きをより実践的に拡張するプログラムです。私たちの目は広い視野でものを見ることができませんが、集中してじっくりと捉えることができる範囲は、視界の中でもごく一部分に過ぎません。視界に入っていないても意識できていない部分が多くあるわけです」

「それは何となくわかる。バスケットかアメフトをしているとき、視界に大人数が入るときは、相手全員の動きに完全に集中するのは難しい。っていうか、ほぼ不可能だな」

よく視力検査で目の視力を測るが、あれは集中して見つめた一点を見る能力に過ぎない。その一点から外れた背景は、途端にぼやけて意識がいかなくなる。特にボールを抱えて走っているときなど、動いているときはなおさらだ。

「その点を改善し、視界の複数の点に集中できるようにします。これを使えば、相手の両手両足全てに意識を払うことができ、『開闢』の格闘能力の向上につながります」

「そうね！ さっそくお願いしていい？」

「もちろんです」

すぐに清子はヘッドギアを被り、雪菜はパソコンからソフトウェアのインストールを開始した。

インストールが終了し、清子は『開闢』へと変身した。

「……どうだ？ 何か変わったことはあるか？」

「特に無いけど」

「では、これを全てキャッチしてください」

雪菜はそう言って、ペン立てケースを『開闢』に向かって投げつけた。ケースから飛び出した八本のペンがそれぞれ清子に飛んできくが、清子は流れるような手さばきで、全てのペンを右手でキャッチした。

「おお、ナイスキャッチだな！」

「八本のペンの動きが、くつきりと目で見えたわ。動体視力が上がったのかしら？」

「感覚としては、それで合っています」

「すごいわね、雪菜ちゃん。ありがとうっ！」

「いえ、どういたしまして。　しかし人工知能を借りた『開闢』の高い情報処理能力とはいえ、あまりの多くの点を同時に意識するのは脳に負担がかかります。私の方から、最初は練習用として、同時に意識できる個数を一〇個までに限定しておきました。これは清子自身がプログラムを改変することにより制限値を上げることができまますから、そこは清子自身で調整してください」

「プログラムのやり方は、涼子お姉ちゃんから教えてもらった方法でいいの？」

「はい。その通りです。『開闢』の変身時に、清子の頭の中でプログラミングを組み立ててください」

清子はプログラムを受け取ったことで満足そうに笑い、雪菜もそんな清子を見て安心したように表情を緩めた。

「すげーな、雪菜。よくそんな高度なプログラムが作れるな」

「私のプログラミングの技術は、全て涼子さんから教わったものです」

「ああ、なるほど……」

そういえば、涼子はサイバー空間なら最強クラスの人間だった。

しかし雪菜のソフトウェア技術者としての脳玉が素晴らしいことには変わらない。龍彦は最近、雪菜に感心させられてばかりいる。

「なあ、オレたち『雷光』や『徹芯』も、『開闢』と同じようにソフトウェアをインストールしたりできるのか？」

何となく清子を見ていて思った疑問だ。ちよっぴりだが、清子が羨ましくなったというのもある。

「原理的には可能なはずです。私とリュウの脳も、通常の人間と同じように微弱な電気信号で情報を組み立っていますから、『開闢』のシステムが応用できます。しかし私とリュウは通常の人間とは電気信号の形が全く違い、未だに脳の情報を解釈することができていないそうです。ですからこうしてプログラムを脳が理解できる形に翻訳してインストールすることが可能になるのは、まだ先でしょう」

「そうか。オレたちも清子みたいに脳とコンピュータがつながれば、もっと色々な能力が開発できるんだろ？」

「そうですね。脳と電子機器をリンクできれば、三人の脳で無線を使ってのデータリンクが可能になります。誰か一人が見たり聞いたりした感覚が瞬時に他の二人とも共有できるわけですから、集団戦を飛躍的に有利に戦うことができます。『開闢』の人工知能も、このことを念頭に置いて開発されたらしいですが……」

しかし『開闢』はたったの一体しかおらず、このメリットを生かせない　ということだ。

「リュウと雪菜ちゃん的能力も、早く解明されるといいわね」

「そうだな。まあ、気長に待つことにするさ」

龍彦や雪菜　『雷光』や『徹芯』の応用装備が開発されるとしたら、それは必然的に二人の改造のしくみが解明されてからになる。しくみがわからないうちは応用も何もやりようがない。できるだけ

早く謎を解明して気持ちをしつかりさせたいと同時に、もっと高いレベルで仕事に貢献できればと思った龍彦だった。

次の日も、龍彦は雪菜と一緒に高校まで歩いて登校した。昨日以上に、周囲の視線を集めているのがわかる。ゴツくて身長も高い龍彦、同じく長身でスラリと手足の長い雪菜。単体でも目立つ二人が一緒にいると、余計に目立つ。

「私たち、そんなに目立つてしょうか？」

「美女と野獣と一緒にいれば、そりゃ目立つさ」

隣を歩く雪菜に何気ない気持ちでそう言ったのだが、雪菜は少し頬を赤くした。

「ありがとうございます」

そう言つて下を向く雪菜が、すごく可愛く見えた。龍彦も少し恥ずかしくなってしまった。

しかし朝っぱらからバカップルを演じるわけにはいかないのですぐに頭を切り替えた。

二日目の授業でも、雪菜は優等生ぶりを発揮した。英語の授業で担当教師が英語検定を勧めた際に、雪菜はすでに一級を持っているとさりと漏らし、クラス全体が驚いた。もちろん龍彦もそのことは知らなかった。

放課後の時間になったら、龍彦はわざと雪菜を女子のグループに混ぜて一緒に帰らせた。もちろんほんの途中までの道のりだが、これくらいのことをしなければ雪菜にはなかなか友達ができなさそうだ。学力方面では非常に優秀な反面、同世代の人間関係においては何も知らない雪菜だ。前日の転校初日では、雪菜は昼休みも教室移動もほとんどを龍彦と一緒にいたので、クラスの女子たちと話す機会があまり無かった。龍彦は知り合いの女子に頼むと、彼女たちは「テロ事件で記憶を失った」という雪菜の説明を覚えていたのか、すぐに了解して雪菜を暖かく人間関係の輪に迎えてくれた。そしてそ

れを見届けると、龍彦は一人で先に学校から帰った。

(これで雪菜にも、たくさん友達ができやいいんだけどな)

校門を出てから、さらに早足で龍彦は一人、科特警本部へと向かう。

足取りはゆつたりとしている。先日的事件を一つ片付けてから、何となくだが、心に余裕が出来始めていた。「気が楽になる」という状態を、久しぶりに実感できたような気がする。

「すいませ〜ん」

道の途中で、後ろから声をかけられた。振り向くと後ろには、龍彦と同じくらいの年齢の制服を着た女子が二人いた。どちらも身長は一七〇センチ以上はありそうで、一方は日本人、他方は外国人だろうか。龍彦に声をかけたのは、ポニーテールの東洋系の方だ。顔を一瞬見ただけで活発な性格をしているのがすぐにわかるくらい、生き生きとしている。もう一人は、ウエーブのかかった栗色の髪をした白人だ。二人とも同じ制服を着ているので、同じ学校に通う友達なのだろう。

「ちょっと道を聞きたいんですけど、いいですか？」

「あ、はいはい」

東洋系の彼女は龍彦のすぐ前で、鞆に手をつ込んで地図を出そうとした。

東京での道を聞くということは、修学旅行生かもしれない。この付近は住宅街で、外部の人間がわざわざ寄り付く場所ではなさそうなのだが。

しかし、すぐにそれは違うということがわかった。

「あなた、改造人間なんですよ」

いきなり耳元でそう囁かれて、龍彦はびっくりして右を振り向いた。

いつの間にか龍彦の右手に寄っていた西洋系の女の子は、ニコニコと笑っている。龍彦の警戒心に黄色信号が灯った。

「そんなに驚かないですよ。あたしたちも、あんたと同じ『新人類』」

なんだから」

活発そうな東洋系の女子の言葉は、その意図とは逆にますます龍彦に不信感を募らせた。

（『新人類』だと？ それに、あんたと同じってことは……）

この二人は、龍彦が『改造人間』であることを知っている。そして、彼女らも龍彦と同じ改造を受けた者たちなのか。

「あんたと色々と話がしたいの。この先の公園で、ゆっくり話さない？」

「いや」

反射的に拒否の言葉を述べてしまったが、不信感が声に出てしまっただけで、彼女の誘いを拒絶したわけではない。

「適当に歩きながら、さっさと話してくれ」

まだ信用できるかどうかわからない相手に、ホイホイとついていくようなマネはしない。しかし話には興味がある。

なるべく自分が主導権を握ろうと意識して、龍彦は歩き始めた。そうすると、二人も龍彦のあとをついて来た。

「わかったわ。普通に考えれば、初対面でこんなことを言う人間をすぐに信用しろってのも無理よね」

少々呆れたように、東洋系の彼女は肩をすくめた。

それから龍彦は、彼女たちの視線とは反対の方向に歩き出した。

「自己紹介がまだだったわね。あたしは台湾から来た金麗華^{きんれいか}。こっちはウクライナ人の、ナターリヤ・スリュサレンコ」

「よろしく。私たちみんな同い年だから」

彼女たちは外国出身にも関わらず、非常に流暢な日本語を話すようだ。

「おまえらは、『あんたと同じ』って言ったな。じゃあ、オレと同じ種類の改造人間なんだな」

「もちろん。ただ、厳密には『改造人間』というわけじゃないわ」

「……………」

ナターリヤの言った意味がわからず、龍彦は返答に困った。

「改造人間と言えば、もともと人間だった個体をサイボーグ化したり、有機体でできた生体パーツを移植したり、また遺伝子の極々一部を組み替えたりしてできた個体を指す。けれども私たちは、幸か不幸かそのどれにも当てはまらない」

しかし、川井たちから龍彦や雪菜は遺伝子組み換え人間だと聞いていたが。

「今までの手法とは違う、全く新しい概念の改造がされてるってことか？」

「いいえ。私たちはそもそも『人間』でもないし、『改造』も生まれてから一度も受けていないわ」

龍彦まだ、ナターリヤの発言を理解できない。生まれてから一度も改造を受けていないとは、いったいどういうことなのだろう。

「ナターリヤ、もったいぶらないで言っちゃいなさいよ。いい

？ あたしたちは人間とは全く違う生物として生まれたの。見た目こそ人間そっくりだけど、遺伝的には人間と全く違う種の生き物ってわけ」

「なにい！？」

思わず歩く足を止めてしまった。

「簡単にいうと、あなたは普通の人間と結婚しても子供はできないってこと。もつともあんたの場合、同じ新人類の女の子のパートナーがいるみたいだけど」

麗華の言う「パートナー」とは、おそらく雪菜のことだ。

(すでにオレの周りのことは、一通り調べ上げてるってことだな)

警戒心から、龍彦は自身が自然と顔をしかめているのがわかった。

(それに何より、人間と全く違う生物か……)

「驚いたみたいね。でも安心して。私たちはあなたの敵じゃないわ。ただこうして、同じ生物種同士で集まっているだけ」

龍彦を安心させようとしてか、ナターリヤは穏やかな笑みを浮かべた。それ自体は温和な笑顔で龍彦の警戒心を解きほぐそうとするが、如何せん、発言を百パーセント信用することはできない。

「それにしちゃ、オレの身辺調査をしたりと、こつちを刺激するよ
うなことをしてるじゃねーか」

「あたしたちにとつてあんたは『行方不明者』なの。探偵や興信所
に行方調査を依頼したのと同じでしょ。あたしたち新人類は、世界
でたった七人しかいない。その数少ない仲間を探そうとすることを、
あんたは悪巧みだとも考えてるの？」

麗華は少し強い調子で反論した。別に龍彦は、そんなことまで言
っているわけではないのだが……。

「それは違う。ただ、オレと同年の人間、それも外国人が簡単に
オレの身辺調査を手配できるとは思えねえ。おまえらには何か裏で
怪しい組織が糸を引いてるんじゃないのかって、オレは怪しんでる
んだ」

「だから、今からそういうことを話そうとしてたの！」

麗華は龍彦の言葉を強引に遮った。

「あたしたちはね、ある組織のお世話になってるの。その組織は、
私たち新人類が他の人間から不当な仕打ちを受けないように色々な
面で助けてくれる。私が留学生の身分で日本にいられるのも、その
組織のおかげでこと」

「その組織を、私たちは『ガーディアン』と呼んでいるわ。『ガー
ディアン』は私が新人類だということを教えてくれて、社会にその
事実が漏れたり私の身の安全が脅かされたりしないよう、常に手を
貸してくれる」

「具体的に、何をしてくれるんだ？ その組織のありがた味を、オ
レにもわかるように教えてくれ」

「バカじゃないの、あんた？ あんたは日本で生まれ育ったからい
いものを……。もし北朝鮮や中国大陸にでも生まれてたら、あたし
たちなんて実験動物にされてたかもしれないわよ。あたしたちを利
用しようと思えば、いくらでも利用方法を国家は思いつくでしょ」

かなり馬鹿にされた感じで、麗華に突っ込まれた。ナターリヤも
少し笑いながら言葉を補った。

「私は、一〇歳のころまでわけのわからない組織のモルモットにされていたらしいわ。そこを『ガーディアン』の人たちに救出されて、いかがわしい記憶を人工的に消去してもらって、里親を探してもらって、今の生活があるの。私は感謝してもしきれないわ。あなたのパートナー、つまり立川雪菜さんも、私と同じような境遇だったんでしょ？」

ナターリヤの言葉で、雪菜の顔が頭に浮かんできた。そしてその次に精神的なショックが頭を駆け抜けた。まさか目の前にいるナターリヤも、雪菜と同じ境遇を受けていたとは。龍彦がこれまで何の影響もなく普通の生活を送ってきたのは、本当に運が良かっただけなのかもしれない。

「私たちは、ただ普通の人間と同じ権利を望んでいるだけだし、日本に危害を加えるつもりは全く無いわ。現状維持が目的という点はわかってほしいの」

ナターリヤに対し、龍彦は表情を動かさず、肯定も否定もしないでおく。

「『新人類』とか言ったな。確か全部で七人だっけ？ オレと雪菜とおまえらで四人ってことは、他にあと三人いるってわけか。その三人も日本にいるのか？」

「いるわよ。そのうち七人全員で顔合わせするかもね」

麗華はそう言うと、龍彦と逆の方を向いた。

「じゃあ、またそのうちね。あんたのパートナーにもよろしく」

麗華はゆつたりと大股で歩きだし、そのあとをナターリヤがついていった。

（警察にもよろしく伝えておくぜ）

二人の後ろ姿を眺めながら、龍彦は心の中で呟いた。

彼女らの話に興味が無いわけではないが、具体的な話の中身を教えられたわけではない。抽象的なことしか話されていないので、今のところ龍彦が受けた印象は、不信感が六割といったところだ。

龍彦は急いで科特警本部に行き、出口を探す。

まず、いつもの第一事務室の中を覗く。 いない。中には雪菜と、いつもなら龍彦よりも後にやってくる清子の二人がいた。

「よう、もう二人ともいたのか」

「リュウが私より遅く来るなんて、珍しいわね。何かあったの？」

「いや……、ちよつと学校に長居し過ぎただけだ」

清子に突っ込まれたが、とりあえずは出来事をごまかしておく。

龍彦の言葉には、清子も雪菜も特に疑問を感じたりはしなかったようだ。

「ん？ 出口さんは？」

「今は警視庁本部に出かけているそうです。何かあったんですか？ 署長の業務なら、川井さんが代行していますよ。今は地下の研究施設にいると思います」

「ああ、そう。別にこれといった用事はねーけど……」

雪菜にも曖昧な返事を返しておき、トイレにいくふりをしてさりげなく第一事務室を去った。

(川井さんにでも、早く報告するに越したことはねーよな)

地下へ階段で下りてしばらく廊下を歩くと、白衣を着て部下の研究職員と立ち話をしている川井を発見した。こちらから声をかけようとすると、その前に川井は龍彦の姿に気がついた。

「こんにちは、龍彦くん。こんな地下に何か用？」

「ちわす、川井さん。 すいません、出口さんに代わって報告したいことがあるんですが、いいですか？」

「あら、なあに？」

いつものように明るい笑顔をしたまま、川井は今まで話していた女性職員を退散させた。

「どうしたの？」

「ついさつき、不審な女二人に話しかけられて……」

さきほどの出来事を、全て川井に報告した。話していくうちに、川井の表情がだんだんと強ばっていくのがわかった。

「その二人の女の子は、龍彦くんが改造人間だって、確かに気づいていたのね？」

「はい。……それなんですけど、オレが『改造人間』ではなく、そもそも人間と全く違う生物だというのは、本当なんですか？」

「黙っていても、仕方が無いわね。雪菜ちゃんも呼んで、話をしましょっ」

龍彦は、すぐに第一事務室に行き、雪菜を連れてきた。川井は、以前にも入った鉄鋼の扉で隔てられた部屋へと二人を引っ張っていった。

「龍彦くん。まずあなたが、さっきあった事を雪菜ちゃんに教えてあげて」

「どうしたんですか、リユウ？」

龍彦は、再び同じ要領で雪菜に説明した。

「金麗華とナターリヤ・スリュサレンコと名乗った二人は、雪菜とオレのプライベートなことまで知っていた。いずれおまえともコンタクトを取るつもりだ、という意図が見えたな」

「不審な組織が、私に接触を試みているんですね」

雪菜も目を細めて訝しがった。

「で、川井さん。オレたちが『非改造人間』だってことについて、話してください」

「結論から言うと、科特警の研究開発陣も、ついこの前に同じような事実を発見したわ。あなたたち二人は、人間とは全く違う。さらに言えば、現在地球上にいる生物の分類にはどれにも当てはまらない、全く違うタイプの生物よ」

「……本当なんですか？」

龍彦が問い返すと、川井は首を縦にしっかり振った。

（そんなことが有り得るなんて……）

さらなる事実を突きつけられた龍彦だが、まだあまりその事実を実感することができないのか、そんなに自分の頭は混乱していない。（今さらって感じもするしな）

しかしこれで、龍彦と雪菜は人間ではないと一〇〇パーセント断言することが可能となった。

「遺伝子レベルの分析で、二人は大腸菌よりも人間から遠い存在かもしれないわ」

「そんなに遠い存在なんですか」

そんなこと　　といつても事実には変わりないだろうが　　を言われると、ますます自分の存在自体が異常なもののように思えてしまふ。

「学術的な詳しい話は後でいくらでもしてあげるけど、目先のことです。大事なのは、栄養学的な違いね。人間は自分の体内で合成できない必須アミノ酸や必須ビタミンがあるけど、二人はそれら全ての栄養素も体内で合成できる能力があるわ。さらにすごいことに、通常の生物がなかなか利用できない多糖類　　人間という食物繊維も二人はエネルギーとして利用できるみたいだから、食事の摂取量に対するエネルギー利用効率もいいし、食性に関してはかなりの自由度があるわ」

「つまり、動物性タンパク質やビタミン類を外部から摂取する必要が無いわけですね。そういうことなら、リュウが食事内容からは考えられないほどの筋肉量を維持できるのも納得できます」

「ん？　　どういうことだ？」

「一緒に暮らし始めた頃から不思議に思っていました。リュウは清子の三倍、私の二倍ほどの食事量ですが、私たちよりもご飯を多く食べるだけで、肉や魚などの主菜を食べる量は私たちと同じでしたから、通常なら清子の二倍もの筋肉量を維持するのは困難です。プロテインサプリメントも摂取していませんし」

「あゝ、なるほど。確かにオレ、三人で暮らし始めてから肉を食う量が減ったな」

それ以前からも、龍彦はプロテインなどを摂取したことはほとんど無い。ちなみにハードなトレーニングをするスポーツ選手は、自身の体重一キログラムにつき二グラム近くのタンパク質を一日に食

べるよう勧められている。激しい運動をしつつ筋肉を維持するのは、それくらいタンパク質が必要なのだ。龍彦でいえば、体重一〇〇キロだから一日で二〇〇グラム。これを摂取するには、なんと肉一キログラムを食べなければならぬほどだ。通常はこんなに食べられないし、また余計な脂肪分も摂取してしまうので、たいていはプロテインパウダーを利用することになる。

「じゃあオレと雪菜は、肉を食わなくても生きていけるってことですね。いやあ、それなら食費が節約できて良かったですよ」

「もつと言つと、ご飯じゃなくて道に生えてる雑草を食べても生きていけるわよ」

さすがにそこまではしたくないが。

「あと大事なのは、結婚相手ね」

「……………」

川井にそう言われると、龍彦と雪菜は顔を見合わせ、お互いつい赤くなってしまった。

そう。自分たちは、今日の前にいる相手以外とは、子供を授かることができない。今日龍彦が出会った二人のような存在がいたとしても、その数は七〇億人いる人間と比べれば話にならないほど少ないはずだ。

「そうだ！ 明日の土曜日は龍彦くんも雪菜ちゃんも非番だから、二人でどこかに遊びに行ったらどう？」

川井の唐突な提案に少し戸惑った。

「考えときます」

川井はお茶目な笑いを浮かべたまま、鋼鉄の扉を開けた。

「私から出口さんに報告しておくけど、二人も周囲の状況に十分気を付けること。龍彦くんが会った女の子たちやその背後にいる組織も、適法で善良な存在だとは限らないわよ」

「はい、わかってます」

初めて情報らしい情報に触れることができた。ここにきて状況が変わり始めている。龍彦と雪菜に秘められた謎が解明されるのが、

早まるかもしれない。不安や疑問も大きいが、龍彦は心の中で期待を膨らませずにはいられなかった。

「明日の土曜日なんだけど」

「ん？」

テーブルを囲んで三人で夕食の肉じゃがを食べていると、清子が箸を止めた。

「私、明日はお姉ちゃんと用事ができたから、朝の九時に出かけるわ」

「ああ、わかった。午後は、学校の友だちと遊ぶ予定だったっけか？」

龍彦は、午前中の内容を深く尋ねようとはしないが、医者一族特有の問題だろうなどと、思ってしまった。

「二人は何か予定あるの？」

「あゝ、えつとな」

龍彦と雪菜は顔を合せ、少し考えた後に雪菜は言った。

「二人で遊びに行こうと思います」

「へえ、どこに行くの？」

「……まだ決めてない。一応、東京都内にするつもりなんだが」

今日のうちに、明日のおおまかな行動計画を科特警に提出しておいた。龍彦たちは、ある意味では一般の警察官よりも重要な存在なため、東京二三区外に出るには正式な届出が必要で、実質的には本部のある大田区を出るにも口頭で報告するのが望ましいと言われている。

「映画館とかよりも、もっと賑やかなところを歩くのが二人には良さそうね。雪菜ちゃんはもちろんだけど、リュウもあんまりそういうタイプじゃないでしょ。だから普段は経験しないことをした方がいいんじゃない？」

「確かに、それは一理あるな」

なら明日は、渋谷にでも言ってみようか。しかし毎度のことだが、清子はよく気が利く。

「じゃあオレらも九時に出発にするか」

「はい」

龍彦たち高校生三人が帰ってしばらくしてから、出口は川井を呼び出した。

「すまん。もう一〇時になるってのに」

「いえ、問題ありません。出口さんこそ、家族に文句を言われたりしませんか？」

「また女房にしかられるな、こりゃ」

出口は、龍彦が彼と同じ『人型的生命体』の少女二人と出会った件について川井から報告を聞いた。

「俺からも公安に根回しをしといたが、組織の実像を掴むには時間がかかりそう。そのなんだ、『ガーディアン』だっけか？ その集団の目的は現状維持なんだろう？ もしそれが本当だったら、現状維持ってのは一番目立たない存在だからなあ……」

白と黒ともつかない。中立的な灰色というよりも、灰色に寄りかかる透明な存在だ。

「明日、二人は都内でデートのようです。尾行をつけるように指示をだしたのは、出口さんですか？」

「そうだ。再び向こうがコンタクトを取ってくるようなことがあれば、最低でも遠くから相手の顔の映像を保存したい。それに万が一何か起こったとき、虎の子の二人の安全を確保する必要がある。相手が本心から現状維持、つまり大島たちや日本警察、ひいては日本政府との友好を望んでるなんて誰も保障しちやいなえ」

全ての可能性に対し隈なく見張っておかなければならない。想定外では済まされないのだ。

「実際に現状維持が目的だとしても、やつらの資金と技術力の出ど

ころはつかんでおかなきゃならん。それが第三の違法組織にでも流れたら、社会にとつちや大迷惑だ」

「技術力については、私も大いに興味があります。なぜ改造人間なほど高いレベルを誇る独自の技術力と研究力を磨くことができたのか、不思議でなりません。主権国家が莫大な予算と人員を投入しても実現できないことを、こつもやすやすとやり遂げてしまったんですから」

「たぶん、一七年前までの対馬に、その起源がある。調査継続だ」

大島龍彦と立川雪菜との接触を終え、麗華とナターリヤは『新人類』の事実上のリーダーであるヘレーネに話を持ち帰った。

麗華とナターリヤは、ヘレーネのホームステイ先の家に行った。ホームステイ先といっても、それは完全な一般人ではなく、『ガーディアン』とパイプを持つ日本人夫婦の自宅である。

「で、ターゲットの様子はどうだった？」

「おなかへったあ」

「ヘレーネ、何か食べる物は無いの？」

「……他人の家の上がって最初に言うセリフがそれなのか？」

金髪碧眼のヘレーネは少し顔を歪ませて立ち上がり、台所からソーセージの袋を切ってきた。

「さすがヘレーネ。一日一回ソーセージを食べないと発狂するんだっけ？」

「それは麗華が勝手に生み出したデタラメだ！」

「まあ、怒らない怒らない」

温和な性格のナターリヤが、麗華とヘレーネの間に入った。

「本題に移りましょう。今日会ったのは、大島龍彦くんだけ。」

立川雪菜さんには会えなかった。後日あらためて、二人が揃ったときに接触してみるわ」

「大島龍彦……これか」

ヘレーネは床に置いてある紙箱から、B6サイズの写真を引っぱり出した。

「まず一番大切なことから始める。彼は我々と協力する気がありそうか？」

「警戒されただけで全然ダメ。最初に話そうとしたら、すごい顔で睨まれちゃった」

「麗華が余計なことを言ったからじゃないのか？」

「やくねえ。さすがのあたしも、『ガーディアン』での仕事は真面目にやるって」

麗華は肩をすくめた。

「接触のやり方が不自然だったから仕方が無いと思うけど、彼是我们たちのことを最高レベルで警戒していたわ。毛を逆立てている幻覚が見えるくらいだった。きっと私たちのことも、警察の上司に報告したでしょうね」

ナターリヤは言葉の後半の方に力を入れた。それを聞いたヘレーネは腕を組んで下を向いた。

「警察というのが厄介だな。彼が改造人間だと教えたのは警察らしい。今まで彼と一緒に能力を開発してきたのも日本の警察だ。それほど警察と親しい大島龍彦は、我々新人類よりも日本警察に帰属心を持つだろう。そしてそのことが、我々『新人類』の七人全員の団結を阻害する要因に十分なり得る」

「最初の印象でそこまで言い切るヘレーネは極端だと思うけど、その気持ちは確かにわからないでもないわね。あたしらは基本的に国家組織や国家権力とは距離を置くスタンスだし」

今の国家は、人間の利益を守るために存在している。それぞれの国家が保護の対象としている人間は特定の国民だったり民族だったりするのだが、それでもとにかく『ヒト』である。しかし残念ながら生物学的なヒトとは全く違うヘレーネたちは、現存する国家から保護してもらえない保証は無い。例えば理想的な民主主義国家でも、ヒ

ト対する天賦人權論のようなルールがヘレーネたちに対して存在しない以上、確証は持てない。だから『ガーディアン』は、どの国家からも距離を置いておるし、メンバーとなる条件には国籍や民族や宗教の条件が一切存在しない。最も重要なのは、『新人類』たちを守るという意思である。

「そういきなり問題を深刻化するのはよくないわ。彼が『ガーディアン』の利益になることの前に、彼が不利益とならないようにうまく回しましょう。そのためにも彼やパートナーの立川さんに、私たちから情報提供を誠実に行う必要があるけれど、その方針建てはヘレーネに中心になってもらうわね」

「それはわかってる。貴重な仲間を引き込むのは、当たり前の話だ」

ヘレーネはもう一度大島龍彦の写真をのぞき込んだ。

「次に個人の情報をピックアップしていく。二人が感じた、大島龍彦の外見と性格の特徴を言ってくれ？」

「身長は一八〇センチ台の後半くらい。同じ新人類男子のオビと比べると、かなり幅のある体格だったわ」

「ひら たく言つと、写真のまんま。いかにもアメフト選手って感じ。性格はたぶん頑固で、あんまり融通が効かなそう」

ナターリヤに続いて麗華も答えた。

「頑固な面のおかげで警戒心が固かったけど、逆に一度こちらのことをわかってもらえれば、信用できる相手になるわ、きつと。あと、結構男前だったわ」

「男前っていうか、野性的っていうか、まあ、あながち言葉は間違っ
つてないけど……」

意外にナターリヤは高い評価をしたので、麗華は少々言葉に詰まっ
てしまった。

「素行面で問題があったらしいな。中学生のころは手が付けられないほどの問題児だったと資料にはある」

「それって単なる喧嘩好きってだけでしょ。別にそれくらい、どう

でもいいと思うけど」

「私も麗華と同じ意見。ヘレーネだって、ひ弱でしょうもない男じゃないかって心配していたでしょ？ 元気のある強気な男でよかったですじゃない」

「……それはナターリヤの好みだろう。心配のベクトルが全く逆だったことは認めるが」

少し間を置いて頭を整理してから、ヘレーネは結論を出した。

「よし、次の接触は私も同行する。私とミシエルとオビの三人で行こう。これで新人類の全員が顔を合わせることになる」

「正式な仕事としての接触はそれでいいわ。でも私個人として二人に接触したらだめかしら？」

「それは構わんが、仕事の目的にマイナスとなるような行動はさける」

「それも当たり前の話ね」

第3編(1) 第一種使用(後書き)

まだ続きます。頑張って書くのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2359r/>

神秘と科学と創造

2011年12月7日01時59分発行